奇跡のための試練

21144444

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奇跡のための試練

【Ｎコード】
Ｎ６９２５Ｋ

【作者名】
２１１４４４４

【あらすじ】
暗い過去をもつ『佐々木勇樹』は、好意を向けていた女性『桜井美奈子』を救うために身を挺して迫りくる車から救う、しかしそのために自らが死亡してしまう。愛されることがなかった勇樹は、死後、魂のみの体になったとき、美奈子の『勇樹を愛していた』言葉に感動し、後悔する。そのとき、世界が歪み、勇樹は『世界少女』と自らを呼ぶ少女と出会う。少女は『奇跡』を一つ、かなえさせることを代償に『奇跡のための試練』を与え、勇樹を異世界へと送る。異世界でルイスという名前になった勇樹は、たくさんの仲間たちと

出会い、成長し、真実をしり、戦いへと身を投じるのだった。暗い過去をもつ転生者は、与えられた『空白の奇跡』に何を願うのか・・・もしかすると後々プロローグが増えるかもしれません。

プロローグ1　『最後の幸せ』（前書き）

全てを魔法のせいにするご都合主義小説のはじまり。

説明不足や、いたらぬ点があったら教えてくれるとうれしいです。

感想お待ちしております。

プロローグ1　『最後の幸せ』

『ろくな人生じゃなかった・・・』

少なくとも俺は思う。

俺の名前は『佐々木　勇樹』といった。

何故過去形か？それは・・・

俺が、死んだからさ。

俺の記憶はある部分から過去の部分が抜けている。

それは、両親とすごした幸せの記憶といえるかもしれない。

そもそも、両親とはどんなやつだったかもわからない。

俺の記憶の始まり、それは燃え盛る火により、世界が赤で塗りつぶされたときから始まる。

その世界は恐怖と混乱が入り混じり、記憶がない俺は周りを見回す。

「ヒッ！」

見回した瞬間にあるものに目がとまり、小さく悲鳴をあげた。

人の手であった。その手をそろりと触ると、生暖かく。そこから真っ赤な液体が出ていた。

血・・・と幼い心から理解した。

『あぁ、この人たちは死んだのだと。』

そして俺は目をつぶる。

『そして俺も死ぬのか』と諦めて。

そこで俺は意識を飛ばす。そしてすぐに意識を取り戻すと、そこは真っ白な場所であった。

その場にいた白い服をきた人は、「よかった」「意識をとりもどした」と口々にいった。

そして俺は『あの手』の人が、自分の両親だと教えられる。

不思議と涙はでてこなかった。

なぜなら、人の涙とはその人との過去をみて、そしてもうあえないかと言う悲しみからでるものだ。

俺に過去の記憶などなかった。

そして俺は、親戚へと子供時代をすごす。

・・・そこは生き地獄だった。

殴られるのが日常と化し、親戚の子供は俺をゴミをみるような目をしてみた。

いじめられもした、そこで階段に突き落とされ、歯を折り、そしてその治療をすることになると両親は俺をみて、「なんで私たちがあんたのために金をださなきゃいけない」といやそうに言った。

教師は助けてなどくれない。「いじめられるには、理由があって、君になにか理由が――」

そんな自論を展開させたバカが教師だった。

毎日毎日、青いあざをみながら俺は風呂で自分の体を洗う。

「・・・世界なんて大嫌いだ。」

俺は小学生のころ、風呂場でそう小さくポツリともらした。

中学、高校といき、高校は家を飛び出し、アルバイトで生計とつなぎ、有名大学へと上り詰める。

そして有名な会社へと入り、やっと落ち着けると思い、俺は同僚との飲み会へと誘われた。

そこであったのが『桜井　美奈子』という女性であった。

彼女は俺の隣へと座り、俺について聞いた。俺は酒の力もあってか、俺の人生について語り続けた。

「俺の人生は碌なものじゃなかった」そう最後は締めくくる。

すると彼女はどうだろうか?引きもせず、彼女は俺の手をとり、こ

う告げた。

「だったら・・・今から碌じゃない人生にすればいいじゃない。」

と・・・それはとても温かい言葉だった。

「・・・あぁ」俺は小さくいった。その言葉は彼女に返答するのと同時に、自分に言い聞かせるようだった。

あぁ、俺はまだ幸せになれるのではないか・・・と思った。

家に帰り、ＦＡＸがあるのをみた。手に取ると、親戚からだった。

そこにはずらりと金が書いてあり、俺を育てるために使った金額とかいてあった。

高校はすべて俺が払ったのに書いてあった。大学でさえも・・・ふざけていると思えた。

だが、俺はそれをすべて返せば縁が途切れると思い、すべてを返すと誓った。

そして、数年ですべてを返し終え・・・美奈子と共に飲みにでた。

そしてそこで人生が終わった。

彼女は俺に何かを言おうとした。

彼女は青になった信号をわたろうとし、横断歩道へと足を踏み出した。

そして俺は横からダンプカーが突っ込んでくるのをみた。その車は信号が『止まれ』という赤になっているにもかかわらず、止まらない。

それはスローモーションであった、火事場のバカ力というものであろうか。

俺は彼女の手をひき、ひっぱる。そして俺は・・・ひっぱった反動で、道路へと躍り出た。

弾き飛ばされる前にみた彼女の顔は、『驚愕』・・・。

激痛と轟音と共に、俺の人生は幕を下ろした。

プロローグ1　『最後の幸せ』（後書き）

交通事故発生。
運転手は、飲酒運転により運転中寝ていたといった。

事故の被害者である青年は、まだ若い青年であった。
まだ未来があったのにもかかわらず、一人の間違いによりすべての未来が消えたのであった。

弾き飛ばされた彼の体は、どこがどう折れて・・・とかではなく、もう『ぐちゃぐちゃ』とでしかあらわせない状態であった。

だが、彼の顔は、『やり遂げたような顔』と『少しばかりの悲しさ』をもっていたという。

プロローグ2　『奇跡のための試練』（前書き）

誤字発見、変更しました。

プロローグ2　『奇跡のための試練』

ダレカのすすり泣きで、俺は意識を覚醒させた。

目をあけると、そこには美奈子がいた。

足元をみると、木の箱があった。

『これが俺の棺おけか。』

俺は自虐的に笑った。

見回すと、同僚がたくさん居た。

高校、大学の友人と呼べるものもいた。

親戚はいなかった。

『用なしってことか。』

俺はまた、自虐的に笑った。

美奈子を再度みる、そこには涙で顔をぐちゃぐちゃにした女性がいた。

「・・・好きだったのに・・・なんでっ・・・・」

そう聞こえ、彼女の声にすこしだけ俺は幸せであり、俺は・・・苦しかった。

『そう・・・俺は幸せだったのか。』

初めて気がついた。

俺は最後の最後で、本当に幸せだったのか。

そして美奈子をみる・・・俺は後悔が沸々と沸く。

『俺は・・・』

願いを言葉とする。

『俺は・・・彼女の笑顔をみたい』

そのとき、世界が暗転し。

そして即座に世界は構築されていく。

「な・・・!?」

そこは白と黒の世界だった。

そこに少女が立っていた。その少女は、どこにでもいるような少女であった。

彼女の居るところは、水にたっているように波紋を広げていく。

なんとも、神秘的であった。

眼鏡をかけ、図書委員のような少女だった。

「――――・・・ですか？」

彼女はいった。

聞こえない。

俺は耳を済ます。

「奇跡が・・・欲しいですか？」

そう、彼女は言った。

俺はうなづく。

「それで、笑顔をみれるなら。」

「だったら・・・試練を与えましょう。」

「・・・まってくれ、君はダレだ？」

少女は俺を見る。そして告げた。

「私は、世界そのものです。」

少女はやわらかく笑う。

「貴方を転生させます、そこで人生をすごしてください。」

「・・・それだけでいいのか？」

「・・・平凡だとは思わないでください。ですが、危険を回避できると思ってください。」

「・・・本当に、奇跡は起こるのか？」

少女は再度、やわらかく笑い、うなづく。

「だったらやるさ。」

「・・・わかりました、貴方には力を与えましょう。・・・貴方の心に、神たちはいたく感動されました。」

「・・・？つまり・・・どういうことだ。」

「神は、貴方の力になります。そうですね・・・なんでもできるっていえるものでしょうか。」

「・・・いや、平凡にすごしたいんだけど。」

「では、あなたの奇跡を言ってください。」

聞いてないね、この人・・・と俺は悪態付くが、少女はどうでもよさそうに聞いてくる。

「あなたの、奇跡は。」

俺は決心する。

「俺の奇跡は、『桜井美奈子が幸せであること』だ。」

その言葉を最後に俺の意識は黒に塗りつぶされていく。

最後にみたのは、少女の微笑みであった。

プロローグ2　『奇跡のための試練』（後書き）

主人公はチートです。

化け物です。バグです。

第一章『記憶召喚』（前書き）

白銀の勇者は、その白銀の剣と、数々の鎧を着て、死地へと赴いた。
何故、彼はいくのだろうか。
まわりの国は彼をおかしな人物とみていた。
『あいつら』にはかなわない。
敵うのが彼だけだった。
しかし彼だけではどうにもならない。
出陣の用意をしている勇者に王が問うた。
「何故、お前は剣をもち、戦地へと赴く。恐怖はないのか？」
それを聞いた勇者はきっぱりといいはなった。
「怖いさ。」
「では、何故？」

「笑顔がみたいから・・・じゃ、ダメかな？」
その言葉をきき、王は絶句し、呆れ、・・・そして彼を尊敬した。
彼はたくさんの鎧と剣をもち、腰へ。
彼はマントを翻し、外へとでていく。
その後ろにはたくさんの仲間がいた。

そこに勇者は居た

＜埃に埋もれた伝説＞

勇者の物語、たぶん途中で番外編で書こうと思います。

第一章『記憶召喚』

『アトラント国』とここはいった。

大国ではないが、都市は充実し、国民は活気にあふれていた。

しかし、何分数十年あまりもの平和な時代が過ぎていたせいか、軍事に関してはあまり手を付けられておらず。正直、他の国に攻められればひとたまりもないと思われていた。

王や王妃、王女・・・そして国民はいつもそわそわとしておりました。

攻め込まれたら負ける――――。どうやって隠せば――――。

などと考えているけど空回り・・・。だが、そんなアトラント国にも転機が訪れました。

大魔術師『レイバン』にて、予言がなされました。

『隣のクレスフィア山にて、白金の剣をみつけ、それを、城の裏の聖域にて置いておきなさい。それを抜いたものは、この国に、守護の力を与えるでしょう』

そうして剣は探し出されました。

何人もの腕利きの冒険者が試すものの、全く抜けず、王族は「もうだめだ」と口々にもらしていたそうです。

そんな時代に、俺の記憶はいっきに引き戻されました。

場所は中世を思わせる石作りの家々。

そこで俺こと、名は『ルイス＝アクセシウム』といった少年は、親に捨てられ道を歩いていたときであった。

城内で、煙突掃除という仕事を任されたルイスは、結構な金が入るといわれ、向かっているところ、頭に何か違和感を感じ、頭を触ってみたところ。

いっきに記憶がきた。

「うぉっ！？ゲホォッ！」

いっきに記憶が召喚されたか、無理矢理ねじ込まれたか、はたまた閉ざされていた箱が開かれたかはわからない、だが俺の記憶はいっきに覚醒し、急激な頭痛と共に意識が一瞬とびかけるが、無理矢理足に力をいれ下唇をかんで意識を戻す。

「はぁっ、はぁっ・・・いってぇ・・・」

息を整え、俺は前をゆっくりとみる。

「・・・あぁ・・・なんじゃこりゃ。」

人の周りに赤い何かが見える。記憶にもともと無かった記憶が存在し始める。

「意味がわからない。」

記憶を整えてみると、そこには剣術の記録と魔法の記録、そして気やそのた諸々の記憶が存在する。

『剣と魔法の世界』ＲＰＧでありがちな世界だと俺は思った。

赤い何かは生命力ということもわかった。というか俺の体からぼうぼうと燃える俺の生命力大丈夫だろうか。

分かる人にはわかるネタ、『俺はバーナーマンか！？』といった感じだ。

こんな世界だからこそ、どこかの勇者が剣をもって、伝説の勇者っぽく敵を倒していくのだろう、だが、俺は隣にいるようなキャラに

もモブにもなることはない。むしろいやだ。

『奇跡のために俺はここで一生を迎える』

試練から逃げ出しても、たぶん逃げられない試練がでるだろう。
勇者なんて俺の器じゃないし、俺もなろうなんて思わない。

「まぁ・・・今の状況で俺の力を使ってみるのもいいが、今は金だな・・・掃除、いくか。」

城にいく、となると・・・なんか勇者にされそうだが、俺は孤児だ、見てみろよこの服、勇者にみえるか？

薄っぺらい、体を覆うだけしか機能しないような服。
とうてい勇者とは思わない。

「ま・・・安心だな。さていこうか！」

俺は鼻歌を歌いながらスキップしようとすると。

とんだ。

もうめっさとんだ。

「うっそぉぉおお！？」

ヒューンという音がしそうな速度で俺はぶっ飛んでいく。

「うらむぞ神ぃぃぃぃ！？」

いやぁ、すがすがしいほどぶっ飛んでいく、内心穏やかじゃないけど。

飛んでいくと、城壁が目の前にくる、本当にＲＰＧのような城と、ＲＰＧのような真っ白い城壁。

中世だな、と俺はぶっ飛びながらも思い、そのまま城壁に突っ込んでいく。

俺の心は色々と考えたが、最後には一つの結論へと到達。

『死んだな』

ドゴォンッ！ガラガラ・・・・という轟音を立てて俺は壁にぶつかる。

ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

とはならなかった

生きてた、というか無傷。

「・・・スポンジみたいだな。」

俺は化け物か、と心の中で突っ込んだ。もうありえへん、ファンタジーや！と関西弁で突っ込んだ。

呆然としていると、遠くから声が聞こえる。

『おい！すごい音が聞こえたぞ！？』

『侵入者か！？』

っと・・・ここにいるのはヤバイと知った俺は、即座に立ち上がり、逃げようと思いたち、周りを見回す。

城壁の近くには、家が立ち並んでいる。前は家、後ろは城壁、そして横は道。

左右から声がする。つまり・・・逃げ道など無い・・・というわけではない。

俺はいっきに飛び上がる。

軽くつま先に力をいれると、いとも簡単に家の屋根へと飛び上がれた。

「魔王城とかあったら本気の一発で消し飛びそうな気がするのだけど。」

ＲＰＧだ、ＲＰＧだとか思ってたけど、これはＲＰＧでもない。

レベル９９でもここまで強くない。

ＦＦでいう全ステータス２５５、魔力ＭＡＸ、ＨＰＭＡＸ、アビリティ全部可能、魔法全部可能状態でもここまで強くはないだろう。

「どんな化け物だ。」

びっくりするほどありえない俺に、自分で呆然とする俺。

後ろでは、なにかいっている兵士がいるが、そんなものにはかまわず、俺は城の正門へと目指すことにした。

バカな力をもって、どっかの勇者様も真っ青な力を手に入れた俺は、ヤレヤレと思いながらも正門へとむけて走り出した。

再度ぶっ飛んだ。

「うわぁぁぁあぁっ！？」

前途多難である。

第二章『偶然の産物』（前書き）

とりあえず、最初くらいは読んでくれている人も進まないとイライラされるだろうし、さっさと書いていこうと思います。

とりあえず今日はこれで区切ろうかと。

第二章『偶然の産物』

普通なら、『ひゃっほう！最強だぜぇ！』といいたいところだ。

俺の手には干将・莫耶が握られている。

高校のころ、見せられた漫画や小説に書いてあった人・・・アーチャーとかいったかな？

が作り出した剣である。

ついでに、思い出せるのは『エクスカリバー』や、いまもっている『干将・莫耶』ぐらいだ。

戦いを剣の効力によって戦っていくこと自体がない、というか戦いたくない。

「やりたい放題だと思われ。」

神のちょっとした好奇心に手をだすのはこれまでだと思う。

それを魔力にもどし、とりあえず俺は正門へと向かう。

「あのー煙突掃除ですけど。」

そういうと、兵隊は俺をみて、ひそひそと話す。

悪いが、ちょっとした好奇心のせいで聞こえる。

『さっきの爆発だけど、いれていいかな?』

『子供があんなことやると思うか?そもそも服も貧相な子供が。』

『たしかになぁ・・・こんな孤児が。』

悪かったな。

「まぁいいだろう、入れ。」

兵士が勝手にきめていいのかどうか不安だが、まぁこのさいだから俺はそのまま入っていく。

「よし。」

俺はのびーをして、城の門の前にいる兵士に聞いてみる。

「アッシュ様はおられますか?」

「ちょっと待ってろ。」

兵士は城へとはいり、数分後に入れといわれ、俺はそのまま入る。そして部屋へと通され。

あとはヨロシクといった感じになにも言われずに兵士は出て行った。

「・・・おい。」

これで煙突掃除以外もやれといわれても困る。

俺は煙突掃除のためにもってきたものをみて・・・

「ぶっ飛んだときに落とした。」

いや、注意しろよ兵隊・・・気がつかない俺もおかしいけどさ。

「う・・・うぅ・・・」

仕方がなく投影するしかなかった。便利だな、おい。

そして、こんな使い方をするのは俺ぐらいかと思われ。

雑巾投影する人は

「・・・ふぅ。」

掃除していくと、結構つらい。

いい加減いやになってきたので、魔法を・・・。

「神のちょっとした好奇心はどこまでいくのだろうか?」といった解明をしていこうと思う。

「きれいになれ!」

きれいになった、煙突が。

なんだこれ、魔力だしながら言えば大体可能じゃないか。

もう化け物じゃなくて、あれだ。

『俺そのものが魔法』であるといっても過言ではないだろう。

Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ｍａｇｉｃ　と名乗ってやろう。

魔術の主だ・・・いかんいかん、俺は平凡・・・平凡・・・

とりあえず、本当にきれいになったか上りながら確かめてみよう。

「・・・本当に綺麗になったな。」

俺は、範囲設定を意識的に行い、そして言葉にして創造しながらきれいにすればできる。

いわば、ファイア！といえば、炎がでてくるイメージがでるのはＦＦやっている人ならわかるだろう。

メラもそうだ。ドラクエをやっている人なら、火の玉が向かっていくイメージだ。

「つまり、あれだ。想像すれば創造できるわけだ。発動のキーワードとなるものがあれば。」

煙突がきれいになったことがわかり、頂上へ上り詰め、俺は屋根で一人で考える。

「メラゾーマは使っちゃダメだろ思う。」

そもそも、最終的には使いまくっている人が多いんだけど、あれ、

たぶんドラクエの世界が更地と化す。

「・・・まぁいいか。」

俺の体内の魔力は、

・自然からの供給

・世界との接続

・神との契約

・自分から作り出し

により成り立ち、だいたい無限だ。

化け物だと思う。

というかばけものだ。

一人軍隊といわれても過言ではないだろう。

気も使える上、やろうと思えば念だってできる。

「化け物決定だな。」

もう悟ったかのように、ふっ・・・と笑う。

そのときである。

いきなりの強風にあおられ、俺は屋根から滑り落ちる。

「う・・・うあぁぁ！？」

別に落ちても痛くは無いだろうが、異常なほどの強風、俺の体は簡単にも飛ばされていく。

これが神の仕業と考えるのは、少しばかり遅かった。

俺はある森へと突き刺さり、そのまま木の枝をおってある場所へと落ちていく。

「な・・・なんだこりゃ・・・」

そう、聖域だ。

そこに落ちていき、剣をみつける。

そこで俺は剣、白銀でありながら蒼く光る剣を見つけ出す。

「・・・なんじゃこりゃ？」

俺は魅了されたようにその剣へ近づき・・・抜く。

「・・・」

抜けた。

「・・・・・・・・・・・はぁ・・・あ・・・・・ありゃ！？」

茫然自失。

「これ・・・剣、伝説の剣・・・あぁ!?神か?あの風は!?」

もうすでに遅し、その剣は抜けてしまいました。

「いや、まだ大丈夫、逃げていいよ、逃げていいよ逃げていいよ・・・」

俺は剣を放り投げ、ダッシュした。

いま考えると、それがいけなかった。

もどせばよかったと、今では思う

そして抜かれた剣を、王女が見つけることになることは

また別の物語である。

第三章『仲間』（前書き）

パソコンぶっとんだ。
故に次は結構後・・・かもしれない。
書きたくなったら書くのが俺ですしね・・・。
感想お願いします。

第三章『仲間』

「（ばれてない、うん、ばれてないよ・・・）」

剣を引き抜いてしまったあと、兵士の横を通るたび、冷や汗が止まらない。

その後、剣については引き抜かれたことを発見されたらしい、それがこの国の姫。

剣は、引き抜かれた後兵士が持っていこうとしたが、あまりの重さに持ち上げられないと言う。

普通の剣ぐらいだったはず・・・あぁ・・・俺化け物か。

あの世界少女、俺をどこまでおとしめる気だ。

その後、剣は馬を何十頭、兵士を何千と用意し、やっと動かせることができたらしい。

そして今は玉座・・・らしい、どうやって持っていったのかとかは聞いたらダメだと思う。

「はぁ・・・」

そんなことはどうでもいいんだ。俺はまだ、サランラップの筒くらいの太さの柱に支えられた皿程度の危うさしか持っていない。

だが、それすらぶちこわすのが神だ。

ぶちこわされないように最小限に気をつけていこう。

「・・・っと、今の状況確認だな。」

この体になったのは・・・というか記憶が戻ったのはついさっき。

生まれてからということはなかったらしい。転生っていうのもめんどくさいものだと思う。

たぶんあの自称世界の少女にきいてもあれだろう。

『世界の制約』とかいって終わるオチだ、めんどい。

で、今の状況はあれだ。

親に捨てられた。

ある意味前の人生より最悪のはじまりだ。

で・・・考えてみると仲間がいた。

さすがに一人でこの中世ともいえるような場所で生きれるわけがない。

「さて、どうするか。」

一人で国外逃亡も簡単だろう。俺の魔法をつかえば。

なんか、『飯よでてこい』で出てくるかもしれない。

「よっし」

だからこそ人の居ない場所へといこう。

「アーイキャーンフラァイ！」

そういって路地へといくと、俺の体は黄金の鳥へと変化する。

そして流星がごとく消えたのだった。

そのころの話。城にて・・・

「なにっあれは伝説の鳥ではないか！？勇者が本当に現れたのか！？」

彼の行動はさらに自分自身を突き落とすのである。

「っさて、飯よでろ。」

人のいないところで言ってみる。

・・・でた。

「わーい・・・すんげぇやりたい放題だね・・・神・・・」

呆然とした。

というかありえん、魔力で飯が完成とかあれか、ドラえもんのテーブルクロスか。

「シチューでてこい。ピザでてこい」

やりたいほうだいです、まじめにやりたいほうだいである。

で、めんどくさくなってさっさと俺は街へと戻る。

仲間をさがさなければ。

仲間の名前は『ユーリ』なんだか日本人臭い名前であるが、異次元なのでそういうのもヘンデはないかもしれない。

「さて、記憶をさぐっていくか・・・」

そう思い、考えてたところ、見知ったような声を聞く。

「ルイス！」

みると、ユーリだった。はぁはぁと、走っていたのだろう、息が荒い。

「どうしたんだ？待ち合わせしてただろ？」

「あぁ、すまん、ちょっと知らない道にはいってな。」

さすがに、前の人生の知識がはいって、混乱してわからないとかはいえない。というかいったらあれだ、ちょっと病院へいこうか・・・ということになりそうだ。

「ん、まぁ庭みたいなものだが・・・そんなにいるわけでもないしな、まだ若いし、知らないところもあるんだろ。」

俺にとってうれしい考え方をしてくれたようだ、俺のいいわけを考える必要は消えた。

「さて、これからどうする？金ははいったけど。」

銀貨5枚ほどある。なんだろう、いまさらだが『金貨よで～ろ』とかいったら大量にでてきそうだ。

「へぇ、結構はいったじゃないか、さすがお城の人だね、僕の方は2枚くらいしかだよ。」

「まぁ、城のひとだしねぇ。」

二人して笑い合う。

「じゃー飯買いに行くか！」

「おぅ。」

俺たちは走り出す。

「・・・どこに？」

俺の言葉にユーリは思い切りこけた。坂なのでそのまま止まらず落ちていって・・・

「ストラーイク！」

おいてあったビンに激突した。

俺は急いで迎えに行き、声をかけようとすると・・・

「おぉい、ガキ？なにしてくれちゃってんだよぉ？」

リーゼントがあらわれた！×２

「ダサッ。」

俺の一言で戦闘がはじまった。

第三章『仲間』（後書き）

主人公のキャラは、少しばかり脳天気だけど冷静なタイプです。
キャラがもうちょっとでてからキャラプロフをだそうかと思う。

第四章『戦闘』（前書き）

パソコン戻った。
なんだろう、もう一回つけてみよと試したところついた。
寿命かなぁ？

第三章が二つだったとかいわないでくれ、変えたから・・・

第四章『戦闘』

「ダサッ」という一言で二人組みのリーゼントがキレた。

「ど・・・どうしようルイス、このままじゃぁ僕たち殺されちゃうよ。」

「あんたなんて死ねばいいのよ。」

「ひどッ!?ていうかルイスが喧嘩うったんでしょ?」

まぁ、それもそうなんだが、ある意味目をつけられたのはユーリのせいじゃないかと思う。

っと・・・喋っていると、置いてけぼりのリーゼント×2の怒りが増しているようだ。

「ちょッしこいてんじゃねぇ（）（%’$$&&）＝」

「”$%&’（）（’$~*}？」

うん、何語?何語喋っているの?

「怒り心頭で、自分が何を喋っているかも確認せず、ただ頭の中で出てきた無能がない脳を使わずさらに無能な言葉を発している。

ダメだこいつら、猿以下ともいえない。こいつらを人間と認めたくない、早々に死にやがれよ、いい加減にしないと生物図鑑に乗らせて珍獣扱いさせるぞ、とルイスは思ったのであった。」

「いってる、いってるよルイス？」

「ユーリ、君の気持ちを代弁してあげたよ。」

「理解不能だよ！？っていうかダサいリーゼントたちが僕に矛先を向けたよ！？なんで？そこまで能無しなのかい！？」

ユーリが心の中を暴露している気がするが、ルイスは気にも留めず、ユーリと距離を離す。

「まってよ！？『僕この人と関係ありません』な態度をされても困るよ！？」

「まぁいい、かかって来いよリーゼント1号、2号。」

その言葉を合図に、リーゼント共はルイスに飛び掛ってくる。

拳を固め、顔でも殴れば泣きながら懇願してくるとでも思っているのだろう、その顔には余裕と怒りの二つが入り混じっている。

ルイスはそれを馬鹿にしたように笑うと、ボソッといった。

「ヘイスト」

行動が速くなり、俺は一号の拳を受け流し、そのまま突き出されている一号の腕を掴み思い切りひっぱり移動させる。

そこは二号の拳が通過するところで、一号の顔面に二号の拳が突き刺さり、うごぉぁっといいながら一号は倒れる。

その状態に二号は呆然とし、ハッと即座にルイスをみて、罵詈雑言を並べ立てるが、ルイスは鼻で笑った。

「君らの自爆だろ。」

その言葉に青筋をたて、二号は拳を放ってくる。何も変わらない一撃、なんとも学習能力が低いと思われる。

いまさらだが、動体視力も上がっている。拳なんてとまった感じだ。

ヘイストは、体内で流れる時間の速度を上げる魔法だ。念には念をいれて使ってしまったが、つまらないほどだ。

二号のパンチをルイスはいっきに叩き落すと、裏拳で頬に一撃。

へぶぅっとか言いながら二号は吹っ飛んでいった。

・・・１０メートルぐらい。

「・・・やりすぎだろうが。」

やったのはお前である。

そして戦闘終了。

なんだか知らないが自分の力に驚きを隠せない。

ユーリをみると呆然としながらルイスの手をとってブンブンと降り始める。

まぁこの程度なら子供にとって尊敬できる範囲なのだろうか?と俺は思った。

「そんな武術、いつならったんだい?」

「う~ん、まぁ我流なんだけどね。」

「すごいすごい!我流でそこまでいけるなんて!」

はしゃいでいるユーリは微笑ましかった。

・・・強いな、と俺は思った。

「さて、飯だろ?」

そういうと、ユーリはコクリとうなづき、先陣をとって歩き出す。

「さっさと飯くいてーな。」

パンを4つほど買った。

銅貨6枚ほどのお釣りがきた。

「・・・すまないが、ユーリ、銅貨って何枚で銀貨になるんだっけ？同等に金貨も。」

「ん？まぁいいか、銅貨１０で銀貨１だよ、銀貨は１０で金貨。」

「つまり銅貨１００で金貨なのか。」

「うん、そういうことだね・・・いきなりどうしたの？」

そういうユーリに、「いや、ちょっとね」というごまかし方をすると、ちょっと変に思われたのだろう、じーっとみてくる。

「まぁいいじゃないか。うん。」

それにしても、お金の値段が日本と同じくらいと考えると、銅貨＝１００円くらいになるわけだ。

パン屋でかえば、このくらいの大きさなら、１００円くらいだしな、と思いながらパンをみる。

つまり、銀貨は１０００、金貨は１００００か。ってことは一回の掃除で最低２０００円か、・・・高額収入だなぁ。

だが、掃除に関しても重労働の上、あんまりやらないということからこの値段なんだろう。

「で、銅貨以下のものはあるのか？」

「本当にどうしたの？」

「いや、ちょっと忘れてね。」

「そう？」

そう、ある程度の記憶はもどったが、まだ細かい記憶は戻っていない。

たぶん、いっきに思い出したショックで奥へと引っ込んでいるだろう。

それを引き出すためにも細かい記憶の一部を知っておこうと思ったわけだ。

「まぁいいや、その下にはもっと小さな銅貨があるよ。」

ふむ、まぁ日本の小銭と同じ発想だろうと考えられる。

よし、結構記憶が戻ってきた。

よし、目の前にいるやつの名前を思い出してみよう。

『ユーリ＝クレイス』

去年から一緒に仕事を探し回っている相棒といえる少女。

・・・少女？

「ぶふぅっ！？」

「うわっ！？汚いな・・・どうしたんだよ？」

「お前女だったのか！？」

「ひどっ！？その言動はひどいよ！？」

前途多難である。

第四章『戦闘』（後書き）

さて、本当に感想くれるとうれしいのですけど。

俺の文章はレビューや感想が書きにくいのでしょうか？

第五章『魔法』（前書き）

とりあえず経済状況の設定はいまやらなくても特に困らないですが。
さすがに魔術の設定は必要だと思ったのでやろうと思います。

第五章『魔法』

ユーリが女だった、驚きだ。

「まさにファンタズィー」

「これでファンタジー！？」

ユーリがなにか叫んでいるが、ルイスは気にもとめなかった！。

「とりあえず、魔法について教えとくれ。」

「・・・本当にどうしたの？」

心配してくれているのだろう、特に脳を。ユーリの目はルイスを哀れんでいるようにしかみてない。

「理由はあとで話すさ。・・・だが覚悟しておけよ、その理由を話した瞬間にお前の日常は平凡から、いきなり『ヒーハー！』とかいいはじめる日常になるから。」

「どんな日常！？想像できないよ！？」

「想像できない日常になるのさ、そうだな、日常で爆弾が落ちてくる日々かな。」

「そんな日々なりたくないなぁ・・・まぁいいや。とりあえず教えておくよ。魔法っていうのは、属性に対して分けてあるんだよね。

たくさんあるよ。火、水、風、光、闇、土、雷、氷、時、空間、暗黒、召喚といった感じだね。」

「闇と暗黒は同じじゃないのか？」

「闇は闇を操り、暗黒は暗黒に関する何かを使役するんだ。暗黒騎士みたいなのをつくりだすのが暗黒、闇は闇を操作したりするね。」

「へぇ・・・どんな魔法があるんだ？」

「うーん、魔法っていうのは血族によるものだよ。」

「つまりすべての人ができないということ？」

「僕はできるよ？」

・・・魔法使いか。なんだろう、これで弓使いや拳術士が現れたら勇者パーティーになるんだろうな・・・。

「ってことは、没落貴族みたいな？」

「見もふたもない言い方するね、ルイスは。まぁ当たっているけどさ。」

「ふむ、俺が絶対にお前を幸せにしてやるよ。」

「そ・・・それって・・・」

ユーリは顔を真っ赤にするが、ルイスのなにをいっているんだ？といいたげな顔をみて悟り、不機嫌になる。

「どーせ僕は女っぽくないですよ。」

さっきのルイスの発言を思い出し、さらに気分を害した。

慌ててルイスが言いつくろう。

「わ・・・わからなかった理由は後で話すよ。」

「絶対だよ?」

ルイスはうなづくと、それをみたユーリは「ふぅ・・・」とため息をついて話始める。

「僕はおとり潰しになった貴族みたいなものさ、名家と呼ばれる部類だけどね。それで魔法は仕える。魔法っていうのは、『使役した精霊』による技さ、大抵は魔の術として魔法だけど、これにより精霊術などと呼ばれている。精霊との契約により使役すると、『眼に分子がみえるようになる』」

「その分子により・・・って感じ?」

「うん、精霊の使役した数でどれくらいの分子をあつめられるかってことになる。魔力は分子を集めるためのものだね、簡単に言えば、落ち葉を分子とすると、それをあつめる手が魔力、そして集めているカゴが、精霊といえばいいかな。」

「へぇ、よくわかったよ。」

・・・俺の化け物度数が本当に良く分かった。『言えばそれが魔法

になる』なんてとてつもなくふざけてやがる。

「で、行動を精霊につたえれば、それが術となるんだ。そうだね。『炎の玉となり、あの箱を焼き尽くせ』」

そういうと、炎の玉が作り出され、木の箱へと向かい、その箱が焼けていく。

「まぁ創られた炎は、こちらの手のうちだから・・・やめて欲しいというときはやめてくれるよ。」

なんとも便利だ。

「魔法っていうのは、精霊がいなきゃだからね、『精霊にすかれる血筋』っていうのが魔法使いの根源だと思うよ?」

「へぇ・・・でも俺は結構変り種なんだな。」

そういうと、ユーリは『?』といった感じの表情になりルイスをみる。

「変り種・・・って?」

「うん、なんか言えば魔術になる。」

「・・・は?」

呆然としたユーリをちらりとも見ず。ルイスは言う。

「水よでてこい。」

でてきた。

さらにユーリは固まる。

「・・・すばらしいね。」

「いや、別にはっきりいっていいんだぞ。」

そういうと、ユーリはコクリとうなづく。そうして深呼吸を数回すると、すぐにユーリは大きく息を吸い、叫ぶ。

「何このチート！？」

ルイスはうんうんとうなづいたという。

「まぁ、とりあえずなんでこうなったか教えてくれるかな？」

「あぁ、俺の平凡な日常のためにがんばってくれるかな？」

「よくないとも。」

「・・・お前、本当に俺がいたところの人間じゃないよな？」

「なにいってんの？」

「別にいいけどな・・・。」

第五章『魔法』（後書き）

あぁつかれた。

第六章『涙』（前書き）

ほ・・・ほんとうにレビューが欲しいんですが・・・
いいんだか悪いんだかわからないんですけど・・・
というか感動系ってものがよくわからないんですけど・・・

第六章『涙』

「さて・・・教えてくれるかな？」

「いいともー」

魔法のレクチャー後、言ったとおり、ルイスは自分の今の状態を語り始める。

「まず始めに、俺はこの世界の住民でなかった」

「・・・？異世界ってやつ？」

「うん、察しが良くて助かるよ、そのときの記憶があるってことなんだよね。というか、あるようにされた。」

そういうと、ユーリは思ったとおりにルイスを疑いのまなざしでみる。

「悲しいけど、それが現実なのよね。」

「なんだかしらないけれど、前世では女だったの？ルイス」

「？・・・どうしてそう思うんだ？」

「たまに女言葉が混じるから。」

「いや、前世は男だよ、前世の記憶が混乱してでてしまうだけだ。」

「ふーん。」

ユーリはそれ以上追求はしてこない。してこないほうがいいのだが、まぁとりあえずはホッとしておこう。

「俺の前世は『碌な人生じゃない』と万人が聞くと万人がいうだろう。」

「・・・この人生も碌なものじゃないと思うけれど。」

「でも、未来がある、未来は無限だ。俺の未来は神により暴風域として設定されてそうだけどな。俺の前の人生は、親と笑って暮らした記憶がない。起きたときには、目の前は火の海で、親は死んでいた。」

「・・・なんだかごめん。」

申し訳なさそうにユーリは言うが、ルイスは気にしていないため、「別にいい」と返す。

「それで親戚に預けられたけど、親戚は俺の暴力三昧、そこの子供は俺を見下した、高校になり、入学がきまった瞬間飛び出して、そこから一人で生きて大学へといった。そして会社・・・ここでいう仕事をするところだが、そこにいって、ある女性とであった。その女性は俺の人生を聞いてなお、『まだ未来があるのだから』という感じで励ましてくれ、俺は両親が俺に送った、おれ自身への金の請求を全額払って決別し、そして俺はその女性とともにのみに出た。・・・そして俺はその女性を救うために命を捨てて護った。」

「・・・」

ユーリは絶句して、呆然としている。たしかにそうだろう、ルイスが前世の記憶を持つといってもありえないことなのに、俺の人生を語られては。

「・・・そして俺は、『世界と語る少女』と出会い、神を味方につけ。奇跡を起こす試練を渡された。」

「奇跡・・・？」

「『俺を励ましてくれた女性の幸せ』それが俺の起こす・・・奇跡だ。」

「・・・つらかったんだね。」

ユーリの言葉を聞いた瞬間に、俺は涙が出てきそうになる。優しい言葉であった。

いつもいつもいつも、泣くのを我慢して・・・それでもう出ることはないと思っていた。

俺は、ユーリと彼女を似ている、と思った。いとも簡単に、俺が我慢していたものを解き放ってくれる。

ギュッ・・・と温かいものがルイスに触れていく。

ユーリが俺・・・ルイスを抱きしめていた。

涙が、もう我慢できなかった。

辛かった、とても辛かった、一人で我慢して、誰にも言わず、ただひたすらに俺は生きてきた。

それは辛かった。他人におびえを持ちながらも、他人が好きで好きでたまらなかった。

だけど怖くて、俺の人生を打ち明けたら逃げてしまうんじゃないかと思っていた。

でも、俺は自然に打ち明けられていた。ルイスの心がユーリを信じていたからだと思う。

そして、彼女と・・・とても似ていたからだと思う。

だけど、ユーリは、逃げることなく・・・ルイスを抱きしめ続けていた。

「あ・・・りが・・・とう。」

子供に抱きしめられ、俺は涙が止まらなくなる。なんと恥ずかしいことだろう。

でも、それはとてもとても温かかった。

「もう、我慢しなくていい。」

その言葉は優しく・・・俺の心が自然と作り出していた壁を壊していく。

涙をだすための壁すら打ちこわし、俺の涙は自然と頬をつたっていき、地面へと落ちる。

ルイスは・・・俺は、その温かさを感じながら

『奇跡』をつくりだすことを決心した。

精一杯生きてやろう、そう心の中できめた。

だから、神、平凡にしてくれないかな？

第六章『涙』（後書き）

神「ヤダ」

天の声をきいてルイスの涙は止まらなかったという。

第七章『そうだ旅にでよう』（前書き）

感想キタァァァッ！

ありがとうございました！

『神のちょっとした好奇心』＝Ｇｏｄ'ｓ ｌｉｔｔｌｅ ｃｕｒｉｏｓｉｔｙ（Ｇｏｏｇｌｅ調べ）

間違ってたらご指摘願います。

技名はこれにしようかと思っております。

第七章『そうだ旅にでよう』

「そうだ、旅に出よう。」

「あんだけ泣いて、次の言葉がそれ!?」

最近ユーリが語尾に『!?』がついている人になってる気がするけど気にしない。

ユーリは突っ込んだ後、速攻切り替えて俺をみて、聞いてくる。

「・・・でもどうして旅に?」

「伝説の剣が抜かれたのはわかるよね?」

「あぁ、そうだね。・・・ってまさか。」

「あぁ、抜いたの俺♪。」

そういうと、ユーリは「はぁぁぁあぁぁあぁ」という大きなため息をついて額に手をあて、あきれている。

「仕方がないんだ!神の策略だったんだ!」

「はいはい。」

いや、本当だから（たぶん）、神の策略のせいで俺は剣を抜くことになったんだから!（たぶん）

「といっても、なんで国王に言わないの？英雄視されるよ？」

「平凡最高、とだけいっておく。」

ユーリは哀れなものを見るような目をして俺をみている。

「・・・大体が自滅じゃないか。」

「違う！神の策略だ！」

「もういいよそれは！・・・んで？旅に行くにしろ大丈夫なの？路銀とかないと死ぬよ？」

「金よ出ろ。」

ジャラララッ

「・・・」

ユーリが　こんな感じ↓ｏｒｚ　になっている。

「もう・・・いいよもう・・・」

ユーリがやさぐれている。まぁルイスのチート魔術をつかって魔法を越えていることをされると、そうなるのも仕方がないと思う。

「ったく精霊にがんばってなかまにしてもらったりがんばったのにルイスはまったく本当にいやになってくるよ。」

ユーリがいるところだけが、なんだかダークである。ひざを抱えて

何かブツブツいっている。

「呪・・・憎・・・」

「ストーップ！なんか呪術みたいな言葉が聞こえた！」

必死の思いでユーリを止める。

「ふぅ・・・まぁいいよ・・・旅に出るんでしょ？行こうよさっさと、オーケーオーケー」

「なんだか投げやりになってないか？ユーリ。」

「これで投げやりにならない魔法使いがいたら正気か疑うね。」

まぁ、そうだろうな・・・とルイスは思った。

「さて、期間は5年。明日からこの国からでる！」

「もうどうにでもな～れ☆」

大丈夫だろうかユーリは。

――次の日――

「さていこうか」

「・・・門番が居るよ?さすがに剣が抜かれた後だし、出る前に剣を持ち上げろみたいな審査はするんじゃない?」

「テレポ、門の外へ。」

ルイス、ユーリの体が光に包まれ門の外へと転送される。

「・・・人間の防御などドウデモイイんですかね。」

「『神のちょっとした好奇心』って俺は名前をつけた。」

「なんだか納得のいく名前になってる。」

「まぁ、俺がよければそれでいい。」

「昨日泣いてた人のセリフとは思えない」

まぁ、俺は今現在、『アイツ』のためにこうやって生きているんだけどさ。

「さて、ペガサスでてこい。」

でてきた。

そのペガサスにのって・・・

「最大目標は、どっかの街の兵隊として雇われることだ。どうせなら騎士団だ、騎士団の危機にさっそうと現れ、敵を粉砕し、そして

仲間になるって感じのありきたりパターンが欲しい。」

「いや、それじゃあペガサスってダメじゃない？」

「・・・なんで？」

「騎士団がペガサスにのった少年を仲間にしたいと思う？思われても目立つでしょ？しかも行く先々で目立っちゃうし」

「・・・たしかに」

「だから普通の馬にしようよ。もしくは歩き。」

「ペガサスは・・・男のロマンッ・・・！」

しぶしぶだが、ペガサスを還し、馬を召喚する。

赤兎馬である。三国志をみている人ならわかるだろう。

「さて、いこうか。」

そういって俺達は走り出す。

俺たちの未来が平凡になることを信じて！

「・・・街にいたほうがまだ平凡だと思うんだけど。」

そのユーリの言葉は、馬の走る音に掻き消えていったという。

第七章『そうだ旅にでよう』（後書き）

～世界少女と神の会話～

「・・・バカだな。」

「バカですね・・・旅にでるって。」

一番目が神、二番目が世界少女である。

「俺たちのかっこうの標的だな。」

「・・・そもそも、帰ってくるのが5年後といっても・・・勇者が必要になるのは6年後だというのに。」

「ある意味もっとも過酷な道をいっているな。」

～Ｆｉｎ～

第八章『鬼退治』（前書き）

なんだろう、ファンタジーってそんなにいいかな？

すでにアクセスが一万越えた今日この頃。

ルイスの自業自得による波乱万丈伝が今始まる。

第八章『鬼退治』

旅に出て、わずか一章後。

「うおおおぉぉぉ！」

「うわぁぁぁあっ！」

巨大な鬼に襲われている少年少女がいた。

「神だぁぁっ！神のせいだぁぁぁっ！」

こんなことになったのは約5分前のことだ。

「お？あれなんだ？」と興味を示したのは、真っ黒な壁。気になってぶん殴った結果、こうなった。

『・・・なんでもかんでも私のせいにしちゃいけない』ｂｙ神

・・・まさか鬼の背中とはな。

「まさにファンタズィー」

「なんっか余裕そうだねぇ？君のせいだよねぇ？ルイス？ルゥゥゥイィィスゥゥ！？」

「・・・ごめんなさい」

素直っていいよね、とルイスは心の中でそう思った。

いま、ユーリの背後には修羅が現れている。『わぁすごい！修羅を召喚するんだね君は！』とかいったら殺されるだろう。

「・・・って君の魔術で倒せるんじゃない？」

逃げながらユーリが冷静にいった。

「・・・おぉ確かに・・・」

「気づけよ！まぁ気づかなかった自分がいうことでもないけどさぁ！」

「とりあえず、どんなのがいいかな？」

「さっさとしろや！」

ユーリの俺の扱いに関していつか議論しようか。

まぁ、俺のせいでこうなっているんだから今は考えずに放つか。

「メラゾーマ」

・・・ヤッバイ☆いっちまったぜ☆

考えずにいってしまった結果のことであった。

「ねぇ・・・ルイス？なにあの巨大な炎の塊」

「・・・たぶん俺の居るところまで更地に変わると思う。」

「・・・逃げろおおおぉぉおおおお！」

ユーリが叫ぶ。ルイスとユーリはいっきに馬を叩き、急がせる。

鬼は呆然としているようだった。そう、その顔はもう諦めているといっていいだろう。

――――悟った顔をした最後だった。

「なんか罪悪感！なんか罪悪感が俺の中でデッドヒート！」

「うるさいっ！死にたくないからさっさと走れぇぇぇぇっ！」

爆発に巻き込まれ、ルイスたちは吹っ飛ばされる。

轟音と共に爆風。それはいまだ1ケタの子供である少年たちを吹き飛ばすには足りすぎていた。

「うあぁぁぁぁっ。」

叫び声がなんかエコーがかっていた。

「ぐふぅっ」

木に叩きつけられ、木が折れる始末。ちょっとそれをみて化け物さにショックをうけていると（いまさら）ユーリを探し始める。

「煙よ、はれよ」

そういうと、煙が瞬時にきえさり、後ろで爆発がおきて、そこから煙がでてくる煙のみになる。

「ユーリー」

呼ぶと、フラフラしながらユーリが出てくる。

「だ・・・大丈夫・・・」

「・・・ふぅ・・・死んだかと思ったぞ。」

「さすがにそれはひどいよ・・・頭痛い・・・」

「全治しろ。」

痛みがなくなったのだろう、ユーリは抑えていた手を離すと、「ふぅ・・・」とため息をつく。

「さっさと馬を探そうか。たぶん鬼はこれで死んだろうから。」

「そうだねぇ。」

俺達は馬を探し出し、再度乗る。

「さて、いくか。」

「そうだね。『触らぬ神にたたりなし』だよ、ルイス」

「わかったわかった」

ドドドド・・・・・

「・・・・なんだ？」

「東から・・・だね。」

鬼Ａが現れた！
鬼Ｂが現れた！
鬼Ｃが現れた！
鬼Ｄが現れた！
鬼Ｅが現れた！
鬼Ｆが現れた！
鬼Ｇが現れた！
鬼Ｈが現れた！
鬼Ｉが現れた！

「・・・」

「・・・真っ白に燃え尽きる前に逃げよう。」

「いや・・・新しい技を考えた。」

「なら、それをさっさと使おうよ。」

ごもっとも。

「終わる世界」

その一言で、鬼たちの進路先にブラックホールが出来上がる。

鬼たちは全滅した。

「・・・ちょ、吸い込まれてない！？」

たしかにブラックホールはルイスたちを吸い込もうとしている

「対処法もできている、『始まる世界』」

ブラックホールが内部から崩壊し、なくなる。

「・・・ふぅ。」

ドドドドド・・・

鬼Ｊｇ「もういいわい！」

前途多難であった。

第八章『鬼退治』（後書き）

～暇だからつくった魔法～

『終わる世界』

ブラックホールというより、次元崩壊させたのがブラックホールと化した感じ。

『始まる世界』

次元を内部から修復し始める魔法。

これはただの時空魔法の最強版といえる。

第九章『とある森の事件簿』前編

鬼は全滅した！

というわけで、鬼を全滅させ、半分焼け野原になった森からルイスたちは馬にのって出て行く。

「俺のせいじゃない、神のせいだ！」

「やったのはルイスじゃないか！」

ユーリがルイスの現実逃避に突っ込むが、ルイスは鼻歌を鳴らしてそっぽをむく。

それをみてユーリが「やれやれ・・・」と肩をすくめた。

そして馬に乗って数分。

村にいきつく、数分くらいで行き着いたことに驚きだ。あれだけの爆音だ、ダレかきてもおかしくはなかった。

でもこない、無人の村なのだろうか？とユーリは思った。

「無人だったらどうする？」

「気がたくさんあっぞ、人がいねぇってことはないとオラぁ思うな、それよりも飯くいてぇぞ。」

「ルイス・・・どうしたの？」

「いや・・・某気使いのカカロットさんの真似・・・そうかぁ、わかんないよなー」

「??」

ちょっとつまらなさをルイスは感じるが、まぁ仕方ないよな・・・と諦めた。

そして村へと入ると、やはり誰もいない。

「本当にだれもいないね?」

「だけど気があんだ!隠れてるんだろ?」

「うーん、正直、気ってやつがよくわからないんだけどさ。」

「見るのではなく・・・感じるのです。」

「なんだか会話をしているとイライラしてくるのは何故かな?」

気のせいです、後ろに修羅が見え始めたユーリはほっといて、村をみる。

小さな村といえるだろうか。農具などあるから、農村だろう。人がいた気配もあるし、たぶん隠れているのだろう。

警戒・・・か?とルイスは考えた。そういえば鬼もいたし・・・考えれば結構でる。

鬼に襲われるから・・・といった理由、ドドドド・・・という鬼が走った音も聞いたはずだ。

だったら声をかけてみよう、安全を知らせれば大丈夫だと思う。

「すいませーん！人間でーす！」

そう声を聞こえると、視線を感じた。だれかが声に気づいて俺をみているのだろう、とルイスは考え、視線の先へと手をふる。

そうすると、その視線の人物は、こちらに声をかけてくる。

「すまないが、一つ聞きたい。」

「はい？なんでしょうか？」

「森の鬼たちはどうなったんだろうか？鬼の足音のほかに爆音が聞こえたりとしたのだが・・・この村は鬼にさらわれたりと被害が甚大なのだ。鬼のことについて教えてくれないか？」

やはりな、とルイスはおもった。もしかして『鬼を神聖っぽく考えている』といった宗教の団体かもしれないと思ったりしたが、俺の前の済んでいた世界を考えると、そんなのは考えられない・・・だがここは別世界だ。だからこそ念をいれて『鬼を倒した』といっきにいわないようにきめていたが、そんなことは必要はなかった。

「鬼は・・・たぶん大体僕たちが倒したと思われます。」

「・・・本当か？」

「はい、鬼に火薬をぶつけて、ユーリ・・・この人の魔術により発火させ、爆発を起こし、倒していました。」

さすがに『俺のいったことが魔術になる』、『神のちょっとした好奇心』といった言葉はださないようにする。というか信じられるとは思わない。

それを聞いた農村の人々だろう・・・が家々や、近くの林からでてくる。

「あぁ・・・よかった。本当によかった!君たちは英雄だ!」

「は・・・はぁ・・・」

村人たちのテンションにユーリがちょっとひく。

「この村はね、子供や大人関係なしに人がさらわれるという事件があったんだ・・・その事件は鬼のせいらしいんだ、鬼がさらっていくところも見た人がいるからね。」

「へぇ、それはよかったですね。」

「あぁ!ありがとう!」

そういって村人たちはバンザーイとうれしそうにはしゃいだ。

ルイスとユーリはなんだかいいことをした気分だったという。

・・・ユーリは事実なにもやってないけど。

「ほっといてよ！」

そしてその情景をみている怪しい視線。

「・・・変な魔術を使うわね。」

そういって彼らをみていた、視線の先にはルイス。

『メラゾーマ』『終わる世界』『始まる世界』かれらがこの森に来て使った魔術。

「私の鬼を一瞬にして倒すとは・・・」

さらにこの森の不可解な現象は続く！

第九章『とある森の事件簿』前編（後書き）

～『世界少女』と『神』の雑談～

「・・・いやぁ、あいつ本当に波乱万丈だな。」

「本当にバカなんでしょうね。」

～ｆｉｎ～

そういえば、ユーリには色々と設定があったりします。

第十章『とある森の事件簿』中編

「俺とユーリは、旅に出て、森へとはいった。そのとき、無情にも鬼たちが俺たちへ襲い掛かってきた！、俺達は必死で撃退し、村へと到着、そこの村はダレもおらず、たくさんの人たちが失踪している。この不可解な事件、解決してやるぜ！じっちゃんの名にかけて！」

「・・・わたしら、いないことになってるんですかい？」

村人がなにかいってるぜ！名前なさそうなキャラはいなくてもいいんだぜ！

「ひどい！？」

「っていうか、無情なのはルイスじゃない？」

「じっちゃんの名にかけて！」

ユーリと村人たちが何かあきれているけど、俺はこの事件を解決するぜ！

「じっちゃんの名にかけてな！」

「もうしつこいよ。」

ユーリの俺を越える無情さにちょっと涙がでた。

「まぁ、鬼を退治してくれたのでもうそんなことはないと思われま

す。今日は村長である私の家に御泊まりください。」

「わぁ！いいんですか！ありがとうございます！」

そういってユーリと村長は歩いてゆく、でも俺は気にしない。

だって事件があるんだぜ！解決してやるぜ！

「じっちゃｎ「なにしているの？さっさと行くよ！」

・・・人生とは無情なことばかりだ。

ルイスはとぼとぼとユーリの後を追うことにする。

その後ろ姿を、一人の少女がみていた。

「ふふっ。」

その笑い声は誰の耳にも入りはしなかった。

「というわけで、さらわれた人について教えてください。」

「なにがというわけなんだよ・・・」

村長の家へとつき、夕食をご馳走になったあと、俺は情報を求めた。

「というか・・・面倒は嫌いじゃないの？」

「なんだかオラわぁくわくしてきたぞ！」

そんちょう　と　ユーリ　の　しせん　が　いたい　！

「まぁいいです。どうだったか・・・ですか？」

俺はコクリとうなづく。村長は何かを思い出したみたいに手を叩く。

「なにか？」

「全員体調が前日に悪くなってた・・・はずだな。」

「事件の情報は正確性が必要なんだ。しかし体調が悪くなってた・・・だと？、この事件、解いてやるぜ！じっ「はいはい、まぁいいから」・・・」

部屋の隅で『の』と永遠に書いてやろう、そうしよう。

ルイス　は　さっそく　じっこう　した　！

ユーリ　は　めんどくさそう　に　こっち　を　みている　！

なんだか　ルイス　は　なみだ　が　でてきた　！

「もういいっす・・・眠るッス」

いじけて眠ることにしたルイス。

「お風呂はいいんですか？」

「朝はいっていいですか？」

「別にかまいはしませんが。」

「じゃあ・・・そういうことで。」

「僕ははいってくるよ？」

勝手にしてくれ・・・とルイスはネチネチとした心で思った。

――夜。

ユーリは風呂にはいって、ルイスはベットへともぐりこむ。

怪しい影が、ルイスの寝ているベットへと近づく。

「・・・ユーくぱぁっ！？」

ルイスは手刀を食らわせられ、縄を巻かれ、担がれる。

「・・・よしっ。」

少女はそういって窓から外へと出る。
そして走り去っていく。夜の闇にとけこみ、その姿はみえなくなっていった。

「・・・ルイス・・・？寝てるの・・・？」

ドアからユーリが入ってくるが、ルイスがいないことには気づかない、そしてそのままユーリはとなりのベッドへと入り込み、寝息をたてる。

「・・・ふぅ、ここまでくれ「なにか大丈夫なのか？」っ！？」

少女はぐるぐる巻きになっている少年をみる。

「・・・気づいてたの？いつから？」

「あんな手刀て気絶する俺じゃない。俺はスーパーマンだ。」

「・・・？すぅぱぁまん？」

「・・・なんか恥ずかしくなってきた。」

自分でスーパーマンとかいっといて、理解されなかったら結構恥ずかしく感じる。

「・・・とりあえずいっしょにきてくれない？」

「な　い　よ　う　に　よ　る　っ　！　　！」

そんなこんなで、この少女との出会いが始まるのだった。

第十一章『とある森の事件簿』後編

「俺とユーリは、とある森の中で鬼とであい、それを撃退、そして村へ到着すると、そこは人さらいが多いという危険な村であった。鬼は何故居たのか、そして・・・何故人は失踪するのか！犯人はダレだ！この事件を俺は解決してやるぜ！じっちゃんの名にかけてっ！」

「・・・バカじゃないの？」

冷静にいわれるととてつもなく悲しくなるのは俺だけであろうか。

「そもそも人さらいの原因は私よ？」

「キミの名前はだれだっ！僕はルイスだっ！そして何故人をさらった！いざとなっちゃ、俺のバーニングな右腕がだまっちゃいないぜっ！」

「何そのテンション・・・」

ルイスのテンションはあがりっぱなしだ。

その理由は犯人が目の前にいるからだ、昔の話だが、彼は警察にあこがれていたことがある。

「ガッシャーンでドッシャーンな犯人との闘いだ！」

「なにがいいたいのかわからないけど、私の話きいてくれる？」

「あ、はい」

ルイスは寝転がって「ポテトチップス、うす塩味で」といってだして、それをパリパリと食い始める。

「なんか、腹立つわね・・・」

「あ?話せよ。」

「殺したいほどイライラしてくる・・・まぁいいわ・・・落ち着くのよわたし・・・」

とりあえず、とローブをはずし少女は素顔をみせる。

「エリカ、エリカ＝クレスフォードよ。」

「あっそ。」

ブチィッというなにかがきれた音がエリカから発せられる。気にしないというスルースキルがやばいくらいほどついたことにちょっと悲しくなってくる。

「気にしないのよ・・・気にしちゃだめなのよエリカ・・・」

気にしない。

「で、なんでさらってたんだ?」

「ちょっと来なさい。」

「わかった。」

とりあえずついて行くことにする。ついていかなきゃ何も分からないだろうし。

「・・・いやに素直ね？」

「危険だったらこの森をお前と共に道連れにしてやろう」

「なんか怖っ！」

「とりあえず変な施設へご到着しました。」

そこは、ただの家とは思えない場所、なんというか隔離施設とでも言おうか？

「はいりなさい。」

隔離施設へと入館。

そこには、人・・・人・・・人。人が寝かされている。

「ここでは、病気・・・つまり感染病の人を隔離している施設なの。」

「感染病？」

「そ・・・感染症による拡大をふせぐため・・・にね。感染拡大規模はとても大きいの。」

この人はいい人なのか。

「でもなんで秘密にしたんだ？」

「・・・」

「おい？」

「恥ずかしかったからよ・・・いいことしてほめられるってことが・・・なんだか・・・」

「・・・」

天の邪鬼って奴であろうか。エリカは顔を真っ赤にさせてうつむいている。

人にほめられるのになれていない、そんな人は恥ずかしくて、なんだか抵抗してしまう。

そんな人は結構いる。だけど彼女は・・・なんだか悲しかった。

「エリカ。親は・・・いる？」

彼女は首を横に振る。

やはり、な・・・と思った。

彼女は一人きりだったのだろう、施設をみると沢山の本があった。

それで魔法を覚え、鬼をつかっていた・・・。

「俺とともにくるか？」

「へ？」

なんだかわからないけど、俺と重ねてしまったような気がする。

「・・・でも・・・」

「全知しろ。」

治　った

「（・Д・；）」

エリカ　は　ぼうぜん　と　している　！

「じゃ、いくぞ！てめぇら治ったんだからでていってもいんだよ！」

寝ていた人々にむかってそういった。

「ちょちょちょ・・・ちょいまち！なにその魔術！？変わってると思って、治療に使えると思ってさらってきたけど、なにその魔術！？聞いたこと無いわ！」

・・・たぶん、この魔法をみられるたびに同じ反応なのだろう。ルイスはため息をつくとしゃべり出す。

「この魔術は俺は『神のちょっとした好奇心』と呼んでる。あとは後でだ。」

ルイスは身をひるがえし、すたこらさっさと村へと歩き始める。

「ちょ、ちょっとまちなさーい！」

「・・・というわけが事の顛末」

「そうでしたかー」

村長と話し、今回の事件について教えた。

村長はエリカに「ありがとう」と告げると、エリカは顔を真っ赤にする。

「じゃ、俺はいくから。」

「そうだね、っていうかルイス、自分自身でやっかいごとにつっこんでない？」

「ははっ、俺はスーパーマンだからな。」

そういうと、ユーリはクスクスと笑う。

「そだね、ルイスはスーパーマンだねっ。」

・・・ん？ユーリの言葉に少しばかり変な感じがする。

ユーリをみると、すでに玄関へとむかった様だ。

「・・・まぁいっか。」

エリカ　が　なかま　に　なった　！

俺たちの冒険ははじまったばかりだ！

第十一章『とある森の事件簿』後編（後書き）

ご愛読あり　神「おわんねーよ。」

違和感は、たぶん中編をみればわかるかと思われます。

P．S．

とりあえず感染病に関してはルイスくんが全部浄化しました。

第十二章『精霊を求めて』（前書き）

方針決めの物語
ぶっちゃけ題名覚えておけば別に問題はありません。

第十二章『精霊を求めて』

「で？ルイスたちは次はどこへいこうっていうの？」

「「へ？」」

ルイスたちがその言葉を発した瞬間に、風がひゅ～と流れる。

「・・・きめてないの？」

今現在、軽く馬を走らせて、『ラール草原』と呼ばれる場所につく。

別名『決戦の草原』、約１０００年、正確に言うと、１０２３年前の戦いにて、この草原が最終決戦の場となったのでこの名がついた。

昔、この国は２つの大国が争ってたらしい。

決戦とか聞いたけど、聞いた話では決着はつかなかったらしい。

最終的に疲弊した国家から、ブチぎれた大臣が反抗、そして数々の街をつくりだし・・・今現在にいたるわけである。

「・・・そもそもこの旅にでている理由ってなによ？」

「・・・」

「・・・」

唖然としたエリカ。いまさら考えてみよう。

「そんなもんないな。平凡万歳って感じだし」

「・・・旅にでたほうが波乱万丈じゃない？」

「・・・あ」

「ねぇ・・・いまさら？いまさらなの？君たちなにがしたいの？」

目をそらす、エリカの視線がチクチクを肌に突き刺さるような感じだ。

「・・・俺は・・・平凡万歳・・・だ。」

「バカなんだね。」

「まぁわかってたけどね。」

畜生、この少女2名本当に怒るぞ。

「とりあえず向かう先は・・・これさッ！」

「・・・木の棒！」

「『木の棒ＤＸ』」

「なにがすごいの？」

「ふふはは！この木の棒はな！魔法によって・・・！」

俺はブンッと木の棒を投げる。

クルクルと回って木の棒は当然のごとく自然の摂理、つまり重力に逆らわず落ちていき、ささる。

それはいい、それはいいが・・・地面にクレーターをつくるのであった。

「・・・なにをまるごとありえな～い木の棒だ。」

自分でなにをいっているのかよくわからない単語を使いまくって、変な説明完了。

「・・・で？」

「なにがしたいの？」

はい、そうですね、別に意味ないですよね。

「で・・・なにする？」

「そうだねエリカ、・・・さすがに強くなりたいと思うんだよ。」

「おぉ～い俺無視？」

女子二人がなんだか会話している、ルイスはのけ者のようである。

「というわけで精霊との契約をしてもらいにいこう。」

「うん、そうだね！各地の文献とかみて魔術についても理解しようかな！」

「それいいね！」

キャハハ、ウフフ

「・・・」

ルイス　は　いじけそう　だ

「さて、いこうかルイス！」

「・・・そうかい。」

「アハハハッなにをそんなにくらくなってるのかな？」

お前らのせいですが。

精霊契約のために、ユーリとエリカが行く！（ついでにルイスも）

そしてルイスは知らなかった。

そのたびの方針は、さらに自分を『英雄』もしくは『勇者』となることを確実に固めていくことを。

ルイスたちの波乱万丈はもう底なし沼のようだ。

第十三章『炎の大精霊』？（前書き）

一つ知ったよ。

『最強設定は話が続かない』

現に俺苦しんでいるもの。

第十三章『炎の大精霊』？

「さて、精霊探しのたび、はじまりなのです。そう、そこは秘境、何の種類かもわからない、普段は決してみることはできない鳥の鳴き声、そして夜になれば犬の遠吠え、木の葉により月の光さえも遮断され、そこは真っ暗な闇、そこに光る怪しい視線は誰ッ！？そう、そこには獰猛な動物たちがっ！「ちっ畜生っ！はやすぎるこいつらっ！」「まけないでっ！私の勇者様っ！」そんな声が飛び交い剣と牙は合間見える、ガキィン、キィンッ！それがあたるたびに当たりは光、火花のみが確認できる。あぁ、どうなる勇者一向！次回！『奇跡のための試練』第十四章『勇者、死す』！楽しみに待っててよね！」

「・・・」

「・・・」

ユーリとエリカはとてつもなく無言である。

俺を見ながら、最初は呆然となり、それからゆぅーっくりとさげすむような目になっていく。

「さて、旅に出てすでに七日である、『エンシェ』という街はまだ着かないのだが。」

「・・・まぁいいわ、とりあえず今日中にはつくと思うわよ。」

『エンシェ』というのは都市名

火山の目の前に位置するその街は、城があるため、結構大きな場所といえる。

そこは、火山の目の前だから危険というわけではない、むしろ栄えているような場所だ。

それは何故か？それは炎の大精霊との契約により、危険はないのである。

そして火山近くということから、炎の精霊などの守護があったり、地形にも結構有利であることから、『鉄壁』とも呼ばれるものがある。

「そこで、契約しようと思ってそこに向かっているのは、ルイス、ユーリ、エリカの三名・・・何が待ち構えているのだろうか。」

「・・・正直最近君がわからなくなってくるよルイス」

「この世にはたくさんわからないことがある、でもそれでいいって、俺は思うんだ、何故って？それはね、全てを知っているってことは、それだけ人の苦労を背負っているってことだ。人の悲劇をしっている。全知全能っていうのは、正直にってしまえば、『どんだけの人が苦しんでいるか、どんなことになって苦しんでいるか』それを知るからだと思うんだ、アハハ」

「・・・なにを壊れているの？ルイス。」

二人に心配されているが、俺はとまらない。

二人に無視され続けた一週間を思い出す。その心は『打ち殺す』という文字のみを刻み付けてくれている。

「そんな君たちが大好きだよ。アハハ」

「・・・」

本当に大丈夫だろうか？といった具合にみてくれている人がいる。

「・・・まぁさっさといって病院へいきましょう？」

「そうだね、そうしようか。」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

いまさらだが、俺はぶっ壊れていると俺でも思う。

「とりあえず、軽く上ってみるか。アーイキャーンフラーイ」

城の位置を確認するために、呪文詠唱・・・姿を鳥と化して空へと大きく跳ぶ。

そしてぐるりと見回すと、大きな城をみつけることができる。

すでに一週間もたったせいか、俺たちがでてきたであろう城下の城はとても小さくなっていた。

「うん、これなら今日中だな。」

そう思って、俺は降りようとする。

すると、ブワッと風が俺へとかかる。

「っ！？風強いな・・・っと・・・うわわ・・・！」

いくら最強設定であっても、今は鳥、自然の摂理には逆らえない状況だ。

「・・・ちょ！飛ばされる！うぉおお！お前らぁぁぁっ城に向かってくれぇぇ！まっすぐ行けばいいからぁぁぁ！」

ユーリはこちらをみて、呆然としている。

エリカは呪文を唱えようとしているが、こいつの魔法は、風の魔法がなかったはずだ。

つまり、俺は誰にも助けられないようで・・・。

風にあおられ、俺は翼を開いたままのせいか、ふっとばされていく。

「うわあああああああ！」

加速、加速。

その方向は・・・城。

「神のせいだぁぁぁぁぁっ！」

『この時期のこの方角への強い風は通常です。』ｂｙ神

俺は飛ばされていく。

そして・・・ドォンッという音をだし、なにかにぶつかり、俺はとまる。

鳥化をとき、そこをみると・・・

なんとも豪華な宮殿があったとさ。

「・・・大丈夫かな?」

「あいつは殺しても死なないと思うわよ。」

「それもそうかぁー!」

少女たちは城へと向かった。

第十四章『炎の大精霊』？（前書き）

とある森の・・・はぶっちゃけやっつけですが感想をもらえるとうれしいです。

第十四章『炎の大精霊』？

―ルイスが吹っ飛んでくる前の王宮にて―

エンシェは、炎の大精霊の加護により、富に満ちていた。そのかわり、ある程度の貢物が必要であったが。

しかし、ここ最近・・・山頂のほうから火山灰などの被害があり、先ほども火山から火のたまがふってきたなど、被害が最近拡大している。

「・・・本当に・・・大精霊様はどうなされたんでしょうか・・・」

この国の姫『ライカ』が、部屋の中で考える。大精霊については子供の頃に儀式としてあったことがある。

思い出しても見ると、そんなことをするような性格とは思えなかった。

『はっはっは！お前が次に私に仕える姫かっ！よろしく頼むぞ！』

そんなことをいって、おどおどしている私をみてケタケタと笑う大精霊。

「・・・なんで・・・？」

「ライカ様。」

突然、コンコンとドアを叩かれ、声をかけられる。

「なんでしょう?」

「『クレフォス様』がお呼びです。」

クレフォス、それは彼女の父の名前である。

「お父様が・・・?」

そういって彼女は立ち上がり、ドアへと歩き出す。

ドアを開けると、父の従者が立っており、彼はペコリとお辞儀をすると帰ってゆく、それをみて、侍女たちを呼び、私は部屋をでた。

・・・で、クレフォスの元へとライカは到着する。

「はい・・・なんでしょうか?」

「大精霊様のことは知っておるな?」

やはり、その話か・・・とライカは思ったが、顔にはださず父をみる。

「存じております。」

「そうか・・・ならば話ははやいな・・・近々騎士を編成して山へと向かおうと思ってな。」

それをきいて、ライカは自分の表情が驚愕の表情になることを感じた。

「まって・・・ください！大精霊様がこんなことをやるとは思えないのですが・・・！そもそも、騎士が何人集まろうとも、全滅するかもしれません！」

『大精霊の加護』は、９００年前ほどに『勇者』とこの国では呼ばれる人が剣をもって、一人で山で大精霊と戦い勝ち得たもの・・・と呼ばれている。

というと、はっきりいってしまうと大精霊が勇者を気に入ったからだが。

「しかし、このような事件はみすごせぬ・・・一国の姫として教えておきたかったからな・・・もう下がれ。」

「し・・・しかし」

ドォオオオンッという爆発するような音が響き渡り、煙が巻き起こる。

「な・・・なんですか！？」

「ライカ！下がりなさい！」

父親の声も聞こえず、その方向をみると、すぐに煙は晴れたのか・・・突っ込んできたものの正体がみえる。

「鳥・・・きれいな・・・」

黄金に輝く鳥・・・その光が途切れると、一人の少年に変わる。

「へ・・・？」

少年の声が聞こえた。

―ルイス視点―

ありえへん、まじありえへんとぞ思ふ。

王宮みたいな装飾、俺は現実逃避として、ここはたぶんあれだ、シャンデリア屋だ、だから高級志向なんだ。とか、シャンデリア屋なんてものがないことはしっているのに、よくわからないことを考えていた。

だが、ひとたび目に入った一人の少女にて、その逃避はがっちりと捕まえられ、逃避不可能となった。

まさに姫、目の前にいた人物は、いままでみてきた物語から考え、検索するに姫。

何度も検索したけど結果は姫である。

「ありえへんっ！」

俺はそのまま立ち上がると、天井に向かって叫ぶ。

「ひゃ！？」

その声に姫様っぽいのが驚いたらしい、いまさら俺の思考の９９％が『こいつは姫』という結果を出しているのに、１％を手繰り寄せる俺のふてぶてさに自分で驚きを隠せない。

だが、認めちまったら打ち首っぽく感じている、。

だからこそシャンデリア屋だ、お得意の『神のちょっとした好奇心』で直せるし。

「あ・・・すみません・・・ここはどこですか？」

まずは情報収集、正直今の状態はポケモンでいうこんらんだ。

『ルイス　は　こんらん　している　！』といった感じだ。

毒やまひよりたちの悪い『こんらん』状態だ。なんかやけどってどくよりたちが悪い気がするのは俺だけだろうか。

それでも運よくちゃんとした行動をしていたのは、心の中でＡとＢを押さず冷静に考えていたからだ。

ハッ！？なにゲームボーイな思考に！？

そういえばなんだかわからないけど、混乱時ってＡとかＢ連打すると必ず自分に攻撃し始めるんだけど・・・

っと、こういうのは思考停止に限る、彼女の名前紹介に耳を傾けよう。

「私は、ライカ・・・エンシェ・・・この国の姫です。」

まさに『現実からの逃走劇　ＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ　ｐａｒｔ１～俺がつっこんだとこは別に権力とかないとこだよね！そうだよね！～』がガラガラと崩れ去ったのであった。

「まじ・・・ありえへん。」

次の瞬間、俺は槍を突きつけられていた。

思考停止しかけているルイスに未来はあるのか！

第十四章『炎の大精霊』？（後書き）

書いといて思い出した。

シャンデリア専門ショップがあった。

物語の断片より（前書き）

別視点でみたプロローグです。

こんな微妙なときに何故やったかと言うと・・・

いまさら発見したからです。

物語の断片より

世界など、脆いものだと私は知っている。それが私自身だから。

それより人は脆い、簡単に崩れ去ってしまう。

だけど、彼は私にまっすぐ向き合い言った『桜井美奈子の笑顔』を奇跡とし、言い放った。

『自らが生き返り、幸せな世界を生きる』そんな奇跡をつかえばいいのに、彼はその選択肢が自分の中にあったことをしっていたのに言い放った。

他人の幸せを。

人間の世界は欲まみれ。

腐った世界ばかりで彼はその腐った世界の被害者であった。

そして彼は壊れながらも、必死に人を愛し、そして彼は必死に『いつか起こる幸せ』をつかむため、必死にもがいていた。

私はそれをみて哀れに思った。

『どうせなら一思いに死んでしまえばいい』そう思い、殺すことを決断した。

そして彼は彼女を護り死んでしまった。

そして私は彼を見ていたら、彼は酷く後悔していた。

そして彼の声が聞こえる。『幸せだったのか。』と彼は言った。

最後の最後での幸せ、私はそれを壊してしまった。

世界であった私は後悔し、神に願い。

『空白の奇跡』を手に入れた。

私は彼を私の世界に呼び出し、彼に奇跡を与える試練を与えることとした。

生きることなどは特に関係ない。

彼が邪魔されることなくまっすぐ生きることを、私は願っているのだった。

だから私は彼女に会ったのだった。

ｂｙ世界少女　アニータより

物語の断片より（後書き）

この物語は、９割のおふざけと１割のシリアスで出来ています。

第十五章『炎の大精霊』？

やり　を　つきつけられた　！

ルイスはどうする？

↓たたかう
とくぎ
まほう
にげる

「うるせぇっ！俺の心の中ではいつも一つ！そう、俺はまっすぐにそこへ向かうのさ！そこへのレッドカーペットが今まさに俺の目の前にあるんだよぉぉぉ！ここで、それをしない俺がいるとでも！？あぁいねぇなぁ！いねぇさ！」

ルイス　は　にげだした　！

しかし　まわりこまれて　しまった！

「カッコイイことといってなにをいっている賊め！」

「ふっ、人ってものはな、いつでも心に仮面をつけてなくちゃいけないのさ・・・言葉にも、仮面を着せて、そして人は過ごしていき、人の表情をみて、どうするかきめる・・・それが人間さ。お前ら・・・なにかいっているが・・・俺がまだ諦めないとでも思ったか！？俺は逃げる！事件というなの無駄に嫌なものからなっ！」

ルイス　は　にげだした　！

しかし　まわりこまれて　しまった　！

「お前しつこいな」

「お前はなんか雰囲気だしてかっこいいことをいっているよな！？」

「雰囲気・・・？そｒ「もういいから捕らえろ！」ちょっとまて、カッコイイことをいいたい気分だったのに」

その王の大号令をもとに、いっきに騎士たちが詰め寄ってくる。

「凍る大地！はじける結晶！」

地面・・・といっても床なのだが、それをいっきに表面だけ凍らせて、破壊する。

『神のちょっとした好奇心』を発動し、魔法をはなったあと一気に足に気を集め、瞬時に移動を開始する。

そのときであった。

大きな大剣が向かってくる。それに驚いたが、俺は迷わず身を低くする。

「へイストッ！」

即座に進行速度の加速化。

「高く飛び上がれッ！ジャンプ！」

正直この『神のちょっとした好奇心』がここまで役に立つとは思わなかった。

チラッと相手をみると、相手は・・・真後ろに居た。

「チィィッ！？エンシェの騎士兵は化け物かっ！？」

某赤いモビルスーツさんの言葉みたいなことを吐いて、俺は行動を移す。

正直にいおう。いまさらだが、俺には『経験』がない。

つまり、経験が結構ありそうな人には高威力発射しまくって戦うしかないのだ。

戦略的な戦い方はできない。

「テレポ！！」

転移、即座に俺は地面へと脚を置く。

「Ｉ　ａｍ　ボ・・・うわぁぁっ！？」

いきなり目の前に移動する騎士さん、顔がみえないが、体格的に女性。弓兵さんの魔術も使えないじゃないか。

女性っていうのは、基本的に力のつきにくい体ですが、持久力は結構つきやすい・・・

つまり、この状況は・・・こいつは気使いであることの証明である。

気を足にためることによる行動のスピードの高速化。

そしてこの身のこなしと、テレポなどの魔法によりひるむ様子もない。

この人は本物だ。とそう感じた。

さて、どうす――――ッ!?

速い!?後ろに現れ、俺の口をふさぐ。

「ぐ――――!?」

「さすがに・・・驚いたぞ。」

よくいうよ、と俺は思った。声は若い女性である。その声は冷静だ。いまいった言葉を返していただきたい。

「さすがに腰を落ち着けて話そうか・・・どういう理由でここにきたのか・・・話してもらうよ。」

そういうと、口をふさいでいた手を離し、俺を解放する。

「で・・・どうやってここまではいったんだ?」

「鳥になって風にあおられふっとんだらここだった。」

「――――は？」

うん、理解してた。

俺は、俺のつくりだした魔術として色々と話していく。

そして話し終わると、騎士さんは思い出したように兜を脱ぐ。

きれいな女性であった。

そしてその女性はキラキラした瞳で俺にいうのだった。

「炎の大精霊様に会いにいくかっ！」

「――――は？」

拝啓：ユーリさま、エリカさま、お願いだからさっさとみつけてくれるとうれしいです。

第十五章『炎の大精霊』？（後書き）

ルイスのチート的能力は。

『想像を魔法できる』といったものです。

身体能力自体もありえなく強いですが、その力を抑え込めるのは結構簡単です。

事実、こういった室内での超身体能力はあまりにも意味はないですし、ヘイストをつかっても、それを越える能力をもって戦われればいみがない。

しかも、ルイスは驚いて詠唱をとめるという失態を犯しました。

どんなチート能力でも欠点があるということがありますね。

まぁ、抑えこめられたら逃げる方法で、『魔力を一気に解放』という方法があり、敵をふっとばせますが。

そのことを知らない、魔力のことをしらないルイスには言っても無駄です。

今のルイスじゃ、後ろをとられたので、即座に口を押さえられ首に剣をつきつけられれば負けです。

第十六章『炎の大精霊』？（前書き）

うん、忙しくなったので結構の期間書かないかな。

一週間後くらいに会いましょう。

しかしまだこの『炎の大精霊　編』は終わりませんねぇ・・・

第十六章『炎の大精霊』？

ガチャガチャ。ズルズル。

そんな音を聞かせながら、鎖でぐるぐる巻きにされた俺は、人の目がある道をあるく。

どんな羞恥プレイだ

そうアレは数十分前だ。

「さて、私の名前はユリア、今から君の戦友だ。」

「はぁ？なにいってんだおま「さぁいこうじゃないかっ！」ちょ、聞いてる？」

俺が言うことを全く聞かずに、騎士・・・『ユリア』とかいった女性は俺の首根っこを掴むとズルズルと引きずっていく

「ちょ？聞いてる？聞いてますか？おーい！」

「あっはっはっはっは！あーっはっはっはっは！」

ヤバイ聞いていない。どうする？俺はどうすればいい？

まったく思いつかない。テレポで遠くに逃げても、この騎士だと数秒後に

「あっはっは！」とかいいながら走ってきそうで怖い。下手したら失禁する。

だけどな！俺は逃げることを諦めない！

ルイス　は　にげだした　！

しかしつかまった！

ルイスは鎖によって拘束された！

ルイスは引きずられていった！

なんだかドナドナをルイスは思い出したという・・・。

で、今現在。

大通りを俺は引きずられるという羞恥プレイをくらわされている。

俺はMではない、普通だといいたい、性的な意味で。

「・・・」

適当に周りを見回していくと、ある知り合いの顔がみえた。

『救いだっ！』とルイスは思ったが、それは勘違いである（断定）。
ユーリとエリカの顔、結構早くにもついていたのかとルイスは神を信じそうになった。

「ユーリッ！エリカァッ！」

ユーリとエリカは目をそらした。

「てめぇら!?無視かっ！無視なのか!?」

「なんだ?仲間がいるのか?」

ユリア（顔を覆うような兜をしているので声がこもっていようだ）が声をかけてくる。

「いや・・・」

居たはずの場所をみるとすでに誰も居なかった。あいつらは最近俺の扱いが酷くなってる気がする。

この街を最後に置いていっていいような気がするよ俺。

「・・・もういいよ」

引きずられながらルイスは涙を流したという。

「さて、参りましたね・・・ククール山。」

それが本当の名前か、とルイスは思いながら、鎖を引きちぎる。

「さて・・・どうするんだ?会うにしても俺、道わかんないぞ?」

「大丈夫だ、私は一度きたことがあるぞ。」

「・・・そうか。」

・・・ふぅ、本当にこいつは俺に何をして欲しいのだろうか。能力をもっているため、ちょっとした達人レベルとか、剣のみを極めた人とかなら勝てそうだが。

気と剣術、二つにして俺を負かしたこの女性は俺に何をもとめているのだろうか?

そもそも姫様空気だし、王様も空気、っていうか騎士団で向かうんじゃなかったのか?ねぇそこどうなんだＹＯ!

「ふぅ、君なら結構補助になると思ってね・・・ってありゃ。」

俺ほうをみて、すこし固まったと思うと変な声をあげるユリア。

「どうしたんだよ。」

俺はその様子を変に思うと、とりあえずとして声をかける。山の内部まですでに来てしまった・・・もう逃げられないと思う。

「騎士団おいてきちった。」

その言葉に、俺は固まるしかなかった。

ユリアは、『テヘッ☆』とかいいながら目をそらし続けていたという。

――ユーリとエリカ――

「・・・なんでルイスは鎖でぐるぐる巻きにされてるの？大罪人？」

「知らないわよ、私が。」

ルイスが大通りを鎖でまかれて引きずられていくという様子をみたユーリとエリカは混乱していた。というか誰でも混乱する。

そもそもルイスは6歳という状況だ。そんな子供が、騎士にずるずると引きずられていったという様子にびっくりだ。

「・・・騎士が横暴をするといったうわさもないし、騎士に関しては結構尊敬されているらしいし。」

ユーリがどうしてこうなったんだか全く分からないといった具合に混乱していると、道を歩いている騎士が話をしていた。

その話に、何か情報がないかと思い、ユーリは聞き耳をたてる。

『ユリアさんが子供を引き連れ火山にはいって炎の大精霊のところにいったってよ・・・』

・・・

・・・・・

「あぁぁぁぁぁぁっ！？」

隣でさっき買った菓子パンを食べていたエリカは、『ビクゥッ！』と驚き、ユーリをみる。

「どうしたの？」

「ルイス、大精霊のとこいった！」

「えぇ！？」

少女たちは火山へとはしっていった。

第十七章『炎の大精霊』？ ―ちょっと変更― （前書き）

・・・一週間後に時間がないことを判明しました。

無理矢理時間をつくって短時間ですませました。

といっても、大抵毎回１０分で思いつくとおりに書いているのですけど。

第十七章『炎の大精霊』？ーちょっと変更ー

「あらすじを説明するぜっ！」

「ひゅーひゅー（棒読み）」

ルイスが変な方向を向いて宣言すると、ユリアは棒読みだがのってくれた、その様子にルイスはホロリと涙をながしながら、ルイスは続ける。俺は止まらない、俺の背中を押してくれるヤツがいるかぎり止まるわけには行かない。みんな俺を変なやつな目でみてた（変なやつだけど）でも、こいつは俺の背を押してくれる（棒読みだけど）だから、俺はやめるわけにはいかないんだぁぁぁ！とか思いながら続きをいい始める。

「舞台はエンシェ、自らの魔法『Ｉ　ｃａｎ　ｆｌｙ』により鳥化したが、突如として発生した風によりルイスは吹き飛ばされてしまう。そして着地・・・もとい突撃した先はエンシェの城であった！。」

「わーわー（棒読み）」

「そして俺はそこで、怪しい人物として認知され、戦い、ユリアと言う女騎士にまけてしまう。やはり経験がなければダメらしい・・・。だがその騎士がいきなり俺に継げる。『いっしょに大精霊にあわないかと！そして俺達は・・・騎士とともにこの山奥へといる！」

「騎士団おいてきちった☆」

「騎士団なしというこのさなか！ユリアとルイスは大精霊に勝てる

のか！ドゴドンッ！」

パチパチと一人の拍手が出てきた。

その拍手にルイスは涙をながしながら答える。

「あんたは・・・最高だ。」

「よくわからないけど、まぁうれしそうでよかったよ。」

こいつぁ親友になれそうだぁ～とルイスはうれしそうに思ったという。

「さて・・・」

話をルイスはもどそうとする。おもいきりズラしたのは俺ゆえ、もどすべきなのも俺だ。

今回のミッションは『大精霊と交渉、不可のときは捕縛、もしくは勝利せよ！』といった具合である。

いまさらだが、なんだかのってきた、鎖で拘束されて大通りをつっきられたあの恥ずかしさも忘れている。

「ミッションスタートッ！」

「あぁ、いくぞ！・・・というか、みっしょんこんぷりぃとってなんだ？」

なんとまぁ、英語が普及していないようだ。

しかし・・・看板をみると、ビールとか普通に書いてあったのだが。
うーむ・・・この世界の文字について考えるべきだな。
「・・・さぁいくぞ！」
「なんか気になるんだけど。」
スルースキル発動し、俺はズンズンと前へと進んでいく。いっておくが、俺は６歳だ、そしてユリアは１８と１０以上はなれている。
たぶん今の状態はなんとなくシュールだろう。
６歳が１８歳をつれて歩いている状況。
なんだか面白い。
すでに歩いて数十分がたつ。
結構な暑さにもなってくる、さすが火山だ。額にじんわりと汗がでてきて、俺はそれを手で拭う。
「ふぅ・・・熱いな・・・っていうかユリア、鎧きて熱くないのか

？」

「騎士が危険地帯に防具を脱ぐわけにはいくまい。しかし大丈夫だ。真夏でも騎士団はこの装備をやめることはできない。顔だけでもだしているからな・・・まだいい。」

俺は騎士団になれないな・・・ルイスは確信した。

「さて、結構な時間がすぎたが・・・「まて、ルイス」・・・なんだ？」

「足音、二人だ。」

「耳よ。」

そういって俺はイメージする、聴力の底上げを。

「・・・たしかに足音だな。」

そういって方向をじっとみていると、知り合いであることを気づく。

「ユーリ、エリカ？なんでここに？」

出てきたユーリとエリカにそう声をかけると、二人は怒りをあらわにする。

「なんでつかまってんの！？」

「ていうか騎士とともに何で火山にきてんの！？」

うん、ごもっともだと自分で言われて思った。

そう思いながら、ルイスはどう説明するかと考える。まぁシンプルが一番だ。

「鳥になったら突風により飛ばされ、城に激突後騎士団と戦闘、戦闘により認められたのか、このユリアさんっていう騎士団の人に認められて、火山にいくことになったので逃げようとしたら鎖でまかれてひきずられて火山でこうやって大精霊探し中だ。大精霊は今現在妙なことになってるらしいよ。」

「「なんだろう、納得できた。」」

どういう意味？俺の運のなさ的な意味？

「まぁ、いまさら驚くわけにもいかないね。こんにちはです、ユリアさん。」

「はい、私はユーリです・・・って大人の女性だね。」

「はぁ、１８歳ですが。まぁ、このエンシェの騎士団の二番隊隊長です。ユリアとよんでください。」

そういって女子たちは結成された。あぁ、俺はのけ者になるのかと結構恐れている俺が居る。

「さて、ルイス？すぐに大精霊を探したいですね、さすがにこの熱さでは体力が消費されます。」

「水よでろ・・・」

水を召喚しもってきた水筒に入れておく。

水筒は結構な熱をもっているが、閉めておけば問題は無いだろう。

「ふぅ、ルイスの魔法には驚かされますね。」

「何このチート、って感じですよね。」

「はい？ちぃと・・・・？」

「いえ、なんでもないです聞かないでください。」

女性陣がなにか話しているが、俺は気にしない方向でいこう。いいことおもいついたのだ。

「大精霊探知機～」

といって、大精霊探知機を呼び出す。

「・・・あるならいってください。」

ユリアのなんだか攻めている目がチクチクとするが、いいじゃないか、今思いついたんだし。

「どーせ今思いついたんでしょ？」

エリカ、うっさい。

普通に大精霊とあった。

「・・・」

まさに無言（なにがまさになんだかよくわからないが。）

大精霊は男なのか女なのかよくわからない人だった。

オレンジ色の光が、その人から発生していることと、ユリアさんの証言からこの人が大精霊だと理解できる。

その人に、なにか黒いものがまとわりついている状態である。

「・・・なんだろ？これ。」

そう思って、俺は検査魔法をかけてみる。そうすると、『呪い』という文字がでてくる。

その瞬間、俺の探査の魔力はエラーを大量に起こし、『呪』という字が検査魔法を埋め尽くし始める。

「ッ！？」

いっきに引き剥がし、ルイスはすこし安堵しながらも距離をとる。

そのとき、大精霊が声をだす。

『あ・・・あぁ・・・だ・・・れ?』

そんな声、結構弱っていると考えられる。声が弱く、かすれていた。

「オッス、オラルイス!転生者だ。」

「ル・・・ルルルルルイス!?そんなこといっていいの!?」

魔法で二人には聞こえないようにしたから大丈夫だ。

『オッス』という言葉で、空気振動を制御した。なんてチートさだ、この魔法は。

『転生・・・?』

俺はコックリとうなづく。

「そして一つ聞きたい、どうした?なにがあった?」

『・・・黒いヤツ・・・大精霊を・・・』

「・・・さすがにヤバイ状況だな。呪いという検索結果がでているし、つかってみるか。聖なる光、ホーリー!」

そうすると、俺の手から光が放射され、黒いものが浄化される。

『う・・・なんだ?これ・・・楽になった?』

「オッス、俺の魔法だ!俺は想像を魔法にする能力をもった無駄に最強な人だ!化け物だ!」

そういうと、大精霊はキョトンとしたあと、クックックと笑い始める。

『はっはっは！自分で自分を化け物というとは！』

「本当なんだから仕方がないと思われる。」

ユーリ、お前はなんで俺を貶める言い方をするかな。

「・・・まぁいいさ。さて・・・治ったし俺は帰るぞ。」

『ちょっとまて、契約してけ転生者よ。』

「つってもな・・・別に必要な感じだと思うか？」

『思わぬ・・・しかし後々楽になるぞ。』

「します、すぐにします。」

楽、ということばに速攻反応する。隣ではユーリがため息をつくが、気にしたらだめである。

「もういいさ。とりあえず大精霊様、僕とも契約してくれる？」

『あぁ、いいだろう、命の恩人のよしみである。』

そういって俺達は大精霊と契約を完了させる。

エリカが、「なんで秘密にするのよ！」と怒っていたことをここに

記そう。

さすがに、しゃべってる内容を変換する魔法をつかえばよかったかな？でもな・・・魔力つかいそうだな・・・無限みたいなもんだけど

『ま、最後にこの鎧を渡そう。』

「鎧？別にいらないんだけど？」

『まぁいいじゃないか、もっておけ。』

そういって炎の大精霊様が鎧をくれた。上半身だけだけど。

赤い鎧、なんだかカッコイイので、快くもらった。

「無限の倉庫よ。」といって魔法を発動、異次元空間に無限の倉庫をつくりあげ、俺はそこに赤い鎧を投げ込む。

『では、な・・・』

俺達は手をふって大精霊のもとを離れたのだった。

―大精霊視点―

白銀の剣を引っこ抜いたことが感じ取れたので、炎の鎧をくれてや

った

白銀の剣による、物語と共にあった鎧だ。

あいつもお気に召しただろう。

さて、あいつはどうやって世界を救うかな？

大精霊たちの鎧を集めれば、白銀の勇者のできあがりだ。

あの剣の伝説が、また始まるのか。

そう思いながら炎の大精霊は帰っていった。

主人公はそんなものはしらなかった。

ぶっちゃけその剣から逃亡している最中だということを、炎の大精霊は知らなかった。

ついでにその鎧が、『白銀の剣』関係だということも知らなかった。

第十七章『炎の大精霊』？ー ちょっと変更ー（後書き）

最後やっつけな感じで書き続けてgdgdですが、気にしないでくれると助かります。

無駄に長いし。

世界少女「というか、伝説系防具集め始めたな、無意識と言うものが驚きだ。」

それがこの物語ですから。

～主人公が手に入れた防具～

『ほのおのよろい』
主人公の引っこ抜いた剣と同じような鎧。

FFとかドラクエって感じでいうなれば。

効果：炎の魔法無効化
　　毒無効化

キャラクター紹介　後々ここで増やします。（前書き）

注意：いまさらですがとてつもなくあれです、なんていうかーネタバレしまくります。なんでこの場所に書いたのかわかりませんが、ネタバレ嫌な人はみないように。

キャラクター紹介　後々ここで増やします。

主人公
『ルイス＝アクセシウム』
生前名：佐々木　勇樹
性別：男
称号：白銀の勇者

世界少女により、異世界に転生された人。

筋力がびっくりするほどあがっている。６歳の少年

能力：神のちょっとした好奇心『Ｇｏｄ' ｓ　ｌｉｔｔｌｅ　ｃｕｒｉｏｓｉｔｙ』
　想像を魔術と化す。

発動するのに必要なこと。

　想像→とりあえず魔術の呪文を適当に決めていう→発動

ゆえに、想像不可能な魔法は無理。
『絶対に壊れない盾』は無理。
『すべての病気を治す薬』は無理。
しかし、この場合、本人を目の前にして『健康な状態』を想像して見せればどんなものでも治る。
～事件簿のときは想像し、『全治しろ』というキーワードにて、健康な状態を作り上げた。
漫画などの魔法は『どんなものがでてくるか』といった知識から創り上げた剣を最初は作った。

ゆえに、知識のない魔術は使用不可能。

容姿：『黒髪』軽くツンツンしてる感じ。

装備：私服

持ち物：

『白銀の剣』（慈愛の剣）

『炎の上鎧』

『水の兜』

『光のグローブ』

『風の肩当』

『時の鞘』

『土のピアス』

『闇のグローブ』

『氷のピアス』

『雷の靴』

『召喚の腕輪』

『暗黒の指輪』

『空間の下鎧』

『虹の盾』

『ユーリ＝クレイス』

生前名：桜井美奈子

性別：女

称号：大精霊使い

結構な家の出であるが、没落の上、ルイスと共に生きることになった人

ある程度の魔術は使える。この人も６歳

能力：

容姿『茶髪のショートカット』眼の色は緑・・・となります。

装備：私服

『鳳凰の杖』

持ち物：特になし

『エリカ＝クレスフォード』

生前名：

性別：女

称号：召喚士・大精霊使い

両親が死亡後、家にある魔法に関する書物にて、魔法を使用可能となった。

時空魔法が得意。契約により鬼と契約したがルイスにふっとばされて現在は４匹（今現在書かれている中で

能力：

容姿：『茶髪のツインテ』眼の色は黒。

装備：私服

『アネモイの斧』

持ち物：とくにはない

『ユリア』

生前名：

性別：女

無駄に最強な騎士様。

能力：

『気使い』

容姿：『金髪の長髪』

装備：『麒麟の剣』

持ち物：軽い薬品、携帯食料など。

『カイト』
生前名：カイト
性別：おん・・・男

絶対不変の盾。
転生者二人目
ピンクがかった長髪の美人。
でも男

能力：『絶対不変の天使の翼』
・絶対不変の盾
・邪気などをはらう
・精神干渉
・羽をとばして攻撃
・飛べる

装備：一般的な剣
兵隊の鎧
天使の輪

持ち物：

『アリス』
生前名：朝比奈義明
性別：女（でも前世は男）

ちょっと赤っぽい金の髪。
転生者三人目

美人さん、でもロリコンの上前世男

能力『すべての流れを視る者』

時の流れをみて、過去、未来をみれるうえ、相手の攻撃の流を超低速でみることがかのう。

しかし、自分の行動がはやくなるわけではない。
魔力の流をみて、魔法自体をコピーすることも可能だが、ルイスの魔法は無理。

装備：騎士団服
『エクスカリバー』

持ち物：
・学生服
・巫女服

『ルシル』
生前名：
性別：女

最初は幼女、途中少女
白髪で、邪神の手下によりひどいめにあってきた

装備：『グリモワール』

『レイ』
生前名：レイ（でてきたときから死んでます
性別：女

能力：ポルターガイスト（実をいうと、ドッペルゲンガーも可能

『クリス』
生前名：中川良子
性別：女

能力：『過程の創造者』

こういうのをつくりたい、と想像をすると、それを創れる過程を創り上げることができる

武器：『創造の槌』

世界少女たち

第一の世界少女
『アニータ』
姿的に緑色みつあみの眼鏡をかけた図書委員風の少女です。
第二の世界少女
『エール』
白髪の大人の女性、少女じゃない？しるか！イメージは短髪ですから
第三の世界少女
『ルベリス』
灰色の髪、長髪。性格的にドSで間違いない。
第四の世界少女
『リティシア』
水色の髪をしたちょっと長い髪をした少女

正直設定資料を掘り起こすとは思わなかった。

すこし前に思い出したので、本文中にかかれてたらごめんなさい。

それ間違ってるかと

アニータはもともと名前だす気だったからねぇ・・・

。

キャラクター紹介　後々ここで増やします。（後書き）

第十八章『城』（前書き）

転生者は次回ですかね。

第十八章『城』

物語は、炎の大精霊を救い、城へと舞い戻った後である。

今現在、ユリア、ユーリ、そしてエリカと共に城へと戻り、門番へと話をつけたあとに玉座へと呼ばれ、今現在王と対峙している。

「このたびはどうもありがとう。」

王、という風格というよりもルイスたちのことを恩人と見ている王は礼を述べる。

ルイスたちは、「いえ・・・」と返しただけですました。

「今回の功績により、なにかしらの褒美を与えたいのだが、何か欲しいかな?」

「いえ、これといって・・・」

本当に何もいらない。

金なんて、『金よでろ』といえば出てくる上。

食べ物でさえでてくる始末。

そんなチートをもちながら何かを欲しがるなんて愚の骨頂だろう。

というかどんだけ傲慢なんだとユーリとエリカから突っ込まれるだろう。

「ほぉ・・・年齢さえ本当に小さいのに、なんてしっかりした子供だ。」

どうやって取られたのだかよくわからないが、王様は俺をいいやつだと判断したらしい。

正直、どうでもいいが結論になっているのだが、王様は気づいていない。

「それで・・・今後の方針はあるのかい？」

王様は優しくいってくる。俺は後ろに居るユーリとエリカをみると、伝わったのか、ユーリがいった。

「水の大精霊へと会いに行こうかと思います。」

そういうと、王様はにこりと笑う。

「君たちの恩返しは、水の大精霊と簡単にあえるようにしよう。」

「ありがとうございます。」

「では・・・本当にアリガトウ。さがって良い。」

そういって王様は俺たちをさがらせようとすると、隣から声がした。

「すみませんが一つお願いがあるのですが。」

そういうと、王様はユリアのほうへと向く。

「なんだ？」

「私は、ルイスと共に旅をしてみたいのですが。」

・・・

俺たちの時間がすこし停止し、ユーリが「えぇぇぇっ！？」という叫びがおき、それに呼応するようにエリカさえも叫ぶ。

「それは・・・何故だ？」

「ルイスの魔術をもっと見ていきました。とてもではないが、人ができるようなものではなく、天才だと思われます。だからこそ、魔術が未熟な私としては見ていたい・・・といって感じでしょうか？」

ごめんなさい、ただのチートです。

「そうか・・・ルイスくん、良いのかな？」

「あーー・・・いや・・・えーっと・・・好きにしてください。」

「ありがとうルイスッ！」

そういってユリアは仲間になった。

お願いだから男仲間が欲しい。

そう思いながらも、その言葉を口には出さず、ルイスは小さく「はぁ・・・」とため息をつく。

女子の派閥ができあがるのは、結構肩身が狭いと思われる。

旅をしていることに前々から後悔はしているが本当に波乱万丈だと思ったとさ。

そして三日後。

ゆっくりと荷物を馬にのせ、乗せ終えたらまたがり、馬を蹴る。

水の大精霊がいるのは『ミレス』といった城がある街。

水の加護がある街だ。

俺は『馬で直線でいっても2週間はかかる』といわれたことにため息をつきながら、草原を走り抜けていった。

隣にはユリア、後ろにはユーリとエリカ。

男にとって肩身が狭い旅が、今始まったのだった。

「男の仲間よでてこいっ！」

第十八章『城』（後書き）

次回出てきますが。

転生者なので、前世の物語からです。

第十九章『爆撃と仲間』（前書き）

ここからは別の転生者の物語が始まります。

主人公とは違う世界からやってきます。

少しばかりこの世界の戦争の技術とは似ていますが。

第十九章『爆撃と仲間』

―戦争。

その言葉は、俺にとってとてつもなく悲しいものだった。

父が死んだ。兄が死んだ。一緒に遊んでくれた隣の家のカナリアさんが死んだ。

親戚が死んだ。たくさん死んだ。

戦争をして相手国の人が死んだ。死んで死んで死んで死んで死んで死んで・・・。

『アシュレイ』という国は、何度も何度も海外へと戦争をしている国であった。

そして、『戦争』が始まった。

俺の住む場所が、戦争の舞台になった。

戦争が始まって、俺は逃げながらも隠れる、といったことが多かった。

母親と共に最初は逃げていたけれど。

母さんは、はぐれてしまった。

そしてあったのが、友達のウィリアムだった。

「さっさといくぞ！」

ひそひそといった声で移動し続けるウィリアムは、さっさと俺の先へとずんずんと進んでいく。

「まってよ！」

俺も小声で懇願するようにウィリアムへと言う。ウィリアムはハハッと笑い、足をもっとはやめてみる。

おふざけだったんだろう。

そんな少年は、一瞬のうちに爆音で全てが吹っ飛んでしまった。

ウィリアムは、その瞬間に死んだ。

俺が目の前でみた戦争というものだった。

爆音だとか、爆撃だとか、そんなものは正直、どこかでなったな程度にしか感じてなかった。

危ないという感覚はわかっていた。

でも、俺の目の前で人が死ぬという状況をみて、俺は初めて恐怖を覚えた。

人の死体をみても、死んでいるとしか思わなかった。

・・・どうすればいいの。

俺は肉の塊といっても過言ではない友であったものをみながら、胃の中のものをすべてをそとへと出した。

気持ち悪い。怖い、怖い・・・怖い・・・・。

そんな気持ちが延々と続き、俺は死体から目をそらし、歩くことにした。

後方から人が来ている。コワイ

俺はその場をはしって逃げることにした。

もう、誰もいない。

もりのなかへと逃げ込み、そこには静けさがあった。

遠くで爆撃が聞こえるけど、なんだかとても静かだった。

「・・・誰だ?」

もりの静かさに声がした。声の方向をむくと、男の子がいて、俺と

同じくらいの年だった。

そのとき、俺は、『カイト＝イルヴァール』は出会った。

『イリス』という少年に。

「・・・お前も逃げてきたのか？」

そういった少年に、俺はハッとわれに帰り、コクコクと、何度も何度もうなづいた。

「そうか・・・いっしょにくるか？」

俺はうなづき、彼の後へとついていった。

何日も逃げながら、俺達は話し合ってきた。

自分ことや、自分の家族のこと

イリスは両親がすでに死んでいて、妹とはぐれたらしい。

妹はもうすぐ誕生日だと笑いながら言っていた。そういって俺に、渡そうとしている蝶のブローチをみせていた。

お小遣いを毎日ためて、買ったらしい。

それをみながら、いつもいつもイリスは笑っていた。

それは希望なんだろう、そんなイリスをみてカイトはなんだか自分までも勇気がわいてきたようだった。

ずっと歩き、もうすぐ安全な場所だとイリスはいった。

イリスは、妹の誕生日がこれで祝えると飛び跳ねてうれしがっていた。

そのとき、乾いた爆発音がした。

パァンッという小さな音、拳銃だろう。

俺はすぐに地面へと小さくなって数秒待つ。

もう、何の音もしないので、俺は起き上がり、イリスをみた。

イリスは地面へと血を流し、倒れていた。

「・・・」

「・・・」

なんで、だろう。

なんでこうも理不尽なんだろう。

妹の誕生日を祝いたいってだけなのに、彼はどうして死んでしまったのだろう。

彼のポケットからブローチが落ちる。

どうせ、俺も今狙われているのだろう。

だったらあがいてやる

そう思って、俺はいっきに足に力をこめ、走り出す。

イリスのポケットから落ちたブローチを取り、おれは走り出す。

絶対に届けてやるという、願いをこめて、俺は全力で走り出す。

死ぬかもしれない、ならば俺は死んでも渡してやろう。

願ったことだ。

死んだやつが願ったことなんだ。

あいつはいつもいつもいつも、俺の事ばっかり心配してた。

自分は妹が居て、渡したかったのに、いつもいつも俺のことばっかり気にかけて。

あぁ、なんて最後なのだろう。

俺は涙を流しながら、俺の友人でった男の過去をたどった。

銃弾が俺を掠めている。

そんなことはしるか。

足を貫通した。

熱い、でもそんなことは知るか。

痛い、知るか、知るか、知るか。

死ぬかもしれない?、知るか。

どうでもいい、俺には今、このブローチを届けることだけが重要だ。

俺は、涙が頬を流れるのを感じながらも、全力で走っていった。

痛みではない、この涙は悲しみのみの涙だ。
絶望への涙ではない、これは希望への代償だ。
俺はひとりである。
闇を知ったし、絶望をしった。
それでも俺は走る。
この手にもったブローチのために。
友の願いをかなえるために。

第十九章『爆撃と仲間』（後書き）

ふむ、・・・戦争ものは、文才すらない俺にとってはきついと感じた。

戦争系ってどう書くか・・・とか教えてくれるとうれしいです。

ある程度の書物は読んできたんだけどね・・・。

第二十章『世界少女』（前書き）

ふむ、前回の話まったくおもんない。

おもしろかったらダメだけど、そういうもんじゃない感じ。

駄文？ってやつかな。まぁいつもそうだけど

第二十章『世界少女』

銃撃から逃げ、俺は妹探しをして。

そして、みつけた。

「・・・」

その場所は、石の下。

冷たい、石のした。

そう、彼女はすでに死んでいた。

俺は、コト・・・とブローチと墓の前におくと、立ち上がり。

拳銃の弾をその頭にうけ。

俺はそのまま冷たくなりながら死んでいった。

『・・・』

幻想的な世界に、一瞬思考を止める。

「ここはどこだ?」

「ここは、次元の外の膜です。」

声がしたほうを向く。

白髪の女性がいた。

年齢は・・・20~25くらいであろうか?

「あなたは?」

「私は、世界そのもの。」

「・・・?どういうことですか?」

「管理者といってもいいでしょうか?」

世界そのもの?管理者?何をいっているんだか理解が出来ない。

でも、理解できる。この世界は俺がいた場所となにもかもが違っている。

真っ白な世界に、俺と女性が立つところから波が立っている。

そして波がぶつかり合い、大きな波へと変わっている。

それは神秘という言葉がはいっている状況だった。

上の空はとても青空で、どこかで見た絵のようだった。

「俺は、何故ここに?」

「一つ聞きましょう。生きたいですか?」

なにをいっているんだ、この女性は。

「生きたいに、きまってるだろ・・・!」

俺が強くそういうと、女性はクスリと笑った。

「・・・では、生きさせて上げましょう。」

「本当に?」

「転生となりますが、いいでしょうか?」

転生、・・・たしか、生まれ変わることと同じだろう。

「それじゃあ、死んだことと同じじゃないか?」

「記憶は残ります。私も貴方に力を貸しましょう。・・・そうですね。聞いた例によると、あの人が空白の奇跡をつかうことにしたらしいですが・・・私も使いましょう。」

「空白の奇跡？」

「あなたは、奇跡が欲しいですか？」

俺の質問には答えず、女性はそういった。

「・・・『平和』という奇跡を。」

「わかりました。」

女性はニッコリと笑って。

俺は意識を失った。

「・・・」

目の前を疑った。

一瞬にして、目の前に女性と男性が居る。

「・・・おぎゃ・・・」

喋れないってありえない。

「わぁ！かわいい！超絶美少年になるだろう！もう天才だ！天才すぎてありえない人になるだろう！」

「なにをいっているのですか、あたりまえでしょう、私の子供ですよ！」

「ねぇ僕は？僕はどうしたの？」

「さぁ、私の遺伝子を受け継いだからこそ天才な我が子よ、大きくなりなさい。」

「ねぇ僕は！？僕はどうしたボギャァッ！」

母親であろう女性が父親であろう男性にアッパーを喰らわせた。

もう呆然である。

「うるさいですね・・・この低給料が！」

「ひどい！ひどいよ！」

もうなんだろう、どうでもよくなってきた。

「さて、貴方の名前ですね・・・どっちにしろきめてあります。考えるまでもなくカイトです。」

皮肉にも、またおれのなまえはカイトだった。

第二十一章『覚醒』（前書き）

生前、カイトと名乗った少年は、戦争によって友を無くし、友と出会う。

だが、その出会った友も死んでしまう。

彼が妹の誕生日にと大事に持ったブローチを、彼は取り、絶対に渡してやると決心し、全力で探したところ、その妹も死んで、冷たい石の下へと眠っていた。

カイトはブローチをことりと置くと、乾いた爆発音がなり。

カイトの脳天に穴をあけ、カイトは死んだ。

そしてカイトは自らを世界と述べる女性と出会い、『平和』という奇跡を願い、この世界へと足を踏みだした。

第二十一章『覚醒』

『カイト＝アルカティア』という名前を貰った。

正直、まだ子供である年齢の精神しか持っていないが、子育てと言うものは羞恥である。

なにが悲しゅうて１３にもなる少年が母親の乳を飲まねばならん。

そして理解したことはたくさんある。

『母は名家の生まれ』

『父は薄給』

後半はどうでもいい。

一番俺が知りたいのは――

「はーい！カイトちゃん、僕に似てかっこよくなってねぇー！」

「何を馬鹿なことをいっているんですかゴミムシ、貴方に似たら没落人生直進ですよ。」

「ひどっ、ひどいよね！？そんな僕を愛したのが君じゃないかっ！」

「愛した覚えはたくさんありますが、あなたの没落さにある意味同情して一緒になりました。」

「ひどっ、ひどすぎるよね！？」

――この両親は、仲がいいのか悪いのか、どっちなんだろうか？

手をワキワキさせながら俺のほうへと抱っこしようとするので、思わず手を掴み、軽くひねってしまった。

ゴキンッといいながら折れた手をもって、自分の筋力に驚きながら、転げまわる父親をみながら、これが俺の体か・・・と思いながら俺は両手をみた（微妙にひどいカイトくん

鏡がないので容姿が全く分からない。

母親の容姿と父親の容姿から考えてみよう。

母親は銀髪で長髪・・・とてもきれいな人だ。２８とかいってたけど、まだ２０くらいだといっても過言ではない。

髪をフサァッとする瞬間なんか、本当に見とれてしまう。

父親は黒髪でボッサボッサで、そしてヒゲがところどころそってなくて、丸めがね。

・・・うん、予想できない。

というかなんでこの人たち結婚したんだろう。

意味わかんない、考えられない、ありえない、なにこのリアルな『世にも奇妙な物語』ありえへん、まっじありえへん。

「・・・ふぅ。」

すでに年齢は４歳となり、歯も生えており、・・・量はあまりないけど、普通のご飯でも大丈夫となったとき、とりあえず自分の筋力について調べようと思う。

というか、本当に俺はどうなってしまったのだろう？

何故か部屋においてあるダンベルをみながら、俺は思う。

『ははっ、こんなの持ち上げられるわけがない』とか思ってた時期も俺にもありました。

ヒョイッという効果音がついてきそうな感じで持ち上げる。

「・・・」

どうしよう、冷や汗がまったく止まらない。なにこれ、ありえない。

・・・転生か。なにか能力とかないかな？あったらいいな。

「なにか能力・・・うー！」

念じてみる

しかし　なにも　おこらなかった　！

「さぁこい！最強の剣よ！」

なんも起こらない！

「すべてを焼き尽くす火よ！」

起こらない！

「さぁ龍よ！でてこいっ！」

『ウヴォァー願いを三つついえー』なんてことは起こらない！

「うぉおおお！なにがあんじゃあああぁぁあぁ！」

全く理解できない子供心、カイトはガンガンと頭を打ち付ける。

「うるぁぁぁぁっ！・・・るぁ？」

ベランダで、グルグルと暴れまわっていた（中でやれ）、そうすると、ベランダの柵がベキッとかいいながら。

「・・・はぁ？」

倒れていく。

「（・・・人生終了？）」

ヒューって感じ。うん。

柵が折れて、隣の折れていないところを掴もうとするが、届かない。

やはり、子供だ・・・リーチというものが短い。

「っ・・・あぁぁぁっ！」

叫んでみるが、場所は誰も居ない場所。

父は仕事、母は買い物。

落ちていく自分の体を支える腕などなし。俺は何度死ねばいいのだろうとなんども考えた。

落ちていく、落ちていく・・・。

そして・・・激突。

「・・・んぁ？」

激突とはならない、地面にぶつかったけれども。

そこにあったのは。

天使の翼だった。

第二十一章『覚醒』（後書き）

カイトの能力『天使の翼』

絶対不変の盾となり、飛ぶ翼となる。

羽を飛ばして攻撃するのも可能。

ルイスの能力『神のちょっとした好奇心』よりも現実的な能力。

けどチート。

ついでに、カイトの容姿は完璧に母親似となります。

女に似るということは、ある意味女友達ができるけど、彼女はできないと友達がいっておりましたよ。

体験談だけど。

第二十二章『わすれさられた伝説』

エンシェ、という炎の大精霊が、ある少年を認め、炎の大精霊が持つ『炎の鎧』をわたした、という言伝が、アトラント国国王の耳に入った。

「・・・炎の鎧ね・・・いまだに白銀の剣の所有者はでてこないし・・・」

王様はぐったりとした表情で窓の外の空を見上げる。

ふっ・・・もうだめだ・・・とその顔は語っていた。

「大丈夫ですよ！現れますよ！」

「きっと現れますよ！」

なんて言葉を家臣がかけるが、そんな言葉はまったくもって耳に入っておらず、はぁ・・・というため息を吐くばかりである。

そんなとき、姫『アリカ』という名前の少女は、炎の鎧という言葉がなんだか気にかかっていた。

「（・・・炎の鎧・・・白銀の剣・・・白銀の剣がでてきたときもなんだか聞き覚えがあったのよね。）」

そう考えて、何かを思い出す。

それは、城の地下にはいったときのこと。

城に地下にはたくさんの古い書物があって、昔からそれをみてきていた。

小さい、といっても六年前ぐらいだから6歳のときであろう、そこで兵が間違えてカギをかけてしまい、私は泣きながら閉じ込められていた。

そして見つけたものは・・・

『勇者の物語』と書かれていた物語である。

とても単純な言葉、というかそのままなタイトルであるその書物を、私は当時、パラリとめくった。

そこに、白銀の剣というものが書いてあったはずだ。

おもいたったらさっさと探してみよう。

すぐに立ち上がり、父である王に声をかける。

「すこしばかり用事を思い出しましたので、部屋にもどらせてもらってもいいですか?」

そうきくと、上の空な父がコクリとうなづく。

それをみて、アリカはその場から離れる。

そしてドレスのまま、城の地下の書物庫へとはいるのだった。

「たしか・・・ここに。」

幼い頃の記憶、すでに六年前なのでその記憶に信憑性はあまりにもない。

でも、なんだかそこに私は吸い込まれていくように、古い一冊の本をとった。

『勇者の物語』そこにはそう書かれていて、私はあせる気持ちを抑えて、ページをめくる。

何年ほど置かれていたのだろう、とても薄くなり、紙はボロボロだ。

『――――――』

そこには、何千年も前の物語が書かれてあった。

『12精霊がこの地を平穏へと導いていた。』

その物語は知っている。いまでも恩恵を与えている大精霊と呼ばれているものがいるから、その物語は消えていない。

『しかし、そんな平穏を乱すものが居た。』

ここからは、まったく知らない物語、6年前もあまり気にもとめなかった。

ペラッとページがめくれるたびに、埃がパラッと落ちてきて、ドレスが汚れていく。だが私はそれを気にせずに読み始める。

『邪神と呼ばれるものが復活し、地を侵食し始めていた。精霊たちに抗うほどの力はもっていなかった。精霊たちは戸惑い、嘆く。そのときだった。１２精霊が収めていない、森の奥の町に、白銀の剣をもって、邪神が呼び出した魔物たちに立ち向かったのだった。』

白銀の剣・・・という言葉がでてきた、私はドキッとする。

白銀の剣の物語・・・。

『精霊たちは、彼の勇気ある行動に心を打たれ、自らの持てる力を使い、防具をつくりだした。』

『炎の上鎧』

――その言葉は、私の心を歓喜へと導くのには十分すぎるものだった。

『水の兜』

『風の肩――』

『光■グ■■■』

『闇の■■ー■』

さすがに昔の書記だろう、文字がだんだんとよめなくなってきている

『土のピアス』

『氷のピ■ス』

『時の鞘』

『空間の下鎧』

・・・あとはかすれて読みにくい状況だ。

たぶん、暗黒や召喚、雷の三つが入るのだろう。

「お父様に教えなければ！」

そう思い、アリカは王の下へと走り出す。

両手に『勇者の物語』を抱えて。

そして、父の元へと舞い戻る。

「・・・どうした？そんなに汚れて。」

「お父様・・・この本を。」

そういって、父親に本を渡す。それを父はなんだこれは、といったように見つめ、めくりはじめる。

一枚、一枚めくるたびに、王の顔には希望がみえはじめる。

「・・・これは・・・！」

「そうです！お父様！」

「彼は伝説の再来としてこの地に現れたのです！」

「うおおおお！伝説の再来だぁぁぁっ！」

盛大な勘違い（勘違いでは半分ないけど）を起こし、彼らはハイテンションになっていたのである。

本人のやる気のあるなしにかかわらず、世界は動いてゆく・・・

―そのころのルイス―

「みてみて！すごい大きなファイヤーボールだよ！」

ユーリがうれしそうにしている。大精霊と契約してから、とても大きいファイヤーボールをうてることになってはしゃいでいるのだ。

「はいはい。」

とルイスが、適当に還していると、ゾクゥッという悪寒が走る。
思わずバッと後ろを向いてしまうが、そこにはエリカとユリアがきょとんとしながらこちらをみていた。

「どうしたの？ルイス」

「なんかあったのか？」

周りを見回すが、特にこれといってない。

「いや、別に・・・」

ルイスの波乱万丈からはもう逃れられないのだった。

第二十二章『わすれさられた伝説』（後書き）

次回は、ルイスとカイトの出会いです。

水の大精霊の物語のはじまりはじまり。

「計画通り」という言葉を誰かが発した。

第二十三章『水の大精霊』？

すでに歳は１４となった、・・・俺？カイトだよ。

俺は徴兵へと赴き、何故かわからないけれど門番へとよこされた。

・・・隊長を吹き飛ばすのは悪かったと思う。

『よーし！戦闘訓練だ！ちょっとそこの・・・カイトとかいったな、軽く相手をしてやろう』

そんなことをいわれて、なんだかイラッ☆とした俺は、剣をとり、フルパワーでやってみた。

カキィンッ（剣と剣のぶつかり合い）、ヒュンヒュン（隊長の剣がはじきとばされる音）。

『腕が！？腕が痛いぃぃぃ！？』

ゴッキリという音がしましたもの。

俺は叫ぶ隊長の懐へとはいり――

『ちょ、待　ヂリャァッ！？』

あごにアッパーを食らわせたところ、隊長のあごが真っ二つに割れてしまい、全治数ヶ月とか。

お見舞いにいったところ。

『ヒィィッ!?お前もう門番でいいよぉ!もうこないでよぉっ!』

とかいわれたので、門番やっているというところだ。

・・・ホントナゼダロー

ったく、暇だな・・・とダラーンとやっていると、４人の集団がやってくる。

馬を下りて、俺へと近づいてきた。

「おぉ、暇がなくなった。」

ちょっとうれしく思いつつも、俺はやってくるそいつらに声をかける。

「水の都市『ミレス』へようこそ!お名前を拝見させていただけますか?」

そういってそういつらをみると・・・

少年、たぶん5、６歳

少女、これまた5，６才

少女、たぶん上の少女よりも年上

女性、それでも若い方だろう。

なにこのメンバー

「ルイスと申します。」

「ユーリです。」

「エリカです。」

「ユリアだ。」

口々に名前をいわれ、ハッとする。そういえば王様から、ルイスというやつがきたら通せ的なことをいわれたはずだ。

「そうですか、では王様より通せとの命がありますので、通っていいです、城への道は案内しましょうか？」

「あ、お願いします。」

ルイスという少年はそういうとペコリとお辞儀した。本当に6歳だ

ろうか、俺の周りのヤツは六歳ぐらいだと走り回ってたはずだ。

内気・・・なわけないか、女性率高いし。いや、全部姉か？髪の色・・・黒、茶、茶、金・・・ないな。

「じゃあ、いきましょう。」

「あ、その前に一つ聞きたいのですが。」

「はい？」

「世界少女とはあいましたか？」

思わず噴出してしまった。

ールイス視点ー

二ヶ月もたってここに到着した。どんだけ日数かかってるんだよ、といった具合だ。

それも、ユリアが『村々をどうせならみていきたい、剣術が上手い人なら戦ってみたい』とかいい始め。

なんだかしらないけど村へ滞在が長くなっていったからである。

「ホッポリ出していい気がしてきた。」

「ははは！そんなことはいわないでくれよ！」

懇願のようで懇願じゃないまなざしをおくってくるユリア。

なんだか腹が立つ。

「はぁ・・・もういいさ。で、俺はこの次の街できめたことがある？」

「なんなの？」

ユーリが聞いてきたので、俺はクルリと回って言い放つ。

「転生仲間を増やすッ！」

仲間には、俺が転生した人ってことは教えた。エリカは信じてくれないけど、必死に教え続けたところ、信じてくれた。

『まぁあのチートは現実にありえないしね。』

絶賛教えてやった言葉をつかいやがった。っていうかそんなことをいうならさっさと信じて欲しかった。

「だからこそ、一言だ。『世界少女とはあいましたか？』と聞いてくるんだよ！」

「違ったら変態だよね。」

ユーリの突っ込みはごもっともだ。

「うっさい！俺・・・転生者がみつかったら、すべて擦り付けるんだ。」

「・・・最低な考えだね。」

そんな会話をしてたら、門番の人が眼に入る。

なんだ、女性か？とか思いながら近づくと、「水の都市『ミレス』へようこそ！お名前を拝見させていただけますか？」ときいてくる。

・・・声を聞いて男だと知った。

俺は噴出しそうになった。薄いちょっとピンクがかった銀髪をもつ、女性でいう美しい顔をもつ・・・。

男。

「（人生って理不尽だな）ルイスと申します。」

続けて後ろの三人も自己紹介をしていく。

「そうですか、では王様より通せとの命がありますので、通っていいです、城への道は案内しましょうか？」

おぉ、あの王、手回しがはやいな。いいやつだ。この門番もいいやつだ、わざわざ案内なんて。

「あ、お願いします。」

そういって門番は身を翻していく。

その背に向かって、俺は忘れていたことをきく。

「あ、その前に一つ聞きたいのですが。」

「はい？」

美しい男の門番は、髪をサラリと動かしながらこちらをむく、その様子にドキッとかしたのは気のせいだ。誰か気のせいだといえ。

「世界少女とは会いましたか？」

まぁ、初めては別に間違ってもいいよな。とか思いながら聞いてみたら。

「ブハッ」

案の定こいつは本物であった。もうジャストミートである。

第二十四章『水の大精霊』？（前書き）

ぐぉおおお！設定かきてぇ！
でも、だしたら後々最後にだそうと思っているやつが意味ない！
どうしたらいいんだ。

第二十四章『水の大精霊』？

「・・・・」

「・・・・」

無言になりながら終始二人はチラチラとお互いをみる。

「えぇーっと・・・君も？」

ルイスはそういってカイトをみると、カイトは案の定コクリとうなづく。

「ははは・・・災難だよね。」

「あぁ・・・俺なんて死んだときの感触が生生しく残っている。」

「あぁ～忘れたくても忘れられないよね。」

アッハッハ！とかいいながらルイスとカイトは笑い始める。

転生者のみできる会話である。

「なにはなしてんの？」

その会話になんだかイライラしているエリカが入ってくる。

ルイスは頭をかきながらカイトを指差して。

「転生者仲間」

と告げた。

そうすると、エリカにユーリにユリアが黙りこくりはじめ、ルイスはちょっと心配になって聞いてみた。

「どうした？」

「ルイスのほかにチートが増えるのね。」

ルイスに教えられたチート＝「ありえん変態」という公式をズパッとあてがっていった。

そういってギロリと睨みつけるエリカに、ルイスはビクッとして、カイトに「そういえば・・・」とかいいながら見る。

「能力もらった？」

そう聞くとカイトはコックリとうなづく。本当にあったようだ。

「天使の翼をいただいた。」

「天使の翼？」

再度、カイトはうなづき、腕を組んで説明をはじめる。

「絶対不変の盾、そして羽をとばして攻撃できるし、飛べる。・・・ルイス、とかいったな？お前の能力は？」

「イメージしたものを魔法に出来る。」

「・・・はぁ？」

その反応は当然だろう、カイトがもっている能力は能力でチートといえるが、ルイスなんて一人軍隊だ。

大砲をバッカンバッカン撃てる超危険人物だ。

ルイスが大人数用だとしたらカイトは一対一なら負けないものだ。

「・・・まぁ、多人数用と単身用だな。」

「あ、たしかに。」

そういってルイスとカイトはケラケラと笑う。

「まぁ、とりあえず王様のところへいくぞ。」

「あぁ、じゃーいくかっ！ッとその前に。仲間になってくれるか？」

そういうと、カイトはハハッと笑って。

「いい感じに時間も許可も取れたらな。」

「そうか、じゃーお願いな！」

2人は笑いながら、後ろの三人は微笑ましさにクスリと笑い、城へと向かう

「で、お前があのルイスってやつか。」

その王をみてルイスは仰天した。

王のいでたちは、きらびやかな衣装、そして立派なヒゲ、立派な髪の毛。

どうみても６０歳以上のおっさんだが、なんだか知らないが、ノリがおかしい。

「わーお、こぉどもじゃないかっ！だがそこがいいっ！ついでにそこのカイトくん！僕の妻に「いやです」わーお！ひどいなぁ、逆玉の輿ってやつだずぇ？「そもそも男ですよ俺」・・・そこがいい「変態かっ！？」っというわけでぇ、王様の『リュード』っていいます！リュードたんかリュードたまってよんでねっ！」

変態だ、変態だ、変態だっ！（大切なことなので三回いいました

「どうしよう、突っ込む気力がないほどのボケだよ！ユーリィ！」

「ルイスほどの変態がいたとは・・・」

あの、ひどいですよユーリさん。

「まぁ、とりあえず水の大精霊にあいにきたんだろ？でもよぉ、川と水道を渡っていけばいいんだけど最近魔物が多くてさ・・・水もにごってきたんだよ！というわけで、よろしく。」

「・・・よろしくって？」

「水の大精霊に会いに行くためには、たぶん原因とか調べなきゃいけないと思うんだよねぇ。っつーわけでさ、よろしくお願いだ～ね～。」

「めんどくさ「じゃぁいってらっしゃい」ちょお前！って兵士！ひっぱるなや！」

「本当にありがとうございます、これで国民も救われます！」

「・・・・」

ルイスはなにもいえなくなってしまった。

なんだかしらないが、色々と巻き込まれてきたなぁ、
とカイトはため息をついた。

第二十五章『水の大精霊』？

時はたち、ルイスたちは、新たにカイトを交え、水道を通っていた。

「水道って、蛇口から入るのかと思った。」

そんなことをルイスはいっていたりする。

「水道ってのは、文字通り水の道だからね、使い方がたくさんあるんだよね。」

「そうなのか・・・川とかも水道なのか？」

「さぁ？よくわかんないけど。」

そんな会話をしながらどんぶらこ～どんぶらこ～という音が聞こえそうなスピードで船をこぎ続ける。

「結構遅いもんだな、船ってのは。」

「まぁね・・・っていうか、ルイスの魔法つかえばいいんだよ。」

「リリカル「なんかいおうとしているのが聞こえるが、脳の中で判断して言っているのかな？」・・・モーターボートになーぁれ☆」

しかたない、といった感じに語尾に『☆』をつけて気分を出す。

正直俺は狂っていると自分でも分かっている。

でも・・・わかってるからこそ！やりたくなるんだぁっ！（ダメ人間論

そして、到着すると・・・

「船か。海賊船ってわけじゃなさそうだけど、妙に豪華だな。」

「水の聖域。どっかの誰かさんが乗ってたって記憶しかない。」

水の聖域、と呼ばれた船は、きらびやかに装飾されていて、少しばかり独特な形状をしている。

「なんか、飛びそうだな。」

「飛ぶぞ？」

「飛ぶの！？」

そんな言葉をきいて、驚きの声をあげるルイス。ユーリもエリカもユリアも、その事実を聞いて目を丸くする。

「結構昔の話らしいし、わからないけどな、昔は飛んでいた・・・らしい」

「なんだ、らしいかよ。」

「何百年前・・・何千年前・・・とか、時間的には生きてないし。」

「まぁ、たしかにな。」

そういって笑う。笑い終えると、カイトは船を聖域によせついているはしごをぐっとひっぱってみる。

「・・・大丈夫かなぁ？」

「ちょ、俺らが上るんだから疑問系だとなんか怖いよ。」

「幸運だからいいと思うぞ？」

「幸運って・・・なんだ？」

「ほら」といってカイトはピンッと人差し指をたてると。「魔物が多いっていってたろ？」

というと、あぁ・・・とルイス一同は思った。

「つまりさ、あわなかったってことは結構幸運って思わない。」

「たしかに。」

「結構長い道のりだったからね、正直幸運だったって思えるね。」

ルイスもユーリも同意し、その他2名もうんうんといった感じで首を縦に振る。

「でもさ・・・ある意味幸運ってことは正直怖いんだよね。」

「怖い？」

ルイスのいった言葉にカイトが反応する。

「神の波乱万丈に巻き込まれそうで。」

そういってルイスは笑う。ぶっちゃけ笑えないけどとりあえず笑う。

「ははっ、神もそんなに鬼じゃないよ。」

「そうかねぇ？」

「ま、いいんじゃない？」

「そうだよ、さっさといこう。」

「あぁ、運がよかったってことでいいんじゃない？」

カイトがいうと、ルイスはちょっと「ありえない」といった感じでいってみると、三人はさっさといこうとする。

「あ、俺もいく。」

そういって男ふたりは聖域へと乗り込んでいき。

「ふぅ・・・ついたついた！」

そういってルイスは、船を歩き回りはじめると・・・

ザッパーン（巨大なイカ登場）

←船にまきついてくる。

←船、メキメキ。

「「「「「「・・・・・・・・・」」」」」」

神は鬼でした。

第二十六章『水の大精霊』？（前書き）

イカとの戦闘。

書いててなかなかにカオスになった。

第二十六章『水の大精霊』？

「・・・」

巨大イカ、登場。

「・・・・」

船の上のすべての人間が沈黙し――――攻撃を仕掛ける。

その船の上には、緊張という、緊迫した空気が――――

「でかい！こんなイカをさしみにしてくってみたい！」

「ちょっとまて！腹壊してもしらねぇぞ！？」

「喰ってみたいんだよ！ゆえに俺はやるんだっ！」

そんなものはすでになかった。

ルイスとカイトの言葉の攻防は、ルイスの勝利である。

「さしみぃぃぃっ！！」

「ピギャァァァッ！？」

よだれをたらしながら全力でむかってくるルイスに恐怖し、モンスターが悲鳴をあげながら逃げ出そうとする！

「にげんじゃねぇよ！食料ッッ！『氷の杭』ッッ！」

氷の杭が、まきついている足に突き刺さり逃げることが不可能となる。

「・・・巨大なモンスターが逃げるなんて前代未聞だよね・・・」

「いわないでよ・・・現実逃避してるんだから・・・」

「さしみとはなんなのだ？」

ユーリとエリカが現実逃避し、ユリアが変なところに気がいっている。

なかなかにカオスだ。

その中でカイトは「はぁぁあぁあぁ」という大きなため息をついていた。

ルイスは――――

「ＳＡ☆ＳＨＩ☆ＭＩ！ＹＡ☆ＫＩ☆Ｉ☆ＫＡ！Ｉ☆ＫＡ☆ＭＥ・・・コメがないな。」

とかなんとかいいながらテンションをあげていた。

そして巨大イカは・・・

「ピギィィィッ」という叫びをあげながら全力で逃げ出そうとしている！

きょだい　な　イカ　は　にげだした　！

ルイス　「　にがさねぇよ　グエッヘッヘ　」

しかし　こおり　の　くい　が　みち　を　はばむ　！

どっちが悪人であろうか、完璧にわからない。むしろルイスが悪人といっても、誰もがうなづく状態だ。

「シネェェェッ！」

きえぇー！とかいいながらルイスは、某改造されたバッタ人間にでてくるザコキャラみたいな飛び方をしてイカに襲い掛かり。

「氷の杭！氷の杭ッ！氷の杭ッッッ！氷の杭ィィィィッ！」

連続でいたぶるように、それも悪人面で涎をたらしながら小さく「グへへへ」とかいいながら戦いに勝利した

「・・・うーん、巨大でも巨大じゃなくても美味しさはかわりないのかな？」

その後、船内でイカをさしみにして、しょうゆを魔法で読んだりとやって、いかのサシミを食している。

イカ、というか、本来の名前はなんだったのだろうか?とルイスはいまさらながら思って。

「ま、いいか。」

という言葉で決着した。

哀れな巨大イカ・・・だった。

「・・・焼くと結構美味いな。」

「マジ?」

カイトはこの環境に慣れてきていたという。

そんなときだった。

『ふぅ・・・本当に貴方たちは人間なんでしょうかね?バグキャラとかそういうのじゃないですかね?』

そういって水の大精霊がでてきた。

「食べる？」

『いりませんっ！』

水の大精霊は結構のりがいいやつだったという。

第二十七話『水の大精霊』？

水の大精霊とのコントを終えて、ルイス一行は水の大精霊へとつれていかれる。

「鬼ってうまいのかな？」

モンスターをたべてから、妙に気になってきたルイス。

というかモンスターを食べるなんてルイスがモンスターである。

「やめてよね！最近やっと一匹契約できたんだから。」

エリカが、自分の鬼を皆殺しにされたことを思い出して、ルイスに忠告をする。

「いや、向かってこなければ喰わないけど。」

「たおすとかじゃなく、食べる食べないなの！？」

『貴方たちは本当に人間ですかね？』

「「「「ルイス以外はそうです」」」」

「カイトぉ！？お前も同じ境遇じゃないか！？」

「黙れバグ。」

「バグゥッ！？」

人間性的ないみで、ルイスは人外だと思われる。

そんなことを話していると、水の大精霊がとある部屋で停止する。

『魔物がでているのはこの部屋のせいなのだ。』

そういって水の大精霊は部屋の扉をあけるよう、ルイスにいう。

「・・・なぁ、ここは危ないのか？」

『普通だったら死んじゃないですか？』

「じゃあ俺死ぬじゃないか」

『どの口がいいますか。』

水の大精霊により、ルイスは『化け物』の称号を得た！

「まったくいらねぇ。」

ガチャッという金属音が響き、さびたドアが音を立てながら開く。

そこから・・・

「うぉおお!?」

速攻でルイスは飛びのき、その行動に反応し全員が後方へと飛ぶ。

そこから紫色の空気が流れ出ている。

「・・・なんだこれ。」

『ふむ、人に害し、精霊にも害し、魔物には力となる気だ。』

「なんだそりゃ。」

『奥を見てくれ。』

そういわれて奥をみてみると、何かキラリと光るものがあった。

「宝石?」

大精霊はコクリとうなづくと、腕をくみ、ルイスたちを見回す。

『あれが原因だ・・・あれを壊すことはできないだろうか?』

そういうと。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ユーリ、エリカ、ユリアと共にルイスをみる。

「そうですよねー俺の管轄ですよねーっと『雷の槍』ッ！」

そういって槍状となった雷を投げるが、その雷は・・・

「消えた!?」

『ふむ・・・魔法消去の魔法があるみたいだ。』

「・・・消えない魔法を想像はできないんだが。」

「まぁ、その原理の魔法を組み込んだりはできないのかな。」

「それ自体は、俺は魔法使いじゃないから良く知らないんだよね。」

そうか・・・とカイトは考え。

「俺の天使の翼で護って中に入ろう、そこで全力で魔法を放てばいいんじゃないか?」

『不変の盾』絶対防御といえる盾である、この気におかされたりはしない。

「魔法自体も、小さな魔法だったけど、うっすらと消えていった感じだし、至近距離なら可能じゃないのか?」

「うん、いい考えだと俺は思う。」

「僕は賛成だ。」

「別に、問題ないならそれでいいんじゃない？」

ユーリとエリカは賛成し、ユリアはコクリとうなづいた。

それをみて、ルイスはうなづくと、カイトに「よろしくたのむ」という、その言葉を聞くと、すぐにカイトは天使の翼を出す。

『お前もバグか』

「うっせい」

そういってカイトはルイスを翼で護るように巻き、中にはいっていく。

そして・・・

「『破壊の一閃』」

という言葉によって、部屋の中はいっきに白んで。

爆発音が鳴り響き。

この問題は決着を迎えた。

「うん、やっぱり仲間になってほしいな。」

そうルイスは思った。

その後、水の大精霊に兜をもらった。

お礼らしい。

すぐに契約をしてもらってルイスたちは聖域を後にした。

―水の大精霊―

本当に驚くほどすごいやつらだった。

あいつらは『水の兜』を得た。

『あと十の防具か』

人間の能力そのものの剣『白銀の剣』

炎の力そのものの上鎧『炎の鎧』

水の力そのものの兜『水の兜』

あいつは・・・いや、あいつらはどうなっていくのだろうか？

なんだか水の大精霊はワクワクしてきていた。

『何百年もなんにもなかったんだ、せいぜい楽しませてくださいね・・・』

水の大精霊の声が、聖域に響き渡る。

第二十七話『水の大精霊』？（後書き）

『水の鎧』

ＲＰＧ風にいうと

特性『自然治癒』付加。

１ターンにつき、ＨＰの１０％ほどの回復をする。

第二十八章『カイトと旅立ち』

城へ戻った瞬間。

「にゃ～」

とかいってくる王様がいた。

「・・・にゃ？」

そう返すと、王様である『リュード』は頭の上で×をする。

「・・・だめだっ！ルイスとやら以外がやるべきだっ！幼女と美女がやるにふさわしい！」

そのときに、俺たちの気持ちは一緒になった。

『『『『こいつやっぱ変態だッ！！』』』』

と。

「っていうか俺男だっつってんだろが！」

カイトが怒り、叫ぶ。

「だがそれがいい。」

「変態かっ！？」

「なにをいまさら。」

「開き直りやがった！」

なにをいまさら・・・と周りの臣下が思った気がする。

「・・・まぁいいよカイト・・・終了しました。」

「へぇっ、ＯＫＯＫ！ありがとねっ。」

そういってリュードはペコッと礼をする。

「あぁ、別にいいさ。」

「じゃあ何も無しでいいよね？」

なんてやろうだ。

話も終了し、カイトが帰っていった後、俺は王様へとお願いする。

「すまないけど、剣を教えてくれないか？」

「ん？何故だ？」

リュードがそう返してくる。

「・・・さすがに、ディスペルには俺の魔法が弱そうだし。」

「ふぅん・・・じゃあ、次の大精霊がいるところの城だね、一番近い場所だから・・・どっちにしろそこにいくと思うよ？紹介状も出しとくにゃ。」

「・・・・・」

もう、つっこむまい。

そしてそのまま俺は帰っていき、一週間程度の滞在を過ぎた後、カイトを交え出発する。

いくまえに、カイトが

「勇者ってなにかわかるか？」ときいてきたが、なにをいっているのだろうか？

白銀の剣のことだろうか・・・そしたらやっかいだ。

「知らないな。」

俺はそう帰し、ぎこちない笑顔をしながら、次の街へと向かった。

ーカイト、城から帰ったあとー

「やぁ、もう徴兵は終わったのか？カイト。」

「ん、父さん・・・とりあえず王様に免除されたよ。」

そう、カイトは帰ってきたとき、徴兵期間を免除されていた。

今回の功績による・・・らしい。

「ふむ、聞いたぞ、大活躍だったとか。」

「ダレもみたひとがいないんだから、どうせ噂みたいに信憑性ないよ？」

「ま、そうだな。」

そういって父さんはケタケタと笑う。

そうしていると、後ろのドアがあき、母さんがはいってくる。

俺の姿をみた瞬間に、「大活躍だったみたいね?さすが私の子供。」という。

「ねぇ?ボクのは?ボクのは?」

「遺伝子は似てないわよね?」

「いや、たしかにボクには似てないけどさ・・・」

いつもいつもこのノリの両親をみて、俺はほほえむ。

「・・・母さん、俺・・・ある人と旅にいっていいかな?」

そうゆっくりとつげ、母をみると。

「別にいいわよ?もしかして勇者様のところかしら?」

「勇者?」

「やっぱりねー勇者のメンバーのひとりになるなんてさすが私の息子。」

「いや、勇者って?」

「すごいわねぇ・・・うふふっ、じゃーがんばってらっしゃい」

「いや・・・だから勇者ってなんなのさ?」

母さんはキッチンへと向かい、父さんは自分の部屋へと帰っていった。

俺はポツンと一人残された。

「・・・・なんなのさ。」

ひとり・・・ポツリとつぶやいた。

第二十九章『勘違いから始まる恋のヒストリー』（前書き）

ノリで書いている感じです。

次は『光の大精霊』が始まります。

第二十九章『勘違いから始まる恋のヒストリー』

白銀の剣の国・・・『アトラント国』

その王の間で、王はテンションを上げて、やんややんやとうれしがっていた。

始まりは「水の兜を手に入れたという報告がありましたっ！」という言葉

それにより、王たちは今現在宴をしている状態である。

そんな喧騒の中、アリカはバルコニーでボォーッとしていた。

その手にはワイン。

そして星を眺めながら一口。

「勇者・・・様。」

顔が赤くなっていく。

どんな人なんだろうか。

性格や年齢、容姿・・・たくさん思い描いていく。

街にでる噂は

『性格：優しくて朗らか。』

『容姿：超美形』

『年齢：１０の後半～２０の前半』

だという。

顔を思い浮かべようとすると、顔が赤くなっていくのを感じる。

「素敵な・・・ひとなんでしょうね。」

ポォッと頬を赤く染めながら、アトラント国姫、アリカは自分の胸が高鳴っていることに気がつく

「これが、恋なんでしょうか？」

顔もみたことがない人だし、想像によって構築された勇者像。

いいえ、そんなものは関係ないのです。

「世界のために戦うような、優しい男性・・・」

彼女は昔から童話が大好きだった。

故に、白馬の王子様のような勇者が憧れであった。

「アリカ・・・ここにいたのか？」

星を眺めていると、後ろから声が聞こえる。

「お父様・・・」

そこにいたのは、アリカの父、アトラント国の国王であった。

「何を考えていたんだい？」

「すこしばかり・・・勇者様のことを。」

そういって顔をうつむかせる。

顔が赤くなるのを感じていた。

「ふむ・・・勇者が好きになったのかね？」

「そ、そんなことは！」

そういって手をパタパタと顔の前で振る。パニックになっているのは、誰にでも見れる。

それをみて、王はフッと笑うと。

「私は反対はしないぞ？少なくとも、自分の使命を感じ、それから逃げることなく立ち向かっているような人だ、優しい人に違いない、そんな人物なのだ・・・私は、いいと思っている。」

「お父様・・・」

後ろでパーティーの騒がしさの中。

二人の親子の絆はたしかに感じられた。

だが、二人は知らなかった。

その勇者が、絶賛勇者から逃亡中の6歳の上。

すでに自分が引き抜いたとバレていることに気がついていないことに。

―ルイスー

ゾクゥゾクゥッ！

「ッ――――！？」

前回の二倍ほどの寒気がして回りをバッバッと見回す。

「なにもいない・・・か？」

「どうしたの？ルイス。」

ユーリが声をかけてくるが、それに向かって俺は「いや、別に・・・」と返す

「なんか、寒気がしたからさ。」

「風邪？」

「いや・・・そういう感じじゃなかったんだよね。」

「？？？」

ユーリは心底わからないといった感じに顔を傾ける。

「どうしたのだ？ルイス・・・この『らーめん』とやらが伸びるぞ？」

それを見ながらユリアがそういう。

「あ、あぁごめん。」

俺は謝りつつ、箸をとり、先ほどだしたインスタントラーメンをずるずると食べ始める。

「あー久しぶりだなー」

ちょっとの幸せを感じながら。

第三十話『光の大精霊』？（前書き）

白銀
炎
水
その次は光です。

ライアルト、略せばライト。

正直創ってきた国名って手抜きだなぁ・・・と今でも思います。

第三十話『光の大精霊』？

光の国『ライアルト』

その国は、『光が途切れない日』というものが一年の中の一日のみにある。

『白夜』みたいなものだと思ってくれてかまわない。

その国の『光の大精霊』は、文字通り、光の加護を与えている。

光はたくさんある。

太陽から発せられる光は植物に活気を人々の生につながっている。

だからこそこの国はとても活気にあふれ、とても農作物がよく育つ、いい土地である。

「というわけさ。」

ユーリがパンフレットをパラパラとめくりながら説明を終える。

「・・・どこから出したんだろう。」

気にしたら負けと言うゲームである。

「まぁいいから、距離的には今いつぐらいだろうか？」

「う～ん・・・最後に出た街からみると、3日くらいでつくっていってたよ？」

馬を乗ったとしても、とユーリは付け加える。

水の大精霊に会い、すでに二ヶ月といった日々が過ぎていた。

これもユリアの希望たってのことだが。

「本当に国土ひろいよな。」

「たしかに・・・そもそも馬に乗って三日で、その中で一回も村がないのってなんでだろうな？」

「それもそうだな・・・だいたい村があれば、敵の襲来とかにも気がつきやすいのに。」

そういっていると、ユーリがピッと人差し指を空に向ける。

「敵は光による探知できるし、そして光の大精霊たっての願いだそうだよ？」

「なんでそんなことを願ったんだろう・・・。」

「光の探知は、大体大雑把だからね、城壁から外、距離はわからないけどそのくらいにしか設定できないんだと思う。なにせ光だからね。」

「そうか・・・光か・・・とてつもなく納得できないのは何故だろうか?俺がおかしいの?」

「納得できるできないなんてどうでもいいよ、大精霊の存在すら納得できる方法なんてないんだから。」

「それもそうか。」

そういってルイス達は馬を走らせる。

数時間がたった後、ちょっと暗くなってきたので、ルイスはとりあえず空へと上ろうと思い至る。

「どのくらいの距離か測るために、とりあえず上にのぼってみるけどいいか?」

「・・・願ったりかなったりだけどさ、また飛ばされるのは勘弁して欲しいよ?」

「善処する。」

そういってルイスは『アァァイキャァァァンフラァァァイ!』と叫びながら自分の姿を変え、黄金の鳥となり、夕日により紅く映えた大空へと向かって「うわぁぁぁ」・・・ルイスはふきとばされていった。

・・・・

「「またかぁぁぁあぁぁっ！！！！」」

ユーリとエリカ、二人の叫びが大空へと消えていった。

「ってかまたってなによ？」

カイトがユーリとエリカにいうと、二人は同時に言う。

「「エンシェでも吹き飛ばされてった。」」

「・・・マジ？」

二人はこくりとうなづく。

カイトは、ハハハッと苦笑いをして

「前途多難だな～」と、頭をかきながらいった。

そしてルイスは・・・

「うわぁぁぁぁっ！」と叫びながら吹っ飛んでいき、城の壁へと激突。

「な・・・なにものだっ！？」

ルイスはきょろきょろと周りを見回す、豪華なつくり、そしてカーペット、その上にカーペットの最後には玉座のようなものがある。

まさしく『城』

「またかッ！！」

その叫びは、虎が吼えたときのような迫力をもっていたという。

第三十話『光の大精霊』？（後書き）

ＧＥＫＩＴＯＴＵ　から　始まる　一人　の　勇者　の　ヒストリー

第三十一章『光の大精霊』？

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！「貴様なにものだ！」『王の間にいたら人が吹っ飛んできた』「それが貴様だろうがぁぁっ！」

な…　何を言ってるのか　わからねーと思うが「わかんねぇよ！お前が言うのかがわかんねぇよ！」

おれも何をされたのかわからなかった…「お前はふっとんできただけだろうがぁぁぁっ！」

頭がどうにかなりそうだった…「俺がなりそうだよ！」

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

「いや、そりゃあ吹っ飛んできたからそんなんじゃないのは分かるが・・・じゃなくて貴様なにものだっ！？」

「うるさいよ、ちょっと静かにしてよね、シーッ」

「あ、すまな・・・って違う！違ぁぁぁぁう！名を名乗れ！」

「子連れ侍だっ！」

「意味不明なことをいうなぁぁっぁあぁ！」

「叫ぶと喉がかれてしまうよ？」

「誰のせいだッ！？」

いやいや、なんてノリのいい騎士団たちだろうか、すばらしい。

「えーっとルイスといいます。」

「・・・今・・・なんと？」

王様・・・ではないな、大臣といった役職だろうか、おじさんが横から言葉投げかけてくる。

「ルイス、ですが？」

「嘘はいかんよ！ルイスという少年のことについては文章でしっているが、城に突撃してくるとは聞いていない！」

いや、聞くとかそういうのじゃないと思うのですが。

「というか、エンシェでも突っ込んだ記憶があるのだが。」

「・・・」

「「「「「「・・・・・・」」」」」」

そこにいたすべての人が沈黙し――――

「ならばその証をみせてくれないか？」

そういって王が俺を見る。

「証・・・ってなにがいいんですか？大精霊からもらった防具？」

そういうと、王はコクリとうなづく。

「はい。」

とりあえず、鎧をだしてみる。

「どんな魔法だかわからないが、空間系だろう・・・まさしく炎の上鎧と、水の兜・・・」

「はぁ。」

なんでそんなに感動しているのだろうか・・・？

「なんでこんな小さな子供が選ばれたのだ。」

選ばれた？なに？なんのこと？

「選ばれたってなんｎ「君がルイスということを認めよう。」

声が重なって俺の声はかき消された。

「いや、だからｎ「君が剣術を教わりたいということは聞いている。」・・・もういいです。」

「騎士団員から剣を教わりなさい。正直、こんな子供がいってくるということには驚いた。」

「・・・？おかしいですか？」

「そりゃあそうだろう、６歳の子供が旅をしているなんて。」

「・・・俺の仲間は６歳と８歳と１４と１６で構成されていますよ？」

それほどおかしいとは思わなかった・・・というのは、視点が違うから思えることなのだろう。

しかし、なにかしら手をうたねばな。

「では、仲間はどこに？」

「魔法で上をとんだら、突風にあおられ、吹き飛んで俺はここにいるんです、たぶん今はここへ向かっている途中でしょう。」

「そうか、わかった。では門番に伝えておこう。」

そういうと、「おい」といい、近くの兵をよぶ。それに向かって説明をして、終えると兵は走り去ってゆき、王は俺にむかって腕を組

みながら見た。

「では、君・・・いや、君たちの願いは『光の大精霊』にあうことでいいかな?」

ルイスはコクリとうなづく。

「わかった、しかし問題がある。」

またか・・・とルイスは思った。

「魔物の多発だ。」

「水の大精霊でもありましたよ、それ。」

「いや、その比に無いくらい多い。」

マジですかい、とルイスは心の中でため息をつく。魔物魔物魔物・・・だ。

前回の聖域では、一体程度で終えたものの、次がそんなに楽になるかどうか?と聞かれると、俺に未来は予知できない。

『イメージを魔法に』といった技だが、未来をみるイメージってどんなイメージだか全く分からない。

「だからこそ、騎士団の訓練へといってもらおうと思う。」

「わかりました。」

剣の戦いについて教えてもらう、結構うれしい。

ユリアやカイトが増えて、ある程度は教えてもらいはするが、まだ未熟だ。

ユリアは正直いって強いし、カイトは動きがすばやく、自分の筋力などを生かして戦っている。

だからこそ、二人ではなく、多人数と共に強くなり、自らの力について知りたい。

『魔法による補助』というのは、スタイルの一つだが、そこには『魔法による補助』だけで『そこからどう優位に進めるか』がでてこない。

故に未熟。

だからこそ・・・たくさんの人の剣術をしり、『自らの力を生かしきる戦い方』をしりたいと思う。

死なないために。

第三十一章『光の大精霊』？（後書き）

いっておきますと・・・

俺に修行風景を書く技量はありませんよ。

第三十二章『光の大精霊』？（前書き）

十日　で　精神崩壊　させる　レンシューメニューは

『意識がとんでも、水をかけて起きるぐらいなら問題は無い』というメニュー

そういえば、見られた方が１０万をこえました。

ありがとうございます。

第三十二章『光の大精霊』？

『あとちょっとで死ぬってところを、体力的に死ぬってところまでやれば人は強くなれる』ｂｙ騎士団隊長

「殺す気かぁぁぁっ！？」

と俺の声が訓練場内でこだました。

トレーニングメニュー

・とりあえずでかい石を限界までもって、訓練場を限界まではしる

・とりあえず剣をもって、意識が朦朧とするまで斬りあう

・とりあえず空気椅子をして、死ぬぅぅぅ！という言葉がでなくなるまでその上に石をのせる。

・とりあえず訓練場での同じくらいの石をもって、川を上る（長さ三キロ）

・とりあえずでかい石を限界までもって、山をうさぎ跳びで往復し続ける。

（そこで倒れたら、馬にのせてノルマまで引きずり続けます）

「とりあえずってなんだよ！とりあえずってなんだよぉぉぉ！」

トラウマを6歳の子供が植え付けられている映像を今現在流しております。

ルイス
／ルイス
状態：ひんし

なんだかしらないけれど、十日たった。あれ？十日ってなんだっけ？おいしいんだっけ？豚を原料とした腸詰・・・ソーセージだったような、あれ？ソーセージってなんだっけ？なんだかしらないけど楽しくなってきたよウフフフハハハ！くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ

「・・・」

「ね・・・ねぇルイス？大丈夫？」

ユーリが訓練の終了日に俺の目の前に始めて現れる。

「・・・・・・」

「髪の毛に白髪が現れてる・・・まだ6歳なのに・・・」

「ぁ・・・」

「あ、ルイス!大丈夫?何言っているの?聞こえない・・・」

そういってユーリはルイスの口元に耳をよせる。

「ヤメテタスケテモウヤメテウフフフアハハハ、ヒヒヒ、モウダメシンジャウシンジャウヨウ」

「ルイスぅぅぅぅ！？」

ユーリの叫びが、訓練場内でこだました。

次の日となった。

「よっし！ルイスも帰ってきたし、いくぞぉ！」

カイトが大きく発言し、剣を空へとむける。

「・・・」

「ルイス？おーい？どうしましたぁ？」

「さすがに、もうちょっとまってあげない？」

ユーリの言葉で、みんなうなづくこととなった。

その次の日。

「んで？もう大丈夫？」

ルイスは、コクリとうなづいた。

ルイス　は　め　が　しんでいる　！

「・・・大丈夫じゃなさそうだけど、うなづけるようになっただけマシだよな。」

「ま・・・・まぁね。」

若干引き気味にエリカが同意し、全員が光の大精霊のもとに向かうことになった。

「とりあえず場所は聞いてきた、山の頂上なんだが――――」

「ヤマ？」

「あぁ、山だが、どうかしたのか？」

「ヤマ・・・ウサギト「ストーップ！！落ち着ついて、ね！？」・・・ウン」

ユーリがトラウマモードにルイスがなるのを止める。

「大丈夫だ！神聖な神殿にいくんだ、光の大精霊の神殿だぞ！」

「シンデン？」

「そうだ！大丈夫だぞ！」

「ダイジョウブナノ、ヨカッタ」

ユーリ、エリカ、ユリア、カイト、四人が同時にため息をつく。

「「「「不安だ・・・」」」」

とてつもなく不安な出発をルイスたちは迎えたのだった。

第三十三章『光の大精霊』？

「光の大精霊の神殿へ向かってすでに数時間が過ぎたが・・・まだつかないのか？」

「なにいってるのさ、登山なんて大きければ数日かかるやつばかりだよ？」

ユーリが俺の愚痴に突っ込んだ言葉で富士山、という日本の山を思い浮かべた。

日本一の富士の山、昇るのに結構かかるという。

ロープウェイを使えばそこまで時間はかからないらしいが、この世界にそんなものがあるわけでもない。

はぁ、とルイスはため息をつく。

「それはたしかにわかるんだが、なんで頂上につくっているんだろうな・・・」

「それはたぶん太陽の祠とも呼ばれているからな。」

ユリアが俺の疑問に答えてくれる。『太陽の祠』ねぇ

「何で太陽の祠なんだ？」

「あぁ、日の出の時間帯祭壇の通路から祭壇をみると美しい日の出

がみえるらしい。」

「へぇ、大精霊様はどこにいるんだ？」

「その祭壇のすこし奥にいるんじゃないかな？」

「・・・ってことはしらないわけか。」

「いいじゃない、炎の大精霊も水の大精霊もしらなかったわけだし。」

いや、まぁそうなんだけど、神殿とかいわれたらダンジョンを考えてしまうわけで、正直知りたいなぁ、といった気分だ。

『神殿ダンジョン』ッ！って感じなものが結構ある。

勇者の武器ｏｒ防具が隠されているとかあったらまんまそのとおりだろう（まんまその通りにある

「ルイス、結構意識的にもどってきたな。」

「あぁ・・・トラウマになってる。ッ！？なんかくるぞ！？」

「あぁ、戦闘開始だっ！」

ガサガサという音をたててやってくるのは

「ゴキブリですか。」

「ヒィヤァァァァッ！？」

でかいゴキブリの形状をした魔物をみて、ユーリは悲鳴をあげ、エリカは呆然としている。

カイトとユリアが剣を引き抜き。ルイスは天に手を掲げ、呪文を唱える

「我に捧げよ『聖剣』」

Ｉ　ａｍ　ｂｏｎｅ　ｏｆ．．．はやれるが、『知っている武器しか出せない』ということで。

『イメージした剣』は創れない。

それでは俺の魔法の意味がない。

「だからこそ――――」

知っている範囲での最強の剣を想像し、創造する――――。

それが、俺の戦い方。

イメージというものは正直いって、最強であるが欠点がある。

『イメージできなければ、創造できない』といった欠点だ。

『最強の盾』不可能、『壊れない剣』不可能、『全てを破壊する光線』不可能。

できるのは『想像の範囲内で出来る最強もの』である。

『ディスペル不可の魔法』という想像はどんな形を成すのか、それもできないため。

『とてつもない威力の魔法』としかできない。

「だから、どうするか。」

イメージにより臨機応変に行動し、その場の最強によって『敵を貫く』

それが、俺の戦い方。

「『グランセル』という剣は、知っている中での最強の切れ味と、知っている中での最強の硬さと、知っている中での最強の・・・魔力をこめられている。」

簡単にいえば、村正とエクスカリバー・・・そして白銀の剣をかけてみれば完成する。

エクスカリバーは想像の魔法により、漫画やアニメ、ゲーム内で『教えられたほどの強さ』をつくりあげることができる。

あとは、その強さに似た『器』をつくればいいだけの話。

俺の二対の剣。グランセル。

形状は、とても美しく。まだきったこともない剣のように光を反射し、その場に存在する。

剣には文字が、知っている中での能力『言霊』の能力を想像した結果の文字。

「『想像された最強の剣』色々と考えた結果、名前はグランセルと名づけよう。」

ちょいと中二病臭いが。

というか創った経緯こそ中二病臭いが。

「うるせいやい。」

俺は、即座に「加速」とボソッといいながら走り出す。

斬る、斬る、斬る。

『死なないために』覚えた剣術。

全てを倒しきった――――

「ふぅ・・・終わオエェェェッ」

全てを倒し、もうモザイクをかけてほしい映像を作り出した。

だってゴキブリが！ゴキブリが！

ユーリをみると。

「・・・ゴキ、返り血、ルイスかかって・・・」

一歩さがっている。

「ちょ・・・まてよ・・・」

「え・・・えんがちょ・・・」

「えんがちょ？」

ユリアが疑問の声をあげるが、そんなものは誰も聞いていない。

「嫌ァァァァ！」

「いや、まってぇぇ！？」

最後までしまらないのが、ルイスクオリティー

「そんなクオリティーいらないんだが」

「まぁ、とりあえず神殿へ到着したわけだが。」

「速いなおい。」

ゴキブリ×１５０というグロい場所を抜け、俺達は神殿へと到着する。

見た目は豪華だが、俺の考えるようなダンジョンとはかけ離れている（あたりまえだ、大精霊をなんと考えているんだコイツ

そういって神殿へはいると、まっさきに光の大精霊がいた。

「早ッ、早ッッ！！会うの早ッ！」

そういって俺は光の大精霊をみる。

『誰・・・だ？』

苦しそうにしているのは光の大精霊、なんだまたか、また面倒があるのか、と最低なことをルイスは考えつつも、声をかける。

「ルイス、と申します。なにかありましたか？」

『あ・・・あぁ・・・あの、勇――――グゥッ。』

勇・・・？勇なんなの？勇って俺のかんがえられる中で全くもって二つぐらいしかないよ？

ユウ、あぁ、ひらがなでゆうか、漢字でみえたけど勘違いか。

うんうん、と俺がなんだか納得していると、カイトが俺の横へやってくる。

「どうかしたんですか？」

『力が・・・吸い込まれていく。祭壇の・・・結晶を。』

苦しそうにうめく大精霊の言葉を聞いて、俺達は祭壇を全員でみる。

「結晶、光を放つ結晶か・・・そして、何だ？あれは。」

結晶を取り込むかのように存在する黒々とした液体

「気色悪いな。」

「さっきのルイスみたいだね。」

「なんだお前ら、俺をいじめて楽しいか？」

ゴキブリの返り血あびた人いじめてたのしいかぁ！？

「水の魔法で洗い流したけど。正直三日は触りたくないわ。」

エリカの言葉の棘が急所をつきまくる。

「まぁ、そんなことはどうでもいいから、すぐにあの黒々とした液体をどうするか考えないか？」

全員でいっせいにもう一度液体をみる。

「そうだね、解析魔法をかけてみるよ。」

全員で同意し、俺は液体のほうへと歩いていく。

『解析開始』

黒々とした液体

効果：魔力吸収、魔法吸収

「ふむ、魔法と魔力を吸収する・・・だから解析が奥底までいかなかったのか『ホーリー』」

魔法をとなえてみるが、それですら吸収されている。

「・・・ふむ。どうするか・・・」

黒々とした液体をみながら、どうするか全員で考えてゆく。

第三十三章『光の大精霊』？（後書き）

・・・無理矢理終わらせた形になりましたが、終わりが見えなかったのでなんだか長くなりました。

第三十四章『光の大精霊』？

黒々とした液体。

光の結晶。

「・・・これは、魔力をすいとっている。」

魔法すら吸い取るこれをいったいどうすればいいのか？

「一撃だけ私がやろう。」

ユリアがそう提案する。

危険ではあるが、それ以外方法を考えられるかどうか、と考えてみると何もでない。

無言を肯定とし、ユリアは剣を引き抜く。

「ふっ。」

小さな息を吐く音と共に、剣が横凪に振るわれる。

ヒュッという風を切る音が小さくなり、液体へと振るわれる。

バシュッという音がしたあと。

――液体は霧散した。

「はぁぁぁ！？終わり？終わりですかぁ！？」

「物理的力には弱かったんだろ。」

カイトがそういうが、それにしても弱すぎるだろう。

障壁とか貼れよ！

「私の一撃は障壁をぶち抜いたため、なんだ、こう・・・バチバチーッとはこなかったんだよ。」

「いやいや！い～や～！さすがに魔法剣とか使って、『くぅっ！！』とかいいながらやるべきだと思うんだよ！ＲＰＧとしてはさぁ！」

「む？あぁるぴぃじぃ？」

「簡単にいえば物語だよ、戦って、目的のために進む物語」

「おぉ、そうか。」

ユリアの疑問に答え、ユリアが納得したようなので続けよう。

「それにしても、ありえないんじゃないかな!?この弱さ?」

「いや、ルイス・・・ここで疑問でも仕方ないよね?」

いや、ユーリがいうのもたしかにそうなのだが、なんというか、『ビバ☆現代人』の血がそれを許さない気がする。

「じゃあ、ちょっと考えてみようよ。」

ユーリがそういって人差し指をピッとたてて、ルイスにビッという音がなるような速さで突き立てる。

「炎の大精霊の魔法、森のはやり病での魔法、挙句の果てに巨大イカを殺して食べた魔法。」

ユーリの言葉が俺の心を貫いていく。

「ぐふっ」

ドサッと倒れこむ。

「ちょっと考えてみようよ。これを仕掛けた人がいたとしても、ルイスの魔法をしっていたらヤケになるよ?」

「ぐはぁっ!?」

身をのけぞらせていく。

「だからこそ、極限まで魔法を無視する力として、物理的な面に目

がいかない、というのもありえるよ？何故？何故どうして？誰がここまで魔法に対して対抗心をもたせたの？・・・ルイス・・・だよね？」

「がはぁっ！？」

とどめの一撃。やめてっルイスのライフはもうゼロよ！

といった具合に痛いところをつかれ、俺は倒れこむ。

「ふんっ」

それをみて、ユーリは鼻を鳴らしてそっぽをむく。

『あの・・・』

「ん？」

倒れたままルイスは、声がしたほうをみると・・・

『もういいですか？』

「「「「「あ、忘れてた」」」」」

『ひどいっ？！』

「いや、スマンスマン。」

『・・・まぁいいですよ、大精霊なのに影が薄いのは光の特権ですから、どうせ私は影がないですよケッ』

なんで大精霊だろうか、いじけている。

「どうどう。」

『私は馬じゃありませんからぁっ！』

大精霊の声が神殿へと響き渡る。

「まぁいいから、平気か？」

『あ、はい、平気です。』

正直考えてみると、大精霊といえど性格があるんだな、といった感じだ。

炎は軽快な感じ、水はちょっと弱気って感じかな。

光は、あれだ・・・ドジッ子

『誰がドジッ子ですか！？』

あれ？なんで心読めるのこの子

『まぁとりあえずお礼ってわけで、光のグローブです。』

「片方だけって・・・」

『いや、闇の大精霊からもう片方もらえますよ？』

「ま、うん、ありがとな。」

そういって俺達は契約を終え、神殿の外へとでていった。

すでに魔物たちはいない。

また、美しい初日の出を、人々はみることができるだろう。

―光の大精霊―

おもしろい人、が最初の感想であった。

今現在は、なんだかやさしい人、といった感じだ。

それでいて、決意する心は強い。

きっと勇者の器だろう。

光の大精霊はこころを読める。

彼は苦しみながらも這い上がってきたことを感じさせる。

６歳の歳でたくさんのことを知ってきたのだろう。

彼が勇者になるそのときを、大精霊たちは待っている。

第三十四章『光の大精霊』？（後書き）

光の大精霊編終了。
次は新たなる転生者です。

転生者は三人設定ですが、四人になるかもしれません。

『物理的最強』
『魔法的最強』
が現在の二人ですが。
あとは、ある程度二つの代表格の能力をだしたいと思います。

第三十五章『新しき転生者：三人目』（前書き）

なんでこうなっちまった。

カオスになりました～

オタクでロリコンな新しき転生者の話、始まり始まりっと。

それでも主人公はルイスですよ。

第三十五章『新しき転生者：三人目』

――なぜ、俺はここにいるのだろうか。

名は『朝比奈　義明』と言う。

名は覚えている。

俺の人生――それは平凡であった。

俺は軽度のオタク。仲間もそれに近い人ばかりだった。

歳は１９、大学へ入り、誕生日を迎えたばかりである。

誕生日に友達が金をくれた。

『お前のために限定物のフィギュアを予約をしてきた』

どんな友達だ、と突っ込みたいが・・・友達が誕生日プレゼントをくれるというのだ、貰わないわけにはいかない。

結構うれしかった、それがたとえ知らないアニメのフィギュアだとしても。

俺が今居るのは白い世界。

真っ白で、それでいて、何かがありそうな――そんな世界。

幻想的、といえるだろう。

それでいて・・・なにか悲しかった。

そこにいたのは、少女だった。

「・・・こ、こんにちは。」

そういってきた。

「こんにちは――」

俺はそう返すと、少女はキッと俺をみる。なにかおかしなことをしたのだろうか、俺は。

「あなたは、死にました。」

ゆっくりと、俺にそう告げてきた少女。

なにをいっているんだこいつは。

――いや。

「俺は、死んだのか。」

首が折れて、死んだ記憶があった。痛くはあまりなかった。

「・・・っふ――――俺は、何で死んだんだ?」

そう聞くと、少女の顔がさぁっと青く染まる。

「わかるか?」

そう聞くと、少女はコクリとうなづく。

「どうしても聞きたいなら、いいますが・・・」

「聞かせてくれ」

俺は、淡々とそういったのだった。

少女はコクリとうなづくと。

「わかりました」

俺を真剣なまなざしで射抜くと、語り始める。

世界が、変わってゆく。

―十分前―

「ふんふ～ん♪」

フィギュア、フィギュアだよグヘヘ

「ちょ、ストーップ！」

「なんですか？」

「い・・・いや、俺あんなんだったっけ？」

少女はコクリとうなづく。

「いやん、はずかしす！」

少女は青い顔をして一歩さがった。

「そんなに引かなくても！？」

コホン、と少女は堰をして、

「では――――」

話を再開する。

―再開―

そう、抱えられているのはフィギュアだ。

それも有名なもの。

しかもクオリティーがすごい。

『ＰＴＡでも問題視されたエロさのアニメ』である。

しかも幼女系。

ロリコンな俺はテンションがあがって！

「フゥーーーー！」

そう、叫んだ。

「まって！やめて！」

少女はもう一歩下がる。

「露骨に間をあけないで！」

少女はもう一歩下がり――

「さて続けます」

そう言った、なんだかその顔は誇りに満ちていた。

「話きいてますぅ！？」

街の人々が俺をみて「なんだこいつ」「キモッｗｗｗ」「うわ、写真とろ～（ピロリンッ」

とかいって――

「もうやめてぇぇぇっ！！俺のライフはもう0なのだよ！」

「うるさいです変態」

「ひどい！？」

今世紀稀に見るドS発言をした少女がめんどくさそうな顔をしながら俺をみている。

そして俺はテンションが上がって前が見えなかったのか、石へ躓き。

マンホールへと落ちていった。

何故開いていたのか、今ではわからない。

そこの下にはおっちゃんがいて。

俺に「おい！？大丈夫か！？」とかいってたのが聞こえる。

俺の首の骨はほとんど折れたといった感じである。

まだ生きれるかもしれない、といった感じの希望が渦巻いていた。

だが、俺の心は一直線に前をむいていた。

そこには・・・俺の求めていたフィギュアがあった。

『幼女』『幼女』『幼女』――

そこには理想郷があった。

『大丈夫か、我が――いもうｔ』

そういって立ち上がろうとして、

ゴキンッ

完全に意識は落ちた。

その死に方は、惚れ惚れする死に方。

尻をマンホールの外の空へむき、そこには雲からもれた光があたり、あたかも尻が光っているようで

そして俺は崩れている幼女フィギュアへと視線を集中させ、まるで物乞いのように手をフィギュアへと向けている。

下水工事の人はこう思ったという。

「なんだこいつ」と。

「はぁずかしぃいいいいいいいい！？」

「貴方には転生してもらいます。」

「いや！もどせよ！こんな終わり方粛清してやる！」

「知りませんよ、さっさといきなさい」

「なに！？なにこの人！？」

「はいはい、じゃ、いってら。」

世界少女は無情である。

これ、世界の常識ね。

第三十五章『新しき転生者：三人目』（後書き）

一話で終わった！？

第三十六章『成長でもしてみようかと』

ルイスが、あるとき提案した。

あるとき、といっても、光の大精霊が終了し、次の風の大精霊のもとへと歩いているときだったのだが。

「そういえば、さすがにこの年齢で旅っておかしいって言われたんだが。どう思う?姿形かえればいいのかな?」

そういって、道を歩いている自らの仲間たちに向くと、ユーリがげんなりとした顔をしながらルイスに向けていった。

「いまさら?」

いまさら、つまりコイツらは感じてたのか、とわかる。

・・・ってこいつら言えよ。

そう指摘してみると、エリカは「や、めんどくさいし。」とさも当然といいたげな顔で言い放つ。

なんてやつらだ、とルイスは思った。

「だけど、まぁみんなおかしいと思っているんだろ?」

全員が全員うなづきやがった。本当に誰か言えよ。

「じゃ、とりあえず俺はかわろうかなって思う」

そういって、考えてみる。

正直にいえば、『１０年後の姿に変わる魔法』とかそういうのはない。

イメージできないからだ。

だったら俺がイメージを描いて、変化しなければならない。

「で、俺って将来どうなると思う？」

「破壊神」

「そういう話じゃないよ！？っていうか即答ってなんだよ！？そんなに俺はその言葉が該当するかよ！？」

「「「「うん。」」」」

なんてやつらだ。

気を取り直して、再度聞く。

「姿形のはなしだよ、１０年後の俺をみんなの言葉から想像してみるんだよ。」

そういうと、みんな「あぁ～」といった感じでうなづく。

「で？どうなんだ？」

「たぶんかっこよくはなるな。」

「性格以外は。」

「うるせぇ！」

そういって四人はハハハッと笑う。俺はどうしたらいいんだろう？メラゾーマでも撃てばいいのかな？いいよね？

「っとー冗談はさておき。」

カイトがルイスから流れる殺気に気づき、冷や汗をかきながらも話をかえる。

「黒がかった髪は、もうちょっと長くなって、かっこよくなってるとおもうぞ。・・・ていうか、どう説明しろってんだよ。」

「・・・それでもそうな気がする。」

「とにかく自分でイメージしてみろ。」

その言葉にうなづき、俺は即座に「鏡よ」という言葉にて鏡を目の前へだす。

「・・・」

黒い髪。

子供・・・大人っぽくなるのか。

よし、想像・・・想像。

「って・・・前世を想像すればいいじゃないか。『我が姿よ変化せよ』」

魔法っぽく（魔法だけど）いって、発動する。

ボォンッという音がして、『佐々木勇樹』であった自分があらわれる。

「服は黒のY・・・ジーパンッと、適当でやってみたな。よしこれでいいかな?」

「へぇ、かっこいいじゃん?前世のお前ってこんなんだったのか?」

「記憶にある中ではな。・・・ユーリ?」

ユーリをみると、すこし呆然としたような顔をしている。

「い、いやなんでもないよ!やってみたいなぁ、と思ってさ。」

「へぇ、じゃあやってやるよ。想像してみて、・・・ってどうやればいいだろう?」

「それは俺がやろう。」

そういうと、カイトがはいってくる。

「記憶干渉・・・これは魔法じゃないのだが、天使の翼により意外にも出来るものだ。」

「うわ、ご都合主義。」

「うるさいな、『お前にはできないことをできるようにしたもの』みたいなのが俺なんだよ。」

「そんなもんなのかい？」

「そんなもんだよ。」

納得できない・・・けど、まぁ仕方ないのだろう。

便利といえば便利だ。

っと・・・想像がながれこんでくる。

「『姿、変化する』」

魔法の言葉を言う。

再度、ボォンッという爆発音。

そして姿が現れる。

その姿をみて――――俺は。

「ッ！？」

動揺した。

姿が・・・『桜井　美奈子』だったから。

「？どうかしたの、ルイス？」

俺はその声で思考を元にもどす。

「いや、なんでも・・・ない。」

ダメだ。動揺が隠せない。

何故？何故だ？何故・・・似ている。

いや、瓜二つだろう。子供のころ、何かしら似ているとは感じていた。

「・・・だけど・・・いやなんでもない。」

気にしてはだめだ、無理矢理そう心に告げて、そして顔を引き締める。

「次はエリカもやるか？カイトは・・・さすがにいいよな、ユリアも。」

「あぁ、俺はいい。」

「私もだ。」

「じゃあ、私はやるから、よろしくね、ルイス、カイト。」

「わかった。」

再度想像が流れ込んでくる。

「『姿、変化する』。」

その言葉により、またまた爆発音が鳴り響き。

エリカは綺麗な女性といった姿になっていた。

「ははっどう？綺麗？」

「まぁね。すごいすごい。」

「むぅ・・・ルイス、適当だね・・・女の子の気持ちを考えて上げてよ。」

エリカの不満な顔をみながら、俺はニハハと笑う。

その後、おれたちはすぐに歩き出すのだった。

「そういえば、ルイス、ユーリ、エリカ・・・俺が大人になったらどうなると思う？」

「そうだな、私も聞いてみたい。」

数分くらい歩いていると、カイトとユリアが聞いてくる。

「うーん・・・二人とも同じ言葉かな。」

「あぁ、ルイスもそう思った？」

「あ、私も私もー」

「・・・なんか嫌な予感がするのだが。」

カイトがそういうが、俺たちはお構いなしに。

「綺麗な人」

そう告げたのだった。

第三十六章『成長でもしてみようかと』（後書き）

・・・どういう感じの文章がいいとか教えてくれると助かります。

俺の文章は、その場の自分のノリで書いています。

書く時間は十分前後、だからこそ説明不足がたりないような気がします。

誰か、『ここが変』などと教えてくれるとうれしいです。

第三十七章『三人目の物語』（前書き）

三人目の立場はあれだ

『変態的ギャグ用』

第三十七章『三人目の物語』

――義明――

――それは突然のことだった。

「ぐぅっ！？」

という声をあげて、俺は床にひざをつける。

そのとき、俺は思い出した『朝比奈義明』としての思い出を。

「――様！？――え様！？」

あぁ、声が聞こえる。

ぶつり、と俺の意識は途切れたのだった。

「――――ん。」

目がさめると、知っているんだけど、なんだか一瞬知らないところにいるような気分になった。

たぶん、記憶が戻ったときの所為だろう。

「ここは――――保健室。」

保健室・・・つまり学校か。

そう考えながらも俺は周りをみまわす。

薬品の匂い。なんだか懐かしい感じもする。

とりあえず、埋もれて見えにくい記憶を確認していくこととしよう。

『歳』17歳

『趣味』剣術などを学ぶこと

『得意分野』魔法

・・・っと、これは、前世では考えられないほど努力家だな、今回の俺。

よっし、名前・・・

『名前』――――アリス＝フォートレット

・・・女の名前？最悪だ。俺の親は男に女の名前をつけるのか――

いや、異世界的な感じか？

この世界ではこういう名前が男ではふつ・・・

そう言い聞かせたときに、みえたのは

「うふふ～なにこれぇ。」

プニッ。とさわってみる。

『現　実　逃　避』

そり立っている二つの丘がみえた――

「こんなん嫌じゃあああああああ！」

『性別』女

そう、俺は・・・今日から。

『女』アリス＝フォートレットになったのだった。

「お姉さまぁ！？」

バァンッ！というすごい音をたてて入ってくるのは、なんだかかわいい女の子だった。

誰だっけ・・・と記憶を探り続ける。

「あぁ・・・リース・・・だったかな？」

「はい、リースです！。いきなり倒れたので心配しましたよぉ！愛しいお姉さま！疑問系ですが、大丈夫ですか？」

「ちょっと混乱してたけど、もう大丈夫。」

まて、なんだこれは。

いや、この学校は――『女学院』

女子高ッスか。

「あぁ、あのベットでの愛を忘れてしまわれたのかと・・・！」

な・・・なんだってぇぇぇぇえ！？嘘だろ！？俺は百合だったのか！？いや、好きだけど（自重しやがれ）さすがに自分ではやらないぞ、たとえ女になっても・・・たぶん・・・おそらく、・・・と思っている・・・だったらイイナー

いや、考えろ、アリス、元義明！元男よ、頭の回転をフルに活用するのだ！

記憶をさぐり、逆回しにしていく。

――記憶の検索結果、そんな事実がないことが判明。

ちょっと残ね――――・・・ん・・・んなわけ・・・ないじゃないか、あはは、僕はいたってノーマルさっ！

「冗談はやめなよ、リース。」

「将来設計ですがね・・・」

『この娘は真正の変態だ』頭の中で誰かが言った。

たぶん俺である前のアリスが完璧に覚えていることなのだろう。

リース　イズ　ヘンタイ

これぞ、俺の中での真理。

「しょうがないな・・・っと、なにかやることがあったはずなんだが・・・」

「部活へいこうとしていたときですが。」

あぁ、そうだ！部活だ！

その言葉を聞いて思い出してくるのは俺の思い出。

そう、部活に俺は入っているんだ。『エンシェング部』・・・エンシェングってなんだよ。

『検索』――木刀で戦う部活。

なんて危険な部活なんだ。思い出してみたら、普通の戦闘みたいな戦いをしているじゃないか。

「そうだったね・・・じゃあいこうか！」

「時計をみてくださいよ、お姉さま。すでに時間が時間ではないで

すか。」

時計。時間・・・うわぁ、夜じゃないか、すでに。

「ごめんね。待っててくれたんだね？」

こいつはヘンタイかもしれませんが、いい人かもしれない。

「いいえ、やわらか――――べつにいいですよ、お姉さま☆」

やわらか！？やわらかってなんだよ！？

「だけどね・・・一日やらないのもなまるし。」

「お姉さま！なんてすばらしい人なんでしょう！」

なんか感嘆しているが、俺はとりあえず彼女・・・リースを説得して闘技場へと向かうのだった。

「はい、ですわ」

そういって木刀のようなものを投げてくるのはリース。

「防具はもう倉庫がしまりきっているので、とりだせませんが、もってくるように言われているこれだけはもってきました。」

「うん、ありがとう。」

そういって構える。・・・からだが反応してくれる。

というか、防具なしってことはたぶん力加減をしてくれるだろう、

「お姉さまには手加減は通用しませんので・・・本気でいきます！」

・・・あるぇー、ちょ、嘘だろ！？

いまだに記憶が戻ってない素人同然に！？

「う・・・あれ？」

動きが――――視える

体を軽く動かし、それを紙一重で動かす。

そして反撃――――

ここで俺の能力を感じた。

ここから俺の物語は始まる。

第三十七章『三人目の物語』（後書き）

『流を視る』魔眼

『時の流れをさかのぼり未来を見る』

『動きの流を一手先で視る』
スローモーションのように動き始める。

『時の流れをさかのぼり過去を見る』

・『魔法の流をみる』
魔法の流れを見て、どんなものがくるかを見極め。対処できる。

といった能力です。

ルイスの魔法が弱点ですね。

第三十八章『風の大精霊』？（前書き）

設定からいうと、転生者たちが使っている能力は作者である私が『根源』として想像して物です。

『魔術の根源』イメージを構成させる
『防御の根源』絶対にゆるがない不変の防御
『魔眼の根源』すべての流れをみる眼

だいたい、コピーする『複写眼』（アルファ・スティグマ）でしたっけ？あれでも流をみなければなりませんし、月姫とかでもでてきますが、だいたいは流をみなければいみがないという俺の見解により、『魔眼の根源』は『流』と勝手にして。
『防御の根源』自体は絶対防御、とまぁ考えていまして。
『魔術の根源』とは、魔術自体を理解し、そして想像を魔法として組み立てられる、といった考えからいっています。

まぁ、そこから色々と形からしての特殊能力を付与したのが、『転生者の能力』となっております。

四人目は『攻撃の根源』にしてみたいのですが。

『絶対破壊』になるので、なんだかつまんないんですよね。
さも当然すぎて。

まぁ、『天使の翼』はご都合主義にいってやろうかと思って創った形ですが。

第三十八章『風の大精霊』？

―アリス―

オッス、オラ転生者！

みんな、びっくりすんなよ？オラ、女になっちまったんだ！

驚きだよなぁ～、オラも驚いているところだ！

『お姉さま～（はぁと』

・・・誰か助けてよ。

「『卒業生代表』アリス＝フォートレットさん。」

そう声をかけられて、俺は立ち上がり、壇上へと歩く。

そうすると、先ほどのお姉さまコールが始まる。

大丈夫だ、みんな！俺の貞操は幾度となく起こった奇襲だが、俺の目により逃げ切れる。

『流の魔眼』本当にこの眼はチートだ。

物質の『流』を読み取るこの魔眼。テストの用紙の流をみると、答えが分かるのだ。

俺が『絶対に終わって答えが配られたら答えを書く』ということをちゃんと実行すれば。

その『未来の流』をみて赤く書かれた答えがみれる。

いわば未来をカンニングしているのだ。

すばらしいと思わないか？

っと・・・とりあえず挨拶をし終えたので、さっさと席へと戻ろう。

・・・っととりあえずここの場所を教えよう。

『風の街』とも呼ばれる街『ウィルフィンド』だ。

『あれ？略すとウィンドじゃない？』という突っ込みはいらない。

そういえば先生が言っていたな、『もうすぐ勇者がくる』と。

勇者、まさにファンタズィーと俺は感じたが、なにをする勇者だとかは聞いていない。

どんな勇者なのだろうか？伝説の剣とか持ってくるんだろうなぁ。

ちょっち楽しみになってきたよ！とかはしゃいだりしている。

「――――であるからして・・・――――でありまして。――――ですね。これで、卒業式を終わりにいたします。」

あ、話が終わった。理事長話長かったな。まぁいいや・・・とりあ

えず俺の就職先は魔法騎士隊と呼ばれるところです。

騎士にあこがれていました。

と、その前に仕事があるということでした。

『風の巫女』とやらの仕事です。

なんだか面白そうなので、楽しみです。

卒業式は終了。その後後輩たちに握手を求められ、とりあえず全員と握手したら3時間ほどかかったので、俺は近くしかけながらも就職先の騎士隊にダッシュでいく。

「おはようございます！」

「いや、こんにちはかこんばんわだと思うんだが。」

おぉ、パニックってました。

「あぁ、すみませんコンバンワ。」

「あぁ、コンバンワ、とりあえず集会に関してはちょっと遅れてい

るが問題は無い。隊長の『ウィドル＝カルティン』と言う。よろしくな？」

「は、はい！よろしくお願いします！『アリス』・・・『アリス＝フォートレット』と申しますっ！」

緊張しながらも言うと、ハハハッと隊長が笑い、「別に硬くなりなさんな！もう君の仕事はあるんだからさ！」という。結構優しい人・・・って。

「仕事・・・ですか？」

そういうと、隊長は手紙をポイッと渡してくる。

「・・・王家の紋章・・・って！？」

俺は急いでその手紙を開くと。こうか書かれていた

『ルイスという旅人と共に大精霊救出を任務に、共に行動すること。風の大精霊を救った後は、巫女として行動し、救出任務は続行。』

・・・そういえば、各地の大精霊がおかしいと聞いたことはある。それを救っている人も。

勇者・・・だったかな？あれ？わかんないや、どっちでもいいか。

「聞いただろ、風の大精霊の話」

あぁ、聞いたことはある。最近の暴風に関してだ。

『風の谷』・・・ナウシカか。まぁいい、とりあえずそこに風の大精霊がいるのだが、そこから大きな竜巻がでて、暴風を撒き散らしているとか。

「・・・つまり、もうすぐ助けてくれる人がくるわけで？」

「あぁ、たぶん明日ぐらいだな。門の前で向かえて、とりあえず一緒に行動しろってわけだ。」

「重役ですね。」

「そこまで気落ちはするなよ。大体はその旅人がやるらしいから。」

おぉ、それは楽そうだ。

「まぁとりあえずがんばれよな！」

そういってバンバンと肩を叩いてくる隊長。・・・これでも女ですが手加減はないようです。

まぁ、いいか・・・と思いながら、俺は騎士隊を回って、挨拶まわりをした。

「・・・明日には会わないけどね」

初めてきて五分で国外任務を任されるとは思わなかった。

―ルイス―

「『ウィルフィンド』がみえ・・・帰らない？」

「・・・とてつもなく大きな竜巻があるからって逃げようとしないでくれるとうれしいよ、ルイス。」

めんどくさいことが起こりそうだ、と素で理解した。

「また大精霊を救うとかないよな？」

カイトの言葉にエリカは「知らないわよ・・・まぁなる確立は高いけどね。」と返す。

その言葉に一同はハァ～とため息をつく。

「なんだかしらないが、運命っぽく感じてきたんだが。」

ユリアはそういうと、全員が全員『うんうん』とうなづく。

「選択肢は俺の中で「帰ることはゆるさない」・・・悪あがきだけになった」

「ちょ！？帰るしかなかったの！？」

ユーリの突っ込みが入るが、反応しない。

「まぁ、いいよ。全体的になんか強くなってきたし。」

盗賊っていうのはゴキブリみたいなものだなぁ・・・と思いながら。

戦闘に関して慣れをもってきたと思う。

「さて、さっさといこうか・・・」

嫌そうに、俺達は歩を進めていった。

第三十八章『風の大精霊』？（後書き）

風の街『ウィルフィンド』
風の谷『ナウシ・・・って違う違う』

第三十九章『風の大精霊』？（前書き）

突如現れて大精霊たちに力を求めた勇者がいた。

その勇者は、邪神の呪いを次々に解き、そして彼は大精霊の支持を得た。

そして彼は仲間をつくり、仲間は彼を尊敬し、そして大切に思った。

彼は剣を掲げ、邪神の軍団へと突っ込むことを仲間に告げた。

彼が背負うは、すべての人間。

彼の力は、すべての人間だった。

「俺がやるのはただ一つの奇跡なんだよ。」

そういって勇者はにっこりと笑う。

＜白銀の勇者の伝説＞

第三十九章『風の大精霊』？

―ルイス―

ウィルフィンド、という街へ到着する。

そこには、女性がいた。綺麗でかっこいいといった印象の女性。

キリッとした顔・・・たぶん女性ウケはするだろうが、男性は寄り付かないだろうな、と考え、ちょっと苦笑。

その姿をすこし眺めてみる。

鎧から察するに、この城、街の兵か騎士団だろうか？

そう思いながら、俺は聞こうと思っている言葉を聞いて見た。

「世界少女とはあいましたか？」

「うえぇぇえぇ！？お前もか！？」

なんだこれ、転生者率高くない？

―アリス―

次の日、門でまってみる。

理由は昨日の話により、明日ぐらいにはくるんじゃない？という隊長の発言のためだ。

だからこそ、門の近くで待っている。

装飾・・・というか紋章といえばいいだろうか？とてつもないくらいにきらびやかなその紋章をみて

「いくらぐらいだろう・・・？」と考えたのは、前世の記憶からくるものだろうか。

今現在は名家だからお金に関しては困りはしないけど。

そうすると、二時間ぐらいだろうか？待っていると数人のご一行がみえる。

そこにいたのは、男性：女性の比率が『１：４』というすばらしいご一行。

心の中で「リア充死ねばいいのに」と悪態をつきながらみていると、その中での唯一の男である黒髪の男の視線に気づく。

黒髪、久しぶりにみたなぁ、と思った。

黒髪に近いひとはいるけど、あくまで近いなんだよね。こげ茶って感じの色だし、みんな。

ある程度近づいてから、俺は声をかけようと思っていたとき、少年・・・１６ちょっとぐらいだろうか？が声をかけてくる。

「世界少女とはあいましたか？」

・・・思考が真っ白になり、再起動を開始させる。

考えろ、考えろ、考えろ！こいつも転生者というものか？

いや、世界少女なんて俺も命名しているが、そんな名前かもしれない

いや、世界少女とかねぇだろ！名前として
セカイ＝ショウージョか？どんな名前だ、そんな家名いらん！捨て置け！
ってことは・・・だよね・・・？

「うえぇぇえぇ！？お前もか！？」

思わず叫んだ。

―ルイス―

パニックになる女性を抑えて俺は街へとはいり、広場へと腰をおろ

す。

「え・・・えっと、君もかな？」

そういうと、女性はコクリとうなづく。

「俺は、ルイスっていうんだ。君は？」

「アリス」

「へぇ、アリス？っと、その前に・・・他の転生者を教えるね？」

そういうと、「は・・・はぁ？」といった感じの声をあげ、俺をみてくるアリスといった女性。

俺は「カイトォッ！」と声をかけると、カイトがこちらに歩いてくる。

後ろに三人はくっついてくる。

「カイトだ。」

そのカイトの自己紹介を最初に、全員が自己紹介していく。

「ユーリだよ。」

「エリカよ。」

「ユリアだ。」

そう終えて、アリスは「アリスです。」といって自分を紹介する。

「転生者です。」

「あぁ、俺もだ。」

「三人目か・・・何人になるだろうな?」

そうカイトがもらす。それに反応したのはアリスだった。

「その声・・・男?」

「・・・・・」

カイトは、心底「またか・・・」と思っているという表情をすると「どうせ俺は女っぽいですよ・・・」とかいいはじめる。

「声が高いという最悪な条件がないからいいじゃないか。」

「そもそも何故髪が長いんですか?」

「母が、切らせてくれなかった。」

・・・母親はどういう意図があったのだろうか?

「あぁ、とりあえず詳しい話は後で、王様のところへ呼べ、といわれているから、すぐにいきませんか?」

全員はうなづき、俺達はさっさと歩き始める。

行く場所は・・・王宮。

到着。その間にはなにもなかったので省略。

そこには、貫禄ある男性が座っていた。

どっしりとした体つきに額の傷。

結構な努力をしてきたのだろう。

歴戦の勇士といわれても過言ではない。

そんな男性が・・・

『娘ＬＯＶＥ（はぁと』

というシャツをきこみ

『娘愛』

と書かれたうちわをもち

王座は娘の絵がはりつけられまくっていた。

「（気持ち悪ぅぅっ！？）」

心のそこから叫んだルイスだった。

まともな王を求めたときであった。

第四十章『風の大精霊』？

―ルイス―

・・・。

沈黙が続く中、ルイスはというと。

「（やべぇな・・・王様＝ヘンタイというのが常識になりそうだ・・・）」

今のところ４０％の確立で王様がヘンタイと化している。

なんだ、『娘愛』って『娘ＬＯＶＥ（はぁと』って。

誰かこいつの頭を助けてやってくれ。

「えっと、こんにち「娘最高ッ！」・・・えぇ？はいぃ？」

「娘って最高だと思わないか？」

「え？あ、はぁ？そ「そうか思うかッ！最高だよなぁ！今は１５になるわけだッ！いいよなぁ！」・・・そうですか」

どうしようか、口と鼻の穴をガムテープでふさいで手を縛って城のてっぺんに吊り下げてやろうか？

ならば行動をしようか、そうだな、「ガムテープよでろ（ボソッ」

ポンッとガムテープがでてくる。

紐はもっている。大丈夫だ、俺ならやれる。

「ぐっふっふ！」

「いや、怖いよルイス？ていうかやめてよ？犯罪者にはなりたくないよ？」

「ユーリ・・・男にはやらなければいけないときがあるんだよ。」

「ルイスが想像していることをやらなければいけないときなんてあるか！？ないでしょ！？」

ユーリがルイスを羽交い絞めにし、ルイスは「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」とか叫んでいる。

それをみてカイトはため息をつき。エリカとユリアは我関せずといった感じだ。

「（なんなんだこいつら・・・）」

そう、アリスは思ったという。

―一時間はたっただろうか。

やっと王が普通にもどせた。

「斜め４５℃のチョップで直るとは・・・」

「王様とテレビをいっしょにするなよ、ルイス」

アリスの言葉に、なんだか感動しているルイス。

「あぁ、同郷っていいよね！」とかいっているが、アリスはとりあえず無視をする

「さて、君たちは大精霊を助けているゆ・・・ゴホッゴホッ、すまない。とりあえず率直にいうと風の大精霊を救って欲しいのだ。」

全員が『ゆってなんだゆの次はなんだ、ゆってなんだよ！』という考えをしているが、王様はそれに気づかず、話を進めている。

「さて、風の大精霊は『風の谷』にいるのだ。」

「ナウシカっすか。」

「あぁ、それ思った思った。」

『風の谷』と聞いた瞬間にルイスはそんなことをいってアリスは同意する。

「なうしか――――とはなんだ？」

そこにユリアがつっこんでくる。それに「俺の知っている物語だよ」と返し「なるほど」とユリアが返した。

「――というわけでな。よろしく頼む。」

「承知しました。」

ルイスが普通にそういったときに、なんだか『本当に大丈夫かよ』といった視線がユーリとエリカとカイトから突き刺さってくる、スルースキルを発動しようと思う。

「では、お願いする。褒章はどうするか？」

「いえ、いらないですよ、そんなもの。」

理由：逃亡中に有名になりたくないから
矛盾：王様に会ってる時点でというか、大精霊救っている時点で有名ですよ

それに対する反応は・・・

「おぉ！なんて良い少年だぁ！」

という反応だ。まぁ当然であろう、理由を知らないから。

こうして一行は風の谷へと出発したのだった。

「・・・休めばよかった。」

ビュウビュウと吹き荒れる風の中、森を突き進み谷へと向かう。その風の強さは体力を奪っていく。

「いまさらだよ、ルイス。」

ですよねぇ・・・とユーリの突っ込みに全員がうなづく。

「ちゃっちゃと終わらせて宿で眠るという選択肢がないからな・・・ここまできちゃあ」

「うん、さっさとしようか」

全員で再度うなづいた。

そして、風の谷に到着。

一同唖然としている感じ。

いままで魔物に出会わなかった・・・というか『魔物が風に吹き飛ばされていた状態をみていた』のだが。

そこにあったのは、無数の魔物の死体であった。

「切り裂かれている・・・な。」

「つっ！？」

そうルイスはもらした瞬間に、ユリアはその場から飛びのく。

「どう・・・っ！？」

『どうした』といおうとしたときに、それをみた。

ユリアがいたところがえぐれている。

「カマイタチってやつか・・・」

防御の膜をつくってもいいが、『イメージし続ける』といった行為に集中力は大切だ。

失敗したらお陀仏・・・さて、どうするか――。

ルイス一行に、数秒だけ壁が立った。

第四十一章『風の大精霊』？（前書き）

白銀の勇者の伝説っていつかけばいいですかね？

というか、四人目の能力ってどうすればいいですかね？

物語自体の大まかな流れと最後だけはできているんですけどね。

ついでに、仲間は１２人になる予定です。

四人目は攻撃型か、防御型か・・・もしくは回復型か。それとも戦略型か

回復というとルイスが『全治しろ』で出来上がっちゃいますし。

第四十一章『風の大精霊』？

カマイタチ。

その威力は絶大であった。本来カマイタチというのは、切れたとしても血はでないといった現象である。

それにより、カマイタチは妖怪などといわれていた。

立派な自然現象だが、今現在は風の大精霊の力により発生しているために、一発で土をえぐるほどの能力。

魔物はそれの被害により、死体の山を築きあげている。

「・・・ッ。」

その被害たるや驚きの声をあげたくなるようなものであった。

『風の谷』から魔力が異常量噴出さて、それに導かれるように魔物が近づき、餌食となる・・・。

『ゴキブリホイホイ』を連想してくれればいいと思う。

匂いで近づかせ、ネバネバっとしたので絡めとる。

そんな現象がいまここで出来ている。

「どうするか・・・」と皆で考えていると、アリスがポンッと左手をグーにして、右の手のひらにのせる。

なにかしらないけれど、ひらめいた、といった感じのポーズ。

「私の能力いってませんでしたよね？」

能力・・・あぁ、そうか、それに打開策があったのか。

「私は『流の魔眼』です。人の未来の流れ、過去の流れ・・・そして現在の流れ、魔力の流れ・・・それらすべての流れをみる魔眼です。つまり、カマイタチの流を視る、と設定してしまえば流れがみえるんですよね。」

おぉっ、とアリス以外の全員が声をあげる。

「じゃあ、俺が天使の翼でとぶから、お前らつかまって、そこからアリスが流れをみて指示をするっていうのは？」

カイトがそう提案すると、全員が同意する。

カイトもうなづくと、天使の翼をだす。

天使の翼だから避けるのに失敗しても翼で護れば大丈夫であろう。

俺の『イメージの魔法』は、『鳥化』という結果を導き出す魔法は持続し続けるけど。

『攻撃から護り続ける』というのは、ダメージ蓄積もあるので、壊れないように想像し続けなければいけない。

やはり『攻撃』と『回復』型が、俺の魔法か・・・とルイスは思っ

た。

『防御』と『飛行』がカイト

『流れ』と『時』がアリス。

さて、四人目はどうなるだろうか？

「さぁいきますか。」

アリスがそういうと、全員でうなづき、それをみたカイトは翼を羽ばたかせる。

「う～ん・・・やっぱり少しばかり辛いものがあるな、動きに関しては大丈夫だろうけど。」

「大丈夫か？俺の魔法で軽くすることはできるが・・・」

そう提案すると、カイトはフルフルと横に首をふる。

「お前の魔法ははっきりいえば最終手段だ。」

そういわれれば、さすがに反論の仕様がない。

そして、始まった。

「右から来る！次左！！斜め右ぃ！」

そう上から声がかけられ、右へ左へと揺さぶられる。

・・・正直吐いていいかな。

「右・・・下からもくる！？」

ガクガクガクガク小刻みに震える。

「ねぇルイス・・・吐きそう・・・」

「我慢してくれ・・・お前がはいたらつられて俺も吐くと思う・・・」

顔が真っ青なユーリと、すでに精神的な部分を肉体から切り離したエリカ、ユリアはなんだか平気そうだ。

そのとき。

「ッぅ！？全方向からきたぁ！？」

その瞬間俺は回りをみて、『想像』を開始。

「『護れ』」

そう告げると、周りに球を描くように膜が現れ、そこでガガガッという鈍い音がなるが、絶える。膜が変形してやがった。

「異常なほどの威力をみたよ。」

「俺・・・避けられなかったらどうなってたんだろうな。」

護ったあと、すぐに地面が見えてくる。

それをみて、みんながみんな安堵して、そして降りる。

「うぷ・・・ついた？ついたの？」

エリカが死にそうな顔で起き上がる。

とりあえず「全治しろ」といって全員に魔法をかけておく。

「とりあえず、巫女服をきなきゃね。」

そういったアリスを見ると、なんだかきらびやかな服をもっている。

「巫女服？白と赤を強調した、シンプルなデザインのやつしかしらないのだが。」

「この世界の巫女は大精霊に供物を捧げるものって感じですよ。供物はこれ。」

そうして石をさす。

「風石ってやつでね。風の大精霊の力となるもの・・・らしいね。」

そういって着替え始めるアリスをみていると・・・

「ゴファッ！？」

「みるんじゃないヘンタイ！」

一撃でユーリのボディーブローで意識を切り離された、横をみるとカイトはすでに後ろを向いている。

こちらをむいて、ニヤッとしたところをみて・・・

「こ・・・コロス・・・」

という言葉をしいて、俺の意識は刈り取られた。

しまらないのがルイスクオリティー

第四十二章『風の大精霊』？

『あ〝あああああア〝ア〝ア〝Ａａａａａ』

『風の谷』に降り、アリスが巫女服に着替えたあとに聞こえてきたのは、叫び――

咆哮のように聞こえたが、それは叫びだと感じた。

『苦しい』『助けて』そんな声のような気がして。ルイスはゆっくりと立ち上がる。

ボディーブローをされた腹がなんだか気持ち悪くて吐きそう・・・だが、何故かルイスは『助けなければ』という感情が前へと押し出されていく。

・・・そして、風の大精霊は現れた。

ビュゥッという激しい風が一瞬拭いたかと思うと、そこに人のような形をした風が見える。

それは、ゆっくりと俺たちをみた。

それがルイスは希望のまなざしのように見えて。

――いや、そういう風にみえたのは、ルイスだけではなく、全員だったのだろう。

再度の風の大精霊の咆哮と共に、風がふきあれる。

「――うぉぉっ！？」

カイトが叫びをあげて、踏ん張る。風がやんだ瞬間にそこから力をこめて、カイトはいっきに『天使の翼』を展開させ、羽をとばす。

だが、その羽は風でさえぎられる。

「うわぁ、天敵。」

ちょっと無理をした軽めの言葉をいいながら、右へと飛ぶ。

カイトの後ろからいっきにユリアが飛び出していき、剣をつきたてようとする。

気により、瞬間的に爆発的な速度で風の大精霊の目の前へと移動すると風の大精霊を横凪に斬る。

風であるが、手ごたえを感じ、ユリアは笑った。

だが――暴風がいっきに爆発するように吹き荒れる。

「ぐぅっ！？」

低く叫びながらも、ユリアは飛ばされないように体を低くするが、さすがに無理があったらしい、吹き飛ばされ、それを飛ばされたところにいたアリスが抱きかかえる。

その瞬間、構成をたてたユーリとエリカの巨大な火の玉が風の大精

霊へと向かっていき、爆発を起こす。

――――それでも風の大精霊は向かってくる。

「連邦のモビ・・・風の大精霊は化け物か！」

――――いや、いまなんていおうとした、おいコラ、とかアリスの発言にルイスは突っ込みを入れかけるが、さすがに自重した。

「『ガラスのビーカー』」

そう言い放ち、風の大精霊へととてつもない重さのビーカーを降らし、閉じ込める。

「空気的な理由で無理だと思うのだが。」

「・・・考えなしだった。」

風の大精霊はスキマからするりと出て行った。

「あぁもう！なんじゃこりゃあ！」

「原因を探さないとね――――」

ルイスが叫ぶと、ユーリが冷静に場を分析し始める。

「というか、正直向こうの神殿みたいなのにいけばわかるんじゃない？」

エリカがそういってビッと風の大精霊の後ろをさす。

そこにはパルテノン神殿みたいなのがあった。

「そうだね！ということでルイス、いってこいやぁ！」

「俺ぇっ!?カイトは?風抜けられそうじゃない！?」

「いや、いっても対処できないだろ。」

・・・たしかに。

ということでいくことになりました。

「さぁぁぁっ！突っ込むぞぉおおおお！」

ルイス全力疾走！

「うわぁぁあ！」

吹き飛ばされた。

「・・・バカでしょ?ルイス。」

ユーリの言葉に言い返せないのが辛い・・・。目の前をみてみると、風が吹き荒れている。さすがに暴走はしているため、警戒心が高いのだろうか?近づかせてくれない。

「最初っからこうすればよかったな・・・」

はぁ、とため息をつき、俺は小さくいった。

「『テレポ』」

瞬間的に移動し、神殿の前へと行く。そしていっきに走りぬけると――――

「（あった！）」

真っ黒な結晶があった。そこに目掛けて――――

「『我が拳に宿すは破壊力』」

想像されて破壊のパンチを繰り出す。もう『ばくれつパンチ』とよばれてもかまわない。

ドォォンッという爆裂音が発生し、少しばかり耳がキーンとするが、それも魔法で治す。

「・・・やった・・・か？」

煙が晴れていく、風が止まる。大丈夫になった・・・と安心すると・・・。

そこには、真っ黒な煙があった。

「ッ！？」

避けようとするが、間に合わない。

ルイスは、取り込まれていった。

そこにあったのは、昔の自分

そこにあったのは、昔の暴力

そこにあったのは、昔の絶望

そこにあったのは、昔の――――忘れたいもの。

それは、欲望であり、・・・それは悲しみであり。

悦楽により突き落とされた親戚であった男と女と・・・子供。

そして、そいつらに殴られている俺がいて。

それが、延々に俺の中で続いていた。

消えない、消えない過去。

悲しい過去。

心が壊れていく。何度も何度も過去を繰り返されている、その真っ暗な世界の中で。

「う・・・あぁぁ。」

涙が、あふれてくる。

タスケテ、と声をもらすが、なにもかも、俺から眼をそらしていく。

そこにあったのは、一つの感情。『めんどくさい』といった感情。

いきたいけど怖い・・・そんなのはただの偽善だ。

そこにあるのは『絡まれるとめんどくさい』といった感情から生まれ、精神が勝手な解釈をしただけだ。

そこにあったのは絶望と・・・

希望だった。

いつでも顔が頭から蘇る。

「美奈・・・子、ユ・・・ゥリ、エリ・・・カ、ユウ・・・リ・・・カ・・・イ・・・ト・・・アリ・・・ス」

それは希望である。そして、この世界の仲間であった。

そこにあったのは、希望である。

そして、そこから創られるのは・・・信念。

『彼女の幸せ』を願った少年の信念。

『仲間と共にある』彼の信念だった。

「それが・・・どうしたぁっ！」

そこから口ずさむのは、過去を受け入れ、そして乗り越えようとする言葉。

「だからどうしたぁぁぁっ！」

次の瞬間、暗い世界は崩れ去る。

「・・・・ッ。」

起き上がると、硬い床の上だった。

神殿の上で寝たままだから、たぶん時間はあまり過ぎていないと思われる。

「おーい！ルイスー！」

遠くから声が聞こえる。それに安心し、精神的疲労を感じながらもルイスは立ち上がる。

今現在の幸せを願いながら、彼女の幸せを願い。彼は走り出す。

風の大精霊と対峙中。

『ありがとうございました。ゆ・・・いえ、すいませんが最初でしょうね。』

「みんないうけどさ、ゆ・・・の続きを教えてよ。ねぇ？」

『とりあえず肩当です。』

話きいているのだろうか？とルイスは思いながらも、一度や二度のことじゃないのでため息をついて肩当をうけとる。

「っていうか、防具がそろい始める気がしてきた。」

全くもってその気・・・は、事実であった。

ルイスたちは契約をしてもらい、さっそうと谷を上っていった。

「ルイス、なんだかスッキリしたような顔をしているけど、どうしたの？」

ユーリの問いかけに、ルイスは笑い。

「なんだか、吹っ切れたんだよね。」

過去の絶望を、未来の希望へと変換した彼は、楽しそうに笑った。

――風の大精霊――

言葉にはださなかったけれど、彼の心をすこしだけみた。

それは、黒い結晶が壊れたときにみた本の一瞬だったが、彼は真っ

黒な過去を背負っていた。

『タスケテ』そう叫んでいた。

そして、そこから・・・光が見えた気がした。強い強い光が。

私は感じた。あれが彼の信念だと。

たぶん、彼の光は過去を塗りつぶせただろう。

彼の最後の笑いが、それを確信させた。

「勇者の素質は十分。」

白銀の勇者を思い出す――

第四十二章『風の大精霊』？（後書き）

長かったらごめんなさい。

今回は吹っ切れていくといった話。

無理矢理にこの展開が欲しかったのでいれた。

なんだか、ごちゃごちゃしてたらごめんなさい。

第四十三章『白銀の勇者』序章（前書き）

全く自身がありませんが、読んでくれるとうれしいです。

白銀の勇者の物語は、この『奇跡のための試練』を書く前に書いた物語になります。

まぁといっても、自分が半分冗談で書き始めた物語なんですがね。

こんなところでかけるなんてうれしいです。

みてくださった人、本当にありがとうございます

といっても、白銀の勇者から奇跡のための試練をつくりあげ。

そこから奇跡のための試練用につくりあげたやつなんですけどね

第四十三章『白銀の勇者』序章

アトラント国姫、アリカは再度、『勇者の物語』をみる。
そこにはこう書かれていた。

『何故そこにあるかはわからない
何時からそこにあったかも分からない
だけど、その白銀の剣は、森の奥深くでいつまでも白く光っている
新たなる勇者をみつけ、世界を平穏へと導くために』

～『勇者の物語』表紙にて

勇者・・・かぁ。

アリカはホォッと心が温かくなるのを感じる。

「・・・もう、寝ましょうか。」

彼女はそういうと、ベットへと入り、眼を閉じ、意識を・・・閉じた。

『夢をみた――――
それは、たくさんの喜びと、悲しみがあふれていた――――』

『人間に争いはたえない、だが、それでも人間は笑っていた。そこにあったのは平穏。

１２の大精霊、精霊たちはそんな笑顔が好きだった。そして、その笑顔を護ってやろうと思っていた。』

『だが、それでも強大なものは現れた。それが邪神。』

『それは、人間の奥底にある暗闇であった。』

『邪神は地を侵食し、精霊たちはそれに抗えずに喰われていく。それは惨劇、それは悲劇。なにも抵抗せず、食われていく仲間をみながら、精霊たちは願った。助けてと、誰か・・・助けて・・・と。』

『だが、それに反応するものはなかった。それは間にこうかけるであろう。すぐには・・・と』

「怖いなぁ」

リィンという少年が森を歩く。少年は兵であった。

それもこれもお金のため、両親のため。リィンは必死になって兵をして、必死になって訓練をしていた。

今現在いるのは、奥深くの森、『聖域』とも呼ばれ始めているこの森には、魔物が現れないという。

そこで、リィンの雇い主である王様は『なにかある』とでも考えたのだろう。一個中隊もの人数をそこへ派遣し、調べてくるよう命令する。

だから今、ここにリィンはいた。

薄暗い森の中、リィンは今現在の森の中を見回す

木々が光をさえぎっているせいか、奥をみると何も見えない。

「おい！リィン、なにをビクビクしてんだ？お前は両親のために兵

をやってんだぜ?それは誇れるものだ。だったらビクビクしてんじゃねぇよ!まっすぐ立てよ、ほら!」

そういってリィンの腰をバンバンと叩くのはカルマ、部隊長であった。

「は・・・はいぃ!!」

ちょっと怯えた様子でリィンは、ピンッと背筋を伸ばし、森をあるく。

「おう!いい感じだな。」

そういってハハハッとカルマは笑う。

数分くらいあるいたところで広場のような場所にでる。

つくと、カルマは散会して、森を散策するように言い渡し、一時間ぐらいでもどってこいともいった。

「ハッ!」

そういって隊員全員が敬礼をすると、カルマは「みんなマジで生きろよ〜」と冗談交じりでいった。隊員たちは「不安になるようなこと言わないでくださいよ。」というと、カルマはそれに笑いで答え、背を向け森の奥深くへと入っていった。

「ぼ・・・ぼくもいかなきゃ!」

怯えた様子で、リィンも走り出す。

正直怖い以外の感情は持ててなかったが、それでもリィンは必死になって走り出す。

「んしょ・・・んしょ。」

そういって林をぬけ、木の間をくぐり、ちょっと服がボロボロになってくるが、気にせず走る。

そのとき、リィンは足をすべらせる。

足元をみていなかった。リィンは坂をまっさかさまに落ちていく。

「うわっあぁあぁ!?うわぁ!?」

結構長かったが、坂というものもあったせいか、尻を打ちつけただけで別に外傷はなかった。

リィンは、「痛た・・・」といいながら腰をさすりながら歩き出すと、そこには神秘的なものがあった。

『光もないのに光る白銀の剣』、それは勇者にみつけられるためのように光を放っているようだった。

「これ・・・なんだ?」

そういってリィンは近づき、剣を掴み・・・引き抜いてみる。

「え？」

それは簡単に引きぬけた。

「う・・・普通に引きぬけたってことは・・・別に勇者の武器とかじゃないのか？」

そういい、リィンは首を傾ける。

そのときだった――――

ドォンッという音が鳴り、リィンは思わず怯えた声をあげる。

「な、なんだぁっ！？」

叫びのような声をあげて、音がした方向へと走り出すと、兵の声がする。

『な・・・魔物はでてこなかったんじゃないのか！？』

『やばいぞこいつ・・・剣がきかない！折れたぁ！？』

そんな声が聞こえる。

役に立てないかもしれないとリィンは思ったが、それでも足は動き、走り出す。

「うぉおおお！」

全力で走り、リィンはさっきいた広場へと到着する。

――――カルマさんが戦っている！

そこにいたのは、魔物と打ち合いを続けるカルマ。

魔物は、何かをいっている。

『ユウシャ、コロス』と、そう聞こえた。

勇者、・・・この剣が抜けたときに、魔物はきた・・・

「まさか――――！」

そう思い、カルマさんをみる。

押されている、だったら・・・俺がいかなければ。

だが、怖い。

これは本当に勇者の剣なのか？

これは本当に、魔物を倒せるのか？

これは・・・本当に・・・僕みたいなので魔物を・・・倒せるのか？

迷いが生じる。

そんなときだった。

「がぁぁっ！？」

カルマさんが魔物にて、弾き飛ばされる。

「カ・・・カルマさんっ！？」

思わず走り出し、木にぶつかって止まる。ぶつかった木は折れていく。

「なんて、威力なんだ！カルマさん、大丈夫です・・・」

大丈夫ですか、そう声をかけたときに結果は知ってしまった。

鎧からあふれるような血。・・・助かることはないだろう。

そう考えると、涙があふれてくる。

「う・・・ガ・・・カルマ・・・ざん・・・」

そういって泣き始めると、リィンの頬に触れるものがあった。

それは、カルマの手だった。

思わず、叫ぶ。

「カルマさん！みつけたんです！これが勇者の剣です！カルマさん、この剣を！」

そういってカルマをリィンはみると、カルマはゆっくりと首を左右に振る。

「もう・・・無理だ。」

「無理だなんていわないでください！」

それは叫びのようだった

カルマは、ポツリと言った。

「息子・・・みたかったな。」と。

「息子なんて、みればいいじゃないですか！生きてください！生きて・・・」

カルマは再度首を横に振る。

「剣は、お前がみつけたものだろ？ならばお前が・・・勇者だ。」

「僕に勇者の器なんて・・・」

カルマは、首を横に強く振る。

「器は関係ない、勇者に必要なのは・・・心だ。」

そういって辛そうに左腕をあげ、リィンの胸をポンッと押した。

「必死に努力するお前を俺は知っている。両親のため、家族のため

に、夜中ずっと剣をふっているお前を知っている。発声練習をして、
次の日ガラガラな声になって教官に怒られているお前を知っている。
だからこそ・・・いえる。お前は・・・勇者・・・・・だ・・・・・」

そういった瞬間、カルマはめをゆっくりと閉じ・・・死んだ。

後ろには、魔物が居た。

それは、白銀の剣をもった勇者を殺すためにいた。

『コロス』その言葉だけを吐きながら。

リィンはゆっくりと立ち上がる。

魔物を、睨みつける。

そのまなざしに憎しみはこもっていなかった。

そこにあったのは、勇気。

カルマの勇気を胸に・・・リィンは敵を見据え、剣をにぎる。

『白銀の剣』、それが勇者の剣というなら・・・

「俺に・・・力をかせ。」

カルマの息子を思う。カルマの心を思う。

リィンは心の中で言う。

『ならば、死なぬ世界をつくってみようじゃないか』

「ハァァァッ！」

リィンは右にとび、向かってくる魔物の腕を交わし、――――いっきに斬りつけたッ！

ザシュッという音がなり、魔物は上半身と別れを告げる。

その動きは、美しく、その少年は薄暗い森の中でも光っていたという。

リィンは戦闘を追え、カルマの死体へと歩き出し。

カルマへと、剣を向け、言い放つ。

「カルマさんの勇気と・・・俺の勇気。そしてこの勇者の剣で！俺は・・・」

『世界を救う』

そう、リィンは告げた。

それが、勇者の物語である。

それが、白銀の勇者である。

少年は流れる涙を拭い、上を向く。

諦めぬ思いを、胸に。

第四十三章『白銀の勇者』序章（後書き）

こんなところが白銀の勇者の序章となります。

次の話はたぶんある程度たったら書く、もしくは前書きで書くことになると思います。

決断させてくれた人、ありがとう。

感想お待ちしております。

白銀の勇者の名前なんて元は設定したなかったんですよね。

第四十四章『未来の少子化問題の原因』

――ルイス――

風の大精霊救出、そして契約、そしてなんだか毎回貰っている防具をもらい、城へと到着する。

兵へと通してもらい、玉座へと行くと・・・

「ふぅ！ふぅ！ＭＵ☆ＳＵ☆ＭＥ、ＬＯＶＥＬＯＶＥ。」

ドンドコドンドコドンドコドンドコ、太鼓が響き渡る。

そこには火のついた棒を右手で、左手で娘の絵をかかれたうちわ、そして王はブリー――

バタン

とりあえず、玉座の外へといき、扉をしめて。

「『この扉、何者にも開けられん。』」

と唱え、扉を魔法の壁で補強し、俺は通路を扉は無視して歩き出す。

それは、なんだか悟ったようにさわやかな笑みを浮かべて・・・

「ってまてまてまて！」

そんな俺をみて、ツッコンでくるユーリ。

「なんだよ、なにか変なことでもあったか?」

「ルイスとあってから大体のことが変だよ!?ってじゃないじゃない・・・とりあえず我慢していこうか?」

「我慢?俺が何に我慢するって?ブリーフ一丁で娘の絵が描かれたうちわでおどり狂っている変態をみる拷問を俺にかしたいのか?俺は逃げるぞ、諦めはしない。」

「なんだかかっこよさげにいってるけど、絶対にそれ現実逃避みたいなものだから。とりあえず、あのヘンt・・・王様の奇行は我慢しようよ、終わった・・・とだけでもいえばいいんだからさ。」

それもそうなんだが・・・正直、あの変態踊りをみるだけでも吐き気が起こるのに、それを数秒もの時間をみると、俺は精神崩壊を引き起こしそうで怖い。

だが、仕方ない・・・か

「よっしゃ・・・いくぞ!」

心をきめて扉の前へといき、開け放つ。

「やぁ、ルイス殿」

ビシッときめた王様をみた。

「「あるぇえええええええ!?」」

二人が叫んだ。

エリカは、どうでもよさそうに、ユリアは動じず。カイトは苦笑。

アリスは・・・

「（これが国の主・・・）」

ちょっとしたショックを受けていた。

「どうしたんだい?」

そう平然と言ってくる王に、ルイスはちょっと慌てながらも聞いてみる。

「さっきの奇k・・・踊りはどうしたんですか?」

奇行、といいそうになるのをさすがに自重し、聞いてみる。

そういうと、いやぁ・・・といった感じで頭をかいて申し訳なさそうに王はしている。

「（あれ・・・案外普通？）」

最初の娘の愛は見ているが、ちょっとぐらいは訂正してもいいかなーと

「日常風景をみられてしまったね」

「「日常風景！？」」

再度ルイスとユーリが叫ぶが、後ろの四人はアリスがさらにショックを受けていること以外、なんら変わらない。

「とりあえず、最初はありがとう、かな？」

「あ、どうも・・・」

普通かもしれないという言葉はもうすでに出すものか、とルイスは思った。

「褒章はいるかい？」

「いえ、いただきません。」

「へぇ、聞いていたけど本当のことだとはね。本当にありがとう。パーティでもやっていこうか？」

「いや、時間はありませんので・・・」

「そうかい・・・」

王様とルイスの会話はそこで終わり、王は礼をし、席へと戻る。

「じゃ、ありがとうございました。」

そういってルイスたちは出て行った。

「で、とりあえず私もついていくわけなんだよね。」

アリスがルイスに向かってそう言った。

「首に縄をつけてでもついていかせるつもりだったからいいさ。」

「なにそれ、怖い。」

出発の日となり、ルイスたちは城壁の前で落ち合う。

「さっさといくか・・・次まで何ヶ月かかるんだよ、本当に・・・」

「さぁ、結構遠いから、いままでのペースだと三ヶ月ぐらいになるだろうね。」

ぶっちゃけ逃げたくなってくるルイスは感情をおさえ、ハァッとため息をつく。

「まぁいいさ・・・さっさといこう。」

そう思って馬へとまたがる。

「さて・・・さっさといくか。」

そう言って、馬を全員で走らせていく。

そうすると・・・

後ろから声援が聞こえる。

なにごとか、と思い後ろをむくと、多くの女性が俺たちに向かい手をふっているじゃないか。

「な・・・なん『お姉さまぁ～！（はぁと』・・・なんだって?」

アリスのほうをバッとみると、アリスは下をむいて、私じゃないよアピールをし始めている。

「アリス・・・?」

優しく、生温かいようなものをみるような眼でルイスはアリスをみる。

「・・・がんばって。」

「そんな眼で私をみるなぁぁぁっ！」

城壁には

『アリス様お姉さんがてっぺん

』

という垂れ幕があり、それが城壁を覆いつくサンばかりにたくさんある。

そこにはハートがちりばめられていて・・・

そんなアリスにルイスは肩に手をおいて、いった。

「未来、少子化になったらお前のせいだろうね。」

「うるっさぁぁぁい！」

アリスは恥ずかしさで半泣きだった。

第四十四章『未来の少子化問題の原因』（後書き）

コメディーはテンションが上がらなきゃかけないっていうことが分かりました。

次は・・・時の大精霊となります。

～次回予告～

時の国がみえはじめるとき、違和感を感じるルイス一行。
空が・・・灰色だ。
灰色、それは曇りならありえるだろうが、それはすでに時の国を山の上からみつけ、目の前にくるまで三日もかかるが、その景色は全くといって変動がない。
時の国になにがあったのか！
次回、『時の大精霊』？
よろしくなっ！

「作者はバカなんでしょうか？」

世界少女たちは全員が全員うなづいた。

第四十五章『時の大精霊』？（前書き）

結構な速度で更新し続けてますけど、疲労を感じますね、アハハ

流れ自体は考えていますが、『〇〇の国でどんなことが～』は即決ですからね。

五分で考えてますから奥が浅いです。もうちょっと考えたほうがいいですかね？

浅い物語は今まで読み返してもつまらないですから。

第四十五章『時の大精霊』？

時の国『タンレイム』

そこは時の大精霊が守護する国。

農作物が四季折々のものがいつでもとれる国という。

「ビニールハウスみたいなものだろうか？」

「む？びにぃるはうす？」

「ビニールっていう透明なシートの中で、温度調整しながら作物を育てるってやつだ。そこでならいつの季節だろうがつくれるって寸法だ、植物ってのは大抵四季を感じるのは、温度によるらしからな、温度を調整して、早めに開花させるなどよくあることらしいぞ。」

「そうなのか。」

ユリアが納得したようにいうので、ルイスは満足した。

「っと、みえてきたよ。」

ユーリがそういって指をさす。

今現在は山の上、『シエル山』と呼ばれる山の上で、俺たちは馬にのってその『時の国』とやらをみているわけだ。

「・・・なんだか不吉だなぁ。」

時の国の上にのみ、大きな分厚い雲がかかっている。それがなんだか不吉にみえる。

「なんかの儀式とかやってるんじゃない？」

エリカがそういうが、あの集まりはおかしいんじゃないか？と全員が思っていることだ。

「雨よ降れ～ってか、火をひたすらたいて上昇気流でなんちゃら～っていうやつをやっているのか？」

「雨乞いだね、まぁそれもありえなくはないかもしれないけど・・・火をたいているなら煙がでてるはずでしょう？」

それはたしかにそうだけれど・・・とルイスは思うが、まぁ確かに煙はない。

消した後かもしれないけれど・・・その考えは言わないで置こう、いけばわかることだろう。

「じゃ、さっさといこうよ。」

「そうだね。」

皆が同意すると、俺達は馬を走らせ、さっさと時の国へと到着しようとする。

途中、崖のような部分で、馬をもどし、カイトの翼を使うなどして、

三日ほどかかったが、すぐに到着する。

「・・・おい。」

これは、ありえない。

「ルイス、僕もわかっている。」

ユーリが、はぁ・・・とため息をつく、それはたぶん「めんどうなことになった」といった考えからくるものだろう。

まったく、雲が変動していない。

それも、時の国の上の雲だけ。

「正直、わっけわかんないわね・・・」

エリカがそういって城壁へと触れてみる・・・と

「ッ！？」

なにやら触れた部分をひっぱっている。

「どうしたんだ？」

カイトが声をかけるが、エリカはギギギ・・・とこっちをむいていった。

「・・・動かない。」

「・・・はぁ？」

カイトがそういって城壁へと触るが、なにも起こらない。

「なにもないけど・・・とりあえずひっぱってみるか？」

カイトがそういうと、エリカは必死になってコクコクとうなづく。

ルイスやユーリ、ユリアとアリスもエリカの体を掴み・・・ひっぱる。

「いたたたた！？」

そういってエリカは体をバタつかせるが・・・ぬけない。

「・・・時がとまっているところに手をいれてしまったせいか？」

「なんですとぉぉ！？」

エリカがすでに涙目になっているところに、カイトはとりあえず触れているところを包み込むようにして触れ・・・引き抜く。

今度は綺麗に取れる。

「たぶん、俺たちは大丈夫なんだろうよ・・・なにしろ転生者だからな。大丈夫か？」

そういってカイトはエリカに手を差し出すと、エリカはその手をおずおずととり、起き上がる。

「ひどいめにあったわ・・・」とエリカがパンパンと服について埃を取る。

「とりあえず、アリス・・・」

「ん、視てる・・・流れが一切感じられない。」

そう聞くと、ルイスは、やっぱりか・・・と思った。

「つまり・・・時が止まっているわけね。」

ユーリがそういうと、ルイスとカイト、アリスは同時にうなづく。

「つまり、転生者でしか入れない国、ということか。」

ユリアがそういうと、全員でうなづく。

「じゃ、俺はいくよ・・・さすがに、結構な日数かかってんのにの

んびりできないのは嫌だしな。」

ルイスがそういうと、ユーリが「あぶないよ！」と止める。

「なぁにいってんだい？いつも危ないだろうが。」

「た・・・たしかにそうなんだけどね・・・」

ユーリが返せなくなったな、と考えると、ルイスはさっさとこの現象をとめることを決意する。

「じゃ、俺もいくぞ？」

「あぁ、私もいこう。」

カイトとアリスがそういって立ち上がる。

「食料に関しては、元からルイスの魔法で必要なかったけど、かってあるし、川もちかくにあったし、大丈夫よ、がんばってね。」

エリカがそういうと、ルイスたちはうなづく

「がんばってね」

「非力ですまんな。」

ユーリとユリアがそういうと、ルイスはそっちをむいてうなづき、

「別にいいさ」と返す。

「じゃ、いってくるか。『英雄たちの歌』」

そういって、ルイスは能力を極限まで高める魔法を自分とカイト、アリスにかけ、いっきに飛び上がり城壁の上へと飛ぶ。

そこは・・・

ひとが全員うごかなくなった国があった。

「なんじゃこりゃぁ・・・」

ルイスはそれをみて、そう漏らしたという。

第四十六章『時の大精霊』？（前書き）

すごいぐらいに進まないなぁ・・・と感じています。

第四十六章『時の大精霊』？

――エリカ――

あいつらが言った後、すこし考えて、近くの木の枝を思いっきり城壁へとくっつける。

当然のごとく、時がとまり、木は固まる。

「なにやっているの？」

その行為をみていたのか、ユーリが私に聞いてきた。

「いや、問題解決すれば、この枝は落ちることになるでしょ？」

そういうと、ユーリは、「あぁ～」とかいいながら関心している。

「さ、なにもすることはないでしょうが、ある程度の用意はしましょ。」

「そうだね」

私とユーリはユリアの元へと走っていった。

―ルイス―

そこにあるのは、止まった街。

俺はとりあえず大通りだと思われる場所に降り立つ。

そして、近くに居た女性に触れてみる。

・・・肌の感触はするが、中身が硬いと感じられた。

「すくなくとも、俺たちが触る表面は時が流れるわけだね。」

それにカイトはうなづく。

「ラッキーというか・・・ショックというか・・・俺達はこの世界の『時』とは違う存在らしいだから、この世界の時をとめても、無意味らしいな。」

「なんっだっかなぁ～」

『この世界と違う』『この世界の人間と違う』というところを、こんな形でみせられて、少しばかりショックをうけるが、ルイスはいまはどうでもいいと割り切る。

「とりあえず、探索だね。」

そういうと、カイトとアリスは同時にうなづく。

「この街は、城壁の上から見ると、この大通りが一本道に城へと向かい、ほかに中くらいの通りが四本がまっすぐしろへと、そして家々の間に路地がある程度の簡素な道だ。とりあえず大通りは三人で

やったあと、ばらけないか？」

「異議なし」

「わたしもない」

三人はうなづきあい、大通りへと歩き始める。

あるきだすと・・・

「「「・・・・」」」

人ごみ。

なんだこれは迷路か・・・とルイスはあきれながら・・・

「吹き飛ばすか？」

「いや、それ以前に吹き飛ばないでしょ、吹き飛ばしたいけど。」

ルイスとカイトがなんだか物騒なことを言い始めて、アリスはそれを必死に止めようとする。

「いや、まて、まってくれ、吹き飛ばすとかいわないでくれ。常識で考えてくれ。」

そういうと、ルイスが、グッと、親指をたてて言い放つ。

「今ならばれない！」

「そういう意味じゃなぁぁぁ！」

思わずアリスは叫んでしまった。ルイスはハハハ、と笑っている。

カイトは・・・

空をとんで、上から異変を探していた。

「おいおい！つれてけ！」

「『鳥化』すればいいだろう、お前は。」

カイトがそういうが、そういうことができないアリスは黙っちゃ居ない。

「じゃあ私は？私はどうなるの？」

「心が野郎なやつはそこで待ってればいいんじゃないかな。」

ルイスの言葉に涙がでそうだ、とアリスは思った。

「いや、私ぃ、心は野郎ですがぁ～体は女なんですよぉ～」

アリスはかわいこぶっていってみる。

「キモイ」

「ひどぃ！？」涙を流すアリスを笑いながら、ルイスが呪文を唱え、黄金に光る鳥と変化する。

「まぁのればいいんじゃない？」

「いいねぇ、この感じ、ファンタズィーって感じだ・・・」

簡単の声をあげるアリスに、ルイスは「そうかよ」とかいいながらルイスは飛び上がる。すぐに建物など追い越し、高速でカイトのもとへと到着する。

「なにかあったか？」

そう聞くと、カイトは二三度周りをみまわしたあと、眼を丸くして、すぐに指をさす。

「あそこに、白い髪のやつがいた。年齢は低い。」

そういわれたので、ルイスは指をさした場所まで高速で移動し、周りをみまわす。

路地のさきをみると、一瞬だけだが白い髪の毛がみえる。

「いたッ！」

そういってルイスはカイトへと指示をだす。カイトはコクリとうなづくと、少女が消えた方向へと飛び上がり。

「見つけた！」

そういって、急降下していく。

『キャァッ！？』

という声がした。たぶんカイトが少女の前に現れたからだろう。
だが、念には念をいれてルイスは速めに路地をぬける。
「せまっ！？上昇してからいかない！？ってイダダダ！ハゲる！女性なのにハゲる！」
あまりの狭い路地に、鳥化したルイスに乗っているアリス、ゴリゴリと壁に頭をすりつけてしまっている。
痛みのために声をあげるが、ルイスはというと
「心は野郎だろうが。」
なんとも適当に返してきやがった。
「体は女性だよ！？」
そんな会話をしながら、カイトの前へといくと、少女がカイトにより抱きかかえられているところだった。
「ヒャウッ！？」
でかい鳥と、それにのっている女性をみて、少女は驚きの声をあげるが、ルイスはお構いなしに『鳥化』を解く。
「ひゃあぁ！？」
少女の驚きの声・・・そりゃそうだ、鳥がなんだかしらないけど人

間になったんだから。

「やぁ、転生者？」

ルイスが気軽に声をかける。止まっていないってことは転生者だろうと思ってやった行動だろう。

「てんせーしゃ・・・？」

カイトがこちらをみてくる。その視線は『うわっ恥ずかしい・・・』といっている眼だ。

「うっさいわ！」というと、たぶんこの子が怯えるだろうから、ルイスはプルプルと震えながらも怒りを抑える。

「んで、俺はカイト、あの黒い髪はルイス、で唯一女性はアリスだ、で・・・君は？」

カイトが俺たちの自己紹介を簡易的にやり、少女にも名前を聞く。

「ルシル・・・」

そうおずおずといっている少女をみて・・・アリスは・・・

「ぐふふ・・・やばい・・・やばいかもしれない・・・萌えて来る・・・やはり異世界はパァラダイごふぅっ！？」

なんだかアリスのテンションあがっているのをみたルイスは、アリスを制する。

隠し続けていた、『ロリコン』というなの重病の症状『かわいい少女、幼女をみると愛でたくなる』というものがあらわれはじめていた。

「んで、きみは何故時がとまらないのかな?っていうかなんでここにいたんだ?」

カイトが全面的に無視して質問をすると、ルシルはビクッとする。

その様子に、ルイスは首を傾げるが、聞かないほうがいいかもしれない、と判断する。

だから、止めようと思ったが、その判断は少女が止める。

「う・・・この現象・・・とめてくれるんですよね?」

そういった少女は、たぶん勇気を振り絞っていたんだろう。手が震えて、涙目になっている。

三人は同時にうなづくと――――

少女は、話しはじめた。

第四十七章『時の大精霊』？（前書き）

ルイスが吹っ切れた次は。

第四十七章『時の大精霊』？

忌み子。

忌まれた子供。

必要なき子供。

それは突然始まって、突然石を投げられて。

突然剣を抜かれて

突然――――

なにが、なんだか・・・わからなかった。

感想はそれだけだった。

三年前の話。

王様が突然豹変し、民を傷つけはじめ、こういった『時の大精霊より言を授かった』

それは、私に対する悲劇の始まりで。

王は言った『夜のみ時のとまる時の神殿にて、国民を集めよ、そこ

で時の止まらぬものは、忌み人、忌み子である。』

そういって、王は兵に命令し、強制的に全国民にやらせた。

そこで・・・私は、とまらなかった。

止まっている現象にわけもわからず。キョロキョロとしていると、神殿の外にいた兵が手招きをする。

それに近づくと・・・剣を引き抜かれる。

兵たちは、悲しそうに私へ剣をふる。

――――斬られなかった。

兵たちは泣いた。

「なんで・・・斬れないんだよぉ・・・なんで・・・斬らなきゃいけないんだよぉ・・・」そういって泣いていた。

その兵は、次の瞬間殺され・・・その血が私に向かって飛び散って、真っ白だった服を赤く染め上げる。

「ひぃっ・・・」と小さく悲鳴をあげ、逃げ出す。

「逃げたぞっ！」

誰かがいった、それは・・・恐怖の声だった。その声に私は対象へと含まれて居ない。

『何か』への恐怖。

その声には、そう感じられた。

そして私は――――逃げ切れた。

そして私は――――毎日が悲しくなっていった。

石を投げられ、兵に殺されかける毎日。それでも願った。

『母と、父と共に、暮らせる日々を――――』だが、それはすぐに崩れ去る。

一年、そんな暮らしをして、疲弊しきったときにみたのは・・・

『両親が処刑される姿』だった。

『忌み子を産んだ責任』らしい、忌み子ってなんなの?忌み子・・・って・・・やめてよ、殺さないでよ。

恐怖で足が動かない。殺されたくない、でも・・・両親は、死なせたくない。

私は近づいていく。自らを差し出すために、なにも変わらないかもしれない。産んだ責任なんだから、でも、なにか変わると信じて。

近づいていくと、母と眼があった。そして・・・母は、ゆっくりと、笑って・・・なにかをいった。

その言葉は、私は・・・すぐに分かった。

『ありがとう』って・・・いってた。

刃が、首を貫くまで、彼女は微笑んでいた。それは、子供に『大丈夫』っていっているような笑み。

そして――――私は、両親が死ぬのを視たのだった。

そして、そこから二年生きてきた。

母の微笑みを忘れず・・・生きてきて。

時が、ふいに止まった。

「それで・・・今になるの・・・お願い、助けて。なんでもする・・・なんでもあげる。」

そういってルシルは泣きそうな顔でいった。

「でも、君は嫌われているんだよね？」

カイトはそういって髪を撫でる。自分の血だろうか・・・髪には黒々しいものがこびりついていた。

「それでも・・・救いたい？」

ルシルはうなづく。そのうなづきはなんだか、強くて・・・それでいて、はかなくて。

カイトはうなづいた。それをみたルシルがパァッと輝くような笑顔になる。

「ぐふふ・・・やっぱり少女の笑顔はいいｄ「落ち着け」ゴフゥッ!?・・・ハッ私はなにを!?」

・・・とりあえず後ろは無視しようとカイトは思った。

「うん!ありがと・・・!これ、あげる・・・いつからもってたかわかんないけど、最初からもってたんだ。」

そういってルシルは一つとりだした。

それをみて、カイトは驚愕する。

それは・・・『ブローチ』、彼が生前にもっていたものと同じものだった。『イリス』のブローチ

「それ・・・売ってたの?」

カイトがそういうと、ルシルはふるふると首を横に振る。

「わかんない・・・お母さんに聞いたとき、最初からもってた・・・

っていってた。」

たぶん、時の大精霊の言というのは、いまの時がとまる現象の邪魔になるものを消すためだろう。

そしてこの子は・・・たぶん・・・予想でしかないけど・・・イリスの・・・

その言葉を聞いたときカイトは・・・頬に温かいものがつたっていく。

「なんでおねえちゃんないてるの?」

泣きながら・・・泣いていいのかわからないような顔になる。

「お・・・おれ、男なんだけど・・・?」

そういうと、ルシルは「ふえぇぇ!?」と驚き始める

なんだろうこれ、怒っていいのかな?

心をカイトは切り替えて、「ごめんなさい!ごめんなさい!」と言い続けるルシルに言う。

「俺たちと、行くか?」

そう聞いたとき、ルシルは呆然としていた。

「ここにいて、なにかあるか?」

ルシルは首を横に振る。

「じゃ・・・いっしょにくるか？」

ルシルは困惑し・・・パァッと輝く笑顔になり。

「うん！」

大きな声で、言った。

「とりあえず、神殿に向かうか。なにかわかるかもしれない。」

ルイスの言葉に全員がうなづき、彼らは神殿へと向かったのだった。

「（守らなきゃ）」

第四十七章『時の大精霊』？（後書き）

評価してくれた方、ありがとうございます。

もっとがんばっていこうと思います。

第四十八章『時の大精霊』？

神殿――

『時の神殿』なんだか、時の勇者を思い出してしまったが、マ○ターソードはないのだろう。

三つの「いや、もういいからどんな感じか実況しろよ。」

カイト・・・ちょっと・・・お話しようか。

気を取り直して再度。

『時の神殿』、なんだか色あいは灰色っぽく、寂れた印象がある。

もともと、大精霊たちのいる場所には『火山』『水路』『山の頂上』『谷』など色々と違いがあったが、ここは待ちにはずれにあるだけだ。

まぁ、それもそうだろう・・・時っていう場所がわからない。

「灰色・・・太陽がでていなくても、はっきりいって暗いよな。」

そういうと、後ろにいる全員がうなづく。

「たしかに、大精霊の神殿は大体が神秘的だったけどな・・・ここはなんだか・・・」

「寂しい？」

カイトが考えていたであろう言葉をアリスがいうと、カイトはそれにコクリ、とうなづいた。

「私がいたときも、なんだか・・・寂しかったです。」

「そうかぁ・・・神殿としては異様だな。なんだか忘れ去られた場所・・・って感じがする。」

ルシルの言葉に同調し、俺は見解を言ってみる、それを聞いてカイトは「たしかに・・・」ともらす。

とりあえず入らないか？というアリスの言葉に賛成し、俺達は入ると、暗闇が在る。

カイトが『光の大精霊』の契約による力を使い、光を発生させる。

そしてルイスは、異変を感じ、とりあえず解析呪文を唱える。

「『解析開始』」

――封印

――外界隔離

「封印、そして外界隔離の魔法・・・」

おおざっぱに解析をかけたから、どこまでわかってはいない。

「外界隔離は、空間、もしくは時だな・・・時から切り離すことを外界隔離というし、空間でもそういえる。」

カイトがそういうと、アリスは魔眼を展開する。

「流れ・・・魔力がそとへ噴出しているって感じの流れがみえる。奥だよ。」

そういって、アリスは走り出す。その後を三人は追いかけていく。

そして到着したのは・・・

「『解析開始』――封印式を確認した。この封印は、内部で力をためぬよう、力を外界へと出す魔法の構成が組み立てられている・・・」

封印式を確認し、その効果を告げると、全員が顔をしかめる。

「・・・ここになにが封印されていると思う？」

カイトがそういうと、アリスとルシルは顔を見合わせる。

「なんていうか・・・ねぇ。」

全員の頭には、三つあった。

『ここは時の神殿』

『そして内部から封印を壊せるほどの能力』

そして・・・『こんな風に隠されていること』

「・・・なんだか・・・なぁ。」

そこによる・・・結果。

『時の大精霊』が封印されている。

全員一致した考えだった。

「少なくとも、時の大精霊の言ってやつは、でまかせってやつだな。
そのうえ豹変したっていったから、その王様も本物かどうかだ。」

正直、考えたくもない。

ルシルは下をみて、震えていて。

「私は・・・私の両親は・・・そうやって・・・ごろざれ・・・たんですか・・・」

涙がポタポタと流れ落ちる。みんな悪くなかった、ただ・・・悪いのは名も知らない、ひどいやつ。

「・・・倒すぞ。」

「あぁ、当然だろ。」

「幼女を泣かせるのは私がゆグフゥ?!・・・冗談だ。少なくとも女の子を泣かせるやつは嫌いだ。」

「そうやってお前好かれていったんだろ。」

「いや、もとより好かれていたが・・・さらに好かれてしまってな。」

そういうと、全員で笑う。なんだか温かい、とルシルは思ったそうだ。

「さて、とりあえずどうするか?」

封印式をみながら、ルイスが考える。

壊す・・・に関してもどう壊せばいい。

「あぁ、どうせなら魔力をだすところに、魔力を無理矢理いれて逆流してしまえ。」

「すっごい無理矢理な考えをする・・・まぁ効果的だとは思うが。」

カイトがいった言葉に、アリスはいうが、同意はする。ルイスはその言葉にうなづき。

「アリス、魔眼は出しっぱなしでたのむ。」

そういうと、アリスはキョトンとするが、うなづく。

ルイスはイメージする。

「『リンク』」

そういってイメージしたのは、神経の伝達。自らの神経とアリスの視覚の神経を導きだし、それをリンクさせるイメージ。

「うぐぅ!?」

見えるのは流れ。頭が変になりそうなほど見えていく。

――だが・・・見えた。

「いっくぞオルァァァ!魔力を思いっきり出す!」

ブワァッとルイスを中心にして風が巻き起こる。それは魔力をいっきにだしたときに起こる風であった。

「うおぉ！？すげぇ魔力！」

「さ・・・さすがに眼が痛いから魔眼は消すよ。」

「す・・・すごいですっ」

口々になにかをいっているが、とりあえずルイスは無視し・・・

ドォォンッという音がするまで魔力を出し続ける。

爆発音と共にルイスたちは後退、そして煙のあとそこにいたのは・・・

『時の大精霊』

『すまない・・・ありがとう。』

そういって礼儀正しく時の大精霊は礼をする。

『封印されていた・・・時はわかる。三年ほど・・・だな。』

「三年ほど・・・つまり――」

「王が豹変したときですね。」

ルシルがそういうと、時の大精霊はうなづく

『アレは、王ではない。かつての邪神の配下であったものだ。』

「邪神・・・なんだか勇者っぽい物語になったのは俺の気のせい？気のせいって誰か言えや！」

ルイスがそう叫ぶが、返ってきたのは――

「・・・・」

「・・・・」

「・・・キノセイデス」

沈黙と棒読み

「そんな棒読み嫌だぁぁぁ！」

『なんだかわからんが、この国を救ってくれるか？』

そういうと、ルイスは「当然だろ」という。

「んなもん、現在進行形で見せられて、力もあって、それで救わないってわけにはいかないだろ。力あるからこその義務ってやつだ。」

そういうと、時の大精霊は微笑み、うなづく。

『では、契約を――「まってくれ」――なんだ？』

「あとで人と合流する。そのときでお願いする。」

『なにをいっている、大精霊の契約は、周りの人も影響するものだぞ？』

「・・・そうなの？」

大精霊はうなづく。後ろをみると、ほかは知らなかったらしい。

「・・・便利だね。・・・でも大精霊契約は発端の人がいないとダメだから後でにするよ。」

『ふむ、わかった。』

大精霊が同意すると、ルイスたちは礼をして、神殿を出ようとする。

行く先は

城

第四十九章『時の大精霊』？（前書き）

邪神の魔物との対戦！

・・・どうしてこうなったんだろう。

・・・私がやりたくてやっただけでした、はい。

第四十九章『時の大精霊』？

――タンレイム・城――

「ぐわぁっはぁっはぁっ、我が名は『ルフィード』おぉ！邪神様の一の幹部！」

この不可解な現象を抑えるために、大精霊を助けた後、城へ向かったルイス、カイト、アリス、ルシル！

そこに待ち構えていたのは不気味な形相をした魔物『ルフィード』

彼は邪神の第一の幹部という。

彼の実力はいかに！？

そして我らがルイス一行の反応は――

「うわーありきたりぃー」

「ありえねー」

「ボツだなボツ」

「ボツってなんですか？」

酷な評価が返ってきた。

「うるさいよ！？」

魔物はなんだか泣いている。床に『の』を書きながら何かブツブツといっている。

「ど・・・どうせおれはありきたりだよ・・・」

「そうだな、じゃー消えてくれ。」

「お前ら魔物にひどいな！？」

そういわれると、ルイスは、フッと鼻を鳴らし、髪をかきあげ――

「俺は全てに対し酷い！」

そう告げた。

「ツッコンでいいのか悪いのかよくわからない答えを返すなァァァ！」

魔物を混乱させるのになんだか楽しいと感じてしまっているルイス

たちがいた。

「ふっ、余裕かましていられるのも今のうちだぁっ！邪神様の幹部である俺の能力をみせてやろう！いく「ヒュッ」グフォォォ！？」

どこからとりだしたのかわからないナイフをアリスが投げる。

「貴様ァ！？不意打ちとは「ルイス、ナイフだせるか？」「OK、『ナイフよでろ』」お前らァ！？」

「死ね！死ね！死ね！」

シュカカカカカカッ！というすごい勢いで投げ始めるルイス、アリス。

カイトは翼をだしてひたすらに翼をなげうっている。

「お前らが魔物みたいなもんじゃねぇか！？」

魔物にそういわれていて、ルイスはハッとする。

「そうか・・・」

そういって下をむいたルイスを見て、ルフィードは「お？普通にや

る気かな?」とでも期待した。

ルイスは、バッと人差し指をルフィードへと指し、言い放つ。

「なせばなるッ!」

「なにコイツ!?」

そしてひたすらナイフを投げていくと、ルフィード・・・もう魔物Aでいいかな「なんかひどいなお前!?」魔物Aにあたり、傷もつかずにカランという金属音をたてて床に落ちる。

それをみて魔物Aがハッとしてニヤリと笑う。

「そうだった、我らのような邪神の魔物には、ただの刃物はきかない!グワッハッハ!」

そういって得意げに笑うが、ルイスたちはげんなりとした顔をして

「忘れてたとは・・・」

「ボツだな、ボツ。」

「ボスとしてありえないな。」

「ねぇー!ボスとかボツとかなにー?」

「お前らもうやめて！」

「ふっふっふ！我らが体は『白銀の剣』、もしくはそれに順ずるものにしか斬れない！フハハ！我が能力は「じゃあルイス！」ちょ、言わせろ！」

「おう！カイト、わかったよ！イメージするんだッ！白銀の剣がその手にあるイメージを！『我が手に在れ！【白銀の剣】』ッ！」

そう叫ぶと空が割れて、空が白く輝く。時が止まっているのに何故割れるんだろう？とか疑問はどうでもいい。

――ユーリ――

そらが割れるて、白銀の光が城へと落ちる。

「なんだろう、あれ！？」

そうはいうが、分かっている、あんな綺麗な銀色、みたことないけど多分『白銀の剣』だ！

「綺麗・・・」

エリカがそういっているのが聞こえる。ユリアも呆然としているらしい、何も言わない。

「ルイス――――！」

中に何が起こっているとか、魔物をルイスがおちょくりまわしているとか分かっていないユーリはルイスの無事を願う。

――アトラント国・城――

玉座にあった白銀の剣が、突如として光を発生する。

その光は美しく、誰もがその瞳を奪われた。

そして光が発生し、空高く打ち上げられたかと思うと、薄く曇りであった空をいっきに晴れにし、青空が発生する。

それがとても神秘的で、国民は驚いた。

伝説についてはすでに国民がしっている『すげぇ！』やら『伝説の始まりだ！』などという声が上がり始めているらしい

「あぁ・・・勇者様・・・！」

アリカ姫が頬を赤く染め、空に向かって言う。
アトラント国の城は、兵がみんなうれしそうに叫んでいた。

――タンレイム・城――

ルイスの手の中に白銀に輝く剣が現れると、魔物はなんだか怯え始める。

「貴様ら・・・本当に俺に特殊能力をグバァッ!不覚・・・なり。」

白銀の剣をとりあえず一振りし、斬りつける。

そうするとスッパリと斬れて、魔物は死に、粉のようになって消えていく。

そうして、ここにいる人々の感情が、一緒になる。

それはうれしさ?・・・違う、悲しさ・・・違う。

それは

「「「「（なんだか哀れだ・・・・）」」」」

魔物へのなんだかわからないけど、同情心だった。

「戻れ【白銀の剣】」

ルイスがいうと、白銀の剣は消えていき――時が始まる。

それを確認すると、ルイスはドアへと歩いていく。

カイトも、アリスも、ルシルもそれに続いていく。

「褒章とは欲しくないんですか？」

ルシルがルイスにそういうと、ルイスが振り返ってルシルにいった。

「そんなものは（目立つから）必要ない。だから（目立ちたくないからこそ）さっさとかえって仲間と共に大精霊にあいにいくんだよ。これが俺たちの旅・・・だしね。」

ルイスがそういうと、ルシルはキラキラとした瞳でルイスを見始める。

「（これが私の・・・仲間ですッ！）」

ルシルはなんか誇らしげだったという。
カイトがそんなルシルをみて、諦めたような笑いをしていた。

――アトラント国・城――

「戻ってきた・・・？」

すぐに白銀の剣は、土台へと返ってくる

「何故・・・？」

皆が呆然としたとき、アリカはハッとする。

「勇者様は、むやみに傷つけたくないのです！あぁ、なんて優しい人・・・！」

そういうと、王もハッとし、家臣や兵たちも、気づいた。

「なんて・・・優しき勇者だ・・・！」

「すばらしい・・・」

そんな声が口々から言われていく。

兵たちは、その言葉を聞いて、『この勇者様に一生ついていく』を

考えていた。

なんだかわからないけれど、さらに勘違いが深まったらしい。

第四十九章『時の大精霊』？（後書き）

時が戻り、国民たちは動き出す。
そして、国の周りの村から何があったかをきいて、『勇者』がたすけてくれたのだということを理解した。
王も牢獄から発見され、一件落着となる。

王が国を探させるが、すでに分かったときには勇者はこの国を出発していた。『時の大精霊』に鞘と、契約を結んだ跡、なにも言わずにでていった。

国民はみた。その勇者たちの背中を。
それは驚くほど頼もしく、驚くほど強かった。
王は、それをきいて勇者に敬意を示し、国民に言い放つ。

『我らは勇者によって救われた、よってわが国は、彼らを勇者とみとめ、敬意を示す。』

そういったとき、国民の大喝采につつまれる。
ルシルの両親には、王が墓の前で謝り、たくさんの人々から花を添えられた。

王が謝る前に、一本の白い花がおいてあったらしい。
そこに、少女のような文字で『いってきます』と書かれていたという。

第五十章『少女の旅立ち』（前書き）

記念すべき１００回の半分。
半分ってつけるとなんだか普通っぽく感じるのは何故だろうか

第五十章『少女の旅立ち』

―ルシル―

『本当にありがとう』

そういってこちらへと礼をするのは、時の大精霊様。

お礼を言われているのは、私の仲間。

途中合流したユーリさん、エリカさん、ユリアさんと共に時の大精霊の前にいる。

「いや、別にいいんだけどね、お礼なんて（目立ちたくないし）。」

そういって頭をかいて笑っている人がルイスさん。

「俺にはルイスの心の声が聞こえるのだが・・・」

そういうのが、カイトさん、正直男ってきいたときはありえないと思ってしまった。

「というか、ルイス？白銀の光について説明してよね。」

そういってユーリさんがルイスさんに詰め寄ったりしている。

『お礼に、この鞘を。そして契約を。』

そういって私たちは大精霊様と契約した。

『そして一つ・・・この杖を』

そういってユーリさんへと杖を渡す。

「これは？」

ユーリさんが聞くと、大精霊様は、にっこりと笑って。

『邪神の手下に勝てる魔法がでるようになる武器です』といった。

『まだ何種類かありますから、見つけてくれると、旅の間便利になります』

そういうと、ユーリさんはうなづいて、「ありがとうございます」と言った。

旅へ出る前に、カイトさんの言葉により両親のお墓へと行くこととなった。

だから、今お墓の前へいる。

ルイスさんが「『花よ』」というと、一輪の花が手の中へと召喚され、それをわたされ、いまお墓の前にいる。

涙がでてきたけど、それを抑えながら私は一輪の花を供える。

そして一枚の紙に『いってきます』と書いて、お墓へと置く、飛ばないように石を置いて。

それを終えた後、涙が零れ落ちそうになったので、服のすそでふく・・・すると、なにかが頭にのった。

上を見上げると、カイトさんの腕があって。

カイトさんの手により、私の頭を撫でているんだ・・・と知ったとき、なんだか涙がとめどなくあふれてきて。

私は泣き始めた。その間、カイトさんは撫でてくれたし、ルイスさんも、アリスさんも、ユーリさんもエリカさんもユリアさんも、ずっと近くにいてくれた。

あぁ、温かいな・・・という感じ。

風が頬を撫で付けて、涙を乾かしていく。

それがなんだかお母さんが、私が泣いていたときに涙を拭ってくれたような感じがして・・・私は元気付けられた。

もう一度、すそで涙を拭って、私は両親の墓を見る。

涙が止まったのを感じ取ったのか、カイトさんは手を離し、それにちょっと寂しさを感じたけれど、声には出さずに、墓をみて。

「いってきます」

そういった。

『いってらっしゃい』

そう返ってきた気がして。

私はまた出てきた涙を抑えながら、後ろにいるみんなへと体をむけ。

「よろしくお願いします。」

と、そういった。

私たちは城の出口へと向かった。

第五十章『少女の旅立ち』（後書き）

短いですけど、まぁ仕方ないですかね？

次は土の大精霊へと向かいます。

第五十一章『土の大精霊』？（前書き）

無駄に頑張ってきた分、なんだか忙しくなってきました。
更新はある程度遅れるかもしれません。

といっても三日に一度はやるでしょうが・・・。

第五十一章『土の大精霊』？

土の国『マストッド』

たくさんの大きな岩が国の外にあり、屈強な要塞のようになっている国。

王権は今現在、意外にも王女が握っている。

王様が病により死んでしまったらしい。子供は幼く、王になるにはあまりにも年齢が低すぎるらしい。

この国の土は栄養が豊富で、野菜がとても美味しいらしい。

光の大精霊と同じように、土も人間に近いものである。

国の中央部にあるのは、大きな樹『イースウッド』とよばれるもので、その一番上をどこからみてもみることができないことから、『頂点へ昇ったものは英雄となる』などという言い伝えがあり。

これにもたくさんの物語がある。

屈強な戦士が、木の頂上へとのぼり、神から力を貰った・・・などという物語だ。

「というわけさ。」

ユーリがペラペラとパンフレットをめくりながらそういった。

「本当にどこから出したのだろう。」

やっぱり気にしたら負けなのである。

「本当に大きな岩がたくさんあるね。」

そういってユーリは、巨大な岩をペタペタと触る。

山のような岩が数多く存在し、ルイスは防御力なんか高そうだな・・・なんて思ってみる。

「んで？ここから何日ぐらいでつくんだ？」

そうルイスがいうと、ユーリが再度ペラペラとパンフレットをめくる。

「馬で二日、歩きで四日ほどだね。」

・・・電車で１５分みたいなノリだなぁ、とルイスは思った。

見渡す限りの岩石。

「正直にいうと、なんかゴッツイ感じの国に思えるんだが。」

「賛成・・・だね、なんだか筋肉だるまなオッサンが『俺の筋肉をみろぉぉぉ!』といいながら走ってきそうだよ。」

「そしてユーリはその筋肉にだかれて、恍惚な表情を浮かべる・・・と。」

「どんな変態だよ!ルイスの中で僕はどんな人なんだよ!」

「聞きたい?」

今現在、ルイスの頭の中には、筋肉に埋もれて「ウヘヘ~ウヘヘ~」と笑うユーリがいた。

ルイスがそういうと、ユーリは、「いや・・・いい・・・」と言う。

「まぁ、国のイメージなんてどうでもいいだろ?さっさといこう?」

カイトがそういったので、ルイスとユーリは馬を速めに走らせる。

数分ほど走らせると、なんだか頭の中で声がする。

それは、なんだか叫びたくなる言葉で・・・

抑えきれなくなってくる。

ルイスは「『槍よ』」といって、槍を出現する。

「敵か!?」

ユリアがルイスにむかっていうので、ルイスは首を横に振る。

それをみたユリアは首をかしげ、「ならば何故槍を?」ときいてくる。

ルイスは・・・叫んだ。

「俺が真の三国無双だ!」

「なにいってんのぉ!?」

ユーリの突っ込みがはいるが、ルイスはなにも考えずに「フハハハ！」という笑いをあげながら走る。

その跡にアリスが「呂布様ァァ！」と叫びながら全力で馬を走らせていく。

その後ろを、「なにやってんだこいつら・・・」といったさめた表情でユーリ、エリカ、ユリア、カイトがついていく。

ルシルは、そのルイスとアリスの後ろ姿を・・・

「かっこい～」

キラキラした瞳でみていた。

ユーリが「真似しちゃだめだよ」というと、頭に『?』を描いていたという。

なんだかわからないけれど、城へいくのに二日のところを一日でついてしまったという。

第五十一章『土の大精霊』？（後書き）

うん、時間がないんだ、ごめんな。

読んでくれる人はすまないけれど、短い。

第五十二話『土の大精霊』？（前書き）

王女のイメージは恋姫ｍ・・・グフゥッ！？

な・・・なんだお前ら、俺をどうするつもりだ！？

いったらダメなのか！？イメージはえんしｌｙゲフゥッ・・・・

第五十二話『土の大精霊』？

ルイスが奇妙なことをいって馬を走らせ、通常二日のところを一日でたどり着いた街、マストッド。

ルイスたちが到着すると、兵が城へと通してくれる。

だから今現在、ルイスたちはマストッドの城にいる。

――マストッド・城――

王座にいるのは、王女。

年齢として３０程度だろうか。顔立ちは整っている。

髪は茶髪、なんだかクルクルしているのは王として普通のことなんだろうか・・・と思ってしまう。

正直、クルクルっていう髪型が金持ちに多すぎるんだけど、あれってなんだろうな？

髪型から『私はお金持ちです』っていいたいのかね？作者の描写とかなのか？

・・・とすこしはずれてしまったが、様子をみてみよう。

王女の名は『ラメリア』というらしい。

今現在、王女は王座の上で静かにたたずみ、こちらをみている。

その貫禄は・・・王そのもの。

久しぶりに普通の王にあえた・・・とルイスはなんだか感動した。

「オーホッホッホ！あなたがルイスさぁん？」

『前言撤回』その言葉が脳裏に現れる。

「（たりない子だ）」

ルイスは思い

「（バカっぽい）」

ユーリは思い

「（オーホッホ・・・ってバカっぽいんじゃない？）」

エリカは思い

「（うむ・・・これが王として普通なのか？エンシェの王はいいほうなのか？）」

なんて勘違いをユリアがして

「（・・・はぁ）」

すでにお決まりのため息をカイトがして。

「（よかった！私の国以外にバカな王はいる！）」

よくわからない安堵をアリスがして

「（あのクルクルいーなー）」

的外れなことをルシルは考えていた。

そんなルイスたちの考えていることも知らずに、王女ラメリアは高笑いをしながら話を続ける。

「大精霊を救っているらしいですわねぇ、その噂を聞いたうえで、頼みたいことがあるんですわ！、最近、地震が頻繁に起きているので、見てきて欲しいのですわ。私の騎士団たちを送ってもいいのですけれどぉ、貴方たちが最近やっているらしいので貴方たちに華をもたせてあげますわぁ！」

はぁ・・・そうですか・・・といった言葉しかでてこないなぁ・・・とルイスは思っていると、声が聞こえる。

家臣の声らしい、それに耳を済ませてみる。

「なにいってるんだか・・・騎士団なら何回も派遣したのに誰も帰ってこないから怖がってたら偶然噂が耳にはいっただけのくせに・・・」

「・・・・」

ルイスは無言になるしかなかった。それをルイスたち全員が聞いていたのか、全員がさめたような顔をしている。

「なにかいいましたぁ？ファリアスさぁん？」

「な・・・なんでもありませんッ！」

「「「「「（地獄耳ッ！！）」」」」」

ルシル以外全員が思った。

イメージしてみよう

○↑王女
□↑ルイスたち
△↑家臣

○　□　△

→こういった配置だ。ルイスからかすかにしか聞こえない言葉を、この王女は聞いて見せた。

そして、ルシルは・・・

「（ユーリさんかエリカさん、ユリアさんかアリスさんに聞けばクルクルになれるかなー？）」

的外れなことを考えていた。

「えっとつまり――『地震が起こって迷惑だからとりあえず止めて来い』ってことですか？」

「むっ・・・要約されるのは気分がいいものではないですが、はっきりいってしまえばそういうことですわね。オーホッホ！華麗な私の騎士団がいけば、ちょちょいのちょーいで終わらせてしまいますがぁ「それはもういいから」・・・まぁいいですわ、今日はとりあえず体を休めといてくれてもいいですわ、部屋は用意させます。それではみなさん、解散！ですわ・・・オーホッホッホ！」

なんだか不快で嫌悪かんがバリバリでて、そこらへんの草木でも聞いて瞬間に枯れてしまうんじゃないか、ということを簡単に考えさせるほどの不協和音である高笑いを奏でながら、頭の足りない王女はさっていった。

「・・・どうぞ、こちらに。」

執事っぽい服装の人の『ドンマイ☆』な顔がなんだか腹が立ったルイスたちだが、全員同時にためいきをついたあと

用意された部屋へともどっていった。

第五十二話『土の大精霊』？（後書き）

ふぅ、さすがに明日はできません。

次回はあさってとなります。では・・・

あとＰＶ２０万超えました、ＧＷって本当にたくさん人がきますよね。

とりあえず絵を上手く書く方法ってしりません？

主人公たちを書いてみたいのですが。

第五十三話『土の大精霊』？（前書き）

この小説書いてはじめて日にちがあきましたね。

でもね

まだだ！まだ終わらんよ！

作者は変人です。

→

いまさら？とかいう言葉を考えた人はちょっと体育館裏にいこうか。

第五十三話『土の大精霊』？

――次の日

王座に呼ばれてきたルイスたちは、『ラメリア』王女の前へといる。

今日もクルクルとした髪型であり、どうやってセットしているんだろう？とか、この国に髪型をセットするものがあるのか？とかルイスが考えていると、王女が口を開く。

「オッホッホ！オ～ッホッホッホ！」

ブチィッ

「・・・燃やすか。」

「ちょ、まってよ！ルイス！」

なんだか頭のところから何かがきれる音がしたかと思うと、ルイス

は決心し、想像しようとする。そこをユーリが無理矢理にとめて、落ち着かせていく。

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」

無理矢理ルイスはユーリを引きはがし、魔術を展開させようとする。

「なにやってんですの？あなたたちぃ？」

そんな王女の言葉がイライラさせる。誰のせいで怒っていると思っているんだこいつ。汚物は消毒ダァッ！

火は浄化であり、火は温かみである。

「故に！消毒ダァァッ！」

「ひぃ！？なんですのぉ！？」

―しばらくお待ちください―

「・・・というわけで、土の大精霊の元へといけばいいんですよね？」

「そ・・・そうですわ・・・」

若干引きつった顔のラメリアと、なんだか満足した顔のルイスがいて、ユーリは心底あきれたような感じでいる。

「では、土の大精霊はどこへいるんですかね？」

カイトがそうきくと、ラメリアは良くぞ聞いてくれた！と言いたげな表情でさっきの引きつりようはなんだったんだといいたくなるような感じで眼がキラキラしていく。

「オ～ホッホ、ひぃっ！？」

ルイスは再度笑う王女になんだか殺意が沸いてきたので、ニヤリと笑うとなにか恐ろしいものをみたかのようにラメリアは顔を引きつらせていく。

「ルイス・・・」

「あんたが笑うとなんでそんなに怖いのか全くわからないわ。」

「うるさいぞ、エリカ、そしてユーリは俺をそんな眼でみないでくれないか。」

ユーリの眼は、『自重しようね？』と語っているようだったとルイスは語る。

王女が落ち着くと、再度口を開く。

「土の大精霊様は地下洞窟にいますわ。」

一々笑わなくなったラメリア、学習能力はあったんだ、とルイスが思ったことをここに記しておこう。

「地下洞窟？」

「地下に洞窟がある・・・ってことか？」

そういうと、ラメリアは「そうですわ」といって続ける。

「地図は・・・ファリアスさぁん？」

そういうと、家臣が「はい！」といって地図をもってこちらへと歩いてくる。

「どうぞ」といってファリアス・・・昨日ラメリアの地獄耳で陰口を聞かれた人はとてつもなく・・・

作り笑顔だった。ブツブツと「従わなかったら殺される・・・」と

いう言葉を吐きながら渡したあと戻っていった。

「「「「「（何があった・・・・！！）」」」」」

ルイスたちは心の中で叫ぶ。

「地図はまわったかしら？」

ルイスたちが全員うなづくのを見ると、ラメリアは満足そうにうなづく。

「じゃあいきなさい？」

その言葉にルイスたち全員がイラッとした。

まぁ心を落ち着かせて外にでようとすると、ルシルがいないことに気づく。

「ルシル？」

カイトが名前を呼びながら周りをみまわすとルシルがラメリアの前

にいることに気づく。

「おい？」

カイトがそういうと、ルシルは口をひらき――――

「クルクルってどうすればできるのー？」

そうきくと、ラメリアは満足そうに笑い。

「私のように高貴になれば勝手になりますわ！」

「「「「「「（なりたくねぇぇぇ！！！）」」」」」」

この場にいる全員（ルシル以外）が心の中で叫んだ。

第五十三話『土の大精霊』？（後書き）

ついでにユーリの杖の名称は『鳳凰の杖』と名づけております。

ありきたりすぎるかな？

第五十四章『土の大精霊』？（前書き）

気がつくと・・・一人だった。
私は一人、そう思い見回していると、思い出す。
邪神の魔物が屋敷にきて・・・父さんは・・・母さんは・・
思い出していると、涙がでてくる。
「う・・・ぐすっ・・・」
泣いていると、声が聞こえる。
「大丈夫？」
その声を聞いて、顔をあげると、そこにいたのは白銀の剣をもっている男の人。
「どうしたの？」
その声がなんだか優しくて、私は泣きながら今までの事を話してしまう。
話し終わって顔をあげると、彼はゆっくりと私を撫で始める。
「う・・・あぁぁっ。うあぁぁっ！」
私は泣き始め、数時間にわたって泣いてしまった。
泣き終えると、彼の手が私に差し出される。思わず見上げると、彼は微笑み、いった。
「いっしょにくるかい？」
そう聞かれて、私はもうないと思っていた涙がボロボロとでてくる。
私はその手をにぎって、大きくうなづいた。
「君の名前は？」
私は無理矢理微笑みながらいった。
「ア・・・ニータ！アニータ！」

＜白銀の勇者の伝説　第一章断片より＞

白銀の勇者の伝説の全貌を明かすことはないかもしれません。

第五十四章『土の大精霊』？

「お～ほっほ！お～ほっほ！」

ルシルがラメリアの真似をして、高笑いをする。

「・・・なんでやってんの？」

カイトが疲れたような顔をして聞くと、ルシルはニパッと明るい笑顔をしながら言った。

「高貴になるの！」

「（高笑いは正直高貴じゃないと思うなぁ・・・）」

カイトはそう思いながら、ため息をついた。

現在、土の大精霊に会うために地下に降りている。

結構長い階段を歩き続け、真っ暗な世界をただ歩き続けている。

途中こけそうになったり、服を擦ったりと、すでにボロボロだ。

魔法を使おうとしたが、魔力をかぎつけて魔物がくるかもしれない、とのこと。

正直、安全第一なので魔法は使わないことにする。

そうして、三十分程度で大きな空間にでる。

全員はふぅ・・・と息をつき、まともな空間

「・・・到着・・・かな？」

そういってルイスは大きな空洞を歩き始める。

数分たった後だろうか？カイトが大きく「下がれェッ！」と叫んだと思うと、カイトはルシルを抱え、全員が後ろへと下がる。

そうすると、ルイスたちがいたところから土によってできた兵、『土兵』が現れる。

「・・・へぇ。」

ルイスは感嘆の声をあげた。

その『土兵』の数は数え切れないほどに多く、百・・・？いや、千は居るだろうか。

「うわぁ・・・っ」

カイトがいやそうに声をあげる。これほどの数と戦いたくない、といったところか。

「魔法で一掃したいけど、ここ地下なんだよね・・・」

ユーリがそういうと、さらに空気はどんよりとする。

「なぁにいってんだ？」

そうルイスがいうと、全員がルイスをみる。

「だからこそ、俺の魔法じゃないか。」

そういって、ルイスは想像する。

ほとんど使ってないけど、一番強い魔法。

本当に使ってなかったなぁ・・・とルイスは苦笑しながらも告げる。

「終わる、世界」

突如としてブラックホールのようなものが発生し、いっきに吸い込まれていく。

「うわわわ！」

「いやぁぁぁぁっ！？」

「ぐっ！？」

「うわぁっ！？」

「まだ終われねぇんだろ！？ならがんばれよ！粘って粘って！ネバーギブアァップ！」

上からユーリ、エリカ、ユリア、カイト、アリスだ。

アリスが何かハイテンションのうえ、カイトに抱きかかえられているルシルは、なんだか楽しそうにしている。

・・・意外にルシルは強い子。

「始まる、世界」

そういうと、ブラックホールのようなものが崩壊し、そして平穏がもどる。

「「「「はぁ～」」」」

ルイスとルシル以外がため息をつくが、全滅したのは事実なので怒るに怒れないユーリとエリカ、ユリアにカイトにアリス。

なんだか疲れて全員が座り込むと、なんだか明るい声が聞こえる。

『すごいですの！最強ですの！』

即座にユリアが剣をとり、カイトが遅れて剣を掴み、声がしたほうを見る。

すると、そこからでてきたのはフリフリな洋服をきた女の子。

「・・・・」

の幽霊。

「・・・幽霊？」

少女はコクリとうなづく。

『おい・・・いきなりとびだ出すな。』

そういっててでてくるのは・・・

「土の大精霊・・・か。」

『む？そうだ。ルイスというものか？』

ルイスがうなづくと、土の大精霊は、そうか・・・という。

「暴走も封印もされてないね・・・」

ユーリがそういう、たしかに、封印されていない。

「じゃあ、なんで攻撃しかけてきたんだ？」

『ふむ、地震の原因はわかるか？』

土の大精霊がそういうと、全員が首をふる。

『理由はな、巨大な邪神のモンスター『サンドワーム』のせいなのだ。』

ありきたり・・・という気持ちは押さえ、ルイスたちはうなづいた。

「じゃあ、力だめしとかいうのか？」

カイトがそういうと、土の大精霊はうなづく。

「んで？合格？」

『あぁ、だからお願いする。サンドワームを倒してくれないか？』

そういわれて、首をふらないのががルイスの仲間である。

全員が、同時にうなづいた。

第五十四章『土の大精霊』？（後書き）

実をいうと、ユリアは天然キャラなんですが、それを出す機会が全くないんですよね・・・。

第五十五章『土の大精霊』？（前書き）

いい加減疲れてきましたね。一日一更新

だが、負けぬ。

サンドワームはなんでしょう、芋虫みたいなやつですね。

口がギザギザで一番上に頭がついて・・・

なんていうか、ヘビーモスだっけか？・・・なんか記憶が違うような気がする。

第五十五章『土の大精霊』？

ＶＳ．サンドワーム

地震の原因が『サンドワーム』という邪神の魔物からだと知った。

今回ばかりは『土の大精霊』は、暴走してたりはしていない。

故に・・・いま現在、『サンドワーム』がよく現れる場所に案内してもらい、まっている。

「・・・遅い。」

「暗闇だからやっぱり時間が感じる速度が違うんでしょ？たぶんまってから十分くらいじゃない？」

エレベーター事故などで聞いたことがある。人は暗闇の中で感じる時間は明るいところと比べるとエレベーターで感じるほうが早く感じる・・・と。

「まぁ、とりあえず・・・あ。」

ユーリが声をあげる。

なんだ？と思いルイスがユーリへと眼をむけると・・・ゆれが起こる。

ゴゴゴ・・・ッという音をだしながら、地下だから土がパラパラと上から落ちてくる。

『くるぞッ！』

土の大精霊が叫んだ瞬間に戦闘態勢へとなり、周りを見回す。

地震が大きくなっていく。・・・近づいている。

そう感じ、神経をより強くありつめさせると、上からバキィンッと音をたててでてくる。

ルイスたちが瞬時に上をむくと、何かが飛んでくる。

向かってくる方向はエリカ。

「キャァッ！？」

そう叫ぶと、その瞬間にカイトが滑り込み、天使の翼を展開。

攻撃を防ぐのをみた瞬間にルイスはサンドワームへと眼をむける。

そしてルイスは魔法を想像する。

「『炎の槍』」

そういって、槍の形をした炎を出し、投げつける。

だが、相手のほうがはやく土へともぐり、槍は居た場所を貫くだけで終わる。

「・・・速い。」

そういってエリカの無事を確認すると、無事なようだ。

「あ・・・ありがと。」

そうカイトにいって、カイトは「別にいい」といって目を細めた。

今の攻撃は砂・・・しかもたぶん結構な威力がある。エリカをとりあえず後ろへと向かわせる

「どうする?」

そうルイスに聞こうとすると、アリスから「来るぞッ!」という声を出される。

それに反応し、「(どこから来る!)」と考えてキョロキョロと見回す。

「下からだッ!」

そう叫ばれた瞬間、地震が強く起こる場所を感じ取る。――言われたとおり、カイトの下だ。

カイトは瞬時に天使の翼を展開し、飛び上がる。するとその瞬間、カイトのいた場所からサンドワームが飛び出してきて、居た場所を瞬時に瓦礫に返す。カイトは即座に羽をとばすが、聞かない、それをみたので次は剣をだしてみるが・・・それははじかれてしまう。着陸してカイトはアリスをみる。

「・・・ありがとな、アリス。」

「っていうか、お前見えているのか？」

カイトがお礼をいって、ルイスが疑問を聞くと、アリスはうなづく。

「『流れ』だからね・・・どこから来るかぐらいはわかるよ、対処法はわからないけどね。」

それを聞いたルイスはニヤリと笑う。

「『剣よ』・・・ユリア」

そういってユリアへと剣をなげる。

「む？なんだ？」

「作戦だ。ユーリ、エリカ、ルシルも協力を。」

そういうと、ユーリもエリカもルシルもうなづく。

剣をもってユリアは『？』と浮かべている。

「作戦は・・・」そういって全員に話すと、ちょっと不安そうに全員顔をあげた。

「・・・まぁできたら勝てるけどね。」

ユーリがそういう。確立は高いのだが、失敗したリスクは結構高い。

ユリアはすぐに構え、カイトは天使の翼を展開したままで待機。アリスは魔眼をだし、次に来る場所を指す。

指された瞬間、ユリアとカイトは飛び出し、ユリアは気の爆発力にて跳躍力をフルに強化する。

カイトは天使の翼でその後をいっきに追う。

ゴゴゴ・・・ッという音をだして、サンドワームが再度でてくる。

「きた！」

そう叫び、ルイスはユリアとカイトをみる。

サンドワームが砂をうってくる、それをカイトが天使の翼で防ぎ、思いっきり翼を羽ばたかせ、加速をつけ――

「どっせぇぇぃ！」

それをユリアを押し上げるために使う。

加速をつけたユリアは、そのまま・・・サンドワームの口へと剣を突き立てる。

グチュッという音をたてて根元まで剣をつきたてると、ユリアは手を放す。

『■■■■■―！』

叫びのような声をあげてサンドワームはのた打ち回る。

「『伸びろ』」

そうルイスがいうと、剣はサンドワームの体の奥深くへと伸び始める。

剣が奥へと到達したのだろう、と思った瞬間、ユーリとエリカ、ルシルは構成をいっきにたてる。

魔術を・・・つかう。

「「「『熱を剣に持たせよ』」」」

そういった瞬間に、剣が真っ赤にそまっていく。

サンドワームはさらに叫びをあげて・・・ドォンッという音をたてて破裂した。

「『対象を範囲に近づけるな』。」

そういって魔力の壁をルイスは生成し、破裂した肉片はかからないようにする。

「・・・ふぅ。」

全員が精神的につかれたのだろうか、地面にへたり込む。

「地下じゃ白銀の剣はだせないから・・・こうするしかなかったんだよね・・・」

「うぅ・・・なんかグロイ・・・」

こうして、戦闘は終了した。

土の大精霊と契約を終えて、

土の大精霊から『土のピアス』を得る。

『ありがとう』

そういわれて去ろうとすると・・・

「・・・なんでいるの？」

『おもしろそうだからですの！』

「・・・えー」

『レイと申しますの！憑いたデス！』

へぇ・・・レイ・・・霊とかいうネタはいらないのだが。

っていうか憑いた?憑いた・・・TU☆I☆TA?

「・・・あのぉ・・・もう逃れることは出来ないってオチですか?」

うなづかれた。いや、うなづかないでほしい。

『ではヨロシクお願いしますですの!』

・・・

「誰か助けてぇぇぇぇ!」

仲間が増えた。

第五十五章『土の大精霊』？（後書き）

最終的に１２人の予定ですが。

・・・多すぎるかもしれませんね。何人ぐらいがいいんでしょう？

教えて！小説好きな人！少なくとも８人以上になりますけどね。

途中、『情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！そして何よりもォ・・・速さが足りないッ！』ってアリスがいう場面をつくりたかったんですけど、忘れてましたね・・・

第五十六章『それにしてもこの姫、ノリノリである』

「おーほっほ・・・ごめんなさい。褒美をとらせますわぁ～」

ラメリアが笑った後、即座に謝った。ルイスは異様にニコニコしていたための所為である。

「褒美として・・・武器を与えましょう。この国にある最強の武器。『アネモイの斧』、そして『麒麟の剣』。アネモイとか麒麟とか・・・名前の由来はわかりませんが、邪神の手下でも斬れる・・・といいつたえがありますわぁ。」

・・・最初に渡せよ。と、この場にいる全員が思うが、ラメリアはそんなものに気づかない。

「・・・ありがとうございます。」

そういって受け取り、エリカに斧を、ユリアに剣を渡す。

「・・・なんで私に斧?」

そういって聞いてくるので、ビッと指を向けて言い放つ。

「鬼」

「た・・・たしかに・・・」

巨大な斧は、鬼ぐらいにしか使わないだろう。・・・いや、転生者

全員使えるけど。

「で・・・私にこの剣は何故だ?」

「カイトとユリアで迷ったけど、カイトは対処できるくらいのものはあるし。」

カイトをみると、「あぁ」と短くカイトはいった。

それをみたラメリアは、区切りが良くなると、喋りだす。

「では、旅に出るまではゆっくりしていっていいですわぁ?オー・・・なんでもないです。」

こうしてルイスたちはこの城へと滞在することとなる。

「そういえば、レイにはなにもないですの?」

「・・・幽霊に武器ってありなのか?」

―ルイス―

何故だろうか・・・。

最近寒気を感じてきた。
城にきてから少しずつひどくなっている。
そのことをユーリに話すと。
「風邪じゃない？今日は寝てなよ。」
といわれた。いや、そういう感じじゃないのだ。
なんていうか・・・『貴様ッ！みているな！』って感じだ。
うん、なんだかわからないけれど、視線がある。
それが何かはわからない。でもなんだか寒気がして怖い。
「・・・とりあえず今日は寝よう。」
ルイスは、やることもないので寝ることにした。

―アトラント・城―

「「・・・・・」」

姫の部屋の警護をまかされた兵隊が、沈黙して部屋の前にたっている。

けして寡黙なわけではない。

何故か・・・喋りたくない。

その理由は・・・

『ウフフフ・・・』

という姫の声だ。

『勇者様・・・ウフフフ・・・』

そして兵はチラリと隣にいる兵をみる。

「姫・・・大丈夫なのか？（ボソ」

「いや・・・俺に聞くなよ・・・！（ボソ」

そんな会話が部屋の外で行われているのも知らず、姫は奇声を上げ続ける。

―アリカ―

『姫は俺が護る！』

「そんな、勇者様！私のことはいいから敵を・・・！」

そんな会話をして、奇跡の力で敵を倒す勇者様。そのあと・・・

『姫様・・・』

「勇者様・・・」

そんな想像をして。

「キャーーーー！」

と奇声を上げる姫。

それにしてもこの姫、ノリノリである。

「あぁ・・・勇者様・・・！がんばって！私がついているわ！そして勇者様はこういうの！『君がいれば何にでも勝てる！』って・・・！」

・・・大丈夫だろうかこの国は。

妄想爆裂姫と化してきているこの国の姫は、奇声をあげてベットでもだえている。

「ウフフフ・・・」

・・・本当に大丈夫だろうか？

―ルイス―

ゾクゾクゥッ！

「ひぃぃ！なんだよぉ！！」

寒気がさらにひどくなるのを感じてルイスはベットから飛び起きる。

そしてバッバッと周りを見回すがなにもない。

「なんなんだよぉぉぉぉ！」

この勇者、いまさらだが災難過ぎる。

第五十六章『それにしてもこの姫、ノリノリである』（後書き）

書いてて恥ずかしくなってきました。

第五十七章『闇の大精霊』？（前書き）

友達がゼロの使い魔の話をしていたので、考えてみた。

～この小説のキャラがゼロの使い魔にいったら～　ＶＳ．ワルド編

ルイス→ワルドは普通に勝てません。
ユーリ→大精霊契約後なら楽勝かと思われます。むしろこの年齢のやつと戦うといったらワルドの気が疑われます。
エリカ→アネモイの斧で風に切り裂かれ、鬼にリンチされかけているワルドが容易に想像できます。
ユリア→設定上負けることはありえませんし、大精霊の能力もあります。
カイト→天使の翼でとびながら、魔法攻撃やフライの攻撃をを翼でうけながら羽と魔法を飛ばし、いじめそうです。
アリス→普通に勝てますが。
ルシル→勝利：ワルドが正気か疑われる
　　敗北；まさにクズ

第五十七章『闇の大精霊』？

「・・・」

ピシャァンッ、ゴロゴロ・・・・。

「・・・」

もう、なにも言うまい。

いま現在、目の前にあるのは暗い雲に覆われた城。

闇の大精霊・・・そうですか、はい。

「帰ろうか？」

「いやいやいや、たとえ見た目がなんだか魔王城みたいだなぁ・・・と思ったとしても帰っちゃだめだよ！」

「わかってるなら帰ろうぜ・・・私、もうこんなのにたえられない！」

「気持ち悪いよルイス。」

なんて会話をしながら、再度城をみる。

名前を『ダルフィーク』と呼ぶこの国は、夜がとてつもなく美しいという。

「・・・年がら年中夜じゃん、うつくしーはいうつくしー。」

「やってられない感じになったとしてもいくしかないんだよ。」

ピシャァンッ、ゴロゴロ・・・。

なんというか、『時のオカリナ』のガノンドルフにのっとられたハイラル城といえばわかっていただけるだろうか？

これぞまさに魔王城。

最終面に突入した気分だ。

「・・・さっさといくか。」

ちょっとため息をつきながらルイスたちは馬を蹴り、走らせていく。

近づいてみると・・・

「・・・もう、いいよね？ゴールしても・・・」

「まてまてまて！逃げようとするんじゃない！」

カイトがルイスの腕をつかみ、ルイスが逃げようとするのを防ぐ。

「いや・・・だってさ・・・」

「いや、逃げたくなるのもわかるけどさ・・・」

ルイスたちは・・・城を見上げる。

「だって・・・浮いてるんだもの。」

まさにガノンドルフ占領後の『ハイラル城』

「なにこれ?賢者様所望?賢者の力で橋でもかければいいの?ふざけてるの?」

アリスが混乱しているのか、そんなことをいっている。

「サリアたーん!でてきてゲフゥッ!」

とりあえずカイトが首に手刀をかまし、アリスを落ち着かせる（気絶）。

「とりあえず、どうするか・・・だね。」

『フッフッフ、お困りかね諸君！私を忘れてしまっては困るね！』

そういって会話に声をかけてきたのはレイ、ルイスに憑いた悪霊だ。

『ちょ、悪霊ってなんなのね！？扱いひどいの！』

・・・勝手にとりついておいて何を言うんだろう。

『・・・まぁいいの。とりあえず私は飛べるの！』

「・・・カイトもとべるけどな。」

「なにがあるかわからんから慎重にしていきたいのだが。」

『このチキンどもが！』

なんなのだろうか、この幽霊は、どんなキャラなのかまったくわからない。

『いいの！私がやってくるの！えーい！』

そういってレイは飛んでいく。城へと向かって。

グングンと近づいていき。

バチィンッ！

『あーれー！』

落ちていった。

・・・

・・・・・・・

「どうするか・・・」

「そうだね。」

「ちょ!?あれいいの!?なんか落ちてってるわよ!?」

エリカがなにかをいっているが、ルイスたちはわかっている。

「まず死にはしない。」

幽霊だし

「あんたたちたまにひどいわよね・・・」

エリカ・・・人生ってものは切り捨てることも知らなければいけないんだよ。

そんな会話をしていると、ユリアが一点をバッと見る。

「・・・そこにいるのは誰だッ！」

そうユリアが叫ぶと、全員が戦闘態勢にはいる。

ルシルはカイトの後ろに隠れて。

「う・・・くぅ・・・っ。」

そこにいたのは・・・

姫のような格好をした少女だった。

第五十七章『闇の大精霊』？（後書き）

テスト前になりますので、更新が遅くなるｏｒ終わるまでないということになると思います。

自分で書いておいて、今回なんだかダメだと思いました。

次に書いたとき、書き直すかもしれません。

いまさらな注意事項～

『この作品は、作者が最初から最後までバグってます』

第五十八章『闇の大精霊』？（前書き）

明日からマジで投稿できなくなります。

第五十八章『闇の大精霊』？

―ダルフィーク・城にて・？？？―

「なにがっあったの・・・だっ！」

城から大量の魔物が現れ、多い尽くしていく。

先ほど魔物によって受けた傷により、痛みが増している。

「くそっ。」

いいことなんて何もない。

姫になって、たくさんのことをしてきた。

「その結果がこれかよっ！」

ふざけるな。

生きてやる、生きてやるんだ！もうあんな終わりかたはしてたまるか。

首吊り自殺？いじめ？孤独？そんなもの、ただ屈したときに逃げただけだ。

「逃げないッ！私は・・・もう逃げない！」

そういって、傷によりえぐられた腕の傷を布で抑えながら王座へと

向かう。

扉を開く、するとそこには――

「お父・・・さま、おかあ・・・さま。」

喰われている、両親がいた。

呆然としていると、両親を食べている魔物がこちらを振り向き。

ニィッ、と笑う。

その風貌に、恐れをなし・・・私はもっている拳銃を引き抜く。

パァンッ！という乾いた音を部屋に響かせ、魔物は・・・無傷だった。

「な・・・にィッ！？」

拳銃、これは私『クリス』である私の能力により創られたもの。

そして・・・この世界、魔法の次に攻撃力のあるものだ。

呆然としていると、ドンッと腰になにかが当たる。

ビクッと驚き、腰をみると、妹がいた。

「お姉ちゃん・・・どうしたの？」

そういってくる妹を抱きかかえ、クリスは王座から全力で逃げ出す。

『ガァァッ！』

そう叫んで魔物がこちらへと向かってくる。

「ひぃぃっ！なんなの！？」

そう妹が叫ぶ、クリスは自分の傷が入った腕をさらに犠牲にし、魔物の爪により腕を削られながらもかわす。

「ぐぅっ！」

うめき声をあげるが、妹を心配させないため、その叫びは無理矢理歯に力をいれてやめる。

痛い――――

だけど、悲鳴をあげちゃぁ、ダメだ。どんなにジンジンと熱くても、痛くても――――

私を私とみてくれる・・・初めての家族だもの。

両親の末路を思い出しながら、クリスは廊下を全力疾走で走りぬき、城の外へとでる。

「（これで――――）」

そう思った矢先、クリスは絶望へとたたされる。

「城が・・・浮いてる！？」

街は遥か先。後ろには魔物の鳴き声が聞こえる。

「お姉ちゃん！？」

クリスは・・・決した。

「う・・・うぉおおおおおおおお！」

腹のそこから声をあげ、飛び出していく。落下していく、風を感じ、死を感じ。

ヒュゴォォッという加速していく風の音を聞きながら・・・地面へと落ちる。

「グァッ！」

つぶらされたカエルのような声をだし、激突する。

下はまだ城の敷地内のようだった。草原がそこにはあって。

「（・・・生きられた・・・けど――――）」

もう、内部がズタズタ・・・だぁ。

クリスは妹をみて、ニコリと笑う。

妹は、ブルブルと振るえ、クリスをさすっている。

「大丈夫？大丈夫なの？」

そういっている妹に、再度微笑む。すでにその笑顔はひきつっているだろう。

「がんばれよ・・・ティア・・・がふっ」

そういって、真っ黒に酸化したであろう血を吐き出す。

クリスの意識はそこで消えて・・・闇に落ちていった。

―ティア―

どうしよう、お姉ちゃんが危ない。

お姉ちゃんは、私を護ってくれた。身を挺して。

だったら私が守らなきゃ、どうする、どうすればいい？

「人を・・・さがさなきゃ。」

そういって私はお姉ちゃんの体を引きずりながら歩き出す。

私も、衝撃をうけたので激痛が走る。

歩き出し・・・声が聞こえだすと、私は姉さんを起き、ダッシュで近づく。

そして建物の影に隠れ、彼らをみていると金髪の女性がこちらをバッとみて、叫ぶ。

「そこにいるのは誰だッ！」

そう叫ばれて、私はビクッと驚き、ゆっくりと出てくる。体がどこもかしこもが痛い。

「う・・・くぅっ・・・」

うめきながらもでてきた私は・・・叫んだ。懇親の力をかけて。

「お姉ちゃんを助けてくださいッ！」

そういった瞬間、プツリと何かが途切れ、眼の前が真っ暗になっていった。

そして次に眼をさましたとき、お姉ちゃんが微笑みながら頭をなでていた感触がまず始めにあり。

私は歓喜でお姉ちゃんに飛びついてしまった。

第五十八章『闇の大精霊』？（後書き）

闇の大精霊は途中で止めて、次は転生者の物語となります。
ぶっちゃけていうと、たぶんルイスより真っ暗な物語になると思います。
題材は『満たされない天才』ってとこでしょうか。

四人目の転生者の能力は
創造の根源と作者が考えた。
『過程の創造者』
つまり、物体を作るにしても、過程が必要。
だから、根源と考えたものです。

第五十九章『満たされない』（前書き）

俺の周りに居る人たち―
『スレンダー美人なら男女問わない』Ｉ
『女子小学生に踏まれたい』Ｈ
『ツンデレは至宝であり世界の心理である』Ｈ
『ロリコンっていうのは・・・普通なんだよ』Ａ
『いいかぁ!?てめぇらっ!俺はそこにアニメがある限り、追い続けるッ!』Ｓ
『たとえさげすまれようとも、俺はそれを見続ける!ＡＮＩＭＥをおぉお!』Ｔ

・・・ろくなやつがいない。

物語自体、今すぐに考えて進ませた物語です。
一日に二回書いて、続きは一週間後♪とかなるかもしれません。
ていうか、なります。次書いたらさっさと勉強ですよ。

第五十九章『満たされない』

『そう、私は逃げた』

鈍い音が部屋に小さく響き渡る。

ギィ・・・

ギィ・・・・・

『どうして、こうなったんだろう』

始まりは、私の一回の努力から。

『よかったね。』

『あぁ！俺たちの娘は最高だ！』

そんな会話を目の前で繰り広げられ、うれしいと思わない子供はいない。

そこから私は、努力した。

そして、天才と呼ばれるようなった。

高校生活。

私は毎回学年トップを取り始める。

そこからはじまったのは、嫉妬。

羨望とかあればよかった。

だけど、そこにあったのは、嫉妬だけだった。

最初に取ったときには、周りの人間は『すごい』などともてはやし、それが何回も続くと彼らの眼は羨望から嫉妬へと変わっていく。

それが変わりはじめるきっかけは、大人だろう。

子供への『上へ行かせたい』という思い。それを言葉にしてぶつけられたのだろう。

『○○ちゃんはこうなのに、なんで貴方はこうなの?』その無責任な言葉は、どれだけ精神的な負担を加えるだろう。

それは、『親の愛』なのだろう。

その『親の愛』は叱咤激励、と親は思っているだろうが――

それはただたんに、相手への憎しみにしか変わらない。

『なんであいつばかり』

『なんであいつだけ』

そんな視線が毎日背中に突きつけられ。

私は、孤独になった。

『満たされている』などと思われているのだろうか。

満たされることなどないのさ。『人間が満たされることはない。どこかからっぽ』

そうわかっていき、私は帰り道、ポロリと涙を流した。

『どうして・・・こうなったんだろう?』

机にあるのは、数々の誹謗中傷の落書き。

教科書は毎日もっていっているため、被害はない。

私は、そこの席へと座り、即座に心を閉ざした。

それは、なんだか心がなにかに溶けていった感じだった。

自分の机をみられ、先生がなにか騒ぐが、私は・・・もう何も知らない。

また、ポロリと涙を流す。

『努力してもしなくても、そこにあるのは最悪な結果だ』

上をねたみ、下をさげすむこの世界に嫌気が指していく。

もちろん、世界には色々あると思う。

だけれども・・・それが、世界のほぼ占めている。

アニメなどでみる『君は一人じゃない』といった言葉を聞いた。

「ごめんなさい、私は・・・一人です。」そうボソッといった。

両親は、私一位をとらないと満足しないようになっていった。

そして私は順位を落とすと、けなしていく。

「・・・どうしてこうなったんだろう」

私は、薄暗い部屋で泣いた。

そしてすぐに、私は限界がきて

部屋の中央で、低く鈍い音を立てながら、意識を途切れさせた。

体は宙に浮いている

そこにあるのは、女子高生の体のみであり
そこに魂はない
首をつったせいなのか、違うのかはわからない
その女子高生は・・・泣いていた。

理不尽という単語が、頭を駆け巡り。
意識がブツリと途切れた瞬間に。
真っ白な世界が、彼女を受け入れた。

第五十九章『満たされない』（後書き）

ふむ・・・実際はリアルな描写をしまくっていこうかと思ったのですがね

さすがに自重しろということで、この程度になってしまった。

ダメだこりゃ。

あまりにも暗くない。

第六十章『四人目の世界少女』

ぐすっ・・・えぐっ・・・

真っ白な世界に変わり、驚きまわりを見回した。

そうすると、視界に少女が移った。

その少女は水色をした髪型で、腰まであるんじゃないか、というくらいの長髪をした女の子だった。

「どうして、泣いているの？」

そう私が声をかけると、ビクリと少女は体を震わせ、ゆっくりとこちらをみる。

そして私をみて、眼を丸くした後、急に赤くなって私に言い放つ。

「きっきしぇき・・・あぅ、かんじゃった。奇跡が欲しいですか？」

そんな羞恥心で顔がさらに真っ赤になっていく少女をみて、私は一瞬目をまるくして――なんだか、笑いが込み上げてくる。

「アハハッ！アッハッハ！」

そんな私をみて少女は驚いた顔をすると、ふくれっつらになって手足をばたつかせながら、「笑うなぁぁっ！」と叫ぶ。

「私はっ！世界少女！奇跡がほしいですか！？」

怒ったように顔を真っ赤にさせて言う少女に、もう笑うしかないように笑いが込み上げていく。

それを無理矢理抑えながらもプルプルと震えながら私は質問する。

「プ・・・ククク・・・奇跡？世界少女って・・・なんだ？クハ・・・ククプップッ」

あからさまに笑いが込み上げている私をみて、少女はさらにふくれっつらになって私の頭をバンバンと叩き始める。

「うぁー！うぁー！笑うなぁ！」

そんな少女をみて、さらに笑いが込み上げてくるが、とりあえず無理矢理飲み込んで「笑わない、笑わないから」といって落ち着かせる。

「本当に！笑わない！んだよね！？」

笑わないから笑い殺すような行動はやめてほしいが、それを私は言わずに、問いかける。

「奇跡ってなんだ?というかさ・・・なんで奇跡なんだ?」

そういうと、少女は『あぁっ!』とでもいいたげな表情をする。

「て・・・転生させるんですよ!それで、そこで生きられたら褒美に奇跡をあげます。」

「ん?すっごいファンタジーだね。」

「そうですよね?魔法と剣の世界がありますけど、色々な世界をみてきて私たちがいた場所がファンタジーだといまさらしり・・・ってなにをいわせるんですかっ!?」

・・・いや、自分からいったんだろうが、と私はいいたかったが、それもとりあえず言わないで置く。

「さて、まぁ世界少女・・・だったね?」

少女はコクリとうなづき、こちらを見る。背が小さいからか、こちらを見上げて上目遣いになっている。

その眼がちょっと潤んでいるのをみて、かわいいなぁ、とか感じてしまったが私は百合ではないぞ?

っと、誰にいっているのか全く分からないな、とりあえず私はうなづいた。

「転生、だったかな?やるよ?」

そういうと、少女はキラキラと私をみて「本当ですかぁっ!」とい

ったので、私はその言葉にうなづいておく。

「じゃあ、お願いしますね！」

そういって少女はニッコリと笑うと、体になにか浮遊感を感じた。

何事か、と体をみると透けていくからだをみる。

「最後に聞きます。あなたの奇跡はなんですか？」

考える時間すらないのか、と思いながらもすこし考え、私はいった。

「うらむことがない世界・・・はむりだろうから、どんな天才でも、どんな努力家でも、隣にだれかが居る世界、それを望む・・・かな？」

そういうと、世界少女は微笑み。

こちらに手を降った。

次のシーンは、お約束どおりのシーンであり。

私を持ち上げているのが王様と王女さまだと知ったとき、私は心の中で『エェェェッ！？』と叫んだことをお伝えしよう。

第六十一章『闇の大精霊』？（前書き）

休んでいたせいか・・・

感覚がつかめないっ！うわーどうしましょーはわわわー

ていうかまだテスト終わってないですよ！あわわわー

・・・キモいとかいったら怒りますよ

第六十一章『闇の大精霊』？

―クリス―

意識が覚醒する。

目の前にいたのは、閻魔様でも神様でも、世界少女となのる少女でもない。

最愛の妹だった。

ティアは、私が眼をあけた瞬間、顔をくしゃ・・・とゆがませ、涙がぼろぼろと流れおちていき。

まるでパチンコのように、我慢した力を解き放って私に突っ込んできた。

「ティア、私は――――ゲフゥッ!?ゴファッ!ウブフゥッ!」

・・・そんなティアの頭が鳩尾にクリティカルヒットしたことは別にいい。

うらみなどないよ?本当ダヨ?

私に抱きついてボロボロと涙を流す妹を両手でギュッと抱いてあげると、ティアはバンバンと私を叩き始める

「お姉ちゃんのバカ！」

そういって私をポカポカと弱い力で殴ってくる妹が、なんだかいとおしくて・・・悲しくて。

私も涙を流してしまう。

そのまま私はティアの怒りを、悲しみを・・・うれしさを、ずっと受けていた。

―十分後―

すこし落ち着いただろうか、周りをみまわすと、人が居ることに気づく。

「すまない・・・助けてもらっていて気づいてなかった。」

たぶん、この人たちが私を治したのだろう。結構高度な魔法や、魔法薬をつかってしまったのだろう（ルイスの一言。

そういって謝ると、黒髪の少年が手を顔の前でヒラヒラさせて苦笑しながら「別にいいですよ。」といった。

そして、すぐに真剣な顔になると、少年は自分の胸に手をあてて、自己紹介を始める。

「俺の名前はルイスだ。普通にルイスっていってくれ。で、聞きたいことがあるが・・・その前に。」

そういってルイスといった少年は後ろを振り返ると、それに答えるように後ろにいた人たちがこちらへ近づいてくる。

「僕はユーリ、よろしくね。」

「あぁ・・・よろしく。」

ユーリといった少女は、落ち着いている少女、歳不相応な人だった。

「俺はカイトだ、男だ。男だぞ?オナベとかそういった類じゃないし、オカマでもない、男だ。」

「よろしく」

・・・そこまで強調しなくても・・・

「私はユリア、エンシェの騎士・・・元騎士なのか現在進行で騎士なのか聞いてなかった、どうしよう。」

そういってオロオロしはじめるクールそうな騎士をみて、苦笑して「よろしく」といった。

「エリカよ、よろしくね。」

「あぁ、よろしくな。」

ちょっと素直になれない少女だな、とクリスは思った。

「アリス。よろしく。」

・・・綺麗な人だな。カッコイイひと、女性ウケがよさそうな人だな。

なんだろう、元の世界で俳優とか、男性役とかできるんじゃないかな？

「よろしく。」

次にいたのは子供だった。

「ルシルだよぉ！」

子供・・・子供だ。将来たぶん美人さんになるだろう。

「よろしくな。」

さて、もう一人いた、と思いそちらをみると

『レイですの！』

・・・

・・・・・透けているんですが、ワタクシメはドウカエシタモノカ

固まっている私をみてルイスは苦笑して、指をさしていった。

「俺に取り付いた悪霊」

カキンッとクリスは固まる。

「うしょ（嘘）・・・ゆーれ・・・い？」

レイが「悪霊じゃないですの！」と叫んでいるが、その言葉はクリスの耳にはとどかず、クリスは呆然としている。

ガタガタと震えだすクリスをみて、全員が「この子幽霊嫌いなんだ・・・」と思った。

―再度十分後―

「・・・コホンッ」

落ち着いたところで、再度真剣な顔になるルイス。

「とりあえず、一言・・・二人に聞きたいことがある。」

そういわれて、私とティアはうなづく。

ルイスはこちらを見据え、口を開く。

「世界少女とは、あいましたか？」

その言葉に私は呆然とした。

ティアをみると、「はぁ？」といった疑問の顔であった。

ルイスはこちらをみると。

「君も・・・みたいだね。」

そういった。

―ルイス―

なんとまぁ、だ。

転生者祭りだヒャッホーイ！とか叫んでみたいが、正直今言ったらつめたい目でみられるだろうからやめておこう。

「とりあえず、まぁ俺も転生者なんだけどね、なぁ？」

そういって後ろのやつらをみると、カイトとアリスがハハッと苦笑する。

「もうバーゲンセールだな。」

「む？ばぁげんせぇる・・・とはなんだ？」

いつもどおりのユリアの一言に「大安売りのことだよ」と返すと、ユリアは「なるほど」といった顔になり、後ろへ退く。

「・・・うははは・・・」

壊れたように笑う・・・クリスとかいったかな？ティアという少女の姉らしい。

なんだろうこの空気。どうにかして止めなくては。

考えろ俺、考えるんだルイスッ！

「転生者祭りだヒャッホーイ！」

ユーリに冷たい眼をぶつけられた。悲しい。

そんな俺たちをみたクリスという少女は目を見開き。

「クスッ」と笑った。

俺たちはその顔に微笑んで。

「まぁ、それはそれとして・・・どうにかしないとな。」

そういっていまだ黒々しく宙に浮き、その巨大な存在を誇示し続ける城をみた。

「なぁ、最初はやっぱり森の賢者なのかな？もしかしたらマスター○ードとることから？」

アリスの声は響き渡り。

次の瞬間アリスの頭は８人の手によってツッコミをいれられまくったということを記しておこう。

第六十一章『闇の大精霊』？（後書き）

・・・ネタわかるんでしょうか、心配です。

ゼルダの伝説、時のオカリナを知っている人がいればいいんですけど

第六十二章『闇の大精霊』？（前書き）

今の友人関係をすべて破壊する破滅の呪文を考えてみた。
小学生をみながら、こういえばいい。

『やべぇ・・・なんだかムラムラしてきた。』

・・・って俺は何を考えているんだ。

第六十二章『闇の大精霊』？

―ルイス―

「さぁてやってまいりました。お城・・・の下。」

ピシャァンッ！ピシャァァンッ！

「みればみるほどガノンドルフ占領後のハイラル城。」

そうアリスが漏らすと、クリスは苦笑いをする。

「んで、今回の課題は、・・・この結界をどう突破するか・・・だな。」

レイがはじかれた結界を思い出し、レイをみる。

『やぁん！熱い視線をむけないでほしいのぉ！』

この幽霊を成仏させたい。

「・・・んで、ドンぐらいの強度だったんだ？この結界。」

そういうと、レイは『あぁ・・・どのくらいとはどういいあらわせばいいのね。』という。

「・・・まぁ好きにすればいいよ、物にあらわしてもいい。」

『そうなのね！スイカの皮みたいだったのね！』

意味がわからないよ、どうしよう。・・・比べるものが必要だ。

「『結界よ、有れ』・・・っと、これでどうだ？」

ルイスが想像を創造する魔法にて、結界を作り出す。それをレイがちょんと触ってみる。

パチィッという音がして、『キャゥッ！』という声をレイをあげた後、レイは眼をつぶって考えている。

そうしていると、クリスが手をあげて聞いてきた。

「そんな魔法みたことないけど、なにそれ？」

「俺の能力だよ、君もなんかあるっけ？」

そういうと、あぁ・・・といった顔をして、クリスは銃を取り出す。

連発式の銃。前の人生では、アメリカいけばありそうなものだが、この世界で見たことはなかったはず。

「私の能力は『過程を創造』っていう能力、銃も過程をつくって頼み込んでつくってみたの。」

そういわれて、ルイスは便利な能力だなぁ・・・と思う。

「へぇ・・・俺は『想像を魔法』にする能力だよ・・・カイト、アリス。」

そういわれたカイトとアリスがコクリとうなづいて、こちらへと近づいてくる。

「俺は天使の翼『不変の盾』・・・簡単にいえば壊れることのない変化のない絶対の盾」

「私は流の魔眼だ、すべての流れ、時だろうが空間だろうが魔力だろうが、そんなものを読み取ることができる。簡単にいえば、訓練すれば魔法を盗めるな、これなんて『複写眼』」

そういって自己紹介をすると、レイが思いついたように顔をあげて、人差し指をビッと空へと向ける。

『ルイスの簡易的結界がみかんで、あれがスイカなの！』

・・・とりあえず強そうなことだけはわかった。

「・・・とりあえず、結界を破壊するか。」

「それしかないと思う。」

俺の言葉にユーリが返してくれる。・・・なんのために強度を測っていたのか自分でもわからない。突っ込みはよしてくれ。

「とりあえず・・・よっと。」

アリスが魔眼を発動、流をみて、ピッと一部を指で指す。

「あそこ、結構薄い。」

そういわれて、ルイスはとりあえず魔術を使い始める。

「『風よ、対象を破壊せよ。』」

そういうと、風が竜巻のように変化し、一気に攻撃をくらわせる。

巨大な壁に風をあてると、反射していく。風がこっちにも被害を及ぼし、全員が構える。

「・・・まだたりないか『火炎球』」

そういうと、車よりも大きいファイヤーボールを出現させ、いっきに向かわせる。

爆発が起こり、エリカの「キャァァァッ！」という悲鳴が巻き起こり、そしておさまると、結界が破壊されていることに気づく。

「さぁ、早く――――ッチィ」

「どうしたのルイス・・・って・・・再生・・・してる。」

結界が異常な速度で再生しはじめている。破壊にすごい威力の魔法をつかったというのに、なんて速さだ。

「・・・カイト、翼で飛んでいけるか?俺の『アイキャンフラーイ』でもいけないぞ。」

「・・・俺も無理。」

「さて、どうする。」

そういってルイス、カイト、ユリアが考えていると、クリスが手をピッと上げてこっちをみてくる。

・・・この娘注目をあつめると絶対にこうするのだろうか

「ブースターを作りましょう、私は『過程を創造』する人ですよ?」

「ぶぅすたぁ?」

ユリアの声に、クリスが説明をする。

「簡単にいえばサラに加速させるものですかね?」

「そうか。」

納得したようにコクコクとユリアがうなづく。

「さて、創りますか！クリエイトォ！」

そういって、クリスはガリガリと壁に設計図をつくっていき。

それをルイスが創造して行きつくっていく。そして簡単に出来上がる。

「さて、いきますか」

そういってカイトが翼を展開し全員を無理矢理のせる。

「さ・・・って！」

俺が一気に魔法を展開させ、結界を破壊、そしてクリスがブースターをＯＮにして・・・

ＧＯ

『ギャアアアアアアアア！』

風圧ってものを考えていなかった　ｂｙクリス

結界は越えたが
そこにあったのは魔物の群れだったという。

「ガノンドルフ！卑怯だぞ！」

アリスが何か叫んでいるが、全員が無視した。

第六十三章『闇の大精霊』？（前書き）

長いよ！長すぎるよ！

こんなに書いたの初めてだよ！

第六十三章『闇の大精霊』？

―城・城壁外にて―

『ヴォォオオオオ！』

地に響くような低い鳴き声をあげて魔物たちが襲い掛かる。

標的は・・・ルイスたち。

ルイスは飛びのくと、居た地が、魔物の爪により引き裂かれ、荒々しいまでの痕がのこる。

「『焼き尽くすは・・・魔物』」

魔術を想像し、創造する。その攻撃により、魔物たちは吹き飛んでいく。

「『光よ、刃となれ』」

ユーリの魔法が『鳳凰の杖』にて、弾き飛ばされ、魔物を貫き始める。

ガギギギッという音を出しまくり、無限にも思えるほどの光の刃が破壊を生み出していく。

「はぁぁっ！」

エリカは鬼召喚にて、『アネモイの斧』を鬼にもたせ、それを思い

切り・・・振る。

その瞬間、爆発的な風により魔物を吹き飛ばし、吹き飛ばされた魔物は切り裂かれていく。

「・・・っぁ！？」

鬼の上にのっているためか、油断したエリカは背後をとられる。

そこをカイトが瞬時に天使の翼を展開し、防御へとはいり、天使の翼を羽ばたかせ、敵を吹き飛ばす。

「『荒波よ巻き起これ』」

カイトそういった瞬間に、竜巻のような水が魔物たちにぶつかり、吹き飛ばされていく。

そしてその水へと、ユリアは剣を引き抜き『麒麟の剣』を打ち立てる。

バチィィッ、という激しい音がなり、雷が水へと流れていく。

『ガァァッッ』という魔物の叫び。カイトはルシルを抱きながら飛翔する。

そこにルシルが魔術を構成。

「うぁー・・・初めて使うけど・・・『暴風よ巻きおきゅ・・・起これ』」

噛んだな

あぁ噛んだ。という思いが皆を駆け巡るが全員が触れないようにした。

ルシルは「あうぅぅぅー！」とかいいながら真っ赤になっている。

だが魔物は吹き飛んでいる。

『いっけぇーですのー！みんなーがんばれーですのー！』

あの幽霊は成仏させられたいらしい、なんかやれよ

魔物を削っていく、ルイスは「これぐらいで大丈夫かな・・・」とポツリともらすと、想像をはじめ

再度、あの魔術を創造した。

「『終わる、世界』」

後ろをチラリとみると、全員がルイスを見てうなづいた。
結構チームワークがなってきたと思う。
言葉を発した瞬間に、小規模のブラックホールの発生が起こる。
そして魔物たちはその黒い塊に飲み込まれていく。
何故、最初にやらなかったのか?、それは忘れていたわけではない。
この技は無差別だからこそ、被害を抑えなければならない。だからこそ、数が少ないほうがいいのだ。
間違えて仲間が吸い込まれなんてしてみろ、ヤバイ。
魔物が吸い込まれていき、さすがに耐え切れなくなったかもなぁ・・・といった具合にて、終了の魔法を唱える。
「『始まる、世界』」
そういった瞬間にブラックホールが崩壊し、消えていく。
「・・・はぁー疲れた。」
ルイスがそういうと、全員が全員ため息をつく。
クリスたちが「力になれなくてごめん」といってくるが、ルイスが「別にいいさ」と返す。
ルイスたちはすぐに城へと走り出すと、城門がみえてくる。

「・・・しまってるな。」

クリスがそういうと、ルイスは何も考えずに、グーで城門を殴りつける。

ドォォンッという音をだして城門が粉砕する。

「・・・え？」

いまさらな身体能力最強設定、ユリアの気などに負けているせいか全く出ていなかった。

「ふぅ・・・さっさといこう！」

ルイスたちは何も反応せずさっさといき、クリスたちは呆然としていた。

城を駆け巡ると、クリスたちの案内により王座へと到着する。

そこにいたのは、喰われかけの両親。

「「お父様！お母様！」」

そういってクリスたちは駆け寄る・・・息は奇跡的にある。

なんであるのか・・・と思ってみたら、闇が覆い、生きる程度には生命を維持させている。

ルイスはいつもどおりにいっておく。

「『全治しろ』」

そういってすぐにクリスたちの両親を治療すると、アリスがカイトをバッとみる。

「上ぇぇ！」

アリスがそう叫ぶと、カイトはすぐに翼を展開させて、両親とクリスを覆う。

上からシャンデリアが降ってきてカイトへとぶつかり、その上へとのる。

「ふっ！」

小さく息をふき、それをユリアが真っ二つに切りさき、カイトの上からどけておく。

すぐにルイスたちは戦闘態勢へとうつり、クリスたちは両親を後ろへと手を引いた。

玉座をみると、そこに黒い物体が着地する。

『Ａａａａａａ！』

叫び声に似た・・・鳴き声・・・だろうか？

『嫌Ｄａ・・・なん＃、こ＆＊‘ァァァ！』

狂ったように体をふって、何かから逃げようとするように動き。

『■■■■――――！』

そして狂い始めた。

「あれは・・・闇の大精霊を飲み込んだ邪神の手下のまつろ・・・です。」

後ろにいるクリスの両親がいう。

「飲みこんだ？」

「はい・・・私たちはみていました。大精霊の巨大な力に浸食されていく魔物を・・・」

そういってクリスの両親は黙ってしまう。

「・・・つまり、うかつには殺せない・・・わけで。」

ルイスは、「（なんだこれ・・・）」という唖然とした思いを心の

中で無理矢理鎮める

そしてルイスはボソッといった。

「『我が手に在れ【白銀の剣】』」

そういうと、ルイスの手に白銀の剣がやどる。その輝きは美しさを増していた。

「しょーじき・・・これに頼るってのも・・・ね。『解析』」

白銀の剣は、謎がおおすぎる剣、知ろうと思わなかったのが原因だ、だが今は知らなければならない。

―白銀の剣―

前所有者『リィン』
現在所有者『ルイス』

能力：魔断ち
　魔のみをたつ剣

　浄化
　魔を打ち消す剣

「・・・ご都合主義・・・といいたいけどね。これでよかったと思う。」

ルイスはフッと息を短く吐くと、キッと暴走し、侵食された魔物を見る。

―アトラント国・城―

またもや白銀の剣が光を放ち、天空へと舞い上がる。

それをみて、王はすこしばかり、罪悪感というものを感じた。

「勇者に・・・押し付けてばっかりいる。白銀の剣がきた・・・ということは、邪神が現れ始めているということだ・・・私たちには何も出来ない・・・のか。」

美しい輝きをもった剣。『白銀の剣』

選ばれたもの・・・勇者。

王の言葉をきくと、この場にいたすべての人間が伏せる。

「それでも・・・戦っているのです、勇者様は。」

姫がポツリと話す。

「私たちが・・・そんなに弱気になってどうするのです。」

その言葉は、王の心を貫く。

「そうだな、そうだろう・・・勇者は頑張っているのだ、我らが弱気になってどうする。」

王は立ち上がる。

「我らは勇者を全力でサポートするッ！やるぞぉぉお！」

王がいうと、家臣全員が「オォォォ！」といい、眼を輝かせた。

―クリスとティアの両親―

美しい剣が少年の手へと宿る。

天から天井を突き破りやってきた剣。

「これが・・・勇者」

彼らの声は誰の耳にもはいらなかった。

―ルイス―

いっきに飛び出していく。

正直闇の大精霊だから浄化されそうな気分だが、大精霊だし！

・・・たぶん、おそらく、だと思う・・・だったらいいなぁ～

俺の後ろから仲間が飛び出していく、一気に攻撃を始めるが。

魔物は腕を一振りすると、風が巻き起こり床が吹っ飛んでいく。

「なぁぁっ！？」

異常な力・・・それに唖然とすると、魔物が目の前へと一瞬で移動する。

「（――速いッ！）『結界』」

そうルイスが心の中で驚きながら魔法を展開させる、結界を想像し、魔法を使う。

その結界は考える時間事態なかったとしても強度はあった。

それが・・・一撃で粉砕される。

「つぇぇぇえ！」

魔物の二撃目・・・それは避けられなかったが、カイトが天使の翼を展開して防御する。

異様なほどの強さ・・・これが大精霊の強さとでもいうのか。

クリスはそれをみて、不利なことに気づく。強さが異様なほどイレギュラー。

魔物になぐられてもルイスはダメージが少ないだろうが、現状は不利。

クリスは外へと飛び出していく。

「ふっ！」

アリスの『流の魔眼』にて、攻撃を先読みしていたことにより、カイトが防御したあとにいっきに魔物へと近づき、一撃を喰らわせる。

簡単な蹴り、それでも転生者である彼女・・・いや彼？どっちだ？まぁいいか、アリスの蹴りは魔物を吹き飛ばすにいたる。

ユリアは吹き飛んだところへと気により爆発的な移動をし、麒麟の剣にて一撃を喰らわせようとする。

――――が。

「いないっ！？」

ユリアの驚きの声により、ハッとしたルイスは、「後ろだッ！」と叫ぶ。

ユリアが後ろを見るが、すでに遅い。

「なッ――――！」

小さい叫び、ルイスやカイト、アリスならば威力はまだ低い、ユリアは強い・・・が。

この威力を喰らえば、死ぬかもしれない。

時が止まったように感じ・・・そして。

「わぁぁっ！」

ユーリが飛び出していき、ユリアを突き飛ばす。

「ユーリィィ！」

ルイスがはっとして、ユーリをみる。

ユーリはルイスへとニコッと笑い・・・吹き飛ばされた。

「ウ・・・アァァァッ！」

ルイスが叫びをキーワードへと変換し、瞬間移動し、ユーリを運び、「『全治しろ』」という魔術をかける。

ユーリは治った、即死じゃないから、まだ生きている。

ルイスは治ったユーリを床に置き、魔物をみる。

その表情は・・・怒りではない、不満でもない。『さらに強くなりたい』という純粋な心。

「護れなければ・・・意味はない。救うという行為は『結果』しか存在しない。」

ユーリは死に掛けた。邪神の魔物によって、人が死ぬというのは、このぐらいに悲しかったものだろう。

心が締め付けられるようだったろう。

ルイスはつぶやいた。つぶやいたけど、その言葉は響く。

それは、

「『ならば、死なぬ世界をつくってみようじゃないか』」

白銀の勇者であった少年の心からの願いであった。

クリスが飛び出してくる。ブースターを引っつかんで、それをルイスへと渡す。

ルイスはコクリとうなづく。

そしてユーリとルイスをのぞいたすべての仲間が足止めへと動き出

す。

ルイスはブースターをＯｎにし・・・仲間が足止めした魔物へと白銀の剣を引っつかみ

突っ込んでいった。

『Ａａａａａａ！』

叫びをあげて、抵抗するが・・・もう遅い。

白銀の剣は・・・魔物を貫き、浄化する。

魔物は・・・その姿を破壊され・・・そこには、闇の大精霊だけのこる。

戦いは終結した。

第六十三章『闇の大精霊』？（後書き）

レイ、空気じゃない？

第六十四章『8人目』（前書き）

たったかたんたかたかたかたん

たららっらーらららーらららーらららー

るーるー

・・・ハッ俺は何を!?

第六十四章『8人目』

『どうせならゼロ魔とかに転生したかったなぁ・・・』

ｂｙアリス

―ダルフィーク・城―

「いま、アリスの心からの声が聞こえた気がするのは何故だろう。」

「なにをいっているの？ルイス？」

「いや・・・ユーリ、なんでもないよ。」

『？』というマークが頭の上に浮かんでいるような錯覚を覚えるぐらい、意味がわからないといった顔になるユーリから視線をはずし、玉座に座る王をみる。

「このたびは、助けていただきありがとうございました。」

そう、このたびこの国を救いました。

すべての人は元に戻り、空には光がもどっている。

「いえいえ・・・なんだか成り行きでなってしまっただけでグフゥ

ッ！・・・なんだよユーリ」

「成り行きで王様助けました・・・とかないでしょ、失礼でしょ。」

そんなものか？とルイスは思ったが、まぁユーリが言うことだからととりあえず疑問にはしない。

っと、ユーリは戦闘終了後、すぐに目を覚ました。

ちょっとルイスが涙目だった。

「なにか・・・褒美はいるかな？」

そう王が聞いているので首をふる。

「そういうのが欲しくてやるのではないんで・・・（成り行きだし）これはもらえる程度ではありませんよ。」

そういうと、ほぅ・・・と、王様が感心したような声をだす。

「（世界を救うのだからこの程度で褒美はいらない・・・ということか、いや・・・世界を救ってもいらないとでもいうのだろうか・・・無欲な少年だ、これこそ勇者の器なのかもしれない）そうか、ならば次の国へいくのだろう。馬車をやろう。」

そういわれてルイスはうなづく。・・・馬車って移動速度が遅くなりそうな気もするが、貰わないわけにはいかない。

「では、行く前に闇の大精霊のもとへといってくれないか、闇の大精霊が渡したいものがあるらしい」

「はい。」

そういうと、王は満足したようにうなづいた。

クリスをみると、なんだかニッコニッコしていた。親が生きていてうれしいのだろうか?と思ったが、なんだかたくらんでいるように見えるのは何故だろうか。

「（いや、転生者だけど姫だしな。仲間になるようなことはしないだろうな。）」

そういうルイスは甘かった。

―闇の大精霊―

王の話を終了させたあと、ルイスたちは

『このたびは迷惑をかけた。』

そういって差し出されたのは片方のグローブ。

「・・・光のグローブとともにありますね・・・禍々しいのはなんでだろう。」

片方のグローブが禍々しいまでの黒を生み出している。

うわぁ・・・とルイスたちが顔をしかめると、闇の大精霊は怒ったように顔をしかめる。

『闇の大精霊なのだから仕方なかろう、黒を禍々しい感じにみるな、やめろ。』

城をガノンドルフ占領後のような感じにした闇の大精霊の力を思い出すと、やめることができない。

モアモアと黒い霧のような発生がしている。とりあえずルイスは装着してみる。

『ででーん』という音がなったと思うと、目の前に文字があらわれる。

『ルイス　は　のろわれた　！』

「うぇえええええ!?」

『冗談だ。』

闇の大精霊のちょっとした冗談らしい。

お前この世界の住人だよな?実をいうと前世覚えてますとかないよな?

っていうかシャレにならない。

ルイスは心の中でそう抗議した。魔物についていたとしてもあの強さをもつ大精霊をもう敵に回すまい。

―国の城壁外―

したくも終了し、ルイスたちは貰った馬車へと乗り込む。

兵たちに見送られ、ルイスたちは走り出した。

数時間ほど走ったあとだろうか、話始める。

「・・・転生者いたなー。」

そうルイスがいうと、カイトとアリスがうなづく。

「そうだなぁ、仲間にしたいけど姫さんだしな。」

そうカイトがいうと、コクコクとアリスが同意する。

「ま、王道として姫が仲間になるＲＰＧもあるけどな。」

そういうと、荷物がモゾッと動き。

「ここにいるぞー！」

そういって・・・クリスが荷物から現れる。

「たんぽぽぉ！お前どうしｔゲフゥッ！」

アリスが何かいったのでとりあえず殴って気絶させておく。

「どうしてここに？」

「そりゃぁ・・・いっしょにいこうかと思ってさ。」

「でも、国が・・・」

「あ、ちゃんといってきたよ。」

そういわれてルイスはほっとする。

「・・・ってそんな簡単にＯＫを出す親がいるかぁぁぁっ！捜索隊とかきたらつきだすからな！」

そんな簡単に娘を旅にださせる国王がいるものか。ルイスはそう思っていたらしい。

―ダルフィーク・城―

さきほど兵士がクリスの部屋で手紙をみつけたといって渡してきた。

それをみると、一言。

『いってきます』とだけ書いてあった。

「・・・むぅ・・・不安だ。」

捜索隊でもつけたやりたいが・・・クリスの願いだ。そう縛り付けるのもあまりいいことではない。

「・・・まぁ勇者だしな。」

「勇者ですしねぇ。」

そう簡単に旅にださせた国王だった。

第六十四章『8人目』（後書き）

・・・よし、やっちまったと思っている。

最後らへんのアリスの言葉をみてネタがわかったとしてもなにもいわないでおく。

作者疲れ気味、ギャグ思いつかない。

故に今回はいつもより適当さ二倍

・・・ヤメテッ！石を投げないでッ

第六十五章『氷の大精霊』？（前書き）

いまさらな能力――
転生者共通：『超身体能力』

ルイス：『神のちょっとした好奇心』能力：想像を魔術として創造する。

カイト：『天使の翼』能力：絶対防御、内部には毒や呪いすら聞かず、羽を飛ばして　　攻撃できる

アリス：『流の魔眼』能力：すべてを見切り、魔術の構成すらみきり、未来をみて　　対応可能

クリス：『過程の創造者』能力：想像する機械、夢物語のような機械（たとえばドラえもんの道具）なども過程を作り出せることが出来る能力

第六十五章『氷の大精霊』？

「メテオメテオメテオメテオメテオメテオメテオ」

ちゅどぉーんっどぉーんっ、どごぉーん！

爆音をたてて地面に隕石が突き刺さり続ける。

そこにあるのは、爆音と山賊たちの悲鳴、そしてルイスのひたすらな『メテオ』だった。

「ご・・・ごめんなさゴベェッ！」

謝ろうとした山賊に隕石が突き刺さる。

後ろにいるユーリたちは普通にトランプをやっている。

クリスは唖然としているが、途中で「ま、こんなもんだろ」といった表情となり、そのままトランプの輪へと入っていった。

「よっしゃー！俺大富豪～」

なんて声が聞こえてくるが、爆音にかき消される。

そしてあらかた倒し・・・ルイスは振り返る。

――――さわやかな笑みで。

『黒い勇者だなぁ・・・』

それをみて全員が思った。

―フランリーズ国内・氷の野原―

「きれいだねぇ・・・」

そういって野原でクルクル回るのは、ユーリ。

そこにあるのは、草たちが凍り、太陽の光により反射しキラキラと光る世界。

エリカもおそるおそるといった具合に草にさわり、触った瞬間に満面の笑みを浮かべるといった行為をしている。

その中でルイスは、真面目に寒がっていた。

ガタガタガタ・・・という音でも聞こえてきそうなくらいに震える。

「（なんでこいつらこんなに元気なんだよ・・・）」

ルイスはそう心の中で思った。

フランリーズ。別名『氷の国』もしくは『オーロラの国』

『美しい国』と評価が高い。だが食料自給率が本当に低い、まぁ氷に包まれている国だろうし。

その代わり、近くの鉱山などで取れる『レクト石』という石があり、その美しさが好まれ、この国はなりたっているといえる。

氷の精霊の力のおかげだといわれている。

代表的なのものは現在、ルイスたちがいる氷の野原とよばれる場所だ。

この場所の草は氷で覆われている。これはいいだろう。

だが、そのまま成長し、死に、そして生まれるといった行為が可能

になっている。

これが氷の精霊の力だ。雑草でさえも美しいものに変えてしまう。

・・・なんで食糧自給が低いのかわからなくなってきた。

「あぁ・・・寒い・・・」

ルイスがユーリからの説明を終えられて最初に放った言葉はこれだった。

「もー、綺麗だよ?この草も。」

ちょっとムスッとして草を見せるユーリに、ルイスはため息をつきながら「雑草じゃねぇか」といった。

「綺麗じゃないか、雑草なんて見違えるほど。」

「へーへー。」

「まったく・・・美しさってものがわからないの?ルイス。」

「雑草が凍っても雑草って発想なんだよ。」

「雑なんだから・・・」

「雑で結構だよ。」

「まったくもー！」

そんな会話をしているのをルイス、ユーリ以外がきいて。

『なんだこの夫婦・・・！』

と思ったのはおかしくないと思う。

「うー・・・風邪引いても困るからとりあえずさっさといこうぜ？」

そうルイスがいうと、ユーリはちょっとあきれたような顔になるが、

「まぁいいか」と小さくいってルイスの背を追った。

「まぁ、ルイスだしね。」

その言葉を聞いて、再度。

『幼馴染かこいつらは・・・』と心の中で叫んだ。（いや、幼馴染だけどさ

野原が凍っているせいか、道が歩きづらい。

「縄で靴を縛る方法ってあったような気がする・・・」

そういってルイスが実践してみると、結構滑らなくなる。

「おぉ・・・」と簡単の声をあげ、ユーリに縄をわたし「滑らなくなるぞ。靴に縛れ」といい、ユーリはそれに従う。

「へぇ、よくしってたね！」

と、その効果をみてユーリがいったかと思うと、ルイスは全員に配ってみる。

そんなこんなで城へと到着した。

第六十五章『氷の大精霊』？（後書き）

メテオ：ＦＦの魔法

第六十六章『氷の大精霊』？（前書き）

疲れがピークです。

そして明日から本気出すので、明日から更新が遅れ気味になるようです。

・・・書いていて自分でも意味不明だったりする。

第六十六章『氷の大精霊』？

―フランリーズ・エルッセン城下町―

ガヤガヤ、という音でも聞こえてきそうな賑わいのなか、ルイスたちは人ごみを掻き分けて歩いている。

色々と大精霊について到着してから探ってみたところ、やはりここでも奇妙なことがおきているそうだ。

この国には、『溶けない氷宝石』とよばれるものがあり、国宝とか。

その氷宝石が、最近溶け始めているとのこと。

そんな情報をきいてルイスたちは宿屋にいた。

何故城にいかないか・・・それは。

『目立ちたくないから』だ。

平々凡々最高だと最初にいっただろう。

「俺は、平凡が、最高なんだッ！」

手遅れ感が否めない。

ヤレヤレと、ルイス以外の全員がため息をついた。

「・・・というわけで、情報を出そうじゃないか。」

宿屋、三つほどの部屋をとり、一つの部屋で集会っぽいものをやる。

ついでにレイのベットなどとっていない、幽霊には意味ないだろう。

むしろ悪霊畜生などに『レイは悪霊じゃないですの！』・・・くれてやるベットなどない『無視ですの！？』

「まぁとりあえずルイスからやってくれない？」

ユーリの提案に、ルイスがうなづく。

「まず始めに、氷の大精霊の居場所を調べてきた。そこは・・・あそこだ。」

そういって窓の外をルイスがさすと、全員がそちらをむく。

「山？それも・・・吹雪いている。」

カイトがそういうと、ルイスはうなづく。

「山の名前はそのまんまの『スノーマウンテン』っていうんだ、一年中吹雪いているという山。その上にいる」

そうルイスがいうと、全員がコクリとうなづく。

「で、その上に氷で出来た教会がある。そこにいるらしい。」

「あ、名前は私が知っているわ、これもそのままで『氷の教会』っていうらしいわよ。」

エリカがそう付け足す。次はユーリが手をあげて話し始める。

「一ヶ月前から、城にある『溶けない氷宝石』が溶け始めているっていう噂があるらしいよ。たぶん氷の大精霊に何かしら影響があったからだと思う。」

「炎の大精霊みたいになにかに干渉されてたり・・・水の大精霊みたいにやむにやまれぬ状態・・・とか？」

ルイスの言葉にユーリはうなづく。

「で、次に・・・私だな。」

そういってユリアがでてくる。エリカはこれまでに出てきたものは自分と同じことのようで、フルフルと首をふった。

「山は吹雪で誰も登れないそうだ。でもここ最近は弱まっているらしい・・・それでも登れたもんじゃないけどな。」

そういってユリアは山をみる。

ゴォォ・・・という音がなって、風が吹き、雪が降り、吹雪となり

荒れている。

「・・・うわーのぼりたくねぇー」

「なにいってんのよ、それでもこれまでやってきたんでしょ?」

「いや、エリカ・・・それはわかるけど。」

ルイスの反論を有無を言わさずに、ルイスにエリカは「だから用意したらいくわよ!」とのこと。

「誰か・・・!助けて・・・!」

「いや、うん・・・無理。っていうかお前がいいだしたことじゃん。」

「確かに、責任もってやってくれ。」

カイトとアリスの有無を言わせぬ物言い、いや、俺じゃないんですけどとルイスが言おうとするが、全員が全員外へと出て行く。

「レイ・・・お前は俺の仲間だよな?」

『ベットがないレイは存在なんてありませんの』

「じゃ・・・ユーリ。」『さっそうと身を翻したですの!?なんか反応しろですのぉぉぉ!?』

「俺には霊感があるのかな・・・さっきから何もないところから声がでてる。」

『すっごいひどい人ですの！？』

「いまさらだよレイ。」

ちょっとまてユーリ、とルイスが言おうとするが、なんだレイが『確かにそうですの』とかいいはじめたので塩を投げつけてやる、成仏！悪霊退散ッ！

『フハハハ！魔王たる我には塩などきかぬギャァァァ！聖水を投げてきたですのぉぉ！？』

『聖水』：ドラクエとか関係なく聖水

「騒がしいね・・・」

「ま、そんなもんだろうね。」

「姫様が仲間とか・・・やべぇ『空のきSゲフゥッ」

転生者三人はのんびりと宿の一階で昼食をとり、その後ユーリとエリカはルシルをつれて、レイは・・・どうでもいい。『ひどいですのぉっ！？この扱いになんだか慣れてきたですのぉ！』

ルイスはとりあえず剣を振って身体をあっためていた。

「・・・この寒さであいつらはどうして平気なんだろう。」

動かなかったら死ぬと思う、らしい。

のんびりと日々はすぎていき――

とりあえず準備はととのっていたりする。

第六十七章『氷の大精霊』？（前書き）

疲れているのに何か書いてしまう・・・これが禁断症状ってやつか？

でも今回は空白とかで行を稼いでる気がする。

第六十七章『氷の大精霊』？

―スノーマウンテン―

ビュォオオオオオオッ

ゴォォオオオオオッ

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

すべてのものが沈黙して、山を見る。

一週間程度で、すべてを用意したルイスたちは、装備をもって山に挑む。

そして目の前で・・・異常なほどの風と雪が降り積もる光景をみて、ルイスたちは固まった。

ルイスはハッとしてキョロキョロと見回し、自分のおでこに手をあてる。

「どうしたの？」

それをみたユーリがルイスに声をかけるが、ルイスがゴホゴホとせきをし始めると、ユーリの目がなにか責めるような目になっていく。

ルイスはそのチクチクと肌に突き刺さる視線を無視し、「ふぅ・・・」と小さく息をはくと、ゆっくりと口をひらき。

「おや、風邪を引いているようだね、すまないがボクは「まてぃ」・・・なにかなカイト。」

身を翻そうとしたルイスをカイトがガッと掴むと、振り向かせる。

「あまり動かなさないでくれないかな、頭痛がするじゃないか。」

「その口調をやめろ、そして仮病をやめろ。」

「やれやれ、人を疑うなんてひどいなぁ、ボクが嘘をついたことなんてないじゃないか。」

「・・・そういわれればそうだが、お前は必要とあらばルールなど無視するやつだと知っている。むしろノリで嘘をつく最も信じられない人Ｎｏ１だ。」

そうカイトが断言すると、ルイスは『やれやれ・・・』といいたげに肩をすくませ。

「人を信じられないなんて・・・かわいそうだな。」

「お前が言うなァァァァ！」

カイトの叫びと、ルイスヘアリスが手刀をうった『ドゴォォンッ』という音が次の瞬間発生した。

「・・・大丈夫なの？」

ユーリがそういうとアリスはコクコクとうなづく。視線の先には頭から雪に腰まで突っ込みピクリとも動かないルイスがいる。

「仮にも転生者だ、このぐらい・・・多分、大丈夫だって・・・おそらく、別に数時間でケロッとしてると思う・・・だといいなぁ・・・」

「なんだかだんだん自身がなくなっているように聞こえるんだけど・・・」

「この程度で死ぬようなやつじゃないとは思うけど・・・これはないでしょ。」

エリカがルイスを指す。

「・・・私も逃げようとすればこうされるの？」

ビクビクと怯えるクリス。

こうして氷の教会への旅立ちはなんだかカオスになっていった。

「よいしょっと・・・」

カイトがルイスを担ぎ上げ、おんぶとした状態になる。

「重い？変わろうか？」

エリカがそういうが、カイトは首を横に振る。

「こーゆーのはさ、男のみせどころっていうところだろ？」

「・・・ごめん、女性が男性を運んでいるようにしかみえないって思った。」

その言葉にカイトがガックリと肩を落とす。

そんなカイトをみたエリカは慌てて言葉をつむごうとし――――でてこなかった。

「ゴメン無理・・・フォロー無理・・・」

その言葉にカイトは泣いたという。

第六十八章『氷の大精霊』？（前書き）

・・・アクセス解析してみたところ、この小説を意外にも見てくれている人がいたらしい。

ありがとうございます。

第六十八章『氷の大精霊』？

―スノーマウンテン・氷の教会付近―

「・・・やっと・・・つきはじめた。」

ユーリがそういってはぁぁ・・・とため息をつく。

かれこれ十数時間は登り、吹雪にあおられ吹き飛ばされそうになったりと、異様なほど苦労をした。

「・・・あぁ・・・もうすぐつくぞ。」

そういってカイトが目の前を向くと、氷の教会が見えてくる。

そのときだ。

ピタッ・・・と時が止まるように吹雪がとまり、太陽が出てくる。

まるで歓迎しているように、太陽の光は氷の教会へとさしこみ、キラキラと幾多にも反射し、幻想的に光る。

ごぉぉおん・・・ごぉぉおん・・・

小さい鐘の音が鳴り響き、そこはとても幻想的なシーンへとはやがわりする。

晴れた美しい銀世界に、ぽつん・・・とたつ氷で出来上がる教会。

そしてその教会はダイヤモンド・・・いや、ダイヤモンドも負けぬ輝く美しさを放つ。

ユーリたちはその光景に目を奪われ、そしてハッとする。

その瞬間、ルイスがガバァッとおきて叫ぶ。

「右４５度！」

そう叫んだ瞬間、ユーリはとびあがる、そして居たところをみると、爆音をたてて氷の杭が突き刺さっているのをみた。

そして、その突き刺さった場所には、巨大なクレーターが出来上がる。

それをみて全員が青ざめ、顔を引き締める。

「異常な威力・・・っていうか。」

全員が全員、ルイスをじっとみる。

「何かな?ボクはさっさと戦いをするべきかと思うんだけど。」

そんな口調のルイスの視線がさらにチクチクと痛いものに切り替わっていく。

「・・・お前、気絶したフリだったろ。」

カイトの確信をつく言葉にルイスは視線をそらし、氷の教会をみる。

「ふつくしい・・・」

そんなルイスはさらにチクチクとした視線を向けられる。

そんな視線に耐え切れなくなったルイスが「スマン」と謝ると、やっと全員が視線をはずしてくれる。

そして、やっと氷の杭が飛んできた方向をみると・・・

木があった。

「・・・木？なんぞこれ。」

アリスがそういって雪玉をつくって投げてみる。

その瞬間その雪玉に氷の杭が突き刺さり破壊される。

そしてマシンガンのごとく氷の杭がルイスたちに発射されていく。

「カイト！防御よろしく！俺はあれがなにか見てみる！」

「おう！」

ルイスの言葉にカイトはうなづくと、すばやく天使の翼を展開させ、防御へと翼を動かす。

氷の杭は、ガガガガッという轟音をたてて、天使の翼にぶつかり落とされていく。

ルイスは想像する。目の前にある何かを近くでみる情景を。

「・・・『千里眼』」

そうキーワードを発生させ、木をみる。

「・・・クリスタル上の氷発見、魔力感知、大精霊に近い魔力・・・たぶん、あれが――」

ルイスは思い出す。

黒く染まった光の大精霊・・・あれは結晶。

「光の大精霊の結晶みたいなものだと思う、あれはたぶん、氷の大精霊の力の源みたいなものだと思う、大精霊はいないから・・・氷の教会かな?」

そういうと、全員がうなづく。

そしてユーリが手をあげて、「じゃ、ボク氷の教会へいってくるね。」という。

ルイスは、それをみて、「俺もいこうか?」と声をかけるが、フルフルを首を振られる。

「ルイスはね、この戦いで結構な確立でキーパーソンだったんだよ、だから必要な人さ。」

だが、ルイスは心配そうに見る。

それは。風の大精霊のこと。

真っ暗な煙・・・

ユリアとともにいけば、光の大精霊のときでも風の大精霊のときのでも関係なく破壊はできるだろう。

だが、風の大精霊のあれは『俺のトラウマ』をうつしだしていた。

「・・・大丈夫か？」

そうルイスがいうと、ユーリはにっこりと笑っていった。

「もっちろん！」

その言葉に小さくルイスは笑みを浮かべると、うなづく。

「ユリアと・・・何人かよろしく。」

ルイスがそういうと、ユーリとエリカ、ユリアとルシルは走り出す。

それを見送り、ルイスたちは走り出す。

第六十八章『氷の大精霊』？（後書き）

う～ん、文章ってド下手ですが、これでも成長はしていると思うんですよね。

小説を参考にしたりしてますので。
要望があればいってくれると助かります。

第六十九章『氷の大精霊』？

―ルイス―

チュダダダダッ！という轟音をたてて雪へと突き刺さる氷の杭。

カイトの翼によりなんとか無傷だが、これは・・・とてつもなくキツイ状況だ。

「・・・雪山だからな、やりすぎると雪崩がおきそうだ。」

カイトがそういって小さくしたうちした。この状況は間違いなく不利。

やりすぎれば街へと雪崩が襲い掛かる可能性もある。そうすると、最終的にこちらが慎重になってしまう。

「『灼熱の炎よ』」

ルイスはそう宣言し、撃ってくる氷の杭をいっきに溶かし続ける。

そしてそのまま炎をのばそうとすると氷の杭のスピードが上昇しはじめる。

「チィィッ！」

舌打ちをしながら、炎を越え襲い掛かる氷の杭を飛んでよける。そしてとんだルイスに氷の杭が襲い掛かる。

そこへとカイトが滑り込み、ルイスを翼で護る。

「くっそ・・・どうすればいいんだこれ・・・」

アリスが流の魔眼を展開してみるが、フルフルと首をふる。

「速すぎる。どんなに軌道が読めたとしても避けきれない。」

そういってハァ・・・とアリスがため息をつく。

ルイスは、「まずい状況だ・・・」と小さく言った。

『うわー！氷の杭ですのー！』

そのとき、聞こえた声の方向をむくとレイがいた。

氷の杭が・・・すり抜けるすり抜けるすり抜ける。

「「「・・・・・」」」

ルイス、カイト、アリスが沈黙し・・・

「「「（ニヤリ）」」」

三人が同時に笑った。クリスは、「こんな奴らと一緒なのか・・・」とちょっと悲しくなってきていた。

氷の杭がすり抜けることに気づいたレイはルイスのほうをむくと・・・その笑顔に凍りついた。

『（なんか・・・危険な匂いがするですの）どうしたんですの？』

「なぁ・・・レイってどんな魔法が聞かないんだ？」

『・・・空間とか時とかそのまま干渉してくるのは聞きますが、物質に干渉してなにかを作り出して攻撃するものはききますの・・・、レイは霊体ですの、霊体とはいわば空気と異なり空気と近しいものですの、風には飛ばされますの』

レイは、ちょっとごまかそうかと思ったが、ルイスの笑顔に人間（幽霊）がすでに忘れてしまった野生の本能が危険だと告げる、故にレイはちゃんと告げる。

「・・・『風よ』」

ルイスの深くなった笑みにちょっと怯えたレイは、ルイスの放った次なる言葉を聞いて、顔を引きつらせる。

「『対象を吹き飛ばせ』」

『まってですあるぇぇぇっ！？』

ひゅーんと飛んでいくレイにルイスが手をふって「がんばってー」といっておく。

レイはヤケクソ気味に、「うわぁもうどうでもなれですのぉおおおおお！」と叫び、魔法を展開させる。

精霊に干渉。

炎の精霊、風の精霊に干渉・・・氷が多いここでは炎はすくなすぎる。

だから、空気で炎を爆発的に動かす。

『もうヤケクソですのぉぉ！炎と風よ合わさり竜巻と成せですのぉおおおお！』

キュボォオオオオッという音がなり巨大な竜巻ができ・・・

『あーれー！』

レイはその上昇気流みたいなものに飲み込まれていった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・あれいいの？」

三人は無言で・・・身を翻し、歩き出した。クリスがなにかいっていたが、誰もなにも答えなかった。

『最後まで扱いがひどいですのぉおおおお！』

―ユーリ―

「ふぅ・・・ふぅ。」

息を整え、ちょっとした疲労を抑えていく。

エリカもユリアもルシルも無事みたいだ。

後ろでは轟音がまだ響き渡っている、早くしなければ。

そう思い目の前をみると、氷の大精霊がひざをついている。今にも倒れそうだ。

黒い煙のようなものがそこに存在し、危険だと本能が告げる。

「怖いなぁ・・・」

そういって逃げろといい続ける本能を無視し、ユーリは歩き出す。

『にん・・・げ・・・んか・・・？いや・・・た・・・・だ・・・の人・・・・じゃな・・・さそう・・・だ・・・な。』

近づくと氷の大精霊が喋り始め、思わず戦闘態勢を取ってしまう。

『べ・・・つに・・・よい・・・た・・・たか・・・わぬ・・・』

氷の大精霊が・・・暴走していない。

「本当に・・・？本当ならなにがあったの？」

そう聞くと、氷の大精霊は喋り始める。

それはゆっくりとだけど。

現在、氷の大精霊は黒い煙により力を極度に奪われている。それによりクリスタルが氷の大精霊を護るために、動いているということ。

「（あの木は氷の大精霊を護っていたのか）で・・・ボクはどうすればいい？」

そう聞くと、氷の大精霊はフルフルと首を横に振る。

『巻き・・・こま・・・れ・・・る・・・ぞ。』

そういわれると、ユーリはヤレヤレといった感じに首をふる。

「ボクはね・・・もう巻き込まれているんだよ、世界そのものにね。」

そうユーリが小さくいった。

エリカもユリアもルシルも・・・なにをいっているのか聞こえないらしく首をかしげている。

「だから・・・ね、もう覚悟はできているさ。取り戻したいからね。」

にっこりと、ユーリは笑う。

「彼が・・・好きだから、ね。」

そういって煙へと手を伸ばし・・・ユーリはブチンと、まるでスイッチをＯＦＦにしたようにバタリと倒れこむ。

「ユーリィッ！」

エリカが叫び、ユリアとルシルがバラバタと走りよってくる。

黒い煙によりユーリは侵食されていく。

キキィ・・・ッという音がなり、目の前で好きだった男性が吹き飛ばされていく。

彼があったのは、飲み会だった。

彼は悲しそうに飲んでいて、そんな表情に私は気になった

そして彼の付き合いが始まり、私は彼を好きになっていくのを感じていた。

だが死んだ

彼は死んだ

目の前で死んだ。

私を・・・護るために・・・死んだ。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ。

初めての決心だった。告白するのは

初めてここまで好きになった。

何不自由もない暮らしで、なぜか心が死んでいった私は、初めて心を許せる人にあった。

彼は悲しそうに笑うけど、その笑いはすこしだけどうれしさがあって、私を温かくさせた。

でも・・・彼は死んだ。

何度も

何度も

何度も

何度も

同じ光景が続く。

なんどもなんどもなんどもな

なんどもなんどもなんどもな

試練。

彼に試練を行わせる、少しずつ軌道を転換させながら。なんて嫌な仕事だろう。

それでも私は彼に真実を話したい。泣きながら私を揺らす彼に

「る・・・いす。」

絶対に、私は・・・奇跡を・・・掴む。

彼が私の笑顔を、幸せを願ったからこそ私は願ったのだ。

『佐々木勇樹の幸せ』を

第六十九章『氷の大精霊』？（後書き）

なんだろ、そんな役割だなぁユーリって。

ヤンデレじゃないよ、本当だよ。

はいはい、皆分かってただろうけど、ユーリは桜井美奈子ですよ！

ま、最後までルイスには分からないようになっていますけど。

最後まで教えないようにしようかと思ったけど、さすがに最後にバーンとやられても全員が全員『いまさら？』とか反応されそうで怖いんだよ！

まぁ、真実をここで話してもこの先なんら変わらないんですよね。

別に変わった描写やるわけでもなし。

なんかやったほうがいいですか？ツッコミはユーリ視点とか？

ルイスに必死で隠そうとするユーリ視点とか？

ていうかくっそー！絶対に最後が長くなってきた！

自分の中で最大の長さだよ！あと四つの大精霊は問題・・・ないといいなぁ

まぁ、よろしくお願いします。

というか、まだバラさないほうがよかったかなぁ？

次回・・・どうしよう。

第六十九章『暗闇の中』

桜井美奈子

今現在『ユーリ』である。

そう私は、彼女にあった。

自らを世界を管理するものと言い、自らを世界だという少女に。

暗い暗い部屋の中、私は涙を流してベットへとすがりつく。

憔悴しきった体は、すでに立てないほどになっている。

何度も、何度も私の目の前で勇樹が死んでいくシーンが流される。

脳と言うのは、なんとも・・・辛くできあがっている。

視たくないと願っても、脳はその感情を無視し、最悪の情景を映し出す。

涙はすでに出てこないほど、枯れてしまったのかと感じられる。

「ゆう・・・きぃ・・・・」

彼のことを思い出す。

そして吹き飛ばされた彼を思い出す。

笑っている彼、悲しそうにしている彼・・・そして、決心したような顔の彼。

たくさんたくさん思い出し。

最後に・・・ぐちゃぐちゃになった彼を思い出す。

もう、嫌になる。

なにもかもが嫌になってくる。

彼は、たぶんこんな世界にいたのだろう。

なにもかも嫌になって絶望して

それでも彼はあがく。

・・・彼は、なんて強かったんだろう。

「会いたいな・・・また。」

もう叶わない。
それは分かっているけど――――

「会いたい？」

ハッと顔をあげる。

そこには少女が居る。

図書委員のような風貌な少女。

「あえ・・・るの？」

かすれた声でそういうと、少女はにっこりと笑う。

「私は『世界少女』世界そのものであり、管理者でもあります。」

そういって少女は誇らしげにいった。

「名前はアニータ。貴方は桜井美奈子ですか？」

私はコクコクとうなづく。

「そう・・・私は、桜井美奈子。」

言い聞かせるようにそういった。

「では貴方に佐々木勇樹・・・いや、ルイスといえばいいでしょうか?彼にあわせましょう。」

・・・ルイス、その単語に疑問を覚える。

「ルイス・・・って誰?」

そういうと世界少女、アニータはにっこりと笑う

「彼は転生してもらいました。一つの空白の奇跡を渡して」

そういわれると、わからなくなってくる。ファンタジーすぎて、まったくわからない。

「その奇跡で、彼は『桜井美奈子の幸せ』を願いしました。」

その言葉で私はハッとする。

勇樹の願いを聞いて、涙があふれてくる。すでに枯れたと思っていた涙が

「私は・・・どうすればいいんですか?」

「貴方の幸せを、そして貴方の奇跡をお願いします。貴方に空白の

奇跡を授けましょう。試練は・・・彼の試練の補助になること。」

・・・なんて、いい条件だと思う。

「しかし、それでも条件はあります。そこには『試練が終わるまで自分の正体を明かさない』ということです。」

「つまり・・・彼の願いがかなえられるまでですか？」

そういうと、アニータはびっくりしたような顔になり、えぇ・・・と小さく言った。

「そうじゃないと、願いがかなえられませんから。」

そういってフフッと笑う。その様子に、私は思わず小さく笑ってしまう。

「貴方の奇跡を、教えてください。」

そういったアニータをみて、私は決心したような顔つきになる。

そして言うのだ。

「『佐々木勇樹が幸せであること』それが私の奇跡だ。」

そういうと、世界少女は微笑んだ。

「では、同時に奇跡が発動しますね。」

そういわれて、私はキョトンと一瞬すると、顔を切り替える。

笑みを浮かべて。

「そうだな。」

ゆっくりとそういった。

アニータはゆっくりといった。

「彼は白銀の勇者になってもらいます。」

「白銀の勇者？」

「その物語は、転生し、そして記憶が戻ったときに知ることになります。」

便利だなぁ・・・と美奈子は思った。

「それでは、いってらっしゃい。」

美奈子は微笑みながら消えていく。

そしてルイスという少年と出会い、物語の始まりを知るのは、また別の物語。

第七十章『やはり勘違い』（前書き）

悪ノリした。

今絶賛後悔中

第七十章『やはり勘違い』

―氷の教会―

『本当に・・・すまなかった・・・』

そういって言われるのはすでに何回だろうか、とルイスは思った。

大精霊を成り行きながら助けながらも、結構な時間が過ぎている。

「まぁ、いいですよ。今回も今回でいつものようなものですから。」

そう氷の大精霊へ、ヤレヤレといった具合でいうと、氷の大精霊はフッと小さく笑った。

『まったく人間というものは面白いやつばかりだな。』

「まーみんな心の中で何もない場所で『ヒャッハー!』とか叫びたいと思ってるんですよ。裸になって『グウレェエイトォォ!』とか『べぇぇぇるぅぅぅん』とか『くぎゅぅぅぅ』とか叫んでる人もいますから。」

『そ・・・それはなんとも・・・』

氷の大精霊様信じちゃってるよ。

「いやいやいや!ルゥゥイスゥゥ?思ってないよ?思ってないよ?やめてよ?っていうか信じないでくださいよ!?」

ユーリがルイスの頭をギリギリとすごい握力で握りながらすごんでいう。

そしてエリカは肩を揺らして「訂正しなさいよ！」という。

なんというコンボ、というわけでルイスは、首を固定されながら肩を揺らされている感じだ。

「痛い痛い痛い痛い痛い千切れる千切れるヤメテ！」

とかいいながら叫んでいる。

ルイスの仲間はそれをみて笑っている。氷の大精霊はひきつったりする。

当然といえば当然だと思う。

『ま・・・まぁお礼として渡すことになっている。氷のピアスを・・・な。』

そういってピアスを受け取る。

ほんのり冷たい。

『溶けない氷と同じものでできている。お前のたびがこれにより、もうちょっとは楽になることを願おう。』

「ありがとうございます・・・いやユーリにエリカもうやめてよ痛いよ！」

氷の大精霊の苦笑が聞こえる。

ルイスたちはそういって踵を返しさっていく。

街の人々は知らない・・・

この街が勇者により救われたことを・・・

と思っていた時期が俺にもありました。

―フランリーズ・城―

「・・・（しくしくしくしく」

そういってさめざめと泣く少年がルイス。

その様子をみて、王様たちは「なんでこの子泣いてるの？」「しりませんよ！」とかいう会話をしている。

それをみているその王様の息子と娘は、勇者と呼ばれた少年をじぃ・・・っと見つめている。

何故ルイスがここにいるか・・・それは。

―回想―

「やっと下山だぁー！」

ルイスがのびをしていると・・・

「あ、ルイスというかたですね！戦いを遠くからですがみてました！すごかったです！王の命令により――（省略」

―フランリーズ・城―

「というわけだったのさ！」

「なにをいっているんだルイス殿。」

「なんでもござりませぬ。」

「なんで古風な口調？」

いつもどおりユーリから突っ込みが受けられるが、ルイスはスルー

する。

王様の視線がなんかイタく感じるのは何故だろうか、いや気のせいだろう

「あーゴホンッこのたびは街をすくっていただきありがたく思っている、なにか礼をしたいのだが。」

そういわれるとルイスは首を横にふる。

「本当に成り行き（マジで）ですから、俺が勝手にやったことです。自分の目的（ほとんどユーリとエリカが勝手にきめられた大精霊契約）のために、俺は突き進むのみです。」

そういってニコッと笑う。

それをみて、王様は小さく「おぉ・・・」と感嘆の声をあげる。

―王様―

なんとけなげな男だ。

勇者にふさわしく正義感に満ち溢れ、心は広いと聞いていて、そんなものはありえないと思っていた。

だが、それは違った。

彼の言葉で世界観が覆された気分だった。

すばらしい・・・私は心の中でそう思った。

―ルイス―

・・・その後のことだが、なんだか知らないがすごいテンションになられて、「私はサポートする！」と王様が決定された。

なんて王様はいい人なんだろう、大精霊契約という自分勝手な考えに、救われたということから力を貸すなど。

「次も順調にいったらいいなぁ・・・」

そういって俺は、仲間と共に走り出した。

第七十章『やはり勘違い』（後書き）

実をいうと、すでに二年以上たっている設定なんですけど・・・

第七十一章『雷の大精霊』？（前書き）

時間がなくても考えて書かないからさっさと出来上がるこのクオリティーすばらしいわけねぇっす！

第七十一章『雷の大精霊』？

―ユーリ―

平凡な日常、それが何故か真っ暗に見え始めたのはいつだろうか。

友達がはしゃぐ声がする。

その声に私は笑みを見せる。

その笑みはつくりものだとわからないくらいに、自然な笑みだ。

鏡で、作り笑顔をしてみた瞬間に、そのことがわかり、少しばかり・・・私は辛く思った。何故、苦しいのだろう、何故こんなにもつまらないのだろう。

全くわからない。わかることなどないと、そう信じきってきた。

こんなことを考えていて、それにあったのが『佐々木勇樹』

彼との出会いで、私は何故つまらなかったのか、わかった。

『純粋な気持ち』それを感じ、私は帰って、マンションへの自室へとはいり、ドアのバタンとしめた瞬間に、とめどなく涙があふれてきた。

「ふぅ・・・」

すこし、ため息をついた。そのため息に気づいて、ルイスこと『佐々木勇樹』である少年はちょっと心配そうに聞いてくる。

「どうしたんだ?ユーリ」

彼が私を『ユーリ』と呼ぶたびに心にチクリとした痛みと、焦燥感を感じる。たぶんこれは自分自身の『名前を呼んで欲しい』といった願いによるものだろう。

何度本当のことを言おうとしたかわからない。

でも、私は言わない。そう考えを起こした瞬間、頭の中で『会えるだけまだいい、これを終えればいえる』といった考えでその欲を押さえつける。

その行動はとてつもなく苦しいが、私はそれをやめることはないだろう。

私はいつもどおり『ユーリ』としてにっこりと笑い、フルフルと首を横に振るのだ。

「なんでもないよ、ルイス。」

そう笑うと、安堵したようにルイスがほっと息をつく。彼はとても優しい。そんな彼の優しさにつけこんでいる私が一番感じている。

「そうか、無理したら次はこの超優しく誠実紳士な俺が超優しく怒って、背負い投げをして城の頂上から分投げてやるからよろしくな。」

「それすっごい殺そうとしている！鬼畜の所業だよ！？」

そういって『僕』は笑う。

「んで、次の『雷の国』はどういうところなんだ？」

そうルイスに聞かれ、ボクはペラペラとパンフレットをめくる。

「・・・本当に、そのパンフレットどこにあるんだ？」

それは僕にもわからない。

―サンクルダート―

『比較的に発展した都市』

その国の裏には大きな山があり、そこは延々と雷が起こっている。

それを利用し、雷というエネルギーを電気として利用する。そういった方法を確立させた都市。

もっともルイスたちが知っている『現代』というものに近しい景色をもっている。

夜には無数の人工の光が照らし、美しい暗闇を演出する。

―ルイス―

「・・・（唖然）」

ルイス、アリス、クリス、共に唖然として景色をみる。ガタンゴトン、という小さく地面が揺れる感じに気づき、回りをみると――

電車があった。

「・・・あれ?俺いつ現代に帰ってきた?」

そんな感じにルイスがパニックになっていると、アリスが歩き出す。
それをみて、ルイスがその服を引っつかみその歩みを無理矢理にとめ、アリスをジッとみて、問う。

「・・・どこにいくんだ?」

そう聞いてみると、アリスは真顔でいった。

「秋葉原にいこうかな、と思って。」

「いや、まてアリス、この世界に秋葉原はない、ついでにアニメもないしフィギュアはあるかもしれないが、とにかく小説はあるが漫画やアニメ、ゲームといったものもないし、パソコンもない、だからたとえ秋葉原といった土地名があったとしてお前の目当てはない。」

そう断言してやると、アリスはバタバタと駄々っ子のように

「やだい!ロ○コンの血が!・・・いや俺はロリ○ンじゃないぞ?とにかく血が騒ぐんだ!現代っ子としての!」

全く信憑性のない訂正をしながら、言い放った。

「黙れ」ドゴォォンッ!

手刀を思いっきり首に打ちたて無理矢理黙らせる。

地面に突き刺さり、これで大丈夫だと思ったのだが、ガリガリと地面を削りながらアリスが這いだしてくる、どういう肉体をしているんだ・・・とルイスが思ったが、アリスの次の言葉で急速に心がさめていく。

「まだだ・・・まだ終わらんゲボァッ！」

二度目の手刀を首に受けたために、さすがのアリスも意識が吹っ飛んだらしい、ピクリとも動かない。

「転生者って・・・めんどくさいなぁ。」

クリスがそうポツリともらし。

「そもそも転生すること自体がめんどくさいし。」

そうカイトが回答をだした。

「本当に・・・もう慣れてきちゃった自分がどうかと思うんだけど・・・変かなァ・・・」

「いや、別に変じゃないと思う。慣れって怖いっていうことを示していると思う。」

エリカが目じりを押さえていった言葉に、ユーリがそういって。

『本当にこの人たちは不思議な人たちなの。』

「そうだねー」

そういうレイとルシル

レイにはもれなく全員からの、「（お前がいうなー！）」といった心の叫びがプレゼントされる。

ルイスたちはそういった妙なテンションを無理矢理落ち着かせ、国へと入っていくのだった。

第七十二章『雷の大精霊』？（前書き）

勇者は炎の大精霊をたすけ、森を抜け、アニータと共に次の街へと到着しました。
そこはとても綺麗な水の国・・・でした。
すでに水は黒くよどみ、その水を飲んでしまった人たちは病気になり、死んでいく。
ひどいものだ、と勇者は思いました。
勇者は水の大精霊を救うために、この国を歩き回ります。
そうすると、人が集まっているのがみえ、それに近づいてみると、目を見開きます。
そこには『猫のような耳が生えた少女』がいました。
獣人、という種族はこの世界にはありません。
それが、この少女は魔族と人間のハーフだということを物語っていました。
『・・・！』『・・・！！』街の人々は罵倒をしながら少女を殴り続けています。
少女は、何も感じないように、顔をピクリとも動かず、ただ死んでいる目をしていました。
勇者は思わず駆け出し、少女をかばうように体を盾にします。
それをみた街の人々は『貴様も魔物の仲間か！』といって勇者へと物を投げつけます。勇者は引かずにただ盾となりました。少女がそんな勇者をみた瞬間に、目を見開きます。勇者の頭からはすでにおびただしい血が流れていました。
それでも勇者は引きません。少女は目を見開き、思わず叫びました。
「なんで私なんかを救うの！？」と。
勇者はにっこりと笑って何も言いませんでした。
少女は何かが切れたかのように顔を上下に揺らし、叫びます。
「私はこんな世界に生まれてはいけなかった存在だ。」と。

少女は叫びながら目の前で『邪神の手下に殺された母のこと』を叫び
そして母を殺したヤツが自分の父親だと騒ぎ
「私はそんな穢れた血をもっているんだ」とボロボロと涙を流しながらいいました。
「世界は、私にとって厳しくでしかない」と、小さくボソリと少女が言い放つと、少女は温かい感触を感じました。
勇者は少女を抱きしめていました。
勇者は血を流しているのも厭わず、少女に言います。
「世界は、君の思ってるよりもサラに厳しいとおもう」と
そして「でも、世界は君の思っているよりも、もっともっと優しいんだ」と笑顔でいいます。
「ボクは君を受け入れよう、それでも君がダメなら。この白銀の剣で君を救おうじゃないか」
といって笑みを崩さないでわしゃわしゃと少女の頭をなで上げます。
街の人々はそれをみて、手を止めます。
もう喧騒はありません。
そこにあったのは、ただ一人の少女にしかみえない、猫のような耳の生えた少女の嗚咽だけでした。

第七十二章『雷の大精霊』？

―ルイス―

この国にきてみて、まず始めの感情は『何コレ現代？』だった。

電車、車。交通機関がバッチリあり。

それらすべてが電気自動車。

なんていうエコ

エコ大国！

そんな感想しかもてないこの国の状態をみていると、とても平和。

ちょっと遠くから、ゴロゴロ、ピッシャァーン！といった雷の音がなるのがすこしやかましいが、それを取り除ければとてもいい国だといえる。

そう思いながら、ルイスは窓をあける。

窓はなんの引っかかりも摩擦もなく開くと、まるで現代に返ってきたような錯覚を覚えるぐらいの音が鳴る。

それは、車が走る。シュァァァァといった道路を走る車の音。

それがなんだか懐かしくて、心をほっとさせる。

その音は、日常で普通といった音かもしれない。でも今現在、なん

だかその音がかけがえのないものに聞こえる。

ルイスはゆっくりと目を閉じ・・・そしてゆっくりと目をあけた。

そして右から左へと、１８０。見回すと、ホッと息をつく。

窓を閉め、室内へと目をやると、すでに全員集まっている。

『なんでまたレイのベットがないんですのぉぉぉぉおおおお！？』

そんな叫びを無視し、ルイスたちは話し合う。

『無視ですの！？空気ですの！？影薄いんです・・・影ないですの。・・・ってどうでもいいですの！ベットくーれーでーすーのぉぉ！』

「さて、調査結果を発表しようかな。」

『レイちゃん泣いちゃうですの！』とかいう声は空気の振動が何故か起こって聞こえてしまっただけのことだ。なんてことはない。

ルイスのスルースキルが磨きがかかり、伝説の剣のごとく美しくきらめいた瞬間だった。

「一言で言えば、この国には『異常なこと』がない。」

そうルイスが締めくくると、エリカが手をあげる。

「はいエリカ。」

「うん、ってことはあれ？つまり今回は平和に終わるってこと？」

そういわれるのも仕方がない。だが、そういうわけにはいかない。

「『雷山』っていうところがあるんだが。・・・これまたそのままだな、まぁいい・・・とりあえずそこに雷の大精霊がいるらしい。」

「――――らしい？」

そうエリカが疑問の声をあげる。

そう、それが今回の一番大切な点

「『登れたものがいない山』――――それが『雷山』だ。」

そう重く口から告げると、全員が沈黙する。

「え・・・それってヤバイってことかな？ルイス。」

ユーリが沈黙をやぶり、聞いてくる。

その言葉にルイスはうなづき、口を開いて説明を開始する。それは『雷山』についてだ。

「この山は延々と雷が降り続ける山だ。その雷は雷を防げる衣服でも貫くといった状態だ。」

そうルイスが継げた瞬間に、遠くからピシャァンッという大きな音がなる。

「ついでにいうが、この音は『特に大きい雷』の音だ。たまに聞こえる程度だが、この程度だと思わないほうがいい。」

全員が全員青ざめる。そんな沈黙に「フッフッフ・・・」という笑い声が聞こえると、ルイスたちはそちらをみる。

そこにいたのはクリスだった。クリスはクスクスと笑いながら手をピーンッと上げる。

「この私を忘れちゃいけないなぁ！」

そうかっこつけて言う女性に、ルイスたちは――――

生暖かい目をくれたやった。

「視るなァ！そんな目でみるなぁ！」

アリスがいきなりそんなことをいうが、誰も聞かずに

クリスが必死になって「私の能力はクリエイトだぁぁぁぁ！」と叫ぶと、全員が「あぁ～」といった表情になる。

「君ら・・・忘れてたろ・・・私この中で一番高い身分だよね！？そうだよね！？」

「・・・た・・・たぶんそうだな。」

「カイトぉ！？たぶんってなに！？」

クリスはちょっと涙を流した。

第七十二章『雷の大精霊』？（後書き）

やっぱい、書くのがダルい

というか、前書きで力を使い果たした気分。

短いかもしれないけど、許してください。

これ以上いったら、会話だけの文章になりそうで怖いんです。

二日か三日後くらいにがんばるよー！

作者はオタクです。
いまさら？とかいわんとって。

ついでにちょっとおかしいところがあったのを気づいて、変えました。
でも今日は最新話は書きませんよ！

第七十三章『雷の大精霊』？（前書き）

ヤバイ、俺オタクだわ
って友達にいったら、「ハァ？いまさら？」といわれて傷ついた今日この頃。
ヤケになって書いた今回の話。
ヤケにはヤケなりにｇｄｇｄな展開でございます。

第七十三章『雷の大精霊』？

―雷山―

ピッシャァァンッゴロゴロ、ピッシャアアンピッシャァンピッシャァンゴロゴロゴロ

雷がなるたびに、暗い山が昼のように明るくなる。

・・・むしろずっと昼のように明るい。

「「「「「「「「「「・・・・・・・・・」」」」」」」」」」

全員が唖然となる。目の前の景色をみれば当然のことだ。雷がやむことなく延々と落ち続けている状態、しかもその雷は大きく、おちたところにクレーターをつくっている。はっきり言ってしまえば

「わー当たったー」
←
死亡

こんな感じのが容易に想像できる。転生者だろうと死ぬ。感電死する。

「ルイス　は　ゴム手袋　を　装備　した　！」

ルイスがグッグッとゴム手袋を装備し、「ふぅ・・・」とため息をつく。

「・・・こんなんで護れるかボケェェッ！」

おかしなノリツッコミをして、全員にあきれられながらもルイスはとりあえず考えてみる。

「なぁ、みんな？雷ってどうやれば避けられるかな？」

そういうと、アリスがハイッと大きく声をあげ、手をピンッと上げる。それをみたルイスは、「ハイ、アリスさん。」と先生のようにいうと、アリスが立ち上がり。

「ピッコロ大魔王戦前の悟空のように雷より速く「却下」・・・といった修行を「却下っていってんだろうが！」・・・したいと「死ね！」ギャフゥッ！」

いつまでもやめないアリスにルイスは一撃加える。ヨヨヨ・・・と泣き崩れながらアリスは「お母さんをぶったね!?」とかいうが、全員が無視をきめる。

「私・・・心は男だけど体は女なんだよ、扱い悪いよね?ねぇ?」

そういってルイスにへばりつきはじめるが、ユーリが無理矢理引き剥がす。

ユーリは、ふぅ・・・とため息をついて、ルイスをみる。

「さっさときめようよ、もう真っ暗だよ?時間的に夜なんじゃないか?」

そうユーリがいうと、カイトがうんうんとうなづき、口を開く。

「たぶん、ずっと真っ暗だろうが・・・すでに夜だな、・・・っといまさら思ったんだけどさ。」

「ん?なんだ。」

カイトがちょっと言っていいのか悪いのか・・・といった感じに言葉につまる、それをみたルイスが、どうしたものかと聞いてみると、カイトは気まずそうに口を開いた。

「・・・俺の翼で護ればいいんじゃないの?」

その言葉に、全員が言葉を失った。

「・・・よぉし。」

そういってカイトが翼を展開し、全員を包むように動かす。クリスはその翼をみて、「わぁ～」っという感嘆の声をあげ、クイクイとひっぱる。

「・・・いや、やめてくんない？」

カイトがむずがゆそうに言うと、クリスはペコリと謝った。

「っというかカイトの翼ってさわったことないわね？」

「む・・・そうだな。」

エリカが『カイトの翼』についっていってみると、ユリアが同意する。そしてユリアは翼をおもむろに触れると、わしゃわしゃと触りだす。

「ふわふわだ。」

そういってユリアはピットリと翼に対して触れる。とても感触が気に入ったようで、顔をうずめてグリグリとし始める。

「これがあんな強い盾になるの？」

ルシルが不思議そうに聞いてくるが、当の所有者であるカイトはどうも言えない。原理が全く分からないからだ。

「っていうか、不思議っていえば、転生者全員の原理が分からないよね。」

ユーリがそういうと、全員がうんうんとうなづく。

「俺の魔術しかり、アリスの流の魔眼しかり・・・本当に分からないな。なんだろう・・・少なくとも『魔術が使える』ということは、『魔術を知っている』ということからなるものだしなぁ・・・」

「んーそれは漫画とかに限定されるんじゃない？『魔力がある』＝『発動キーをいえば魔術となる』といった魔法もあるわけだし――」

そんな会話をやんややんやとルイスたちはし始める。

そうこうしていると、ルイスはハッとしてカイトをバッとみる。

「なんだ？」

カイトが不思議そうにルイスをみると、ルイスはニッコリと笑い、言った。

「盾の羽って抜いたら元に戻るのかな？」

「は？なんでそんなことときくんだ？」

いきなり奇妙なことを言い始めたルイスにカイトは不思議そうに聞く。

そしてルイスは満面の笑みで答える。

「羽毛布「やめてくれ」・・・わかった。」

そんなグダグダな状態でルイスたちはカイトの翼に包まれながら、山へと登り始める。

第七十三章『雷の大精霊』？（後書き）

～世界少女の語り～
「リィンは満足しているでしょうか・・・」
「そうだね。満足してるといいね。」
「奇跡を与えるまでしてお願いしたんだから満足してほしいっていうかんじ。」
「そうだねー」
アハハ、ウフフ。
「・・・アリスの奇跡って聞いてない気がしてくるんだけど気のせいかな？」
「「「・・・・・」」」

第七十四章『雷の大精霊』？（前書き）

何故今回二話書いたのか？

かけそうだからだよ！

第七十四章『雷の大精霊』？

―雷山・頂上付近―

ピシャァァンッ、という甲高い音が当たりを満たしながら、薄暗い山道を延々と歩き続ける。山道といったが、そこにあるのは荒地だらけ、人の手は付けられていないのがわかる。雷により、道のようになった山道を歩き始めて三時間ほどになり、ゆっくりであるが、頂上へとルイスたちは近づいている。すでに頂上かと思われる場所が見えてきているほど。

「・・・ふぅ・・・」

ルイスはキィーンと耳鳴りのなる耳を抑えながら、嫌そうに耳を揉んだりしてみる。だが、それでも耳鳴りはやまない。すでに甲高い音を何度も何度も聞いており、その轟音は耳を貫くようだった。

他の人も同じようで、耳鳴りが続くことに少しばかり嫌気が差しているようで、顔をしかめている。

「・・・あとちょっとだ・・・ね。」

ユーリが翼のスキマから頂上にある塔をみる。そこだけ雷が全く落ちておらず、無傷の状態だ。

「あぁ・・・」

そのユーリの言葉に、ため息交じりにルイスがそういうと、全員が

コクリとうなづく。

それをみたルイスは何も言わずに塔をみる。

もうすこしだ・・・そう思い頂上へとつく――

―雷山・頂上―

「ふぅ・・・」

ルイスが小さく息をつく。

すでに塔は目の前。

この国には不思議なこともないと聞いていたのでルイスは『大丈夫だろう』とたかをくくっていた。

だが、甘かった。

ルイスがゆっくりと顔をあげ、高くそびえる塔をみた――

その瞬間だった。

ゴオォォォォォォォッ！という轟音がなり響く。

その瞬間、ルイスたちは目を見開いた。

塔の内部から大量の雷が発生し、塔を消し飛ばした。

――本当にけし飛ばしたのだ。

すでに塔は、塵すらあらず。そこにあったはずの塔は一瞬の雷により吹き飛んでしまう。

「なっ――――」

巨大な塔の内部にいた。この巨大な塔を消し飛ばした張本人を――

――ルイスは『見た』。

『ＧＡＡａａアアアアアＡＡａａａａａアａＡアア』

轟音、その声は鳴き声とは呼べないほどの轟音。先ほどまでの雷の音すら小さく感じるほどの轟音。

パリパリと空気がはじける感じがする。ルイスたちはいっきに身構える。

雷により引き起こされた煙が消える。

そこにいたのは――ライオンといえるものだった。

形は、ライオン。

鬣のようなものがあり、その鬣は、バリバリという音をたてながら放電する。そして色あいはエメラルドのようだ。

まるでそれら全てが電気であるかのようにその鬣はバリバリという音を流し、雷を放電し続ける。

――それならいい、それだけなら。

だが、その肉体は、・・・いままであったものなど小さく思えるほど大きい。

考えるならば――――『ビル』といえるだろうか。

大きいビルではない。だが、そのライオンは、とてつもない大きさを誇っていた。

アリスが『流の魔眼』を展開。そして展開した瞬間、叫ぶ。

「カイトォォッ！」

その叫びにより、即座にカイトはうなづき、天使の翼で防御状態を保つ。

次の瞬間、ガァァァンッ！という音がなる。その攻撃がライオンの放った電撃の攻撃だということが、スキマからもれる光によって理解する。

轟音、さきほどまでの雷などどうでもいいような轟音。

ルイスは冷や汗が頬をつたっていくのを感じた。

アリスがカイトに向かってコクリ、とうなづくと、カイトは翼を開く。

そこで、ルイスはみた。

『雷の大精霊』がそのライオンに取り込まれていることを

そして全員が聞いた。

『グガァァッギィィッ!?ガァァッ』

そのライオンのような魔物が、制御できない力に苦しむ声を。

『ＹＹＹＹＡＡＡＡＡＡＡＡ！』

叫びが聞こえる。そして、光が当たりを支配する。

カイトは必死になって再度展開するが、間に合わない。

ルイスは『想像を魔術へと変換』する。

「『すべての防壁よ』」

そういった瞬間に、火、水、光、風、土、闇、氷、雷、すべての自然系統の防壁が展開され、その雷を防ぐ。

爆音が当たりを満たし、ユーリは発生した煙を「『風を煙を散らせ』」といって、吹き飛ばす。

吹き飛ばし、目の前をみた瞬間にユーリは目を丸くする。

いや、ユーリだけではなかった。全員が驚きを隠せなかった。

『防壁が、ほとんどボロボロ』にされているのだ。

「・・・ッ！？」

アリスが息をのむ。次がくる、とでもいいたいのだろう。

即座にユリアが『麒麟の剣』を抜く。そして即座に投げ捨てる。

そして剣が十数メートル先へと刺さった瞬間に、刺さった場所に、雷が落ちる。

再度・・・轟音。

「『すべての防壁よ』」

そして同じようにルイスの防壁、ユーリの風により、煙が晴れる。

そこには麒麟の剣があった。

「・・・大丈夫なようだ。名前になっている麒麟とはいったいなんだろうか・・・とても気になるな。」

即座に向かって剣をユリアは引き抜く。ルイスは苦笑いするしかない。

そして、ルイスは真剣な顔になり。

「『我が手に在れ！【白銀の剣】』ッ！」

叫ぶ。

その瞬間、雷が支配していた光を、白銀の光が満たし始める。

それは美しく。暗闇を創ってきた剣を弾き飛ばし、丸い円を作り出す。

キラキラと太陽の光がルイスたちへと差し込む。

ルイスの手には――――『白銀の剣』が握られた。

再度の雷。

ルイスは負けることなく剣を振る。

その瞬間――――だ。

『白銀の剣は雷を切り裂いた。』

「もはや・・・なんでもありだな。」

悪態をつきながらもルイスは笑う。

ユーリもエリカもユリアも武器を抜き、カイトは翼を大きく広げ、アリスは魔眼を展開し、魔術を展開する。クリスは作り出したロケットランチャーを弾とともに持つ。ルシル、レイは魔術を展開する。

全員が軽い笑みを浮かべ・・・走り出した。

第七十五章『雷の大精霊』？（前書き）

・・・この小説以上に更新しまくっている小説ってあるのかね？
作者暇人ジャアリマセンヨー
この小説一話一話が短いから速く書けるため、一日ｏｒ二日に一回更新ができるんですよー
・・・この更新速度って丁度いいのだろうか？
そもそも最初は『暇だから書いた』物語から始まり、感覚で物語を書き続けている感じですからね・・・いや、考えてますよ。ちゃんと、物語は。
一話一話を長くしたほうがいいですかね？
〇の大精霊は１～５と決定していますが、たまに収拾つかなくて長くなったりしますが、それをなくしたほうがいいですかね？
・・・文章自体良くなってきてるんでしょうか、心配です。

第七十五章『雷の大精霊』？

―雷山・山頂―

ゴォォォッチュドォォォンッ

あたりに轟音が再度響き渡る、白銀の剣で斬った後、さらに巨大な雷をだしてくる。悲鳴のような叫びを獣をあげ、暴走しているにもかかわらず、本能的なのか・・・巨大な雷をだし、ルイスへと打ちつける。

「ぐ・・・ががががが！」

必死に白銀の剣で斬ってしまおうとするが、雷の力より押され気味になる。ルイスは必死になって無理矢理押し返そうとする。

すぐにカイトが飛び出し、翼により防御する。ギリギリのところで耐えたルイスは、力から解放された瞬間にため息をつき・・・

「『テレポ』」

即座に魔法を想像する。そしていっきにライオンの足へと到着する。まるで巨大な柱のような足を・・・無理矢理切る。

ズバァッという音もならず、すり抜けるように白銀の剣は切り裂いた。

「・・・え？」

斬れたのか・・・まったくわからず、思わずルイスは切った場所をみると、グパァッと足であった部分が、切った部分から開いていく。

『ギ・・・ガァァァッ！』

痛みにであろうか、叫びを響かせ、ルイスは「うるせっ！」といって、耳に手をあて、飛んで戻る。
まぁ、それでも音が和らぐわけでもない。

キィーンと鳴り始める耳鳴りに、イラッとくるもなんとか心を落ち着かせてルイスは前を見据える。

「『光よ、刃となりて敵を切り裂け』」

ユーリが即座に魔法を構成させ、攻撃を始める。エリカが鬼を召喚したあと、斧を持たせいっきにフル。

ガガガガッという音と、ザシュッとう切り裂きと貫きの音が何度も何度も無限に発生し続ける。

『ヴォオオオオオオオッ！』

そして、あたりがいっきに光へと満たされ・・・

「『すべての防壁よ』」

即座にルイスの防御壁により雷は防御されようとした。だが、今度ばかりはさらに強く、その防壁さえも貫き、爆発により風が巻き起こる。

「キャァアッツ！？」というエリカの悲鳴を感じ、ルイスは想像を開始し、「『風よ中和せよ』」と魔術を宣言し、爆風を無へと返す。

「うぅ・・・」

エリカが涙目で自分の髪を触る、ボロッボロだ。

「うがぁぁぁっ！」

そして何か切れてしまいました。

「『氷よっ！捕縛せよ！』」

エリカが魔術を開始、体すべてが氷づけにされる。

「『氷よッ！対象を貫け！』」

魔術を再度エリカは構成、下から貫くように氷が発生し、腹へと突き刺さっていく。

パキィンッという音をだし、氷の刃は氷ごと敵を貫こうとするが、敵は固い、敵を打ち上げるだけで氷の刃は突き刺さることはない。

「ぐぅぅー！」

なんか癇癪を起こしているエリカを横目に、打ち上げられている魔物に、クリスはロケットランチャーの照準をあて・・・打つ。

ゴォォンッという爆音がいっきに巻き起こり、敵は仰向けにされる。

アリスが流の魔眼で流をみると、こちらをバッとみる。

「まだだ。」

そう宣言されたので、ルイスは飛び出して雷の大精霊を助けようかと思ったが、押しとどまる。

その瞬間――――

敵の周囲１００メートルに巨大な雷が落ちる。

そのシーンをみたルイスは冷や汗を描いた、目の前にあるのは巨大なクレーター。

「うーわー。非常識ッ！」

悪態をルイスはつくが、剣を即座に構える。

そもそも転生自体が非常識なことなのだ、魔法もあることもすでに容認している。いまさら呆然としている理由などあるものか

・・・というかカイトがいないことにルイスは気がつく。

「カイト？」

そう大きく声をだすと、カイトが全力で走ってきた、ルイスは「どこにいってたんだ？」と聞くと、カイトは箱を一つ、そして本を渡してくる。

「・・・なんだこれ。」

そうルイスがきくと、カイトもなにかはわからないらしく、首をかしげる。その行動が妙に女っぽくみえ――

ゴォォォッ！

「『すべての防壁よ』――話しくらいさせろよ！」

雷を発生させたであろうライオンへと睨みながら、ルイスは箱をパカッとあける。

「――そこには、天使の輪があったとさ。」

それを全員がみた瞬間に、カイトがなんだか悟ったように言った。

「・・・ドンマイ。お前専用だよこれ。」

「うるさいよ！？」

いつもは意外にクールなカイトは顔を真っ赤にしていった。もう『天使の翼』と自分でいったんだからお似合いだ。

魔道書はテコテコと歩いてきたルシルが取って、開いていた。

「・・・むー『無力化』？」

ルシルがポツリとそうもらした瞬間に、ルイスがバッとルシルをみて――

ゴォォォッ！

「だーかーらー！『すべての防壁よ』。」

そして即座にルイスが魔法を展開させ、防御する。

「・・・ちょっと二人ともつかって「イヤだ！」・・・カイト、お前の天からの命令だ。」

カイトは顔を真っ赤にしてブンブンと首を振り続けるが、ルイスは無理矢理輪を取り上げ、カイトの上へと置く。

「あぁっ！？」

天使の輪であろう物は、カイトの上へと・・・停止する。

「・・・」

「決まりだな。じゃ、攻撃よろしく。」

さめざめと泣き始めるカイトは、なんていうか綺麗な天使様だったりする。

ルイスは体制を低くして、「『テレポ』」といった魔術を発動し、敵の上へと移動する。

「『白銀の剣よ・・・拡散せよ』」

空中でイメージする。白銀の力を、そして・・・いっきにふる。

剣からでたエネルギーは、刃へと変化させ、敵へと討ち、敵を切り

裂く。

『グガァァッ!?』

と敵がひるんだところで、ルイスは再度「『テレポ』」を発動し、さらに上へと飛んでみる。

そしてカイトをみる、カイトはすでに立ち上がっており、フルフルと振るえながら魔法の構成をたてる。

ルシルは本をじーっとみながら、ブツブツと魔法を唱える。

「『光よ、対象を破壊しつくせ』・・・フフフ。」

なんか黒い笑みを浮かべるカイトに、ルイスは冷や汗を浮かべるが、カイトの上にある輪が光をさらに放ち始めるのをみて、「（あぁ・・・なんかあるなぁ・・・）」と思うので、「『テレポ』」と再度上へととんだ。

そして次の瞬間。

光があたりを完全にみたし

とてつもない光の巨大な光線がライオンを飲み込んだ。

『グギャガアアアァァァ!?』

全員がその状態に呆然とし――――

アリスだけが

「すげぇ！生ファイナルフラッシュだ！」とかいいながら喜ぶ。

「（天使の輪は増幅効果でもあるのか？）」

と、ルイスは考えていると、ルシルが本を読み終えたのか、吹き飛ばされたライオンへと指をさす。

ボロボロなライオンへと宣言した。

「――対象を捕縛せよ」

そういった瞬間に、ライオンはピクリとも動かなくなる。咆哮さえも起こらず、ライオンは停止し続ける。

それをみたルイスは、好機といわんばかりに笑みを浮かべ、ライオンを――一刀両断した。

ここにて戦いは終結したのであった。

第七十五章『雷の大精霊』？（後書き）

カイト・・・真面目なんだかネタなんだかわからなくなってきた。

ルシルの魔道書はそのまんま『グリモワール』と呼ぶことにします、。

ファイナルフラッシュはベジータの攻撃ですよ。

第七十六章『辛かった戦いも終わり』（前書き）

始まりと終わりを兼ね備えてみてみたりする。

第七十六章『辛かった戦いも終わり』

―雷山・山頂―

ルイスは、戦いの終了を目で感じ取ると、ゆっくりとひざをまげ、地面へと体を預ける。

ドサッという音がして、ルイスは上をみる。白銀の剣が横でカンッカラカラ・・・という金属音を立てて倒れるのをきいて、ルイスはゆっくりと白銀の剣をみる。

そして再度、ゆっくりと上をみると、白銀の剣がきたときにできた、雲の穴がいつまでも元に戻らずそこにあり、太陽の光が差し込んでいる。

その太陽の光は、白銀の剣へとあたり、白銀の剣は虹色のような色をだして光り続け、その光はどこまでも届いていく。

『・・・すまなかった。』

隣で雷の大精霊がポツリとルイスへといった。

ルイスはすこし目を閉じて、ゆっくりと目をあけた。

「いいさぁ・・・もう、慣れてるから。これも試練じゃないかな。」

そういってルイスは顔をゆがませ、クツクツと笑う。それをきいたユーリも、苦笑いを浮かべる。

そこに、８人と一人の大精霊の笑い声が発せられる。

白銀の剣は、いつまでもいつまでも光っていたという。

―サンクルダート・住民―

サンクルダートの住民たちは、その光景に息を呑んだ。いつまでも雷の落ちていた山、分厚い雲に覆われていた山、その山の頂上部分が、ポッカリとあき、山を照らす。

そして反射しているのが、何色もの光を発していた。

彼らは現在、広場にたくさん集まっていた。

それは何故だろうか？

それは、異常なほどの轟音がここまで伝わっていたからだ。

住民たちは、いきなりのゴォンッという轟音に飛び起きる。ただえさえいつも雷の音に慣れていたのに、いつもとは比べ物にならないほどの雷を落とされ、驚きベットから飛び起き、そして広場へと集まったのだった。

そこでみたのは、何度も何度も落ちる、桁違いの雷と、遠くからでも目視できるほど大きな魔物。

それを見た瞬間に住民たちは慌てふためいた。

『この世の終わり』『もうダメだ。』『逃げなければ』――その声は、おびえのみだった。

そのときだった。白銀の光が、山へと差込み、分厚い雲をつきぬけ、魔物がいる場所へと降り立ったのは。

「勇者だ・・・！」と、誰かがポツリと洩らしたとき、場は恐怖から興奮へと移り変わる。

見えなくてもかまわない、住民たちは勇者へとエールを送る。

何度も何度も何度も、雷が落ちたとしても、白銀の光はやむことなくきらめいていく。

「あぁ・・・」と住民たちは感嘆の声をあげた。

そして、巨大な光・・・とある人が巨大な望遠鏡を取り出し、それをみたところ、その望遠鏡を覗いた人が、「天使だ・・・」とポツリと洩らす。

そのときの歓声はすばらしかった。

そして、最後の・・・白銀の光のきらめきにより、魔物は消えていく。

『ウオオォォォ！』という叫びが上がる。

『勇者様ー！』などの黄色い歓声も上がる。

すべての人々には、歓喜の心が満ちていた。

―雷山・頂上―

雷の大精霊は、ルイスをまっすぐみる。

そして、靴を取り出した。

『雷の靴・・・礼だ。本当に・・・ありがとう。』

ルイスはゆっくりと手を差し出し、その靴を受け取ると、影の倉庫にしまう。

『・・・つけぬのか？』

そう雷の大精霊は言うと、ルイスは苦笑いをしながら頭をかき、いったのだった。

「必要なときがきたら・・・な。」

そんなルイスの苦笑に、雷の大精霊は微笑んだ。

ルイスは雷の大精霊へと深くお辞儀をすると、身を翻し歩き始める。

その背中が、まるで『大丈夫だ。』といっているようだ・・・と雷の大精霊は感じた。

大精霊は、そのほかにも感じていた。

深い深い、暗闇を

そして

それを貫かんばかりに、光る、剣とその持ち主の心を

暗闇につつまれ、城のような場所があった。

その場所に強い強い壊れた力があり

光の下に

強い強い聖なる力があった。

大精霊は思い出す

決意の眼をして白銀の剣を片手に持った勇者の名を、顔を

大精霊は魂に刻み付ける

今、不屈の魂をもち、剣をもった勇者の名を、顔を

第七十七章『召喚の大精霊』？（前書き）

これが終わったらあと二つの大精霊になりますね。

たぶん１００までには終わると思います。

おふざけっぽいおふざけはない感じにしましたが、これでいいのかな？

第七十七章『召喚の大精霊』？

―サモニア・召喚の国―

「ふぅ・・・もうすぐだな。」

ルイスたち一行は、馬に乗りながら次の国へと進んでいた。名前は『サモニア』、別名召喚の国。

「召喚の国、っていうぐらいだからね、龍とかと一緒に生きているっていうらしいよ。」

『サモニア』

別名：召喚の国、共存の国

召喚の大精霊、というのは、自然にある大精霊のように、何かを操るというわけではなく、力を貸してもらう大精霊だ。

力を貸してもらう、といっても弱いわけではなく、もともと召喚の大精霊の強さは１２大精霊の中でもベスト３にはいるだろうといわ

れるほど強力なほうだ。

それゆえ、大精霊に付き従うのは、最強種の龍だろうが、小さい虫だろうが多種多様にある。

だからこそ、『共存の国』と呼ばれて、凶暴だといわれている動物だろうが、人間と共に仲良くくらしている。

「――というわけさ。」

「・・・ユーリ？喋ってたっけ？」

「それは言わない約束だよ。」

全くよく分からない会話をしながらルイスたちは走っていく。

「っていうかパンフレット本当になんなんだろう・・・」

「・・・それも言わない約束だよ。」

ある程度はしらせていると、国が見えてくる。ルイスが馬を走らせながらも、もうすぐ到着か・・・と小さくため息をつくと、聞こえてくる音に馬を止める。

そんなルイスをみた後ろのユーリ、エリカ、カイト、ユリア、アリス、ルシル、レイ、クリスがいっせいに馬を止めて、ルイスをみた。

「どうしたんだ？」

全員が思っているであろう言葉を、カイトが代表して聞いてみると、ルイスは上を口をあんぐりとあけて指をさした。

「上？」

カイトが上をみると、カイトでさえも呆然とする。

「ねぇ？なんなの？」

エリカがカイトへと不思議そうに聞くと、カイトは「見ればわかる」とでもいいたげに上をさす。

ふぅ、とエリカがため息をつくと、上をゆっくりとみる。

――そこには巨大な龍がいた。

ギュオォォォッォッという空気を切る音を出しながら龍は通りすぎ

ていく。

「――――さすが、召喚の国・・・」

ユーリがそうボソリといった。

―サモネア・アノネス山―

「何故『アノネス山』と呼ぶか、それは歴史家と呼ばれる『アノネス・マフィーラー』という男の人が、この場所からある遺跡を発掘したからなんだって。」

「ある遺跡？」

「言われているものは『勇者の遺跡』と呼ばれているらしいよ。」

勇者の遺跡ねぇ・・・とルイスが胡散臭そうに思うと、山からの光景を見る。

「へぇ・・・やっぱり『召喚の国』『共存の国』・・・だね。」

そういって面白そうにルイスは笑う。

ルイスだって男、この光景に関してはわくわくしてくる。

国の上に龍が何匹も飛んでいる。龍じゃないもののもたくさん居る。その光景が幻想的、まるで魔法の世界・・・いや魔法の世界なんだし異世界なんだけど、その光景にはドキドキし、高揚感が巻き起こる。

「すげぇ・・・な。」

思わずそうルイスは口にすると、隣にいたカイト、アリス、クリスがコクコクとうなづく。

「あぁ、こんな光景みたことないぞ。」

感嘆の声をカイトがあげ、アリスもクリスも感想を止まらずに口々に言い出す。

そうしていると、ユリアが思わずバッと国をみる。

「・・・どうした?」

「危険、だ。」

ユリアの言葉に、『?』を浮かべてルイスはユリアをみる。そしてその表情をみたときに、その真剣さに驚く。

「何が・・・危険なんだ?」

そうルイスが言った瞬間に

『ドォォンッ』

「――――!?」

爆発音に全員が国へと視線を向ける。

そこにあったのは、もくもくと煙をあげる民家と・・・

狂ったように飛び回り、火を噴く龍たちだった。

第七十八章『召喚の大精霊』？（前書き）

ちょっとふと考えたこと～
ネギま！とかに主人公もしくは仲間を投入したらどうなるんだろう？
全員精霊もちのうえ、バカみたいに強い武器もってるよ？
まぁまだアリスとクリスとレイはもってませんけどね。

第七十八章『召喚の大精霊』？

―サモニア―

ドォォォンッという音が起こったかと思い、街の人々が上を向く。
その眼に映ったのは龍が暴れている姿。その姿を見た瞬間に、その眼には恐怖が映る。

街の中に行きかう音は、叫びと爆発音。

「あぅっ・・・」

とある少女が石に躓き転ぶ。そしてその少女には、龍からの炎を発せられる。

少女は上を向いて、何が起こってるかもわからず、死を覚悟した―

――

そのときだった。

目の前が白に覆われ、居たはずの龍が吹き飛ばされている。

少女はその龍をみて、呆然としていた頭がハッとする。

「に・・・にげなきゃ・・・！」

たくさんの逃げる足音の中、救われた少女はあの光に『ありがとう』と心の中で思い

村人はあの光に、希望をもつ。

―ルイス―

「・・・なにそれ。」

ルイスがクリスがもつ、さっき龍を吹き飛ばした銃の形をした機械を指す。するとクリスは苦笑いをしながら

「・・・ハイメガ粒子砲？」

と、疑問文で返した。

「なんで疑問文!?っていうかそんなのいつ持ってた!?」

「名前なんてないのさ!『あ・・・創ってみよう』って思ったからつくっただけなんだから!雷の大精霊と契約してやっと本格的なものが創れるのよ!別にちょっとぐらいお茶目な感じはいいじゃない!」

「いや・・・それを『お茶目』で創ったならおかしいと思う・・・」

そうルイスが引きつった笑顔でいうのはもっともだ。お茶目で大量

破壊兵器を創るとか。

ルイスは「（まぁ・・・気にしたら負けだよな。）」というこの世界からサラに成長をみせたスルースキルでその最終兵器作成者から眼をそらし、街をみる。

「・・・とりあえずいくぞ。」

そうルイスがいうと、全員がうなづく。

そうしてルイスは走り出し・・・

「・・・テレポでいけないの？」

「いや、あれ想像でここにいるって考えて、テレポっていうんだよ・・・そこに石があったらめり込むよ？」

ユーリの言葉にルイスが冷静にかえし・・・

「いや、だったら空中にやればいいじゃない。」

エリカのさらに冷静なつっこみに・・・

「「そうだったーーー！」」

ルイスとユーリが同時に叫ぶ。

「・・・ルイスはわかってたけど、ユーリも天然的にバカだよね。」

「天然バカ、というやつか。」

「いやー！やめてー！」

エリカとユリアの言葉に、さすがのユーリも顔を真っ赤にして羞恥を隠せないようだ。

ルシルの「いいこいいこ」といいながら頭を撫でられているのが羞恥心にブーストをかけ

カイトやアリスやレイやクリスからの生暖かい笑顔がもう宇宙へ飛び出していきそうなくらいの威力まであげる。

「・・・さってー、さっさといこーかー！」

ルイスは棒読みで知らぬ存ぜぬを押し通す。

そして想像を開始する。

「『テレポ』」

瞬時に全員が掻き消え、サモニアへと飛んでいく。

―サモニア―

街の人々が逃げていく。

その瞬間、光が発せられ、人々が走りながらもその光をみる。

「ふぅ・・・」

大人数の人々が居た。

「・・・っと、『防壁』」

少年の言葉で、空に薄い色をした膜が出来上がる。

それが龍の息吹を無効化する。

街の人々は全員が足を止め、少年たちをみる。

『救世主』という言葉が人々の頭に浮かび上がり、人々は少年に平和を願った。

――ルイス――

「っと・・・応急処置みたいなもんだけど大丈夫だな。」

俺がそういうと、全員がうなづく。

カイトは顔を真っ赤にしながら天使の輪を装着。

ユーリは鳳凰の杖を、エリカはアネモイの斧を、ユリアは麒麟の剣をルシルはグリモワールを取り出し、紐解く。

「『テレポ』」

魔術を宣言する。そうすると目の前が真っ暗にし、光が入りはじめる。

その瞬間に大きな足場を想像し、宣言する。

「『足場よ在れ』」

そう宣言して魔法を創造する。

俺は透明な足場へ軽く足踏みをすると、小さくニヤリと笑う。

「大きさに関しては、その国を覆うくらいにはしたから。」

そう俺ががいうと、全員が「わかった」といった。

そして俺は、龍をじっとみる。そして眼を見開いた。

「・・・変な男が乗っているな。」

「やっと気づいたか！」

男は俺たちに対して声を張り上げる。

「我は邪神の配下の一人！パパスッ！」

「なんだ、やられフラグビンッッビンじゃねぇか。『ぬわーーーー！』」

「ルイスゥゥ！ひどいぞ！いい親父さんになるんだよこの方は！」

「なんだかしらんけど黙れェェェェッッ！」

パパス　は　キレて　おそいかかってきた　！

第七十八章『召喚の大精霊』？（後書き）

うーん、カイトのイメージは・・・あれだな。

ちょっと前、友人宅でみつけた・・・なんだっけ？

クロウカシスだったかな。ちょっと検索・・・あぁあってる。

その髪がピンクっぽい娘・・・それに似ている。

名前調べておこうかな？

っていうかこれ、Ｒ１８じゃないか！

第七十九章『召喚の大精霊』？（前書き）

友達が『ミステリート2』がでねぇぇぇ！って叫んでました。
ＰＳＰのやつだった気がするけど、新しいのでるのか？と聞いたら
何かシランが怒られた。

第七十九章『召喚の大精霊』？

―サモニア―

『ブォォッ！』という音を鳴らして龍が炎を吐く、それをユーリが『水よ、押し返せェェッ！』と魔術を発し、押し返す。

その水にユリアは麒麟の剣の力を発し、雷を帯電させ、帯電した水流として龍へとぶつかる。

『グォォォッ！？』

龍は特にダメージは少ないものの、電撃により体があまり動かない状態のようだ。

「さすがに龍でも大精霊には叶わないらしいね！」

そうユーリが言うと、全員がうなづく。

「ッチィィッ！」

敵であるパパスが盛大に舌打ちをすると、龍から飛び上がり、近くの龍に乗り移り、前に手をかざす。

「落ちろ蚊トンボォォ！」

「・・・ごめん、突っ込まないでいいかな？」

「全くお前らの言動がわからないのに、なんか悲しくなるのは何故

ェ！？」

なんだか知らないけれど、ルイスたちの前に現れる魔物はみんな同情したくなるように出来ているのだろうか。

パパスの龍の氷の息吹をエリカが鬼の斧の一振りにて吹き飛ばす。

アネモイの斧もだが、みんなの武器はチートだ。

ルイスは、とりあえず今の現状を無視し、魔術を想像する。

「『連射せよ』」

創造、光の弾を大量に生成、炎の弾を大量に生成、水の弾を大量に生成、氷の弾を大量に精製

その４つの弾がいっきにパパスに襲い掛かっていく。それをパパスは龍をたくみに扱い、息吹で落とし、避けたりとする。

「弾幕薄いぞ！なにやってんの！」

全員がアリスの発言に無視を決め込み、相手の出方を伺う。

「フハハハ！ゴミのように死ねェ！」

やられ役、主人公の上へ行くための段差役みたいな言葉を発して、パパスは龍を操り全部の龍から息吹を発せさせる。

「『すべての防壁よ』」

そうルイスは魔法を宣言し防御を展開させる。

防壁にぶつかり何度も何度も爆発の轟音をならしながらルイスは想像に集中していく。

「フハハ、いつまでももつと思うなよぉぉぉおお！」

何度も何度も爆発音が巻き起こる。さすがにこの大量の属性からできた防壁の想像を維持できるのもキツイ、ルイスはすこし冷や汗を流すと・・・

ルシルがビッと相手をさす。

「む・・・なんだ？」

「『無力化』」

そう宣言すると、パパスののっている龍がガクンッと動かなくなる。

「ッ！？なんだと！？」

パパスは攻撃も受けないのに動かなくなった龍に驚き、動きが鈍る。

その動きを『知っていた』アリスは即座に間合いをつめ。

「お前だ！いつもいつも、脇から見ているだけで、人をもてあそんで！！」

何かアリスが言っているが全員が完璧にスルー、知らない人も多いだろう、というか全員知らない。

だがツッコムと負けだという考えから、誰も何も反応しないのだ。

「勝てると思うな、人間ッ！」

「許せないんだッ！俺の生命に変えても！体に変えても！こいつだけはッ！・・・時間がたんねぇ。」

最後になにかアリスがいったかと思うが、誰もが反応しなかった。

アリスは相手の居るところよりすこし上空へいったかと思うと、風の精霊より力を借り、いっきに自分を回転させ、相手の体を思い切り下に蹴る。

それをパパスは防ぎきり、龍の尾の一撃でアリスは吹き飛ばされる。

「グゥゥッ！！」

『『風よ、中和せよ。』ですの』

即座にレイが風の精霊によりアリスが飛んでいくのをとめる。

「クハハ！貴様らごとき・・・我に敵うと・・・なんだこれはッ！？」

吹っ飛んでいくアリスをみて、余裕の表情をして、笑うが、腕にある奇妙な物体をみて声を荒げる。

それをみたクリスがクスリと笑って告げた。

「爆弾♪」

いたずらが成功したように軽快にクリスは笑う。

アリスはその声をきいてニヤリと笑う。さすがに痛かったのか、わき腹を抱え「『水よ、我を癒せ』」と魔法を使い続けている。

「な・・・なんだ!?こんな形状の爆弾はみたことがな・・・ッ!」

「特性だよ、うん。時限爆弾みたいなもの・・・かな?はい、3――2――」

さすがに近距離で爆発されては魔族である自分に傷は負わせられないだろうが吹き飛ばされてしまう。

パパスはあせり、取ろうとするが、間に合わない。

「0♪」

ゆっくりと告げたクリスの言葉に重なり合うように爆発の轟音が巻き起こる。

「グゥゥッ!?」

爆風によりパパスは下へと吹き飛んでいく。そこへと狙いを定めるのは・・・

「・・・えっと・・・」

カイトだ。アリスからもらった紙を眺めながら、なんだかダルそうにしている。

「『マススパーク』」

そう叫んだカイトの魔法が構築され、光線が吹き飛ばされていく。

正直カイトは光線といわれ、『光』なんだか『雷』なんだかわからなかったから、アリスにきくと「恋の魔法です」と答えが返ってきた、もうどうでもよく感じたのでとりあえず光と雷をあわせて撃ってみたしだいだ。

「ぐがぁぁぁっ！？」

パパスは飲み込まれていくが、魔力により盾を形成しその魔法を防いでいく。

「ぐぅぅ・・・さすがにきついものだ・・・が！」

盾によりカイトの魔法が完全に無効化され、ルイスたちは目を丸くする。

そこにいたのはボロボロになったパパス、さすがにダメージは聞いているようだ。

「まだまだなんだよォォォ！」

次の瞬間、パパスの体は黒く変色してきた。

「・・・第二形態とか・・・」

軽蔑したようなルイスのめんどくさそうな声に

『黙れェェェ！』

形態変化しながらもツッコンでくるパパスはすばらしいと思った。

第七十九章『召喚の大精霊』？（後書き）

？で終わらせる気満々だったけど、また？で終わるなこりゃ・・・

第八十章『召喚の大精霊』？（前書き）

三人称が多すぎて、ルイス視点とかやると間違えて、普通は『俺』なのに『ルイス』って書いちゃうんですよね。
最近、テンションだけで書いている部分がなくなってきた。

第八十章『召喚の大精霊』？

―サモニア・城―

「・・・」

サモニア王『ザフィーネ』は王座から降り、ゆっくりと窓へと近づく。

「危険です！いつこっちにくるかもわかりません！逃げましょう！」

兵が、大臣が、口々にそういってくる。だが王にはわかっていた。もし、彼らが負けた場合、逃げる場所などないということに。王の視線の先には『勇者』がいた。そして『英雄』がいた。彼らは必死に戦っている。逃げてどうなる、彼らは護るために戦っている、護るために存在する王が、いま逃げて何になる、いや・・・なにもならないだろう、ザフィーネはじっと戦闘をみつめる。国の王として眼をそらすわけにはいかない。否・・・そらしては、いけないのだ。

「お父様・・・」

「父さん・・・」

姫『ロゼッタ』王子『クリエス』は王をみて、王の視線の先をみる。

魔物は黒く、穢れていくように黒に侵食されていく。

『ＧＹＡＡＡＡＡＡＨＹＡＡＡＡＡＡ！』

ビリビリとした笑い声がここにまで響き渡る。

「どうかお願いだ・・・勝ってくれ！国民を、私の家族を・・・護ってくれ・・・！」

その王の言葉をきいた姫と王子は願う。

「（お願いです・・・！）」

「（勝ってください・・・！）」

ただ・・・彼らの勝利を。

―戦闘―

『ＧＹＡＡＡＡＡＨＹＡＡＡＡＡ！』

ビリビリと空気を揺らす声に、思わずルイスは耳を手で覆う。

『遅い遅い！遅いんだよぉぉぉ！』

そのスキを見逃すことのない、パパス（第二形態）は、突っ込んで

きて、ルイスへとけりを放つ。

「フッ！」

それに即座にルイスは反応し、蹴りを流すように手を動かすが、思ったよりも威力が高く、軽く吹っ飛ばされてしまう。

「ッあ・・・！本当に何者だよ・・・」

そう悪態をつきながらも、ルイスは想像する。速度増加・・・

「『ヘイスト』」

そうルイスが告げた瞬間に、透明な時計がルイスたちに現れ、時計が高速移動を始める。

「くるぞぉ！」

アリスが『流の魔眼』を発動し、叫ぶ。それに全員が反応し、飛びのき移動をはじめる。

『イイイイイイヤッハァァァ！』

嬉々とした叫びに、ルイスたちは嫌気がさしてきた。だが、嬉々とされるほどに強い。闇の大精霊にいたやつと比べてもいいだろう。

「（スピード・・・一番速いヤツは・・・ユリアだ。）」

気の爆発力による移動、あれのスピードは本気の状態はみたことがない。・・・いや、みたことはあるのかがわからない。聞いたこと

がないからだ。

『どぉしたぁぁぁ？どうしたんだぁぁぁ？』

「チィィッ！」

挑発するような言葉遣いで、パパス（第二・・・パパス２でいいか）パパス２は攻撃を仕掛けてくる。

「『結界』」

ルイスは展開させる、どっちにしろ一瞬で破壊されるのは眼に見えているが、ルイスはパパス２の拳に破壊される結界をみながら、ルイスは眼をそらさずに魔術を想像し、創造を始めた。

「『収束、敵を捕まえよ』」

結界の破片がすぐに集まりだし、手首足首に装着される。

『ウウウォォォォ！？チィィィッ！無駄なあがきをぉぉ！』

「一々小文字つけなきゃしゃべれねぇのか！『吹き飛ばせ！光の光線』よ！」

ルイスが魔法を創造し、それをみたユーリは即座に精霊につげる。

『グゥゥッ！』

弾き飛ばされるパパス２へと

「『すべてよ凍れ』・・・うわぁ・・・・魔力馬鹿みたいに使う。」

吹き飛ばされ、即座に体勢を整えたパパス2が凍りに包まれる。

『小癪なァァァ！』

凍らされながらもパパス2は抵抗し、凍りきった瞬間にひびが氷へと出来ていた。

アリスはそれをみながら、あせることなく、告げる。

「『時よ――止まれ』」

ゆっくりと、そう告げた瞬間に氷はひびわれた瞬間で止まる。

『貴様・・・らァァァッ！』

パパス2の怒りの声がかかる。いい加減諦めろ、とでもいいたいのだろうが。

だが、『諦めない』、現状『程度』で諦めるやつじゃない。力がある。『ダンプカーに引かれても死なない力が』『銃で撃たれても死なない力が』『マンホールから落ちても死なない力が』『支えてくれる仲間と言う力が』この力を使わずしてどうする。

『うりゃー！風よ拘束せよー！ですのー！』

まったく久しぶりなレイが、ひび割れた氷の中の『風』を利用し、相手を固まらせる。

ルシルは詠唱を終えると、パパス2を指差し

「『無力化』」

そう告げる。

だが、相手の抵抗も高く、異常なほどの魔力を噴出し、どうにか離れようとする。

「ユリアァ！」

「・・・わかった。」

ルイスが呼ぶと、ユリアはコクリとうなづく。・・・意外な以心伝心にルイスは一瞬唖然とするが、ニヤリと笑い。

「いくぞ！」

『ヴォォォォッ！』

無力化と拘束を無理矢理はずし、魔力を大半失い始めたパパス2へと気の爆発力により移動する。

それはまるで戦闘機のごとく突っ込んでいく。

「アバババババ！アバババ！」

前からくる風により顔が変形していくルイスを尻目に、ユリアは直進する。

『っちぃぃぃ！』

パパスはそれをみて、攻撃を放つ。

「だが、その攻撃は断るぞ。」

いつの間にか目の前に移動していたカイトが翼によりその攻撃を無効化する。

そしてカイトは敵の頭を蹴って移動する。

それにより、スキが生じ・・・

「『我が手に在れ！【白銀の剣】』ッ！」

ルイスの手に出現した白銀の剣は白銀の光を知る中で最も強く輝かせる。

『グゥゥッ！ガァッ！』

白銀の剣はパパス2を貫き、パパス2は消滅する。

ユリアがルイスを手放し、近くの屋根へと降り立つ。

次の瞬間、町から歓声が巻き起こる。

そしてルイスは・・・

笑いながら、小さくため息をつ・・・

「・・・ルイスぅぅ！？」

ユーリの自分の呼ぶ言葉にユーリへとルイスは視線をむける。

ユーリは上を指している。

「・・・上？」

不思議そうにルイスは上をむき・・・

振ってきた龍に巻き込まれ、街へと落ちていった。

「・・・まさにルイスクオリティー・・・」

クリスはあきれながらもそうボソッと言った。

第八十章『召喚の大精霊』？（後書き）

？は、とりあえず大精霊に会うことから始まるでしょうか。

終わったら次は暗黒の大精霊になります。

空間の大精霊は最後ですね。

第八十一章『召喚の大精霊』？（前書き）

色々とフラグ回収中。

第八十一章『召喚の大精霊』？

パパスが消滅する。

パパスは、意識が薄れながらも、なんだかいわなければいけない衝動にかられていく。

――何故だ

――何故、こんな気持ちが巻き起こる。

ゆっくりとパパスは口を開き、最後に――――いった。

『ぬわー』

それを言った瞬間に、なんかスッキリした顔でパパスは消えていく。
そこに残ったのは、パパスがつけていた腕輪のみ
それが重力にそって、落ちていく。何回も何回もクルクルと回りながら。

――――カラァン、カラカラ。

その腕輪はクルクルと、縦に回り、吸い込まれるようにして動き出す。

「む・・・くぅっ・・・プファ・・・」

ルイスがドラゴンを押しのけ、ドラゴンのしたから出た目の前で、
その腕輪は横になり、摩擦により簡単にとまり。
その腕輪は透明な人の手により拾われる。

『・・・まず始めにいうことは、ありがとう、だな。』

声が聞こえ、ルイスは荒くなった息を整え、前をむく。

「・・・召喚の大精霊？」

そうルイスが言うと、大精霊はコクリとうなづき、微笑んだ。

『あぁ、召喚の大精霊だ。』

「何故、街中に？」

『君たちが行くべき場所とは逆方向だからね、僕の神殿は。』

「・・・いくべきところ？」

『勇者の遺跡』

勇者の遺跡、と呼ばれてルイスが正直わからなくなってきた。

勇者？何故勇者？という言葉が何度も何度も頭の中で繰り返される。

「勇者？俺は、勇者なんかじゃない。ただ自分のために生きているだけだ。」

『何をいっているんだい？君は、彼女の笑顔のために生きているんだろう？』

そういわれ、ルイスはハッとする。

「・・・何故、貴方が知っている。」

『僕は召喚の大精霊さ。簡単にいえば、君の生命をこの世界に召喚させたものが・・・僕。』

「・・・俺は、転生したわけじゃ・・・ないのか？」

そういわれて、大精霊はうなづく。

『君は誰だい？』

「俺は、ルイスだ。ルイス＝アクセシウム」

『で、君は何者だい？』

「俺は、佐々木勇樹だ。」

『それで、君の体は、何者なんだい？』

「ルイス・・・わからない。」

記憶をたどる、記憶を思い出す。あるのはユーリとの物語。ルイスはそのことに気づいていく。そして・・・混乱していく。

『君はね、君の体のことをなにもしらない、君の親のこともなにもしらない。考えても見よう、君の魂を召喚して、何故こうも簡単に体に定着した？赤の他人の体に』

「・・・異世界なんかとは、つながりなどない。」

『親戚の家と理解していた家に、何かしら違和感はなかった？何故君は両親を知らない？何故両親の写真すらみていない？そもそも君

は・・・・親戚の家と言われてあの家にいたのかい？』

「あ・・・う・・・あ・・・？」

『君はその体のことを知らない、その体の親をしらない、君の本当の親をしらない』

ルイスは、混乱する頭を無理やり動かし、うなづいた。眼は泳ぎ、冷や汗をかき、思考は『わからない』といった言葉を延々と繰り返す。

「ルーイースー！」

その自分の名前を呼ぶ声で、ルイスはハッとする。そしてバッと大精霊をみて、すこし、ニヤリと笑う。

「勇者の遺跡とやらにいけば、わかるんだね、『俺は何か』」

大精霊は、そんなルイスをみて、面白い、と思った。口元を小さくゆがめ、大精霊はうなづく。

『知りたいなら、いけばいいよ？』

そういって大精霊は消えた。

そこにかけつける仲間たち

「ルイス？どうしたの？」

ユーリが心配そうに聞いてきた。そのユーリに軽くニコニコと笑い

ながら問いかける。

「なぁ、ユーリ、エリカ、カイト、ユリア、ルシル、レイ、クリス、『俺はなにものだ？』」

そう聞かれて全員がキョトンとし、俺に向かってわけが分からないといった顔をする。

「そんなことはどうでもいいよ。」

ユーリがゆっくりとそう告げた。

「何故？」

そうルイスが問いかけると、ユーリは満面の笑みで答えた。

「ルイスは、ルイスだから。」

そういったユーリをみて、先ほどまでキョトンとしていた仲間たちは軽く苦笑いを浮かべ。

「どうでもいいわね。」

「どうでもいいな。」

「どうでもいい。」

「どうでもいいのー！」

『どうでもいいですの！』

「どうでもいいわよ」

そう全員からいわれて、苦笑いをルイスは浮かべる。

「ん、今は・・・どうでもいいか。後からゆっくりと見てやろう。」

そういったルイスは、先ほどまでの混乱した顔とうってかわって、すがすがしそうに笑ったのだった。

第八十一章『召喚の大精霊』？（後書き）

最初のほうで、こういう表現をしました。

『いっきに記憶が召喚されたか、無理矢理ねじ込まれたか、はたまた閉ざされていた箱が開かれたかはわからない』

『転生』と位置づけないようにするために、こんな表現をしたんですが・・・

まぁ、めんどくさいことになりましたね。やっちまったＺＥ☆

あ、ついでにカイト、アリス、クリスは全員転生者ですＹＯ！

正直疲労感で満タンですね。

次は暗黒。番外編でもいれようかな？

といっても何書こうかわからない。

設定をひたすら書いても『いまさら？』っていわれそうだし・・・

あぁ、キャラクター表書かなきゃ。

ぬわぁぁぁ！やることが妙にあるよ！

っていうか、最近書くとテンションが下がるんですけど、倦怠期ですか？いったん離れたほうがいいんですか？

第八十二章『幕間、やってみたかっただけ』（前書き）

やってみたかっただけ、
なんだかやってて後悔した。

第八十二章『幕間、やってみたかっただけ』

―召喚の大精霊から暗黒の大精霊への道―

「・・・キャラクターが欲しい。」

そういいだしたルイスに全員の視線が集まる。

「きゃらくたぁ・・・というものはなんだ?」

「いわば個性だ。」

なるほど、とユリアがそううなづいたのをみて、ルイスはバッと振り返り、ユーリをさす。

「『ボクッ娘』」

「意味が分からないし、なんだか危ないよルイス。」

「だまらっしゃい。」

そうしてルイスは、ユーリを指すのをやめ、エリカをビッてさす。

「なっなによ!」

すこし引いて、エリカはけん制するかのようにいう。

「ツンデレ子」

「ツンデレ子!?」

「つんでれ・・・とはなんだ?」

「ちょ、訂正しなさい!」

エリカを無視し、ユリアにルイスは説明をし始め「ちょ!無視しないでよ!」・・・る。「意地を通したよ!」

「・・・アリスいけ。」

そうルイスがいうと、アリスがいう。

「最初はツンツン、つまり最初は刺々しいけど、途中からデレデレ、つまり優しくなるタイプと、ある一部のひとに対し、ツンデレ、つまり扱いはツンツンと刺々しいけど、心の中でデレデレしているタイプがある、俺は『べっ別にあんたのためにしてるんじゃないんだからね!』とかいいつつも、主人公が嫌われているんじゃないかと思いながら去っていくと、物かげて顔を真っ赤にして『う・・・私のバカバカ!なんでこう荒々しくしちゃうのよ!私のバカッ』とかいうのがい「アリスキモい。」ちょ!お前がいいだしたんだろ!?」

「・・・なるほど。」

ユリアがちょっと引き気味にうなづいた。こんなユリアみたことがない、すごいぞアリス、ドン引きだぞアリス!

「うれしくねぇぇ!」

「――――ということだったのさ。めでたしめでたし。」

「しかも自己完結した！？」

アリスの叫びを無視し、次はユリアをビッと指す。

「・・・・・・・」

「・・・・む？」

「・・・クー・・・・デ・・・・・・デレがねぇぇぇっ！」

思わずルイスが頭を抱えて叫びだし、ユリアはすこしビクッとする。

「む・・・わけがわからない。」

「いつものことだよ。」

「たしかにそうだな。」

ユーリの言葉にユリアがうなづく。

「ユリアはクールだ。純粋だし、いいヤツだということはわかる・・・でも・・・わからない、なんだ、これは！何を考えてこれをつくったんだぁ！？」

「・・・何をいっているんだかわからないが、たぶんこの世界外の話をしないで欲しい。」

ユリアがそう注意されても困る、ルイスは頭を抱えながらも深呼吸をし、落ち着く。

そうしてカイトをビッとさすと・・・

「・・・うん『男の娘』」

すがすがしく笑ってそういうと、カイトの背後からオーラがドバッドバッと巻き起こる。なんて黒いオーラ

「フ・・・フフフ「ごめんなさい」いいんだよ、ルイス。後で釘バットをもってきてくれれば。」

「処刑道具を俺がもってこいと!?」

ルイスが叫ぶが、黒いオーラは消えることがなく、もあもあと巻き起こる。

冷や汗をかきながら、ルイスはすでに上がることのない領域までいったスルースキルを執行し、スルーをした。

そうして、次をみる。

次は・・・『なんだかわくわくした顔をしたルシル』がいた。

「やめてぇ!そんな純粋な顔をして俺をみないでぇ!」

「むー?」

「・・・むぅ・・・『ロ「まて、落ち着け、落ち着くんだ。」リータ』「決行しやがった!普通にいいやがった!」」

アリスがルイスを止めるが、ルイスはスルースキルを過剰発生させ、スルーする。間違えた発生に、ルイスはちょっと後悔したが、さらにスルーを決行する。

そうして次をみるのが・・・

「・・・」

『わくわくするですの！』

・・・・

・・・・・・・・・・

「なんだろう・・・『悪霊』・・・？」

レイが『悪霊じゃないですのぉぉぉ！』とかいっているが、思いつかない。

「あーもういいや。」

『なんで投げやりッ！？』

「よっし、次次ー」

『果てしなく扱い悪いですの！』

うん、いまさら・・・といった思いがレイ以外に巻き起こるが、誰も口にはださなかった

次をみると、最後になっている。

クリスをみて、すこし考えると

「姫・・・としかいいようがないよ。」

「うん、それは私もわかっていた。」

果てしなく普通なタイプである（このメンバーでは）クリスは、ちょっと悲しそうにいった。

「普通は・・・個性だよ。」

「果てしなく悲しいフォローをありがとう」

もはや半泣きなクリスの肩に手をおき、ニコリと笑う。

さめざめと泣き始めたクリスの肩を、全員がポンッと叩いたため、その涙を流す時間は継続していったという。

第八十二章『幕間、やってみたかっただけ』（後書き）

「・・・というかエリカ、なんだかしらないけど、ツンデレ子って言葉に何も感じてなかったよね、転生者？」

「あんたたちビックリ人間と一緒にして欲しくないわ・・・なんとなく言葉でわかるだけよ。」

「ちっ・・・まぎらわツンデレ子め・・・」

「ちょ！？」

第八十三章『暗黒の大精霊』？（前書き）

「・・・何故、最後の記述は途中で終わっているのでしょうか。」

アリカ姫は最後のページをみて、つぶやいた。

そこにはこうか書かれている。『邪神は勇者の一撃により倒された。』と

疑問は二つある、『生死などをちゃんと書いていないこと』そして『そこで終わっていること』

勇者はどうなったのだろうか？

そして邪神は死んだのだろうか。

アリカ姫は、考える

何故、勇者が蘇ったのか――

もしかしたら・・・この先、この国は・・・この世界は危険かもしれない

アリカ姫はそう考えて、目を閉じる。願えるのは勇者のみ。

第八十三章『暗黒の大精霊』？

―ダルマンリーク・国境付近―

草を踏みしめながら、ルイスたち一行は国境付近へと到着する。

これまで国では、国境というものがある程度は存在した。

大精霊の力にたより、国境をあまりにも手薄にしているところばっかりだったが、ルイスは国境であろうこの場所をみてため息をつく。

「全く・・・なにもありません。」

そう、そこは原っぱ・・・のみ

「ここまで手薄なのは初めてだねぇ・・・まぁわかるけどさ。」

ユリアは苦笑いをしながら目の前をみる。全員がすこし唖然とした表情で居た。

『真っ黒』なのだ。

とにかく『真っ黒』

全員がヒクヒクと顔の筋肉を動かすのがわかる。

「あぁ・・・いきたくない・・・」

思わずルイスが本心をもらした。国境付近・・・というか、すでに国境が完璧に分かる。

「国境を暗黒で分かる国も斬新だな。」

カイトが、苦笑いをしながらもそうふざけてみるが、誰も反応しなかった。

「いけばわかるだろう。」

ユリアの率直な意見から、全員がうなづきあう。正直第一歩目がとてつもなく勇気がいる行動だったが、ルイスは一歩を踏み出した。

『ダルマンリーク』

見た目どおりの通称：暗闇の国、暗黒の国、月の国

国境が暗闇で完璧に分かることから、『国の形が完璧に分かる国』という共通認識をもたれている国

といっても、国境からある程度を抜ければ、普通の太陽の光を見られる。

国の様子は、暗黒といわれているが、それは国境のみで国は美しい。

『まるで　夜の月のようだ』といわれたこともあるほどであり、その美しさは商人の間でも有名だ。

「らしいよ?」

「ユーリ、この暗闇の中でどうよんでいるんだ?」

「それは聞いてはいけないことだよ、ルイス。」

暗闇で出来た国境を乗り越える間に、ユーリはこの国をどこからか出してきたパンフレットで説明をする。

正直目の前でさえみえないほどなのに、何故読めるのかルイスは不

思議でしょうがなかった。

「・・・まぁいいさ。」

「というか、何回目なのよ、この会話」

「これは『お約束』ってやつ」

ルイスのちょっとあきれた言葉に、エリカは突っ込んでくるが、アリスがその言葉に笑いながら答える。

「む？お約束・・・約束？」

「なんていうか、毎回やるべきことって感じだな。」

「なるほど。」

ユリアの疑問の言葉にルイスは普通に答える。

もう慣れたものだな・・・とルイスは心の中で苦笑しながらも、歩みをとめない。

ザッザッという土を踏む音をさっきから踏み続けている。暗黒により太陽の光がまったくないので、草が生えないのだ。

「・・・なんだかちょっと帰りたくなってきた。」

今歩いている荒地であろう場所を感じていると、ルイスはなんだかイヤになっていく。

「・・・やるべきことだよ、ルイス」

そもそもやるべきことなのかわからないのだが・・・とルイスは小さくつぶやくと。

「・・・お願いだから、やってよ、ルイス」

ユーリに懇願され、ちょっと驚きつつも、すこし笑い。

「いっちょやったるかい！」

と元気よく笑う。

「ここまできたからには、最後の空間の大精霊までだな。」

カイトが笑いながらいうと、全員うなづく。

「さっさとやって・・・すでに四年近くたってるけど・・・のんびりしようか！」

ルイス一行は笑いあう。

国境を越え、なにもついていないのに、ルイスは思わず体を振って、なにかを落とそうとして、前をむく。

そこには美しい国があった。

第八十四章『暗黒の大精霊』？（前書き）

無駄にシリアスになってきた、どうしよう、おふざけが少ない。

そういえば５０万ＰＶいきました。ありがとー！

第八十四章『暗黒の大精霊』？

月の国

真っ暗な暗闇の中、蒼く美しく光る月

この街は、この国は、すべてによって『芸術』と成されている

「――――わぁ・・・・！」

ユーリが簡単の声をあげ、一歩二歩と歩き、街をみる。

上をみると太陽の光があり、月などは出ていない。

それでは何故、あの国は蒼く光っているのか。

「ねぇ！すごい！すごいよルイス！」

はしゃぎながらもユーリが走り出す。

それに続いて、不思議と笑みを浮かべていたエリカも、ルシルも走り出した。

残ったのは、転生者のみ。

「・・・なんだろう。」

ルイスは、冷や汗のようなものを書きながら、ポツリともらす。

カイトも冷や汗をかいて、顔をこわばらせる。

アリスも、クリスも。

そして、走り出していたユーリが止まる。

「え・・・あぁ・・・？なんだ・・・これ・・・？」

ユーリは心臓部分を手で押さえ、地に足をつき、前をみる。

月の国、美しい国、そこからは嫌な感じがしない。だけど・・・その後ろにある大きく包まれたような雲からは、異常なほどの嫌な感じがジワジワときている。そしてそこには、１２本の杭と、１本の巨大な剣の形をしたものが突き刺さっていた。

エリカは、ユーリをユリアとルシルに任せ、レイと共に戻ってきたようで、冷や汗をかいて動こうとしないルイスたちを心配そうにみる。

「いったい、どうしたってのよ。」

エリカは本当に不思議そうに視てくるが、ルイスは何も答えない。その変わりに、カイトがいやな感じがする場所をさし、エリカに聞く。

「あれ・・・変な感じがしないか？」

そう聞かれて、その指をたどってみるが、エリカは不思議そうに首を傾ける。

「なにがあるってんのよ?」

そう聞いてきたエリカに、カイトは驚愕の表情をする、・・・いや、この場にいる転生者全員が驚愕した。

カイトはドキマギとしながらも身振り手振りをしながら、聞いてみる。

「だって、十二本の杭と、剣みたいなやつが突き刺さっているんだぞ!?」

本気で、あせったように聞いてくるカイトに、エリカは驚きながらも必死で指を刺している場所をみる、だがいくら見ても不思議そうにしていた。

「・・・わかんない、見えないわよ・・・」

そう悲しそうにつぶやいたエリカに、カイトは声をかけようとするが、言葉は見つからない。

だが、ルイスは目を硬く閉じると、パッと眼をあけ、深呼吸をして歩き出す。

「お、おい?」

アリスが声をかけてくるが、その方向に笑いかけ、ルイスは言った。

「こうしてたって、意味ないだろう?」

そういってルイスに、カイト、アリス、クリスはすこし微笑むと、

歩きだす。

「別に・・・どうだっていいさ。」

そういって笑うカイトに、エリカは安堵の表情を浮かべる。

だが、ルイスの顔は、さきほどの笑顔とは違って、とても怖い顔をしながら歩いていた。

「（・・・なんでだろう、この感覚を・・・俺は、知っている？）」

思い出そうとして、痛む頭を抑えながら、ルイスは歩き出す。

―ダルマンリーク―

異常な感じ、というものと関係なしに、街は活気があった。

「暗黒の大精霊、っていうからにはなんだかダークっぽい感じを考えていたんだけど、そんなことはなかったんだぜ！」

「うむ？だぁく？」

「暗いってことだよ。」

「うむ、そうか。」

すでに恒例な会話を追え、ルイスは周りをバーッとみる。活気があり、笑顔がたくさんある。

しかしルイスに関しては嫌な感じがずっと続いており、宿をとってさっさと眠りたいところだ。

そう思ってルイスは周りを見回すと、キュッと服が握られるのを感じ、後ろを振り返ると、ユーリが服をひっぱっていた。

その顔はちょっと赤く、きつそうにしていた。

「・・・宿、いかない？」

そう上目遣いなユーリに、何か最初にロがついて最後にンがついて、まぁいいや、ロリコンという新しい新境地を開拓しそうになるが、ルイスは押しとどまり、ふざける。

「Ｒ１８的展開？」

笑ってそういうルイスにユーリはため息をつくと、ニッコリと怖い笑みを浮かべ

「オコルヨ？」

片言でいった。さすがにルイスは怖くなって、宿を探し始めると、ヨロヨロとカイトがやってきて、東の方向をさす。

「こっちに宿があった。」

そういわれ、ルイスたちは歩き出す。

5人がフラフラして、3人が気遣いながらも。

第八十五章『暗黒の大精霊』？

―ダルマンリーク・宿―

「ウヴォエエエェ・・・気持ち悪い・・・ニコポとかナデポとかモテない男が最高に欲しいもの・・・」

「いや、正直ヒクよ、ルイス・・・。」

変な汗をかきながら、ルイスとユーリがぐったりしている。

ベッドの上で、『ぜぇぜぇはぁはぁ』と今にも死にそうな青い顔をして。

「糞が・・・もう糞が・・・うぅ糞が・・・」

「ルイスって、辛い状況下だと言葉を選ぶことがないよね・・・」

うめくような罵倒する言葉をうめき続けながらも、ルイスは立ち上がる。

「気持ち悪い・・・いきたくない・・・引きこもりたい・・・だが断る。」

「誰にいってんのか全くわからないよ？」

「俺はァ！全てをォォ！救っちゃったりするかもしれないんだぜ！？」

「誰にいってるのか全くわからないよ？」

「人は俺をこう呼ぶ！『無職の自宅警備委員１０年目』と！」

「ただのニートじゃないｋ・・・うぇ・・・気持ち悪い」

勢いよく突っ込もうとしたユーリが、吐き気に耐えかねて口元を押さえる。そして突っ込ませた張本人は・・・

「（・・・この世界にニートが存在するとは・・・）」

なんて的外れなことを考えていた。

ルイスは、ベットから起き上がると、周りを見回す。

「どうしたの？」

ユーリの不思議そうな声に何もこたえず、ルイスはキッと顔をこわばらせると口を開いた。

「『吐き気の感覚を遮断せよ』」

想像するは、この吐き気がなくなった自分。

「・・・いまさらだけど、気づいたよ。」

「遅いよ・・・」

ぐったりとしながらユーリはいった。

―ダルマンリーク・宿の前―

「ふぅ・・・いやぁ、本当にキツかった・・・」

アリスが、両腕をダラン前にたらしながら、はぁーとため息をつく。

カイトもうなづいた。

「本当にルイスの魔法は便利だな。」

「使い勝手はある程度に悪いけどな。なんていうかポンポンうたないからな、ルイスは。」

「いや、撃ってるよ、ポンポンポンポン、でも相手が強すぎるんだよ。」

そんな会話をしながら宿の前にいると、エリカたちが戻ってくる。

「ん？もう大丈夫なの？」

そうエリカが聞いてきたので、全員うなづいて、ユーリが説明を始める。

「ルイスの魔法で感覚を遮断したって感じかな？」

「・・・それって大丈夫なの？」

感覚遮断といわれて、まず始めに想像するのは『傷つけられても何も感じない』だ、痛いは危険信号だ、遮断されたら死んだことすらわからない。

ルイスは、そういわれることは想定したので、説明する。

「吐き気限定の遮断だからね。」

たぶん、そうなってるはずだ・・・と付け足したかったが、たぶんいったら全員が青ざめそうだからやめた。

エリカはうなづくと、ゆっくりとため息をつく。

「そんなことやれるなら、もっとはやくやってよね・・・」

「いや、気づいたのさっきだし。」

そういうルイスの言葉を聞いて、エリカはさらに大きくため息をつく。

「もう、諦めなよ。」

ユーリの言葉の矢が、ルイスの心に突き刺さった。

エリカは、小さく再度ため息をつくと、「実質二人での情報あつめだったんだから・・・」という。

「え？四人・・・あぁ、そうか。」

レイをみて、納得するが、あと一人は？

「ルシルよ、背が小さいから相手にされないというか、何かを買いながら情報を得ようとするやり方だと、まず始めに店主が『偉いねぇ、お嬢ちゃん、おつかいか？』とかいわれるのよね。」

ルイスの脳裏には思わず、『情報しゅうｓｙ『おじさんおまけしてあげるねぇ！』え・・・うんありがとー！やったー！』

といってすでに一行も書いていないのにやるべきことを忘れているルシルの映像が流れた。

「うん、なんだか納得。」

そういわれてルシルがプクゥーと膨れるが、なんら気にすることがないルイスだった。

「とりあえず、情報だ。」

話をとりあえずぶった切ってユリアがそういうと、ルイスはうなづく。

「で、大精霊はいずこに？」

そうルイスが聞くと、エリカは苦笑いを浮かべながら、斜め上を指す。

「・・・変なところをさすなよ。」

そうルイスがいうと、エリカは「別に間違ってないわよ」といった。

そうしてエリカはいう。

「暗闇の中に、『暗黒の城』っていうのがあってさ・・・そこにいるらしいのよ。」

そういわれて・・・ルイスは絶望した。

「・・・また・・・か・・・！」

散々イヤになってくるあの暗闇の中を思い出し、ルイスはさらにイヤになっていく。

「まぁ、しかたないんじゃない？」

そう苦笑いを浮かべるエリカをみながら、ルイスは吐き無くいう。

「さーいくぞー（棒読み）」

「おぉ・・・・」

なんとも覇気のない掛け声である。

そうしてルイスたちは街の外へと繰り出していく。

第八十六章『暗黒の大精霊』？（前書き）

大精霊を救い始めて、もう何年たっただろうか、リィンは仲間とともにゆっくりと歩いていく。
だが、心は急いでいる、邪神の侵食がすでに大規模といえよう。
「・・・家族は、大丈夫だろうか。」
そう小さくいうと、リィンの肩にポンッと手を置いた人が居た。
「大丈夫だよ」
「エレナ・・・」
にっこりと笑うのは、リィンの幼馴染であった。エレナは、リィンを追って単独で旅を続け、リィンと共に最近いっしょになったのだった。
「ふぅ・・・山道って本当にけっこうキツイ・・・」
愚痴を言おうとしたエレナだったが、気配を感じ、ギンッと睨む。
「誰だッ！「ひぃぅっ！？」・・・子供？」
エレナは茂みへと叫ぶと、そこからでてきたのは小さな女の子。
「うゆ・・・うゆ・・・」
アワアワとその少女は目を左右にせわしなく動かす。そんな少女をエレナはみて、眼を見開く。
「なんで、ボロボロなんだ？」
エレナはそうきくと、少女は、顔をうつむかせ、ポロポロと涙を流し始める。
それをみたエレナは、あわあわと手を動かし、慌てながらもなだめようとする。
「い・・・いや、いわなくてもいいよ？聞きたいけど、あぁ～！別に聞きたくないー・・・ない・・・・よ？」
「全く、本当に全く言葉に信憑性がもてないよ。」
そうリィンにエレナは言われて顔を真っ赤にして「うっさい！」と返す、言われたリィンは、クスクスと笑う、それをみてエレナはさ

らに真っ赤になっていく。
そうしていると、少女はフラッと倒れはじめる。エレナはそれに気づき、すぐに手をかすと、少女は「ありがとう」といってその手を持って、弱弱しく微笑んだ。
そして、少女はコクリとうなづくと、再度弱弱しく微笑み。
「・・・村のみんなが襲われました」
小さくいって、リィンのもってきた水を受け取る。
「あ・・・」
エレナは小さく後悔の言葉を発した。少女は、すこし水を飲むと、ずっと弱弱しく微笑み続ける。
「だから・・・勇者様、お願いです・・・私を仲間にいれてください。」
そういわれ、リィンは首を横に振る。
それをみたエレナは「リィンッ！」と怒るが、リィンは「いや、違うよ」と言う。
「へ？」
素っ頓狂な声をあげて、エレナはリィンをみると、リィンはにっこりと笑う。
「俺は勇者じゃないよ・・・俺は、平和の世界が欲しいから戦ってるんだ、俺の私利私欲さ、仲間にするには別にいいけどね。」
そういって、リィンは笑う。
「そういうのが、勇者だと思いますよ？」
少女は微笑み、リィンは目を丸くする。
「では、よろしくお願いします。私は――」

第八十六章『暗黒の大精霊』？

―暗黒の城前―

「・・・なんていうか。」

「幻想的？」

わからない、といった顔でルイスは目の前の城をみる。

城、というか階段なのだが、目の前から続き、遥か上の城まで続いている。

空間に城が建つ、といった光景だ。

闇の大精霊でも、浮いてはいたが、なんか力が使われている程度はわかっていた。

だが、正直こんな光景は初めてだ。

「眼が痛い・・・」

そういってカイトは目じりを押さえる。そう、景色は海の底から、海の外をみたかのように、光が多い方向に反射して、さだまっていない。

「ふぅ・・・まぁ、いくか。」

そういってルイスたちは階段へ足を踏み入れようとした、その瞬間。

周りの地面から大量の魔物が召喚される。

「ッ！？罠かッ！？」

ルイスはそういって創造を開始し、魔法を構成する。

「『吹き飛ばせ』」

そういってルイスは親指と人差し指を合わせると、左から右に振る。そうした瞬間に台風なみの風が巻き起こり、魔物たちはたまらず吹き飛ばされていく。

ユーリはすぐに鳳凰の杖をとりだし、魔法を構成し始める。

「『光を刃となりて敵を貫け』」

そういった瞬間にマシンガンのように空から――――なにもでてこない。

「あれ？」

「いや、光ねーじゃないか。」

ユーリが素っ頓狂な声をあげると、思わずルイスが突っ込む。

突っ込まれたユーリは顔を真っ赤にして構成を変えていく。

「『火よ、風に乗り敵を蹴散らせ』」

そういった瞬間に、ユーリは火と風の精霊による魔術の構成を完全にたて、発動する。火はいっきに広がり、魔物を焼き尽くす。

エリカは鬼を召喚し、『アネモイの斧』をもたせ、思い切り振る。風の刃が大量に出来上がり、敵は炎に燃え盛られながらも、風の刃により切り裂かれていく。

ユリアは麒麟の剣をもち、構成を立て始める。

「『剣に雷を打ちたてよ』」

そういった瞬間に、麒麟の剣から発生する電気の量が眼に見えて増えていく。そしてユリアは流し目で敵をみると、剣を、一度敵に向けて・・・振った。

その瞬間、あたりは光に満たされる。敵は何も言えずに雷に飲み込まれていき、消滅し始める。

「・・・これは――――剣術なのかな？」

「しらねーよ」

ユリアがそう聞いてくるが、ルイスはそっけなく言った。

「・・・魔法なのか？剣術なのか？」

そういわれて、迷い始めるユリアに、ルイスは「あーはいはい！」と無理矢理言葉を中断させようとする。

「むぅ・・・」

ユリアは納得がいかなそうだが、思考を中断し、あたりを見回す。

「考えている暇は・・・なさそうだ。」

ユリアがそういうと、全員がうなづいた。なぜなら、今現在あたりから更なる魔物が召喚されているのだ。

「・・・いっきにきてくれればいいんだけど。」

「これも作戦のうちってやつじゃない？」

カイトがため息をつきながらいうと、エリカは諦めた顔をしながらもいった。

「ま、さっさといくしかないか・・・」

ルイスがそういうと、全員が同時に駆け出した。

・・・ルイスを置いて

「まてよ!?お前らァ!?」

そう叫んでルイスは全力で後を追い始める。

「お前ら!?『俺がここで食い止める、お前らは先にいけぇぇぇ!』とかいうやついないのかよ!?」

そういうと、アリスは「わかってないなぁ・・・」と露骨にため息をして

「んな死亡フラグバリバリでてんのやるわけないでしょーが。」

意味がわかってないだろう全員がうなづく。

「お前ら意味がわかってんのか!?」

ルイスがきくと、ユーリは「なんとなく」と、そうそっけなく言った。

―暗黒の城―

ぜぇ・・・ぜぇ・・・とルイスたちは頬や首から流れる汗を拭う。

いいあいをし続けていたせいで、さらに疲れてしまっている。

「・・・ふぅ。『冷えろ』」

小さく魔法を使うと、あたりが冷えていき、汗はみるみると引いていく。

「ふぅ・・・大精霊はどこ・・・」

そういってルイスがあたりを見回すと、パッパッという音を鳴らしながら光が城のホール中央であろう場所に光が注がれる。

ルイスたちは思わず身構えるが、そこから暗闇が生まれ、人の形をしていく。

「・・・大精霊？」

そうルイスが漏らすと、大精霊は、バッバッとポーズをきめ始め――

『アァァァァァァァァァァァッ！』

そう叫ぶ。

ルイスは「取り込まれたか！？」と思って身構えるが――

『正解ィィィ！』

暗黒の大精霊の言葉に、思考を停止する。

ユーリが思わず「暗黒の大精霊のイメージのせいで・・・クールな人だと思ってたよ・・・」ともらした。

第八十六章『暗黒の大精霊』？（後書き）

ついでに、前書きに書く『白銀の勇者の物語』は、世界少女との出会いです。
正直５５万もきてくれてうれしいです。
あとちょっとで終わる・・・といった感覚がずっと続いていますが、結構長いですよね。
あと十五話くらい・・・８月までにはなんとか・・・

第八十七章『暗黒の大精霊』？（前書き）

いまさらですけど、どうせユーリの正体なんてバラす前にみんな知ってたよね・・・

というかスランプのような感じがするよ！

もうちょっと期間あけて、気分が再度元通りになったら書こうかな？

第八十七章『暗黒の大精霊』？

―暗黒の城―

『ＹＥＡＡＡＡＨ！』

叫ぶ暗黒の大精霊

「・・・」

沈黙するルイスたち。

妙なこのカオス空間の中、ユーリが手を上げる。

「あ・・・あのぉ～」

顔を引きつらせながらもユーリは手をあげて、暗黒の大精霊を呼ぶと、暗黒の大精霊は気づいたのか、クルッと華麗にターンをきめ、こちらを指差してくる。

『なんだい幼女！』

「少女じゃないかな？・・・まぁいいけど。とりあえず魔物・・・とかこなかったんですか？」

ユーリがそう問うと、大精霊は『ハァッ！そんなことかい！』といって指をパチンッと鳴らす。

そうすると、下から魔物がでてくるでてくる。

その様子にルイスは驚きの声をあげて、そしてジッとみる。

「・・・死んでる？」

そうルイスがいうと、大精霊は『暗黒の世界でこの暗黒の大精霊様を倒そうなんてナァッ！』といってクルリとターン。

ルイスは、あまりにも始めての状態に戸惑いながらも、戦いがないことに安堵した。

「つまり・・・大精霊が倒したと。」

カイトがそういうと、大精霊は『イェェイ！』といって天へと指をむけた。

「（うぜぇ・・・）」

この中の全員がそう思いながらも、スルーする。

最近スルースキルがあがりまくっている一行だった。

沈黙が続くと、大精霊はクルクルとターンして、ムーンウォークをきめ、こちらに指を指してくる。

ルイスは「（なんかやんなきゃ喋れないのか）」なんて思ったが顔には出さない。

『他の大精霊の言伝により、話は聞いている。力を貸そうじゃない

か、少年・・・イエェェェイ！』

「（いや、普通の喋り方でいいじゃないか・・・）ありがと・・・あれ？力を貸すってなにに？」

生きることにか？生きることに力を貸すって・・・俺ニート化？ダメ人間万歳？、とかルイスが考えたとか考えなかったとか。

『まぁいいじゃねぇか！少年・・・ムゥッ！？魔力を感知したＺＥ！』

そういうと、ルイスたちはバッと扉をみる。

そうすると、そこから大量の魔物たちが・・・！

『ＨＡ！フハハ！この暗黒の大精霊様にィィィ！たてつくとは！』

そういうと、大精霊は妙なポーズを取りながら叫ぶ。

『暗黒の海に飲まれちまえ！』

そういうと、なんだか悪役っぽい言葉を発しながらポーズをシャキィーンッととると、魔物たちの下から、大量の黒いなにかが噴出し、飲み込んでいく。

その量は膨大。何万もいるだろうかと考えられた魔物を一瞬で飲み込み、引いていく。

引いた後にはなにものこっていない。

ルイスは沈黙しながらも、「（あれ？もしかして俺魔物倒す必要な

くね？）」とか思った。

だが、そんなルイスの心を呼んだかはわからないが、暗黒の大精霊はクルッとターンをしてルイスを指差す。

『オゥ！少年ッ！いっとくがよぉ！魔法よりもその白銀の剣のほうが絶対的に殺せるんだぜ！』

「そうなのか？」

『あぁ！最高の聖なる剣ってやつだぁ！おっと！聖なる剣ってやつぁ・・・渡すもんがあんなぁ！』

聖なる剣、という単語に思いついたのか暗黒の大精霊は、暗闇から光る剣を取り出してくる。

そしてそれをアリスに投げつける。

投げつけられたアリスはそれをちょっと慌てながらも受け取り、それをみる。

光り続ける、といっても白銀の剣の光とは、ちょっと違う光を持つ剣を持ちながら、アリスは震えた。

「お・・・おぉふぅ・・・・」

手が震えているアリスになんだ？と思いながらも大精霊をみる。

「も・・・もっすぃかしてぇ！これってやつはぁ！エクスカリバーじゃないかね？」

『ＹＥＡＡＡＨ！そんなこといってたぜ！』

そういわれると、アリスは「ふっふっふ・・・」という不気味な笑いをしながら、剣を構える。

ブツブツと

「厨二病レベル拡大！感染拡大！脳に浸透しております！食い止められません！心の中で何かの文字がさわいでいます！えっと・・・エフ・・・エー・・・ティー・・・・イー・・・・ＦＡＴＥ！ＦＡＴＥですッ！くっ！なんて侵食率だッ！ヤバイ！ヤバイゾォォォォ！」

とかいっていたためか、半径３メートルに誰もいなかった。

そしてアリスはいった。

心の中を解き放ち・・・

「エクス・・・カリバァァァッ！」

周りが光にみち・・・

「『すべての防壁・ダブル』」

ルイスの魔法にて止められ・・・

「『石になれ』」

ルイスのニッコリと黒い笑みから口出された石化魔法にアリスは石化され・・・

暗黒の大精霊は沈黙し・・・

『・・・まぁいいんだＺＥ・・・指輪だ・・・』

「ありがとうございます」

素直に暗黒の指輪を受け取り

アリスは三日間放置され、三日後、出発するときに石化解除される。

アリスいわく、暗黒の中で一人ぼっちはマジで怖かったらしく

泣きながらルイスに抱きつき、ルイスが引き剥がそうとやっきになる光景があったとか。

第八十八章『幕間：やりたかっただけｐａｒｔ2』（前書き）

やってみたかっただけ、
やってなかったアリス多めの物語
無理があったと後悔している。
扱いが毎回ひどいので良くしてみた。
後悔した。キャラの性格がさらにわからなくなってきた。

第八十八章『幕間：やりたかっただけｐａｒｔ２』

―アリス―

「そうだ！思いついた！」

私が空間の大精霊がいる街への道を歩きながら、バッとガッツマークを創りながら立ち上がると、全員がげんなりした顔を向けてくる。失礼な。

「おいお～い、なんて顔をしているんだお嬢さんたちぃ！ってまって！？先いかないで！？無視しないで！？」

私がルイスへと走りより、すがりつく、最近こんなことが多くなってきたなと思う。すがりついてグイグイひっぱってやると、ルイスがげんなりした顔で振り向く。失礼な。失礼だよ！私は話す言葉すべてがふざけているみたいじゃ・・・みたい・・・いや、ふざけているな、ほぼＡＬＬ

「ふ・・・人類は無情なもの「いみわかんねーよ」・・・うん、ごめん。」

考え付いた言葉を述べてみたら本当に意味がわからなかった。

とりあえず謝っておいた。

「なんかさ・・・最近さ・・・女と男が混じってきたんだよね・・・本当に・・・なんだろう・・・」

「・・・ドンマイ」

悲しそうに私がいうと・・・いや、まて、私っていってたよな!?俺だよ、俺、俺は精神的に男なんだ。

「俺・・・なんだ!?なんだよこの違和感!涙がでてきたァ!」

何故だわた・・・俺が俺というと、違和感丸出しだ。本能がわた・・・俺を女と認めているということか!?ふざけるな!屈しないぞ!わた・・・俺は!

「わた・・・俺は男だァ!わた・・・俺はこんなことで屈しないぞ!わた・・・俺は・・・なんだろう涙が止まらない」

「もう私でいいんじゃないの?紳士的な感じで(笑)」

ユーリがわた・・・俺に慰めの声をかけてくる。なんて常識人だろう。でもなんでだろう、言葉に(笑)がついてたきがする。気のせい?気のせいだよねぇ?

「ルシル・・・私どうしたらいい?カイトみたいに往生際悪く男だといいはり続け「俺は男だ!」・・・往生際わるく「言い直すなァァァ!」・・・認めろよ」

「お前!?俺が女っぽい顔である描写なんてほとんどねぇのに!?」

「ふん、なんだその髪の長いいかにも病弱的な感じの顔は!実際は剣ブンブン振り回して『ヒィィヤッフゥゥ!』っていいながらいい笑顔をしているくせに!」

「どんな狂人だ俺は！？」

「そうだな・・・言い換えようか、お前はルイスの狂ったところを1．5倍くらいにしたところなのだよぉ！」

「え？なにそれ微妙すぎない？」

「ちっくしょうぅぅぅ！全人類に顔向けできねぇぇえ！」

「てめぇらチョット面かせや！」

そんな会話をしながら歩いていくと、ルイスが微妙な顔をして私・・・俺・・・俺俺俺俺、俺の顔をみてくる。

「なんだルイスぅ！見ほれちまったかい？この美しくナイスバディーなわた・・・俺・・・に。」

「寝言は寝て言え、っていうかさめざめと泣きながらクネクネするな気色悪い。」

「ひでぇ！？」

そんな受け答えをすると、さらに微妙な顔をしてルイスが私・・・もういいよ私で、はいはい私！わーたーしー！の顔をみてくる。

「本当になんなのさ？」

私がそういってルイスを覗き込むと、ルイスはふぅ・・・とため息をつき、口を開く。

「――――さっきなに言いかけてたんだ？」

そういわれて私はハッとする。そしていい笑顔で、ガッツポーズをして、バッと立ち上がりポーズを再度きめ・・・

「いや、それはいいから。」

ユーリの冷たい、絶対零度の言葉でその動きは凍らされた。

「ねぇ、ルシル、ユーリってなんであんなにつめたいの？」

ルシルの肩を抱いて、問いかける。

「・・・ちょうどいいからじゃないかなー？」

そういわれて、私はハッとする。

「それは・・・確かにッ！気づけたッ！この一言でッ！私は・・・気づけたのダッ！あぁ！このメンバーは！パーティはッ！ユーリの人非道的な冷たさと！ルシルの純粋さと！レイの無邪気さとッ！クリスの・・・普通さ！そして！そしてなのだよッッ！エリカのツンデレ子的な成分でッ！」

「ちょ！訂正しなさいよ！まったくどいつもこいつも人のことをツンデレ子ツンデレ子って！」

そういわれて、私はわざとかっこつけてフッと息を吐き出す。

「事実は・・・隠せないッ！」

スネに蹴りの連続ッ！これは・・・避けられるッ！

流の魔眼を発動する、そして・・・

「見える！見えるぞッ！」

蹴りをガンガンと避けていく。

あぁ、コスモがみえるとか叫んでみたい！

「なにこの力の無駄遣い！？」

エリカがなにかをいっているが、気にすることなどない、それが私だ。

「くぅっ！くっ！避けるなぁぁ！」

ムキになってけりを速めていくエリカ、かわいいぞエリカ！すばらしいぞエリカ！顔を真っ赤にしていくその顔もゲブラァッ！

「くぅー！カイトォォォ！」

自分に死角からのチョップ攻撃を喰らわせた張本人をみると、平然として・・・いやあきれていた。

「お前・・・自重と言う言葉を覚えようぜ？」

「ふ・・・自重してこれくらいなのさ！」

「馬鹿かお前は。もっとしろ。」

「ゆうに２００トンのおもりをつけている状態だと想像してみろ、そんな鉄くずだらけの人にお前はさらに錘をつけるのか？人非道的だとは思わないのか！」

「それを軽々しく動かす超人には十分だと思うぞ。」

はぁ・・・とため息をつくカイトの、服をひっぱる人がいて、カイトはそれに気づいてそちらをみる。

「あ？エリカ、どうした？」

カイトがそうきくと、エリカは顔を真っ赤にしてモジモジとしながらそっぽを向いていう。

「あ・・・ありがと・・・なんていうか・・・助けてくれて。」

なんだ・・・この胸から湧き上がるものは！

「うぉぉぉ！この感情が・・・萌えという・・・ものなのクァッァア！」

「・・・『石化しろ』」

この一言で石化され、そのまま空間の大精霊のいる国までもっていかれることとなりました☆

―ルイス―

いや、なんかノリで石化したけど、何がいいたかったんだろう？

いや、マジで。

第八十八章『幕間：やりたかっただけｐａｒｔ2』（後書き）

やばい、びっくりするほど後悔している。

第八十九章『空間の大精霊』？（前書き）

二日で書いてみました。
すこしくらい考えて・・・といった感じでやりましたが、何か変わりましたか？

第八十九章『空間の大精霊』？

空間とは、世界だ。
故に、空間の大精霊は神とも呼ばれている。
一撃により、全てが霧散する。
一撃により、世界が破壊される。
その強さは絶大であり、最強である。

大精霊の中、最も最強の大精霊、それが・・・『空間の大精霊』

―空間の大精霊―

暗闇の中、何かが壊れていくのを感じた。
それは、力。
それは、封印。

『な・・・！ついに壊れ始めたか・・・！』

１２の杭と、白銀の剣による封印。暗闇の中、あの『城』は封印されていた。
空間の大精霊は、思い出す。勇者を、勇者の強さを。

彼はいった。

彼は叫んだ。

彼は願った。

幸せを

『全てが幸せになりますように・・・か』

大精霊は、勇者の言葉を思い出す。勇者の『この世界』での最後の言葉を
彼が邪神を倒しながらも、涙を流しながらも、叫んだ言葉を。

空間の大精霊は、世界を統べる

だからこそ、聞こえたこの言葉

空間の大精霊は、そっと感動した言葉を頭の中で何度も唱える。

『私は・・・人が大好きだ。』

子供の無邪気な笑顔、天才の策略、人の狂気。人には色々あり、大精霊はその色々をもつ人をうらやんでいる。
そして人は、巨大な力を持つ大精霊を敬っている。

空間の大精霊はそっと目をつぶり願う。

『新しき勇者よ、前代の勇者の思いを受け継いでくれ』

教会の鐘が、鳴り響き、空間の大精霊はフッと消えていった。
大精霊は願う。
新しい伝説を

新しき平和を

―三人称―

「『石化解除』」

ルイスが歩きながら、次の国の国境へと差し掛かると、魔術を口にする。あまりにもアリスがテンションが異常状態なので無理矢理に

止めるために使った魔術だ。石化して二週間たつ、最近では『なんだかすすり泣きが聞こえる』なんて怪談的要素まで組み込まれてきたこの石造を直すのは正直いって心苦しいがまぁ面白いのも飽きるからいいだろう、とルイスは思った。

石化がとけ、涙目でウルウルとしながらも、アリスがまず始めに行ったこととといえば。

「ぶはぁ・・・！」

息を吸うことである。そのままぜぇ・・・はぁ！すぅぅ！はぁぁぁっ！と大きく大げさに息を吸い、吐きを繰り返しキッとルイスをアリスは睨みつける。

「何も二週間も石化することはないじゃないかぁぁあ！」

涙目で叫ぶアリスに、ルイスは「アッハッハ！」と自信もやりすぎたと思っていることを笑ってごまかす。そんな態度にアリスは納得がいかないのか怒り始め、ルイスは最終的に謝ることとなった。

「すまないな」

そういうと、アリスがうなづいて「もういいさ」と返す、ルイスは正直なんで俺が完全に悪いようなことになっているんだろう?とか思いながらも歩き出し、それに全員がついていく形となった。

国境を越え、ユーリは本当にどこからともなくパンフレットのようなものを取り出し、パラパラとめくる。すでに誰も突っ込むものは折らず、その様子を全員がジッとみているだけだった。そしてユーリは目的のページが見つかったのか、小さくコクコクとうなづく。

「空間の大精霊のいる街まで結構期間がある上、山の上だから結構キツいかもしれない。」

そうユーリがいうと、全員がヒクッと顔をゆがめた。その様子をみたユーリはすこし笑うと、説明を始める。

――スペーラース――

言わずもがな、空間の大精霊が住む場所。
その街があるのは、山の山頂であり、雲の上、いくことも困難とされ、『伝説の街』とも呼ばれ、冒険家などでは最もいきたい場所とされている。
山の頂上といわれたとしても、その場所は空気が薄いことはない、これを一般的に『大精霊の加護』と呼ばれ、こんな偏狭な土地にたくさんの人々がいる理由にもなる。
山の頂上だとしても、その大きさは大きく、通常の都市の数倍はあり、そこで自給自足も可能。
故に、こんな偏狭な土地だろうと、人がいなくなることはない。
そして、このスペーラースでは、独自の文化というものを形成され

ている。
この街の象徴は街の中心部にある大きな時計塔。その芸術は行く人を虜にする。

説明を終えたユーリは、パンフレットをパタンとしめて、どこかにほうっておく。

どこに入ったかは誰もわからないために反応はしなかった。

「なんだろうなぁ・・・鎖国時代の日本みたいなところか？」

ルイスがそういうと、アリスとクリスは同時に「違うと思う」といった。

「正直言わせると、鎖国は意図的だったし。キリスト文化による自らの力の低下を防ぐための策だったからな。仏教的な意味で」

「うんうん、まぁだからいっても無理矢理返されることはないんじゃないかな？」

そういわれ、ルイスはコクリとうなづく。そして、正直に「山の上かよ・・・しかも行くことがきついってすんげぇイヤなんだけど・・・」

本当に嫌そうな顔をするルイスに、全員が笑い、そしてため息をつく。

「同感だよ・・・」

ユーリがそういうと、全員がコクコクとうなづいた。

「まぁ、仕方ないしいくしかないでしょ?」

エリカがそういうと、全員が心の中で「ま、そうだよなぁ・・・」と諦めの言葉を思った。

ルイスが一歩を踏み出すと、それに続くかのように全員が一歩一歩と歩き出す。

すでに仲間なのだと、それだけで感じ取れた。

―国境越え・スペーラース―

ルイスは、国境を越えたことを、地図を取り出し確認する。確認、といっても、大雑把なものではあるが、ルイスは国境を越えたことを確認できると、ふぅ、とため息をついた。ルイスの心の中には、これが最後、という感情があった。

ルイスは、いまさらにこのメンバーが『ものすっごい物好き』ということを感じた。

ユーリもエリカもカイトもアリスもルシルもレイもクリスもズルズルとここまでやってきている。

「なぁ・・・いまさらだけどさ、俺たちってなんでここまできたんだ？」

そうルイスは気になり、問いかけてみるとユーリがすこしだけビクッとする。

「え・・・な・・・なんで？」

うろたえながらも、ユーリはルイスに聞いてみると、ルイスは顔をしかめていった。

「なんていうか、俺たちって相当に物好きだなぁ・・・って思ったんだよ。」

そうルイスがいうと、エリカはクスクスと笑う。

「それはたしかに！」

そういって笑うエリカ、カイトもアリスも苦笑する。

「いまさらだけど、なんていうか、運命を感じる感じかな?まぁ神はいるって知ったんだし、運命も信じてはみるけどな。」

そうカイトがいうと、この場にいる全員がうなづく

「なんだかしらないけど、１２の大精霊と契約したとしても、まだ旅は終わらないように感じるんだよな。」

アリスは笑いながらもいった。ルシルは、『終わり』という言葉を聞いてちょっと悲しい顔をするが、それを察したルイスとカイトに頭を撫でられ、笑顔をみせる。

「俺たちの戦いはまだまだ続く!てきな感じだな。なんていうか、最終決戦がありそうな感じだ。」

そういうと、ユーリを覗いてほとんどが笑う。ほとんど笑っていないユーリをルイスがみて、心配そうに声をかけてみるが、反応はあまりにも鈍い。

それに少しばかり疑問を感じるが、ルイスは笑顔をつくって「さぁ、いくぞ!」と声をかける。

その言葉に、ユーリがハッとして、全員で

いくぞぉぉぉ!と元気良く言った。

この旅はまだまだ終わらない

邪神は蘇り、戦いが始まるだろう。

第九十章　『空間の大精霊』？（前書き）

暗闇の中、少女は一人で泣いていた。
目の前には両親の死体がある。
その両親の死体は、ブラブラと左右に風にユラれ、動いている。
えぐ・・・ぐすぅっ・・・
両親は、自殺した。幼い心の中、そう分かっていた。
私もここで死ぬべきなの？心の中で、誰かに答えを求めるが、何も帰ってこない。
私は、一人。
そう心の中で、望まない繰り返しが続く。そうしていると、物音がする。
「・・・誰ぇ」
小さくそういった。そうして部屋からでると、ノック音がする、誰か来た様だ。
私は泣きながら、助けを求めドアを開ける、・・・そこにいたのは、少年だった。いや、もう青年だろう、白銀の美しい剣を携え、少年は私をみてニコリと微笑む。
「僕はリィン、すまないが、雨でね・・・ちょっとこの雨宿りさせてくれないかな？」
リィン、と心の中で何回も唱え、少年をみると、後ろに仲間も居るようだ。
みんなぬれていて、本当に雨が降っている。
すこし警戒するが、警戒を解く、殺されるなら、殺してくれ・・・
そう思った。
「・・・いいですよ」
そういうと、後ろから女性が飛び出していく。
「あっりがとーございーまーす！」
元気良く家へと入っていき――悲鳴が聞こえた。

リィンという少年も驚いた様子で、せっぱつまった顔で、走っていく。
そうして、走っていくと、すぐに女性がみつける。
「エレナァッ！」
叫びながらリィンはエレナを駆け寄り、揺らす。
「あば・・・あばばば」
エレナは何かをさしているようだ。リィンは指の指す方向をたどっていくと、眼をまるくする。
そして、やってきた私をみる。
怖がられる、気味悪がれる、同情される。もしくは・・・好機と見られ殺され身ぐるみはがされる。そういった変な知識がながれてくる。だが、全部違った。
リィンはゆっくりと微笑み。
「一人・・・だったのかい？」
そういった。私は、何故かその笑みに安心してしまい、がんばって止めていた涙がさらにでてくる。
私は泣き続ける。
その後、両親はリィンたちによって丁重に葬られた。
両親たちの墓をみて、ボーッとする私の頭に、手を載せられる。
見上げると、リィンだった。
「いっしょにくるか？」
その言葉に私は泣き出してしまう。
それをみたエレナは、微笑むと、私の頬を両方掴むと、・・・ひっぱった。
「いひゃい！いひゃい！」
そういう私をケタケタと笑うと、「泣き虫だなぁー！」と笑う。
私はムキー！と怒り始めると、ついにリィンがせき止められていた川が吐き出されるがごとく笑い始める。
それをみて、私はさらに怒り始めるのだった。
・・・すでに、涙は流していなかった。

描写はないですが、この話をかいているとき、すでに七人ほどの仲間がいます。
炭鉱で働く男性なんですけどね。名前はダン
そして占い師　キャンベル
リィンとエレナ
そして世界少女四人

こちらも八人ですね。
やっと集まった、といったところでしょうか

第九十章　『空間の大精霊』？

パキッという音がする。

杭にヒビがはいっていく。

その事実をすべての大精霊が知り、恐怖する。

だが、その顔は絶望をみせない。強大な敵を目の前にして睨むような状態。

巨大なヘビに出会ったカエルが、ヘビを睨んでいる。

そんな状態。

大丈夫、彼がいるから。

カエルの後ろには『人間』がいる。

剣を引き抜き、毒を持ち、何メートルもあるだろう蛇を前にする。

たとえカエルが飲み込まれようとも、人間はその『剣』を引き抜き
頭を斬り、助けるだろう。

たとえ人間が飲み込まれようとも『剣』を引き抜き、内側から切り
殺すだろう。

『人間』は諦めない

たとえ目の前に　化け物　がいようとも

ただその場にたたずみ、逃げない。

剣を持て、剣を振れ、そして救う。

『勇者』は、それだけを思考に残す。

恐怖など知らぬ。

絶望など知らぬ。

強大な力

圧倒的な差

そんなものは・・・知らない

勇者は『白銀の剣』を

人間は『剣』を

頭上に掲げ――――邪神を打ち破る
頭上に掲げ――――ヘビを打ち破る

―スペーラース山―

サァサァと、風が吹き、草が揺れる。
暖かな気候の中、ルイスたちは歩いていく。
空間の大精霊、『スペーラース』の街、ルイスはその道のりをあるく。

「結構楽な場所だなァ・・・」

ルイスがそうはいいつつも、額の汗を拭う、楽、とはいっても難易度的な考えで、すでに十数時間は歩き続けだ。顔自体は疲労を感じてはなさそうだが、さすがに汗はでる。何年も旅をしていたんだから、ある程度は大丈夫かと思ったがさすがに十時間以上も山を歩き続けるのは初めての経験だ。水はあるし食料は尽きない、そもそもルイスの魔法があるから大丈夫だ。疲れれば使えば元気になる。
だが、精神的な疲労は魔法が聞かない。想像して、『クールな口調

の自分』を想像し、重ね合わせることは可能だが、『精神的に元気な自分』というものが無理だ。精神疲労とは精神回復。精神というものがわからないために回復はできない。一時的に楽にはできるが、最終的に集中力がきれ、魔力を使った疲労と集中してできた疲労、それがドンッとくるので、使いたくはない。

「まぁ、もうどれくらい歩いたかわからないけどね・・・すでに夜だし。」

「それは・・・いうなよユーリ」

げんなりした顔でルイスが文句をいうと、ユーリは「ごめん」といった。言われたおかげでさらに自覚した仲間たちが小さくため息をついて、それでも歩みは止めない。

ルイスが軽く左右に首を動かし、周りをみていく、すでに真っ暗だ、月明かりを手がかりに歩いている。

ルイスはさすがにこれ以上は危険だろうと判断すると、仲間に声をかける。

「さすがに危ないから、野宿か?」

そういうと、全員が賛成したので、野宿が決まった。

野宿をできる適当な場所を見つけると、月明かりから精霊を導き出し、カイトは魔法を構成していく。

「『光を玉となり、道を照らせ』」

そう精霊に命令を下すと、精霊は光を生み出していく。カイトはそれをみて、コクリとうなづくと、後ろにいる仲間たちへと振り返る。

「じゃ、行って来る」

「俺もいこうか？」

仲間に、探索をしてくると告げると、ルイスが手をあげて、聞いてみる、カイトはすこし考えると首をふる。

「このメンバーなら巨人が来ようが大丈夫だろうが・・・まぁお前はこの中でも強いし、白銀の剣もあるから、ここで待機したほうがいいんじゃね。俺の能力は防御に特化しまくっているからな、どんな敵だろうと逃げ切れるだろ」

カイトがそういうと、ルイスは納得したようにうなづく。

そうしてカイトは歩き出す。

―カイト―

「・・・なんだか怖くなってきた」

とりあえずシャドーボクシングをやってみる。なんかやってないと怖くてたまらない。暗い森というものは本当に怖いものなんだと再認識した。

「フッ」

小さく吐きながら一回だけ拳を振るってみた。するとどうだろうか、放たれた拳から、音速を超えたせいか衝撃破が走り、目の前の木を粉砕する。

「・・・やめよう。」

いまさらな最強設定にため息をつきながら、シャドーボクシングをやめることにする。さて、次は・・・と考えてみると、歌を思いついた。

「～♪～♪」

歌ってみると、声が響き渡る。異常なほど綺麗な声だ。自分で自分

を褒めるなんてなんておかしいことだと思うが、本当に綺麗だ。まるで女性みた――

「・・・・」

自己嫌悪をしながら頭を抱えてみると、肩に何かが乗せられる。思わず横に飛んでみると――

そこには少女がいた。

思わず、言った。

「世界・・・少女・・・・？」

言われた少女はコクリとうなづき笑顔になる。

「ハイ。」

少女は小さく答え、おれ自身は呆然とする。

「どうかしましたか？」

世界少女は不思議そうに――――って違う！

「な・・・なななななななんでここにぃ！？」

出したこともないような声を出しながら、俺は指を世界少女へと向ける。それをみた世界少女は不満そうに頬を膨らませる。

「人を指でさすのは、マナー違反、ですよ？」

そういわれて、カイトは指を素直におろした。そして謝罪を・・・

「あぁ・・・あ・・・すま・・・って違うッ！？」

「何が違うんですか？さすがに指をさしたことは謝るべきですよ？」

「それはすまない、だけど何でここにいる？」

そういわれて、世界少女はコクリと首を縦に振る。

「貴方に言うべきことが。」

そういわれて、カイトはそれが何か、思わず考えてしまう。それで思いついたのが

「奇跡の試練か？」

そういわれ、世界少女はうなづいた。

「よくわかりましたね。」

「ルイスの話は聞いてたからな、アリスなんか『俺の奇跡は！？どうしたのぉ！？』とかいってたけどな。」

そう言って笑うと、世界少女もクスリと笑う。そしてすぐに真剣な顔をすると、それを感じ、カイトも顔を真面目にする。

「んで、俺の願い『平和』のための試練はなんだ？」

「覚えてましたか」

そりゃ、当たり前だろうが、と言いたいところだが、正直今の今まで忘れていたりする。結構キツイ日々だったからなぁ・・・。

「んで、試練は・・・「ありません」・・・はぁ？」

その言葉をきいて、呆然とした。そしてすぐにハッとする。

「な・・・ないってどういうことだ？」

そういうと、世界少女は再度うなづく。

「貴方は、貴方が到達地点だと思ったところにいくだけです。アリスさんもクリスさんも」

そういって、世界少女は俺をジッと見つめる。

「つまり・・・自分できめろ、と？」

世界少女はうなづく。そして、うっすらと消えていった。

「ちょ・・・っとまて！聞きたいことが・・・」

いきなり消えていくことに、手を伸ばそうとするが、触れられなかった。

世界少女はニコリと微笑む。そして、真剣な口調で言った。

「ルイスさんといると、危険です。貴方はついていくかどうか、きめる必要があります。」

そういって、消えていく。

カイトは消えたあと呆然となり・・・ハッと意識を覚醒した。

「危険・・・？」

そうつぶやき、カイトはハッと一笑した。

「上等だっての」

カイトはそうニヤリと笑い、帰っていった。

第九十章　『空間の大精霊』？（後書き）

六十万ですね、はやいものです。
本当にありがとうございます

第九十一章『空間の大精霊』？（前書き）

疲れてきてます
日刊とかやるべきじゃない。
これ以上長く、日刊以上のことをやっている人はなにもんですか

第九十一章『空間の大精霊』？

冷えていく

自然でもなく、暗黒でもなく、空間でもなく、はたまた魔術でもなく
魔法でもなく、ただ『何かが』

それを感じ取る人々も居る

そして、大精霊はまるで人間のように恐怖する。

人間を信じている

しかし、それでも怖い
精霊が騒ぐ
そして願う
人の・・・底力を
ヘビの口の中にある、禍々しい何かを
混沌という名の、壊れきった何かを
人が触れれば触れたものは崩壊し
精霊が触れれば、飲み込まれ
ただ抗うことの出来ない力に、唯一抗える剣、『白銀の剣』
それをもつものが勇者ではない
もとうがもたぬが、強くあり続けるものが、勇者なのだ

―スペーラースへの道のり―

風が吹く

雲が動く

山の上、雲の上

すこし下を向けば、白い霧のようなものが見える。

風が吹き、その白い霧は、ゆっくりと動き出す。

ルイスはそれをみて、小さく綺麗だな、と思った。

「ざ・・・むび・・・」

すごいくらいに鼻水をたらし、ガチガチと歯を鳴らしながらも。

氷の大精霊のときナミの寒さにガチガチと震えている。

「ま、わかってたけどね。」

「わかってたらなにかしら対策しろよ！」

ユーリが小さく笑って言うと、思わずルイスが突っ込んでしまう、

結構珍しい光景だった。

ルイス一行は、すでにスペーラースの近くまで来ている。この丘を軽く越え、もう一度坂を下り、さらに上にいけば、到着だ。

すでにここまでに4日以上の経過だった。ルイスはチョモランマでも登山してんのかと突っ込みたくて仕方がなかった。体は汗でベトベトだ。その不快感からか、全員が嫌そうな顔をする。それに気づいたルイスは、やっぱ便利なもんだな、とため息をつきつつも、想像を開始する。汗を取り除く想像を。

「『汗を取り除け』」

そういうと、とたんに汗は消えていき、ルイス一行は小さくため息をついた。

「あぁ・・・ありがとう」

「正直俺もいやだったから、別にいい。」

カイトがお礼をいってきたから、ルイスは返し、目の前をみる。もうすぐ丘の頂上だ。とたんにみんなの足が速くなる。一時だけども、ゴールというものは人に幻想を抱かせるものだ。『到着したら楽になるんじゃないかな?』といった感じで。まぁ、マラソンのゴールだろうと、到着した後がキツイものだが。

ルイスは、足を速めたからか、すぐに到着する。全員が妙にすがすがしい顔をして、まだ続く道をみて、ため息をつき――そして、眼を丸くした。

ゴォォンッという音がした。鐘の音だ、その音は鈍く鈍く・・・
そして透き通っていた。その音がルイス一行の心に響き、そして時計搭の美しさに心を奪われる。その時計搭はシンプルだ。茶色で、どこにでもありそうな時計搭、だけど、それでもなにか、人を引きつけている。

ルイスはハッとし、首を何度か左右に振る。そして振り返り、いまだに心を奪われている仲間にいうのだ。

「さぁいこう！」

そういわれ、全員がハッとする。そして全員がうなづいたのをみて、ルイスは満足そうに歩き始め、その後ろから全員がついてくる。

ルイスたちはまだまだ終わらない道のりを歩き始める。

―スペーラース―

ルイスたちは門へと到着する。すでに五日目が始まるやもしれない、といった時間帯だ。
まだ門番はいるようで、ルイスたちは声をかけてみる。

「あの、すみません。」

声をかけると、門番は気づいたようで、こちらを振り向く。

「やぁ、こんな遅くに、国へ入りたいのかい？」

そういわれ、ルイス一行はうなづく、それをみた門番はうなづき返すと、「別にいいよ」と返す。ルイスたちは「今の時間帯でもはいれるものなのか？」と正直思ったが、すぐにその理由がわかった。
門番は笑いながら扉をさす。大きな扉はしまったままだ。

「さぁさ、はいってはいって。」

そういわれ、ルイスたちは呆然とする。その様子がおかしいのか門番はすこし笑い出してしまう。

「ま、扉へ触ってみてよ」

ルイスたちは、互いに顔を合わせながら、半信半疑で扉をペタッと触る。するとどうだろうか、扉に触ろうとした手がすり抜けていく。それをみて、思わずルイスは手を引っ込め、ゆっくりと息吐き、そして一歩を踏み出す。

「この扉は、人を判別するからね、危険人物じゃなければ大丈夫さ。」

――一歩を踏み出しただけで、目の前は異世界のようだった。

「おー」

小さく感嘆の言葉を発する。それだけで十分な感想だった。

イメージは中世ヨーロッパ、心を奪った時計搭と、石で出来た道、石でできた街。

それをみたアリスでさえも、感嘆の声をあげ。

「タイムスリップした気分だ。」

と感想を述べた、まるっきりイメージどおりの中世ヨーロッパ。ルイスはアリスの感想に心の中で同意した。そしてルイスは歩き出す。さすがに休みたいのだ、この時間帯ではあいているところこそ珍しいといえる。だが、人と言うものは欲望に忠実なものだ。休めるなら休みたい、といった感情だ。ルイスは左から右にかけ、ぐるーっと見回すと、まだあいている宿屋をすぐに見つけ、走っていく。そしてドアをあけると、宿屋の主人であろう人がルイスたちをみて、愛想のいい笑いをする。

「こんばんは、宿ですか？」

そう聞かれ、全員がうなづくと、主人は日数を聞き、それ相応の金額をルイスは渡しておく。

「では、ここに・・・」

主人にカギを渡され部屋へと向かい、ルイスはベットへと体を預けると、すぐに眠り始める。

そして、明日を迎えるのだった。

―次の日―

コンコン、という音により、ルイスは起き上がる。

「ふぇ・・・あぁ・・・」

魔法を想像し、肉体年齢をあげると、ドアへと向かい、開ける。

「ふぁ・・・なんでしょうか？」

そう聞くと、光る鎧が見え、視線を上へ上へと押し上げる。そしてそこにいたのは、金髪の騎士。剣を携え、ルイスをじっと見る。ルイスはとりあえず警戒心をもち、ちゃんと動ける体制へと体を少しずつもっていく。騎士はそれに気づくと、笑っていった。

「別にとっつかまえるってことじゃないよ。私の名前は『ハインツ＝カルヴァニト』君たちがくるって大精霊からお告げと言うものがあってね・・・ちょっと問題が今現在あるけど、そのために呼びにきたのさ。」

そう騎士が笑いながら告げると、さすがにルイスも安心して、コクリとうなづく、それをみた騎士も笑いを止め、真剣なまなざしでルイスをみる。そしてうなづく。

「何分くらいでこれそうかな？」

そう聞いてきたので、ルイスはすこし考えると、決定したようで、顔をあげてハインツへと言う。

「十五分ですかね、仲間も呼んで・・・あぅ。」

「ん？どうしたんだ？」

ルイスがいきなり変な声をあげて、頭を抱え始めたので、ハインツは心配そうにルイスをみるが、ルイスは「いや・・・別になんでもないです」という。

「・・・全く何でもなさそうにはみえないな。」

「いや、ほんっとーになんでもないんです。」

そういわれ、ハインツはちょっと心配そうにみていたが、「そうかい」と小さくいうと、「じゃ、外でまってるから」といって歩いていった。

ルイスは遠くへいくのを感じると突然、フラッと壁へと寄りかかり

「俺・・・なんだかしらないけど、有名になってない？」

いまさらなことを言った。

第九十一章『空間の大精霊』？（後書き）

申し訳ございませんが、メモ帳に書いたものを間違えてけしてしまい、時間をつくって書いたのですが、今日は無理です。二日後にまた会いましょう。本当にごめんなさいッ！

第九十二章『空間の大精霊』？（前書き）

うぅ・・・この話昨日かけたのに間違えてメモ帳けしたから遅れた・・・

再度思い出してみるけど、全く思い出せなかったことに驚いた。

第九十二章『空間の大精霊』？

大精霊たちは思い出す。

あの世界を

邪神に飲み込まれた、あの世界を

何もない、世界を

いや、無と言う言葉も当てはまらず、有という言葉も当てはまらず。

光もなければ闇もない、あの世界を

そして大精霊は恐怖する。

あの世界を思い出して。

自らの何かが壊れてしまいそうな、そんな・・・世界を

いま思い出しても、心が壊れてしまいそうな、あの、世界を

世界で、ただポツンといた。

意識はない。だが記憶はある。

何も考えられない、ただそこにいた。

ただフワフワとしていた感覚があったと思う。

その感覚は、恐ろしく不快だった。

そこに、一筋の光が流れた。

それは小さな小さな穴からもれる、白銀の光だった。

それをみて、大精霊は意識をすこし覚醒する。

そして、動かないからだを動かそうとし、光を掴もうとする。

心の中では無理だと叫ぶが、目の前の現状は、その心を打ち消すようになる。

光が、だんだんと広げられていく。

広げるその手は、ただの人間の手。そのただの人間の手が、世界を救っていく。

そして、世界が破壊されていく。

邪神の世界を

頼りない、その笑みをもち

みるものを安心させる、笑みをもち

大精霊に希望を持たせた、その後姿を

大精霊は、思い出す。

―スペーラース・城―

城の中、ルイスたちは玉座の間にいた。

そこにいたのは、初老の男性、すこしひげの生えて、それでいてそのヒゲが良く似合う渋さをもっている男性だった。

「私の名前は、セリウスだ。苗字は長いから省略する。王家の苗字だかしらないが、拒否する。」

そういってそのセリウスといった男性は人懐っこい笑みを浮かべる。その笑顔がルイスたちを安心させ、ルイスたちは自分たちも自己紹介をしようと、口々に自らの名前をいう。

それをきいたセリウスは、ニカッとした笑みを浮かべ、コクコクとうなづく。

そして、セリウスはどうでもいいような話をし始めていく。そんな話が、ルイスたちの心を解きほぐすようで、ルイスはすこし、

「（面白い人だな）」

と思った。ルイスはふと周りを見回していると、そのセリウスといった王様をみる家臣たちの目は、尊敬している眼だとわかり、すごいひとだなぁ、とも思った。

そして、軽く話をすると、本題なのかセリウスは真面目な顔になっていき、空気がピリピリとなっていく。そして家臣たちも真面目な顔をして、セリウスはルイスたちに玉座に座ったままではあるがお辞儀をする。

「一つ、お願いがある。空間の大精霊までいけるようにとりはかることはできる。だが一つやってほしい」

そういわれ、ルイスはピリピリとした空気に息をのむと、心を落ち着かせ、セリウスへと問う。

「それは、やっぱり魔物関係とかですか？」

そう聞かれ、セリウスはゆっくりと、それでいってしっかりとうなづく。

「あぁ、そうなのだが。空間の大精霊がいる場所はわかるか？」

ルイスは知らないので、後ろの仲間たちをみる。仲間たちは首を横にふり、知らないことを表現したので、ルイスは首をふる。それをみたセリウスはうなづいた。

「空間の大精霊の居る場所、それは空だ。城の屋上のとある扉から続く階段がある。そこからいけば大精霊と出会うだろう・・・だが、一つ問題がある。そこに魔物が突然現れた。大精霊のいる神殿は結界がはってあり、有る程度はもつだろう、だがそれは有る程度・・・時間がたてば護ることは出来ず、破壊されてしまう。だから、魔物を倒して欲しいのだ。」

そういわれ、ルイスは仲間をみる。ルイス自体は一向にかまわない

が、仲間の許可くらいはとっておこうと思い、後ろをみるが、仲間たちは笑っていた。その笑みは『なにをいまさら』といいたげな笑みであり、それをみたルイスもまた笑みを浮かべる。セリウスはそんなルイスたちをみて、自然と笑みを浮かべた。

ルイスは前をむいてうなづく。

「はい」

そう小さく返答すると、セリウスはまた人懐っこい笑みを浮かべ、礼をもう一度した。

「よろしくたのむ、ゆ・・・いや、ルイス。」

ルイスは本気で心の中で「（だからそのゆ・・・の続きを誰かいってくれぇぇぇ！）」とか思ったが、顔には出さずにお辞儀をする。

「その扉に、そして神殿の護りには、王家の血族が必要なのだ。だから必然に私の娘と共にいくことになる、護ってくれ・・・よろしく頼む。」

ルイスはその言葉をきいて、もう一度深く深くうなづいた。

―城・屋上・空間の大精霊への扉前―

ルイスたちは、連れてこられ扉の前へとたっていた。セリウスの娘、いわばこの国の姫を待つためだ。

暫く待つと、綺麗な女の人がやってくる。

「えっと・・・」

「はい、私がこの国の姫、イルフィーと申します。」

その女性に、ルイスは姫かどうか聞こうと思ったが、それをわかったのは先に自己紹介をする。自己紹介をされて返さないのも失礼なので、ルイスたちは自己紹介をし返すと、綺麗な笑みを浮かべて、そして真面目な顔にすぐになる。

「では、準備は良いでしょうか？」

そうイルフィーがいうと、ルイスたちは同時に全員がうなづいた。

ルイスの白銀の剣は時の鞘にいれ。
ユーリは鳳凰の杖をもち。
エリカはアネモイの斧を召喚した鬼に持たせ
ユリアは麒麟の剣をいつでも引き抜けるように手に持ち
カイトは真っ赤になりながらも翼と天使の輪を装着。
アリスはエクスカリバーをワクワクした顔でもち
ルシルはグリモワールをパラパラとめくっている。
レイは『なにもないですのぉぉ』とかいって

クリスはそれを「私もだし・・・」と慰めようとして、すこし自分が嫌いになった。

そして扉は開かれる。

その次の瞬間。全員がキッと気分を戦闘態勢へと身構え、カイトは天使の輪が輝きながら魔法を増幅させていく。

「『光よ、吹き飛ばせ』」

その瞬間、膨大な光があたりを包み込み、爆発音が巻き起こる。

ユーリは杖を固く握りしめ、魔術を構成していく。

「『光よ、敵を貫ぬけ』」

そういった瞬間に上空から大量の光の刃が現れ、敵が無造作に倒されていく。邪神の手下たちは、ルイスたちに気づき攻撃を開始し始める。

イルフィーは目の前の光景に小さく「すごい・・・」といった。

その声はルイスの耳に届いていたようで、ルイスはイルフィーに笑

いかけると、白銀の剣を引き抜いていく。

「いっけえぇぇぇ！」

エリカの鬼が斧を振り、異常なほどの風で敵を吹き飛ばしていくと同時にルイスは飛び出していき、まだ残っている風へとのる。

「『加速せよ』」

魔術を想像、そして宣言すると当時にルイスの速度が加速し、いっきに敵へと向かっていく。そして邪神の手下切り裂いていく。

それをみたアリスは、後ろにレイ、クリス、そしてイルフィーを後ろにつけ、飛び出していく。

邪神の手下は、それをみて、大精霊の護りをとくには王家の血筋が必要なことをしってか知らずか、イルフィーを標的にして、いっきに向かっていく。

アリスは向かってくる何体かをエクスカリバーで切り裂いていく。ルシルはページの呪文を唱え終わったようで、魔物が終結している場所へ、無力化と同じように指をさし、ゆっくりと小さく円を書く。

「『破壊されよ』」

そう宣言した瞬間に、ルシルが円を書いた場所にいる邪心の手下たちは・・・粉となった。

それをみた邪神の手下は、アリスたちに攻撃する人数をすべての邪神の手下をあつめ、すこしバラけながらも近づいていく。イルフィ

ーを捕まえればすぐに終わるとでも思っているのだろうか。

それをみたアリスは恐怖することもなく、だた笑みを浮かべた。

「その程度バラけた程度で、なんとかなると思ってんじゃねーよ！」

そういって、アリスは剣に魔力をこめる。もはや有名になってしまっている台詞を。

「エクスッ！カリバァァァーーーッ！」

その剣は世界を焼き尽くしていく。

邪神の手下は防御壁をはり、抵抗をしていく。

それをみたカイトは、エクスカリバーから放たれる光へと魔力を構成し、魔法をうつ。

「『光よ、吹き飛ばせ』」

それをみた、全員が魔法を構成し、光へと放つ。

そしてルイスは、いっそう輝く白銀の剣を、光へと放ち・・・

魔物たちは、浄化されていく。

何万といただろう魔物たちが。

イルフィーはその光景をみて

「これが・・・勇者・・・！」

声は小さくとも、大きく感動をした。

第九十二章『空間の大精霊』？（後書き）

ここまで感想を欲しがらない作者っておかしいかな？

作者はガラスのハートですからｗｗｗ

そういや見ているひと（読者）ってルイス一行の誰が好きなんですかね？

もしかしてストーリーがすき・・・なんてことはないのさ！

ＬＯＶＥじゃなくてＬＩＫＥね

ＬＯＶＥとかいったらドン引きしますから。

まぁそこまで魅力のあるキャラクターはいませんが・・・

まともに個性が感じられるのってエリカくらいなのかな？

ツンデレ子的な意味で。

登場が安定しているのは当然のごとく主人公とヒロイン

カイトとユリアとエリカくらいですかね

ルシルは意外にでてる。

レイはまったくでないし、クリスは普通だなァ

１３人とかやっていたらてんぱってただろうなぁ・・・

感想まともに聞いていてよかった。

最近文体を軽く変えてみました。軽く変えたというか

『ちゃんと説明しはじめた』といえばいいのだろうか。

過去の文章も変えたほうがいいのかね。

といっても過去はほぼふざけすぎているからな。

変えて欲しいって人が・・・

って長くなってきた。今回もよんでくれてありがとうございました。

第九十三章『空間の大精霊』？（前書き）

空間の大精霊が空気です。
次回は、ルイスの真実が・・・話されません。
省略されます。
その後ちょくちょくでてくるだけです。
・・・普通に書いたほうがいいでしょうか。
１００話で終わるという目標がガラガラとくずれていっている気がする――

第九十三章『空間の大精霊』？

―ユーリ―

「やっと到着した・・・」

そうやって、僕たち・・・いや、私たちは空間の大精霊の神殿の前へと到着する。

最後の大精霊、そんなうれしみが私の心をみたしていく。

もうすぐ、もうすぐ言える・・・彼に抱きついて、彼に好きだっていって・・・そんな考えがたくさんでてくるが、とたんに私は不安になっていく。

「（彼は・・・勇樹は、いや・・・ルイスは、最後に私が騙していたことを聞いて、軽蔑しないだろうか・・・）」

そういった不安。不安というものは考えると、じわじわと心を侵食していくものだ。私は姫である女性が扉に手をふれるのをみながら、内心ドキドキしていた。

まだ時間はある。まだ邪神が現れていない。

それでも、不安で不安でいっぱいだ。

「ん？どうしたんだルイス」

私が不安な顔になっているのを気づいたのか、ルイスが駆け寄って

くる。まったく、生前もまったくかわらないほどに敏感だ。それに気づいて自然と笑みを浮かべた。そして私は決意する。

「ねぇ・・・ルイス」

そう聞くと、ルイスは頭の上に『?』がでてきそうな顔で私をみる。

「ん?なんだ?」

そうルイスがきいてきて、一瞬言葉につまるけど、勇気をだして聞いてみる。

「ルイスはさ、大切なひとが、ルイスが危険にさらされることがわかっていてさ、でも、その大切なひとはいえなかったらさ、その大切な人をうらむ?」

そうきいて、私の心臓はさらに高まっていく。ドクドクと鼓動がうるさい。私はまっすぐにルイスがみれなくなってきて、それでもがんばってルイスをまっすぐ見た。

だけどルイスは私の気持ちとは裏腹に笑うと

「うらまねーよ。大切なやつってのはさ、手を差し伸べてやるべきやつだからな。そいつがなんか理由があるってんなら、聞いてやるよ。そして許してやる。・・・内容により殴る回数が増えるけどな」

そういわれて、私はキョトンとなり・・・思わず、笑った。そんな私をみたルイスは、ちょっと赤くなって「いいからもういくぞ!」という。

「うん。」

うなづいて、私は心の中で歓喜した。

彼は、いつまでも優しい彼だった。

―ルイス―

なんだかしらないが、ユーリが相談してきたので乗ってやった。こいつには何か隠し事でもあるのだろうか？

そう疑問に思いながらも、護りがとけた神殿へと入っていく。

そしてそこにいたのは――

「こんにちは・・・お久しぶり、とでもいいましょうか？」

眼鏡をかけ、図書委員のような風貌、その風貌は覚えていた。俺は思わず一歩踏み出し――――

「次回もみてくれよなッ！」

「なんで速攻終了！？」

「ヤバイ、パニックになった。」

俺の思わずな行動にユーリの突っ込みがはいり、さすがに冷静になる。何度か息を、吸ってはいてを繰り返し、深呼吸をして心を落ち着かせ、ゆっくりと世界少女をみる。世界少女はクスクスと俺をみながら笑っていて、思わず顔が熱くなったのがわかった。

俺はとりあえず目の前の光景をみながら、次の言葉を捜す。

「と・・・とりあえず、こんにちは。」

「ハイ、こんにちは。」

なんだかしらないけど、年上（？）の余裕というものだろうか、世界少女は余裕そうにクスクスと笑う。

年上・・・っていうと、俺の年齢を数えるとすでに３０にはなるくらいなのだが、世界少女が年上になると、絶対に世界少女の少女部分がおかしいとゲブラッ・・・なんで目覚まし時計が上からッ！？

「なにか・・・いいました？」

ヤバイ、笑顔だけで魔物が殺せるよこの人。

「んで・・・一人なんですか？」

「ふふ、一人じゃありませんよ。」

世界少女が笑うと、あと三人追加される。後ろをみると転生者が驚いている。・・・関係者か。

「っていうか一人は絶対的に少女じゃな痛い！今度はタライがふってきたァ！」

「ルイス、さすがに女性に年齢について問うのはやめようよ。」

うむ・・・自重しよう。カイトがじーっとみている女性が泣く子も・・・いや、全世界のすべてのものが恐怖しよってこなくなりそうな顔で俺をみている。怖い・・・なんだよ世界少女ってみんな怖いのかよ。

そう思っていると、一人の世界少女がこちらにやってくる。

アリスがそれをみている。・・・コイツをこちらに送った者か

意外と普通そうな娘だ――

「こんにちはロリコン」

前言撤回を所望する。

その言葉を聞いたアリスは、まるで心外だとでもいわんばかりの顔をして、手を動かし続ける。

「いいかね、世界少女。俺はロリコンだが、君の言うロリコンは変態的なロリコンだ。大丈夫だ、俺は幼い子供の純粋さが大好きなだけだ。愛でたいのだ。俺は決してハァハァ、ボクといっしょにお風呂にはいらない？とかいう単語は性的な意味で使わない。そもそも幼女にそんなのは感じない。俺は愛でるために風呂にさそう。そもそも俺は幼女というものにはどれでもいいというわけではない。正直にいってしまえば、そんなに幼くてもダメだということだ。愛でる対象はやはりかわいくなければいけない。俺は６歳以上１０歳以下を所望するのだ。Ａ○（自主規制）などでのロリなんとかというものは正直いらないのだ。あいつらはなんだ、髪をくくって幼い格好をすればロリになるとでも思っているのか、対外が気持ち悪いんだよゴラァと俺はいいたいのだ。そもそもロリというものは純粋さという点からみてロリといったほうがいい。純粋さがなければロリというものはない、純粋なくしてロリは成らず、小さきことをなくしてロリはロリと呼ばずだ。これは国による民と同等のレベルで必要なものなのだよ。俺はどんなロリコンでもなんでもいいというわけではないのだ。Ａ○という単語がでてきた時点で、性的な部分をもっているのではないか、という突っ込みをうけるかもしれないが、

俺は断じて違うといっておこう。いってしまうと、男とは総じてエロが大好きだ。最高だ。ヒィィィヤッフゥゥゥッ！だ。正直にいうと、ロリという言葉をみて俺はＡ○を選んだわけではない。でてくる人物をみて選んだのだ。つまり俺はロリコンというものではない。幼女！幼女！とはいいたいが、そこには性的なものはなく、愛でるという感じがある。つまりロリコンではない。ＯＫ？（参考：いとこの酒の席での愚痴）ってなんで青い顔をして一歩下がるのかな！？」

「分からないお前がおかしいよ。」

俺の突っ込みにさらに心外だという顔を張り付かせるお前に心外だよ俺は

とりあえず俺は世界少女をみる。

世界少女は俺をみてニコリと笑うと

「貴方は・・・世界を救うのです。」

とんでもない言葉を投げかけてくる。正直いって今言うべき言葉じゃないとおもったけど、そんな気持ちはすぐに掻き消える。

「それが、貴方の試練。」

「・・・試練？」

『異世界でいきる』それが俺の試練、ではなかったということだろうか？

「何故・・・いまごろ。」

そういうと、世界少女はうなづく。

「貴方は、世界を救いたいですか?勇者になりたいですか?」

「・・・」

無言だ。何もいえない。世界を救いたいといえば、救いたいといおう、たくさんの人にあってきた。たくさんの人に励まされてきた。・・・でも、試練ということばに、言いにくくなってしまう。救いたい、といってしまえば、『試練のために』という考えがまとわりといてしまう。

それは、自分自身がもつ勝手な欲望だ。

それにより、世界を救うという選択肢を選んでしまってもいいのだろうか。

「いや、違う。」

俺のやることはただたんに奇跡の範囲を広げるだけではないか

『美奈子を幸せにしたい』

その願いを、この世界すべての人の幸せにつなげ、美奈子も幸せにする。

ただ、それだけなのだ。

その思いをつなげ、俺は言葉を発する。

「これは俺のたんなる欲望だ。勇者じゃない。世界を幸せにしたい、美奈子を幸せにしたい。そんな俺の私利私欲だ。でも・・・俺は、戦う。」

その言葉に、世界少女は目をまるくし、とたんに4人がクスクスと笑う。

「似ていますね。」

「えぇ、似てるね。」

「まるっきりリィンと同じなんだから、ちょっと性格は違うけど」

「懐かしいですね」

・・・リィンというものは誰なのだろうか。俺はそう思ったが、なにも聞くことはない。

世界少女はコクリとうなづくと、後ろの仲間たちをみる。そして四人同時にいう。

「「「「貴方は、戦いますか?」」」」

そう問いかけられ、後ろのやつらは、笑うと

口々に

「「「「「「「「当然」」」」」」」」

という。

『では、私と契約しようか』

突然入った言葉に、俺たちは振り向いた。そこにいたのは大精霊。

「空間の大精霊・・・？」

そういうと、空間の大精霊はうなづいた。そして手を差し伸べられて、思わず俺はその手を掴む。あたりを光が包み込んでいき、すぐに光が晴れる。

『契約、完了だ。それではこの下鎧を。』

そういって渡されたものを受け取る。・・・鎧の完成だ。

「あれ？防具完成！？いや・・・盾がないじゃないか。」

「それはいまからです。」

「え？」

世界少女の言葉に振り向くと、世界少女は何かを唱え、俺を指す。

「転送」

そういった瞬間に、体に光が包まれていく。

そして次にいたのは、石でできた場所だった。

第九十三章『空間の大精霊』？（後書き）

参考文献（いとこの愚痴）があるにしても、自分は変態だと再認識した。

第九十四章『勇者の遺跡』（前書き）

ハァー
ぶっちゃけ結構疲れていたりィー

最近異世界転生と異世界憑依の基準がわからなくなってるよね・・・
そういえば、無限の魔術師右代宮戦人を異世界に飛ばしたらどうなるんだろう・・・、いや、改造しなきゃどうにもならないか。
ベアトの技をバトラがーとかエンドレスナインーとか
青き真実ーとか赤き真実ーとか、黄金の真実ーとか
そういえば作者は二重人格説を信じているんだよねぇ。

第九十四章『勇者の遺跡』

―ユーリ―

ルイスが世界少女によって転送されたあと、世界少女は私に向かって微笑みかける。

「あとは・・・貴方はどうしますか？いってはならないのはひとりだけなので、いってもよいのですが。」

そういわれて、私はコクリとうなづく。

みんなは不思議そうにこちらをみている。

「ね、ねぇ？いうってなにを？」

エリカがそういってくるので、私はエリカをまっすぐと見つめ、そして周りをぐるっとみてからうなづく。

「ボク――いや、私の正体は――――」

決心を、した。

―勇者の遺跡―

ピチャンッ・・・

ピチャン・・・ッ

薄暗い暗闇の中、足の感触から石でできた場所だと理解する。右にいって触っても石、左でも石

上を向けばまっくら、それだけでもこの場所は地下だとルイスは理解した。

「どこだーここー」

小さくいってみる、その言葉が響き渡って大きな声に聞こえる。だけど返答は何もなく、その響き渡る音から、まだ道が続いていることを知った。

光の精霊を探すも居ない。ルイスは仕方がないな・・・と思い想像を開始

暗闇を照らす光を

「『闇を照らせ』」

そういった瞬間、ルイスが突き出した人差し指に小さな光が発生し、あたりを光で照らす。周りを照らし、左右が近く、狭い空間だということをルイスは理解すると、前をむき、後ろをむく。

「・・・結構長いんだな。」

目の前は深い深い暗闇の中、さらに続くものだ。オマケにどっちにいけばいいのかわからない。どうすればいいんだろう、とルイスは思い見回していると文字がみえる。

かすれている文字、それでも読めそうだったので眼を近づける。

「・・・この世界の文字でもないし、元の世界のでも・・・いや、なんでだ?読めるぞ。『やればいいさ』・・・」

その文字が読めた、という疑問がさっさと消えてしまうくらいに、その適当さに唖然とする。ルイスはなんだかイラッときたが、呼吸をいつもおりも大きくし、心を落ち着ける。

「ふぅ・・・って落ち着くかボケェェェッ!」

そんな文字に思わずぶんなぐ・・・れなかった。

「ハァ?」

もう一度殴ってみる・・・そうするとすり抜けていく。

「・・・とりあえずいこう。」

半ばあきれながらも、ルイスは壁をすり抜け前にいく。すり抜けすぐに眼に入ったのは

『馬鹿正直だな』

またもやルイスはイラッときたが、今度は手を出さずに押しとどめておく。

ルイスはさらに歩んでいく。

―ここからは音声だけでお楽しみください―

ブォォンッ

「殺す気かァッ！」

チュドォォンッ

ガラガラ・・・

「どんな古典的トラップやねーん！」

ドゴォォッ

ゴゴゴ・・・・・

「秘拳、屋上割りッ！」

チュドォォンッ

―勇者の遺跡・盾の間―

「・・・・」

満身創痍である。

「・・・・・・もういいよ、もういいやん、もうええやん」

もうダメな感じだ。

ルイスは半ば泣きそうな感じでただっぴろい空間にたどり着く。ルイスはたどり着いた瞬間にすこしうれしい気持ちがでてきたが真っ暗がさらに真っ暗になったことに嫌気がさしていった。

「『拡散せよ』」

ルイスは光の弾を頭上へとなげると、拡散させる。そうするとこの部屋が照らされていく。

ルイスがこの部屋をみると、さらに奥に不思議なものがある。大きな扉、装飾がしてあり、何色もの色が塗られている扉だった。その扉をみるとまたも文字が書いてある。

「『持つ者全てを見せよ』・・・か。うーん、全部っていうと・・・」

ルイスは影から鎧たちを呼び出し、装着する。そして白銀の剣を呼び出し、手に持ってみる。

「・・・んぁ？」

そうすると、扉が淡い光をはなち、その光がさらにさらに強くなっていき、・・・次の瞬間に扉は消滅していた。

「・・・あってたってことか」

ボソリ、とつぶやくとさらに奥へ行く。

そうすると、光を放つ盾をみつける。その盾は壇上においてあり、その光は白銀の剣と同じ・・・というわけではない。だが、白銀の剣と負けず劣らず美しい光。白銀の剣は白い光、盾は太陽の光のようなものを放つ。その光に違和感を感じ、こちらに向けられている光から逃れるように右に動くと、そこに虹ができる。

その光に思わずルイスは感嘆すると、すぐにどこかへ飛んでいきそうな意識を取り戻し、虹を観察してみる。

「・・・通常の虹の出来方とか関係ないなこりゃ・・・」

この盾から虹ができている、命名するなら『虹の盾』か、そのままんまだけどな。

正直ドラクエっぽい展開にとまどい気味だが、ここは異世界の上ルイスは勇者だという結論付けられた状態があるので、すでにルイスはなれている。

召喚されて勇者だといわれて、記憶喪失で戸惑いながらも強くなって、土壇場で記憶が戻って、強くなって、敵を倒して・・・っていう展開がないだけマシだ。

ルイスは無造作にその盾に触ってみる。

パキンッという音をたてて、世界が割れる。

「なッ――――！」

世界はぐるぐるぐるぐると回りまわりまわりまわり
暗闇へ・・・落ちた。

そして暗闇がはれると、そこにいたのは知らない男女。
結婚でもしているのだろうか、男性は一人の子供も持ち
女性はお腹が大きく・・・子供がいるようだった。

『ねぇ、リィン。』

女性がリィンという男性を呼ぶと、リィンと呼ばれた男性は振り向く。

『なんだい？エレナ。』

『絶対勝って、平和になって、そしてそして、・・・幸せになろうね。』

『あぁ、当然だよ。』

その光景をみて・・・ルイスは、涙を流していた。

その涙の理由がわからない。何故こんなにも悲しいのかわからない。
でも涙が止まらずボロボロと涙が頬をつたい、地面へと落ちている。

「うぅっ・・・うわぁ・・・うわぁぁぁ。」

涙で顔がぐしゃぐしゃになりながら、幸せな男女をみて、涙を流す。
幸せな二人をみて、何故涙を流すのだろう。

わからない・・・

わからない――

世界はさらに続いていく。

真実をみせる。

ルイスに・・・勇者に真実を見せる。

暗闇の中、ポツンとルイスは立っていた。

ハッと意識を取り戻し、ルイスはゆっくりと盾を手に持ち、自らの腕に収める。

最後の一滴が頬をつたい、地面へと落ちた。

「俺、いくよ。」

ルイスは小さく、何かに言うようにいった。

その声は優しく。美奈子や、仲間に言うように優しい。

「いってきます。」

そしてルイスは笑った。

その頃、封印のすべてが壊れきっているということを、すべての人間はしらない。

第九十五章『最終決戦』　戦前（前書き）

８人だけの世界をかけた大戦

どんなＦＦですかい、と心の中で作者は自虐的にいいます。

第九十五章『最終決戦』　戦前

ある夫婦は願った。

炎の中、燃え盛る火の中、体が潰れていたとしても、朦朧とした意識の中願った。

『この子が、幸せでありますように』

暗闇の中、ついに封印は解き放たれた。

そこにまきおこったのは、笑い声

ユカイでユカイでたまらないといった声。

その声を聞き取り、暗黒の大精霊は身が凍る。

そして暗黒の大精霊は自身の力をすべて使い。

街の人々を転送した。

街の人々は、いきなり暗黒の壁から変わり、青空に変わったことに驚愕する。

「な・・・なにがおこったんだ!?」

一人が叫び、何人もの人々が現実に驚愕する。

そして見つけるのだ、かつていた暗黒の地であることを知らせる暗黒の境界を

「まさか、大精霊・・・?何か起こったのか・・・ッ!?」

その瞬間に異常な魔力量を魔法使いたちは感知する。

そしてすべての視線が暗黒の境界へと眼を向けられた瞬間。その境界は無残にも崩壊した。

何が起こったのかなんて誰もわからなかった。

『何かが起こって、暗黒の境界が壊れ、そしてそこには街があったと考えられるものさえなかった』

そうとしか言いようがない。

街の人々は驚愕し、恐怖し、それでもまっすぐと『街があったであろう場所』をみる。

そこには城があった。その城は言い表せない何かを纏っており、人々は本能が警告した。『逃げろ』と、『とにかく逃げろ』と。

―空間の神殿―

ユーリは全員に自分について言うと、全員が全員、生暖かい眼でユ

ーリを見始めている。カイトの「ラブラブだねぇ・・・」という言葉に、ユーリは顔を真っ赤にさせ――すぐに、思わず表情が固くなった。

「な・・・なにこれ・・・!?」

不快感、ピリピリときて、何かドロッとしたものが体を駆け巡っている不快感、それをユーリが感知し、仲間たちも感知したのか不快感を顔にあらわにしていた。そして世界少女たちは、ついにきたかという顔つきをしている。

「来ましたか・・・最後の、戦いです。」

「邪神が・・・?」

そう会話していると、仲間たちは頭に『?』をくっつけているような表情をしているのをみて、ユーリは話をし始める。

『白銀の勇者の物語』を

―ルイス―

「ふぅ・・・」

暗闇の中、やっと這い出して太陽の下にでる。額には汗がにじみ出て、顔は疲労が見え隠れする。

だが、そんな表情は遺跡から出た瞬間に変わる。

「この感覚・・・記憶の！」

ルイスの顔がこわばり、城に対して視線を送る。

『あるだけで、異常』そんな城だった、俺は少しばかり顔をゆがませると、ブンブンと顔を振り、まっすぐ前をみる。

魔法を構成・・・

「『千里眼となれ』」

眼に向かって想像を開始し、構成を構築、魔法を宣言する。

眼が千里眼となり、城がぐんぐんと近づいて見える。

「・・・ふぅ。」

邪神の手下であろう魔物たちが噴出しているのがみえる。

ルイスは魔法を構築を開始、精霊に補助を申請し、受理される。

大精霊に力を渡され、それをさらに付与する。

さらに魔力を膨大につぎ込み、空間の大精霊の力をさらに強める。

「『爆ぜろ』」

その瞬間、空間が爆ぜる。

手から玉ができ、それがだんだんと巨大化していく。

白銀の剣の力を想像により、外に出ている分だけとり、魔術の構成にのせておいた。白銀の剣の力は浄化、邪神の手下共に友好だ。こんな使い方なんてはっきりいってしまえば使ったことなどなかったが、ぶっつけ本番、といっても足止め程度でいいと考えはしていたので、構成にのせられなくともよかったのだが、これで大きく現状は変わる。

巨大な球となった幾度となく内部で空間が爆ぜ続ける球をいっきに切り離し、城へと飛ばす。

城の異質さから感じても、たぶん『城にはきかない』だろう。

だが――――

球がいっきに城へとぶち当たる。

城は何かの力で防御され、結構な魔力をいれたのにもかかわらず入り込めない。

そんなものは理解していた。

だから、ルイスは目の前の状態からさらに魔法を想像し、構築する。

「『さらに爆ぜろ』」

そういった瞬間、まるでシャボン玉が割れるかのように球は割れ、そこからいっきに空間が爆ぜ続けて出来上がった『力』が解放されていく。

それにより、周りに居る魔物が消し飛んでいく。

・・・まぁ、まだ魔物はいるだろうが。

俺はちょっとため息をつきながらも、魔力を結構使ったことに多少の疲労感を感じ、それが即座に癒されたことに、自分の魔力の異常さにやっぱり気づく。

「ふぅ、チート・・・だよな。」

まぁ、それにしても敵が強すぎるのだが。

宝具とかそういうレベルでは切れないだろう。この世に想像された魔術・魔法で倒せるかも問題だ。

転生チート、とかいうレベルなどではない。主人公無双とか無早どうでもいい。

『敵』と『俺たち』は無駄に『最強同士』なのだ。

「・・・合流するか。」

今現状を心に刻み、俺は転送を想像し、構築。

「『空間の神殿へ』」

そういった瞬間、その場からルイスの姿は掻き消える。

―空間の神殿―

ルイスが到着すると、全員は沈黙していた。

「あ、ルイスッ！」

ルイスの姿にまず始めに気づいたのはユーリだった。それにより全員が気づく。

「なんだかヤバイみたいだな。」

カイトの言葉にルイスはうなづく。

全員がそれで沈黙する、だがその眼には絶望は移っていない。

「・・・盾を手に入れたようですね。それと、真実も」

世界少女がそういった。ルイスは強くうなづくと、遠い眼をする。

「・・・真実って？」

「終わったら話す。」

ユーリが聞くため、ルイスは答える。ユーリはその言葉にうなづく。

「私も戦力になったからさ」

クリスはニコニコと笑い、でかいハンマーを持っている。

「『創造の槌』だってさ。・・・そのまんまだけど、効果は絶大だよ。」

『レイも・・・武器ではありませんが、力を手に入れましたの！名づけて・・・『ポルターガイスト』ですの！』

「わかった、レイの効果はもういい、わかるから。」

『出番がすくないですのぉぉ！？』

「うん、効果は後で言うね。」

「あぁ、わかった。」

レイをいなし、クリスの効果を後で教えてもらうようにいった。

ルイスはパンッと頬を叩くと、転送を想像し構成し始める。

「・・・どこにいくの？」

ユーリがルイスにそう聞いてきたのでルイスは笑っていった。

「『アトラント国』なんか文献あるかもだろ？白銀の剣があったんだし。」

その言葉に、全員がなるほどとうなづく。

「じゃぁ・・・いくかッ！『転送』」

「いきました、か。」

『心配か？』

空間の大精霊の言葉に世界少女はフルフルと首をふる。

「『彼の子供』ですから。」

―アトラント国・王座・ｓｉｄｅルイス―

転送され、玉座に到着する。正直初めてだ。

「な・・・なにもの!?・・・・いや、貴方は、ルイス様ですか?」

「・・・様?、いや、はいそうですけど」

転送して目の前にいた姫・・・たしか、アリカとかいいたはず。

「あの・・・」

「少しばかり、お待ちください。お父様を呼んできます。・・・うふふふふ」

声をかけようとしたが、冷静なお姫様は父親、王を呼んでくるようだ。・・・最後の笑いに寒気を感じたのは気のせいだろう、・・・気のせいであってくれ。

お姫様である『アリカ姫』がでていったあと、ルイスはポツンと扉をみていた。

ある程度時間がたつと、王であろう人がやってきて、俺がもっている剣をみて感嘆する。

「そ・・・それは白銀の剣ッ！それでは貴方が！」

そういわれ、コクリとうなづく。

興奮していたことに気がついたのか、王はハッとすると、落ち着いた顔でこちらをみる。

「一つ聞こう、何故ここにきたのだ？」

「白銀の剣があった場所なので、邪神の手がかりがあるものかと・・・」

そういうと、王様はうなづき、一冊の本を渡してくる。『白銀の勇者の物語』だそうだ。

「すまないが、書庫をさがしてもこれぐらいしかなかった。」

「いえ、十分です。・・・ありがとうございます。」

そういって、礼をすると踵を返し、歩いていく。

すると、後ろから王から声をかけられる。

「・・・なにか褒美はいるか？」

その言葉に振り返り、笑顔でいった。

「いりません。」

そういうと、王はうなづく。そしてさらに言葉を続ける。

「何故、お前は剣をもち、戦地へと赴く。恐怖はないのか？」

俺はその言葉に、まっすぐと王をみていった。

「怖いですよ、とっても怖い。」

「では、何故？」

「笑顔がみたいから、・・・たくさんの人の。」

そういってルイスは再度歩き始める。

王は心の中で思う。

「（これが、勇者）」

伝説は、始まった。

第九十五章『最終決戦』　戦前（後書き）

・・・時間があったのですこしみたところ誤字発見。

・・・最後のいいところで誤字・・・

第九十六章『最終決戦』―戦前―？（前書き）

ふむ、最近ご都合主義小説がよく見かけますが

どうせならあれですよ

ご都合主義小説の主人公に一般的感性をもつ主人公を憑依させて心の中で突っ込ませながら物語を進めるような小説があったとしてもいいと思うんですよ。

第九十六章『最終決戦』―戦前―？

世界は『狂っている』

だから、壊してやる。

邪神は、城の中で笑う。

狂ったように笑う。

その眼には光る何かがあって

壊したいという破壊衝動という気持ちのほかに、彼には別の感情があった。

―ルイス・アトラント国―

一日だけ貸してもらったベットの上で足をパタパタとさせながら本を読む。

『白銀の勇者の物語』

終結自体はちゃんとかかれていない。

だけど俺はその結末をしっている。

邪神は最後の力をつかって勇者を滅ぼして、邪神は健在のバッドエンド

それでもそのバッドエンドは勇者によって伸ばされている。

まだ終わらない。俺の手でハッピーエンドにするんだ。

「・・・戦いはごり押しですか・・・」

ひたすら斬りつけて、邪神を浄化し続ける。そんな戦い方。

ぶっちゃけていうと、あまりいいとは思わない。というか俺の剣のレベルでどこまでいくかどうか・・・

「考えても仕方ないよ。不安なとこばっかり考えたっていみないじゃないか、ルイス。やることは、不安なところをどうやって埋めるか、じゃないかな？」

それは確かにそうだ。それはそうなんだけど・・・

「ううむ・・・最終的に敵を貫ければ勝利ってやつだろうな。その結果をつくりだすために、どんな過程を作ればいいか・・・がんばる・・・・か。」

「大人数ＶＳ８人だからね、正直化け物大人数ＶＳ異常＋一般人だからね。」

「・・・突っ込みたいけど反論できん」

そんな漫才みたいな言葉のキャッチボールをしながら、何度も『白銀の勇者の物語』を何度も何度も読んでみる。俺は初めてよんだとき、すこしばかり涙がでそうだったが、いまは冷静によむことができている。

「やはり、最初はカイトが思いっきりぶっ放せばいいんじゃないか・・・これは。」

カイトの武器、いやアイテムだろうか・・・は『天使の輪』、勝手に名前をつけたものだが、魔法の威力を増幅させるものだ。思いっ

きりやればある程度はふっとぶと思う。

「最終目標は城にはいること・・・なんだけど、どうしよう？」

「テレポでいけばいいんじゃないか？」

そういってうなっていると、エリカとカイトが一緒に部屋にはいってくる。カイトの言葉に、すこし「あぁ・・・」と大丈夫な気もしたが、無理だということをすぐに理解した。

「いや、テレポは失敗したら物質と同化しちまう。っていうか、見えなきゃ移動できない。『想像』しなければいけないから・・・」

「うぁ・・・想像しちまった・・・ってことは、テレポ、瞬間移動するにしても場所みなければいけないってわけだ。」

「じゃあ一回空に瞬間移動して、そしてまた城の上に瞬間移動すればいいじゃない」

「空にほっぽりだされて、足場もないで、バランスもつけられない、もしかしたら空中で視線がぶれて、想像がちゃんとできなくなってしまう可能性もある・・・リスクが大きすぎると思うんだよね。」

「じゃあ飛んでいけば・・・？」

「残念だけど、想像は連続してできないんだよ。」

「便利なようで不便ね・・・」

エリカの言葉に、この場にいる全員が同意した。そしてカイトが何

かに気づいたように「おぉっ！」という声をあげると、この場にいるカイト以外がカイトをみる。

「なにか思いついたのか？」

と、俺がいうと、カイトはビッと俺に人差し指を向ける。

「水の聖域、船、有る程度直せば飛ぶんじゃないか？」

そういった言葉に、全員が「おぉぉっ！」という反応をしめす。ナイスだカイト。

そういって歓喜を示す俺たちの居る部屋がノックされているのに気づき、いったん全員が落ち着かせて、「どうぞ。」といってハイっていいことを示す。

「声がするから着てみたのだが・・・」

「ふぅ・・・ユリア・・・バイクつくってるっていうのに無理矢理ひっぱってこないでくれるとうれしいよ・・・」

そこにいたのはユリアとクリス。全員が丁度いい・・・といった顔をしているのに、ちょっとクリスは嫌な予感を感じているのか、顔の筋肉をヒクヒクと動かしながら嫌な顔をしている。

「な・・・なに？」

「ちょっと水の聖域直してきてくれないか。」

「水の聖域？たしか、昔本で・・・船だったね。昔飛んだ船。」

そういうと、全員がうなづく、クリスは正解だったことに安堵して、
「大規模な修理だよ・・・いや改良してしまえばいいかな？」とかいいながらもめんどくさそうにため息をつく。

「全員でいきたいけど・・・全員だと如何せん動きが遅くなるだろうから、正直少ないほうがいいと思うんだよね、でも一人だと危ないから、一緒に行ける人選んでいってくれないかな？」

「うーん、なんだか直すことを大前提に考えられている気がするけど、馬よりさっき創ったバイクでいけば速いと思う、でも二人乗りになっちゃってるからな・・・バイクの免許もっているひとといる？といっても今聞けるのはルイスとアリスくらいだろうけど。とりあえず聞いてくるね。」

そういってクリスは部屋からでていき、アリスの元へ向かい・・・

そして戻ってくる。

「・・・もってなかった。ついでにルイスももってなかった。」

「いっとくが、俺にはそんな金銭の余裕はなかったからな。」

「俺はあきはば・・・ゲフンゲフン、バイクよりも電車でいったほうが良いような場所にかよっていたから、必要はなかったんだよね。」

「ってことは誰でも同じだね、もういいや、ユリア、一緒にいってくれるかな？」

そういってクリスがユリアをみると、ユリアは何かを考えているようだ。そんなユリアに、クリスは心配になって「どうしたの？」ときいてみると、ユリアはちょっと不安そうにきいてくる。

「ふむ・・・バイクとはなんだ？」

その言葉に全員が不安になったが、クリスはそりゃそうだよなぁ・・・と小さくボソッというと

「馬よりも速いものかなぁ？」

と答える。

「ドラゴンかなにかか？」

とユリアがさらに疑問をぶつけてくるが、クリスは「地を走るからね・・・みたほうがはやいんじゃない？」という回答を述べると、コクリとうなづく。

そうしてユリアとクリスは出て行き、全員がその跡に続く。

―クリス―

さて、バイクの目の前にはきたものの、私バイクにのれないし・・・なぁ・・・

肝心のユリアは「・・・口がないぞ、どうやってえさをたべるのだ？」などといっている。さすがに有る程度は使い方を教えたほうがいいだろう。しかたない、ちょっと走るぐらいは、この私にでもできるだろう。幸い使い方はもとのバイクよりも簡単だし。

「ちょっとみててね。」

そうユリアにいうと、ユリアは素直にコクリとうなづく。私はバイク、大きさでいうと中型にあたるであろうバイクの目の前にある、カーナビのような部分に手をあて魔力を押し流すと画面がひかり、キィィンッという機械音を鳴らしながらバイクが起動する。その様子をみて、ユリアが「おぉぉっ！」と眼を輝かして感嘆するのをみて、クスッと笑いながらも、バイクを完全に起動させた。それにまたがってみる。

「ほほぅ・・・ほぅ・・・」

感嘆の声を漏らし続けるユリアをみながら、私は説明を始める。

「操作は簡単、ハンドルを右に曲がりたいなら右にハンドルを回し、左なら左、動くのはこのアクセルっていう踏めば加速するやつをふみ、止まりたいならブレーキね。っと、今からふむ・・・そぉっと・・・そぉ・・・うわぁぁっ！？」

ゆっくりと踏もうとしてガチガチになっていたせいか、強く踏んでしまい吹っ飛んでしまった。

その場に音だけ残し、すごい速度で加速する。ブレーキッ！

ガッという音をたててブレーキを押すと、ブレーキが破損することなく止まる、強化しておいてよかったと思う・・・と、思ったのだが、そのブレーキの強さのせいで、自らがふっとんでいってしまうとは思いもよらなかった。

「ひょえええぇぇぇ！？」

ザザーッと、頭から地面へとぶつかり、そのまますべっていき、数十センチでとまった。

・・・痛い。

いつのまにかユリアがバイクを押しながら私の目の前にいき、「き・・・危険な馬だな。」という感想を述べてくれ、後ろにいるルイスは半ばあきれている。・・・こういう類のがニガテなものだということだということを今理解し、ユリアに乗るように進める。

ちょっとユリアは顔をゆがませ、不安そうにしているところを意外だと思ったけれど、ちゃんとゆっくりとアクセルを踏んだところをみると、大丈夫そうだ。・・・ユリア楽しそうだし。・・・テンションおかしいけど。

「あっはっはっはっは！あーっはっはっはっは！」

そんなテンションがおかしいユリアについて、ルイスに聞いてみると

「いや、俺あったとき無理矢理炎の大精霊のところにつれていかれたし。」

といった返答がかえってきた。

「・・・ものすっごい不安だけど、私いくね・・・」

この場にいる全員から励まされた。

「じゃ、いってくるね。」

「ではいってくるぞ！ふふふ・・・」

未だにテンションがおかしいユリアに冷や汗をかきながらも、私たちは水の聖域へと向かう。

完成するのははやくしたほうがいいだろう、城が動きつつあると聞く。

私は仲間全員から哀れみをもった視線を送られながらも、ユリアが

うれしそうにのったバイクの後ろに座る。

「さぁいくぞ！」という掛け声をした後、何をおもったか、アクセルを思いっきりユリアは踏み付け、いっきに加速させた。

「ちょ、はやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

という音を残して、私は泣きそうになりながらも水の聖域を目指す。

「「「「「「生きろよ・・・」」」」」」

見送った全員の心がシンクロした。

一週間後――クリスたちが飛んでいる船を携えて戻るとき

邪神との戦いが始まる

第九十六章『最終決戦』―戦前―？（後書き）

何とか百章で終わりますかね。

百章だぁー！終わったー！ってときに

『〇〇章がぬけてますよｗｗｗ』

とか

『〇〇章が二つありますよｗｗｗ』

とかいわれても

「全力で見逃せ！」っていいますから、絶対。

だったら自分で探せって？イヤですよ、めんどい（ダメ人間

第九十七章『最終決戦』―戦闘・開始（前書き）

中二病全開だよ！もとからだけどね！

指摘？ダブり？なにそれおいしいの？

『全　力　で　見　逃　せ』

選択肢は

はい／ｙｅｓ／ｓｉｒ　ｙｅｓ　ｓｉｒ／ＯＫ／承知いたしました／あなたの言葉に私はさからえません／私はあなたの下僕です／だが断る

いまさら思ったんだけど、みんなってキャラクター誰が好きなんでしょうか？

第九十七章『最終決戦』―戦闘・開始

真実を知ったとき、それでも涙はでてこなかった。

何故かはわからない。

親父も母さんも、白銀の剣を通して俺をみているような気がしてならない。

俺の親父は邪神を倒せなかった。

俺のこの体は

親父の願いを叶える為の唯一の可能性

俺がひいひいひい・・・もういくつかわからないけれど

そんな祖先の俺が兄の子孫であるこいつの体にいる・・・

なんだか不思議な気分だ

俺の全てをやっとしった

何もかも偽りだった

でも、それでも、俺はここにいる。

終わったらみんなに俺について話そう

俺の真実を

終わったとき、真実を教えるのは、ルイスだけではないけれど

ゴウンゴウンゴウンガタンッ

「・・・なんか怖いんだけど」

「いや、さすがに一週間でここまでやれたのを褒めてよ。」

クリスが、ユリアと共に『水の聖域』を直すために出てから一週間、ルイスは『城』による被害を聞きながらも待っていたところ、浮いた船にのってクリスたちは帰ってきて、今現在、ルイスたちは『水の聖域』へと乗り、城へと向かっている。

そのためか、ピリピリとして、ドロッとした何かが駆け巡るような不快感がさらに増してっている。そのために全員が顔をゆがめて、不快感が外からでもわかってしまう。ルイスは、すべての防具をつけているためか、すこしは軽減されているが、それでも不快感が拭えないらしい。

「おっ、見えてきたァァァ！」

その不快感を無理矢理拭い去るように、とにかくテンションをあげてルイスは『城』がみえてきたことを仲間に伝えると、仲間は全員ルイスのもとへと駆け寄ってくる。

「視るたびに不快感を覚えるね・・・」

とユーリが顔をゆがめながらもいうと、全員がうなづき同意する。

「っていうか仲間が全員ここにいるのに、どうやって飛んでいるんだこの船？」

「ん？この船は思考を読み取り行動してくれる船でね、私の魔力で契約したから大丈夫だよ。この船はそもそも戦闘用で出来上がった船みたいなものでさ。戦闘もできるから・・・っと」

いきなりクリスが言葉をとめて、目の前をみる、それに釣られ、全員がバッとまえをみて、嫌な顔をする。

「うーわー」

あからさまに嫌な顔でいうルイスの視線の向こうには、邪神の手下が大量にいる。それをみてクリスが丁度いいといった具合に笑う、いい感じで黒く染まってきているようだ。

「みててね。『対象を倒せ』」

そうクリスが言った瞬間に、船の周りに魔力の球が発生し、前にたまっていく。

「『放て』」

クリスが宣言すると、魔力があつまり出来た大きな球は拡散し、敵を粉砕していく。

そんな景色にルイスたちが呆然としていると、クリスはクスクスと黒い笑みを浮かべながらこちらをクルリと振り向きいう。

「すごいでしょ？これ丸ごとが、あいつらを倒せる武器なんですよ？」

そういって笑っていた。

ルイスたちが「（クリスを怒らせてはいけない・・・）」と思ったのは当然であろう。

数時間後、城の近くへと来ていたルイスたちは、邪神の手下による攻撃の激化を感じながらも、なんとか相手を倒し、進めていた。

ルイスは仕上げだと思いながら、想像を始める。

「『テレポ』」

構成を構築、その後魔法を宣言した後にルイスたちの姿は船から消えていく。

そしてその瞬間城の上へと到着する。

『私たちが城に入るときはすごく苦労したのに・・・』

どこかで、世界少女の声がした気がする。

船にたいし、魔法を構築させ、「転移」とルイスはいっておき、船を地上へと移動させておく。

ルイスたちは戦闘態勢を取りながらも、まっすぐ前を向く。

「――――いくぞッ！」

ルイスの掛け声に・・・・・

『ギャォォォォウッ！』

邪神の手下が反応した。

「ちょ！？お呼びじゃねーよ！？」

ルイスが思いっきり突っ込むが、邪神の手下はどうでもよさそうにこっちに突っ込んでくる。

カイトが一掃しようと天使の輪を真っ赤にならずに装着する、天使の翼を出して、魔法を構成しようと精霊を『視ようとする』

「『光よ――――』ッ！？いない！？」

精霊のいないことにカイトは驚愕する。『光があるところに精霊は居る』なのに、何故いない・・・・？

そうカイトが疑問に思うと、邪神の手下の一人であろうものが笑いながらいう。

『この城の防壁にィ！精霊ははじかれるんだよォォォ！』

そういわれ、カイトは特に気にすることもなく「あぁそうかい」といって笑う。

『なァにィ余裕ぶっこいてんだよォォォ！』

「いやなに――召喚に『精霊はいらない』からね」

カイトは構成をする。外部の生物に干渉。対象――『光の精霊』

「『召喚：光の精霊』続けて『光よ対象を破壊せよ』」

連続に構成をたて、光の精霊を召喚し、光の魔法を構成、発動。

あたりを光が包み込む、精霊がいないと思っていたであろう邪神の手下はあっけなく吹っ飛ばされていく。

「『光を刃となりて敵を貫け』」

ユーリも負けじと魔法を構成する。今度はカイトがすでに召喚済みなので大丈夫だ。

「なんでお前ら・・・特にカイト・・・マススパークっていわないんだ・・・」

なにかアリスがいっているが、誰もその言葉に耳を傾けるものはいない。

ルイスはとりあえず白銀の剣で敵を切り裂き続ける。

レイは、何か含み笑いをしながらたっている。

『ふっふっふ、レイのすごさをみせつけるときですの！いきますの！はぁぁぁ！ポルターガイス「『召喚：炎の精霊』『炎よ、侵攻せよ』」ってまってですのぉぉぉ！？』

「なに?どうかしたのレイ?」

『うっうぅぅ・・・エリカが久しぶりの見せ場をとっていったですの・・・』

「な、なんだか知らないけど、ごめんね?」

『もういいですのぉぉ!』

「あ・・・レイ!?」

―ルイス―

・・・なんだかレイの声が聞こえる。スルーしよう。

斬りながらも前に進んでいたら、後ろがおろそかだったようだ。後

ろに大量に邪神の手下だらけだ。何コレピーンチ

「っとぉ！ルイス！」

とか思っていたらユーリがでてくる。だが結構キツイ状況であることはかわっていない。

魔法を想像し構成し、宣言をする。

「『弾き飛ばせ』」

ユーリを引き寄せ即座に宣言をすると、後ろにあつまっていた邪神の手下は吹っ飛んでいく。とりあえず現在、殲滅して全員でいくかどうかを聞いてみる。

「城の目の前なんだけど、どうする！？」

「さきいってろ！」

返答ははやい、その返答にうなづくと、ユーリの手を引いて城の中へと走っていく。

ドアは重いが、なんのその、扉を蹴り飛ばし走ってなかへと入っていった。

―ユーリ―

ルイスが走っていく。私の腕を掴んで。

ちょっと顔が赤くなるが、まぁ仕方ない、仕方ないったら仕方ない。

「で!?これからどうするの?」

すこし心を落ち着かせ、ルイスに聞いてみる。邪神と戦って勝てるかどうか悩んでいたのをしっている、どうすればいいのかぐらいは考えている・・・

「突っ込む。」

・・・と思った私が馬鹿だった。

「なにそれ!?バカぁ?」

思わずそういうと、ルイスは苦笑していた。・・・なんだかその顔に全力の一撃を食らわせたい気分だ。

城の廊下を走る走る走る。

城は驚くほど静かだった。

不気味なほどに。

―ルイス―

玉座であろう場所のドアをぶち破り、中へと突入する。

ＲＰＧっぽくすれば、たぶんここでラスボスをエンカウントするとかふざけたことを考えてみたが、相手側は普通にいた。

そこにたのは少年だった。

少年は俺たちをみると、目を丸くし、行動を停止する。

「・・・邪神？」

隣にいるユーリが聞いてくる。俺が聞きたい。

少年は俺たちをみて、停止したかと思うと動き出す。

口元をゆがめて

「クヒックヒヒヒッ・・・クキャ・・・クキャキャ・・・ギャハハハハハッハハハッハ！キタァ！キタヨォォォッ！ギャハハハハハハッ！」

その瞬間、不快感がさらに駆け巡り、危機感というものがいっきに稼動し、右へと力をこめ、ユーリとともに飛ぶ。

その瞬間

黒が世界を包み込み、城の屋上部分がすべて吹き飛んでいた。

「・・・本当になにもんだよ。」

すべての防壁を展開してはみたものの、本能的に飛んでいてよかったと思う。

「ナニモノ・・・？ナニモノナンダロウ。ワカンナイ。ヒト、ヤメチャッタシ」

「・・・そうかよ。じゃぁ・・・戦うぞ。止める。お前を止めて、かりそめでもＨＡＰＰＹ　ＥＮＤだ。」

邪神の笑い声が最後の戦いを示していた。

第九十七章『最終決戦』―戦闘・開始（後書き）

もうすぐだよ・・・もうすぐ終わるんだ・・・

なんかいきなり出番がなさそうなクリスの戦闘

なので武器紹介

『創造の槌』

形、大きさともに変化可能のうえ威力さえも変更できる槌

ダブりを指摘されて『あぁもうやってやらぁぁぁ！』といった感じで直していった結果、すごいめんどくさいことに気づいた。

うん、誰か助けて☆

第九十八章『最終決戦』戦闘・終了（前書き）

グロ注意って書いたほうがよかった気がするよ。
前書きのために結構話を削除し続けたんだけど、色々と表現が自分でも異常だと思う。
邪神の過去です。読んでも読まないでもいい気がします。
でも読んでくれるとうれしい気がする。

盗賊に両親を殺された。
ボクは反撃し、そいつらの剣をとりあげると、夢中で振るった。
いつのまにか目の前にはリーダーである人物が一人だけで、あとは血溜まりに沈んでいた
リーダーであろう人物はボクをみて、化け物といった。
リーダーへ剣をむけると、リーダーは小さく悲鳴をあげ懇願した。
ボクはそいつの腕を剣できりさくと、リーダーは悲鳴をあげて転げまわる。
何度も何度も何度も何度も何度も何度も切り裂き続けると、リーダーはくるったように笑い始めて、独白が始まった。
逃げ回る人間を殺すのが好きになったと
悦楽というものを感じていた
最初は怖かったけれども、慣れてきて、それが楽しくて楽しくてしょうがなかったと
その独白をきいた瞬間にザワッとした感情が流れ込む
このときはじめて『殺意』を感じた。
狂ったように相手を腕からみじん切りのように斬り続ける
あぁ死ぬな、永遠に死ぬな、こいつのせいで俺の両親は永遠に生き返ることはない
ならばボクはこいつに永遠の苦しみを与えてやろう

叫べ叫べ叫べ叫び続けろ
それがうれしくてうれしくてたまらない

いつのまにか叫びはとまっていた。
ボクは血にぬれた体をポンポンと叩き
最後に顔を叩く
その顔はゆがんでいた。
ボクは鏡をみると、とたんに恐怖した。
「う・・・あぁぁっうわぁぁぁ」

鏡に浮かんだボクは

満面の笑みをして、血にぬれていた

思わず家から出る、この血なまぐさい家から。
飛び出し歩き続けると、街で通行人はボクをみて気持ち悪いものを
みるような眼をしてみてきた。
笑みがなおらない
トボトボと歩くと、額に石を投げられた。
投げた張本人をみると、張本人は『恐怖』していた。
ボクが張本人へと近づき、近くにあった鉄の棒を持ち、振るう。
張本人である人は、逃げ出した。なんで?なんでだろう?怖いなら
やらなきゃいいのに

ボクは笑いながら追い詰め鉄の棒を振るう
だが、それは振るいきれず、誰かに止められていた
思わず後ろを振り返ると、一人の女性がたっていた
女性はボクの笑った顔に笑顔をむける、それは自然の笑みだった
そしてボクの額にデコピンをする、それによりボクはハッとする
笑みがとけ、ボクはすこし泣き始める、それをみた女性はアワアワとしていた。
それをみて、ボクは面白くて面白くて笑い始める
それをみた女性も、キョトンとするとすぐに笑い始める。
女性はボクから話をきくと、いきなり手をひき走り出す。
ボクが理由をきくと、一緒に住もうといった。
・・・理由じゃないじゃないか、とボソリと告げたボクの顔はなんだかうれしそうで
それをみた女性は、うれしそうに笑う。

幸せってものは大切なものなんだ
だから、ちょっと気を抜いていると失ってしまう。
ボクは目の前の光景をゆっくりとみる。
そして涙を流す。
家が燃えている。
買い物へいき、戻ってきている間に誰かが燃やしていた。
燃やしたであろう人間は、その家の前で笑い踊っている。手には酒瓶をもち、楽しそうに笑う。
「――――狂っている」
ボソリというと、笑い踊っている人間は踊りをやめ、ボクをみる。
その眼は鬱にそまっていた。
ボクは近くにあった石を握り、その男を殴り殺す

そして殴り終わり、血だらけになった腕をみて、ボクの顔が笑っていることに気がついた。

拒絶する、なにもかもを

第九十八章『最終決戦』戦闘・終了

―邪神―

リィントイッタオトコガイタ

ソイツハ『白銀の剣』ヲタズサエアラワレタ

タタカッテイテワカッタ

オレハトメテホシイノダト

ダガケッカハトメラレルフウインサレタノダ

トメテモライタクテ

とめてもらいたくて

僕は、現れ始めた封印から力の一部を出し、リィンを異次元へと送った穴をつくり、そして力を飛ばす

破壊の限りを尽くせと命令を告げる

彼はそのボクをみて、倒してくれるだろうか
そして戻ってきてくれて、ボクを殺してくれルト
デモ結果は違っタ
リィンは死ンダ
ボクにヨッテ
モドッテキタチカラから感じ取れタノハゼツボウ
カッテダロう、カッテナヤツダロう、ソレデモダレカトメテモライタクテ
リィンニヨッテケズラレテキタ『力』がモドッテキテ
ボクハマタノミコマレテイク
「グヒッ・・・グキャ・・・・・グヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャ」
アァタノシイ
アァ・・・タノシイ・・・
テキガキタ、リィンノヨウナヤツダ
殺してほしイ

―ルイス―

剣を振るい続ける。

あいつは受け止めていく。

そのたびに受け止めた部分が浄化されていく。

真実をみて、感じた。

コチツは殺されたがっていると

だからこそ、全力でやる。

ユーリが杖をふるい、召喚した光の精霊の攻撃を行う

だかその攻撃は消滅する。何度も何度も他の精霊を召喚し、攻撃する。

それはすべて消えていく。

「な・・・なんで!?」

ユーリが叫んでいる。そしてわかったのだ

何故親父が剣で切り裂き続けなければならなかったのか

こいつには、『白銀の剣しか効かない』のだ

「イヒャヒャヒャ、グィ・・・・グギャギャギャ！」

邪神であろう少年は笑いながら黒い光を発生させる

俺はその光を横っ飛びで全力でかわす、だが足りない、相手の攻撃が巨大すぎることを感じる。なので俺は想像を開始し、構成し、宣言する。それはいつもどおりの『やることを宣言する』のではなく、適当な一つの言葉、「あ」とか「い」とか。そもそもこれでも大丈夫だったのだが、変なこだわりでやらなかった。だがいまはこだわらない、それほどにヤバイ。

「『あ（テレポ）』」

瞬間的に姿は掻き消え、俺がいた場所は黒に塗りつぶされる。その場所をみて理解したのは、あいつが放っているのは『ちょっとでも触れれば消滅する黒い光』なのだ。それをしって冷や汗を流す。危険すぎるものをあいつはバンバンと撃ってきている

「なにそれチート？」と思わずいってしまった俺は悪くないだろう。

戦ってすぐに違和感を感じ始める。

邪神の手下が現れないことだ。

見回すと、くる気配もない、普通だったら来て一緒に殺そうとするだろう。だがあいつはずっと一人だ。

あれだけの数もいたのに、何故一人も残っていない。・・・何故？

そう思ったときに、邪神の手下の表情を思い出した。そこにあったのは恐怖だった。

・・・こいつは、何者にもキョゼツされているのか。

剣を振るう、黒い光が何度も何度も俺を遅い、俺は必死で避ける。キツイが、切り裂き続けているせいか、相手は力が減っているように見える。これなら大丈夫――――

「ギャァッァァァァッハァァッァ！」

「なぁ！？」

黒い光が邪神の上に現れ、拡散し始める。これはヤバイヤバスギル

俺はとっさにユーリをみて、ユーリへと走る。呆然としているユーリの前へと現れ、驚く声をだすユーリの盾になり、前に剣を突き出す。

そしてその瞬間、黒い光は拡散する、避ける場所が全くないほどに拡散する。

俺のほうへときた光は俺が想像により加速の魔法を重ね続けて白銀の剣でけし飛ばし続ける。

「ウオオォォォオオォォォォォォオ！」

必死、叫びながら必死で戦っている。正直いってめげたい。体がも

のすっごい悲鳴をあげている。

無理、無理だ、無理なんだよ、と思考がいうが無視する、無視無視、うるせぇ！

煙が上がり視界が消えていく。それでも剣をふるう、どこからくるかもわからない、でも振るう

振るう振るう振るう振るうッ！！！

ようやく煙が引き始める。

心がすこし休まるが、休め続けてもいけない。剣を構え相手を探す。

「ね・・・ねぇルイス？なんで、なんで白銀の剣がボロボロなの？」

そういわれ、剣をみて・・・驚愕した。

剣がボロボロなのだ。力を受け続けただから、と簡単に説明できるであろうが、その光景は正直いって信じられない。たぶん、斬れるのは一度のみ程度であろう。

「『直れ』」

そういってみるが、なにもかわらず剣はそこにある、ボロボロのま

まで

「『直れ』『直れ』『直れ』・・・無理・・・？」

想像を魔術にする魔術、イメージはできているが剣は代わりがない。

「神の力ですら、この剣は再構築不可能ってこと・・・かよ？」

神にあったら多分殴ると思う、・・・最悪だ。

そんな時、声がする。

「うぉぉ！ルイス！・・・ハァ、到着した。で！？大丈夫・・・」

カイトがやってきたのだ、そして俺に声をかけようとしたとき、顔は驚愕する。『白銀の剣』をみたのだ。

「・・・大丈夫かこれ・・・」

カイトがその剣をみながらいい、後からやってきたやつも呆然としている。

「ヤバイ、限りなくヤバイ」

そう返答をすると、カイトは何かを思いついたような顔をする。

「どうせやれんのは一度だけだろ？突き刺して、そこから一刀両断くらいするしか勝てないんじゃないか？」

「・・・たしかにそうだ・・・だけどやれないと思うのだが・・・」

そう俺がカイトへいうと、カイトはニヤリと笑う。

「だったら俺たちの力を奪うって感じでいけば能力を仕えるようになるんじゃないか？」

「・・・奪う？」

たぶん、俺は今呆然としているだろう。カイトがそんなことをいいだしたため、当然だろう。

「だったら私のは必要ないと思う、でもこれを渡そう、力になるとおもう。」

クリスが話をきいて、自分の能力の戦闘能力の低さについていい、そして俺になにかをくれる。

「これは？」

「すっごい光が発生するだけだよ。それも太陽光と同じもの」

「・・・ありがとう、たぶん使うよ。」

そういって手に握り締める。

「じゃぁ、奪うっていう感じを思い浮かべろ」

カイトがそういうので、俺は想像を開始、構成を発動。カイトたちはすでに翼も眼も展開している。

「『奪え』」

そう宣言した瞬間に俺の背中には翼が生え、眼に流の魔眼が発動する。

煙が完全にはれたとき、邪神が現れる。

「じゃーいくぞぉぉぉ！」

いっきに飛び出すと、邪神が俺へと攻撃を仕掛け始める。

流の魔眼で避け続けると、邪神は再度拡散する技を発動させようとする。

「ギャハハッハアァァ！」

拡散される攻撃を翼で防ぎ続けると、邪神は忌々しそうに顔をゆがめる。

剣を俺は相手へと先を向けると、加速をさらに重ね合わせ、全速力で向かう。

黒い光が無駄だと悟った邪神は剣を折ろうと物理攻撃を仕掛けようとする。

その瞬間、俺はクリスにもらった太陽光がでる装置を発動する。
その瞬間、世界が光に満たされ、邪神のうめき声が聞こえる。

―クリス―

太陽光は、すべての敵に有効・・・そんな勘みたいな考えで装置を作ってしまった。

勘、といえども理屈はあるのだが、太陽光さえ無効化しているなら、何も見えなくなってしまうし

―ルイス―

頭がぐわんぐわんして吐き気がする。太陽光をモロに眼にはいってしまったらしい

たぶん後で治せるだろう

ひるむつもりなどない、そのまま走り続けて、手探りながらも

邪神を貫いた

「どっせぇぇぇぇい！」というかっこ悪い叫びをあげながら、敵を一刀両断していく。

ピシッとかバキッとかいうひどい音がなっているがそれでもやめない。

そして、邪神は切り裂かれていく

斬り終わったとき、剣は折れてしまったけれど

邪神であった少年は、狂ったような笑いをやめて
ゆっくりとひざをつく。
眼には涙を

白銀の剣は折れたというのに輝き続け
その光は少年を包み込む。

少年はボロボロと涙を流し
なにか女性の言葉をつぶやき消滅した

戦いは終了したのだった。

第九十八章『最終決戦』戦闘・終了（後書き）

うぉおおおお！次エピローグ二つだけだよぉおおおおおおおお！

ヒャッハァッアア！

終わりが近いぜるるるるるるるるるる（壊

エピローグ&後日談の提案（前書き）

・・・エピローグ二つで１００話とか思ってたけどさ

エピローグを話しに換算すると、プロローグも同じように足される
から百話越えてるよね・・・？

うわあああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ

完結したーーーーー！

・・・学園黙示録のＳＳでも書いてみようかな？

俺がかくとイメージがあれなんだよね

『なんかひどい過去があって疑心暗鬼な主人公が何か知らないけど
フラグたてまくってヒロインが迫ってくるけど疑心暗鬼な主人公は
「ど・・・どうせ後でバ・・・バカにするんだろぉ！？『勘違い乙』
ってぇ！わかってんだよぉぉ！」とか心の中で思いながら必死に生
きる』感じになりますね・・・

エピローグ&後日談の提案

邪神であった少年は少年へと戻り
消滅した。
手下どもは消えていき、すでにあとかたもなく
異常を発していた城は白く光砕けていく。
それは無邪気な光だった。
それはうれしそうな光だった。
ルイスはその光のなか、脱出しながらも思った。
にているなぁ・・・と
死んだとき、美奈子の言葉を聴いたときの自分と
後悔はあれど、その気持ちは無邪気でうれしかった。
ルイスは折れた白銀の剣であったものをみる。
その光は、慈愛の光だったんじゃないかと、そう思った。

―ルイス―

そんなことを思っている場合じゃない

「ひぃぃ!?」

走っている間に目の前に瓦礫が落ちてきたよ!邪神の最後の反抗か!?あんな純粋な感じで死んでいったのに最後の反抗か!?実をいうと心の中でほくそ笑んでたとか!?

気を抜いたら絶対に『ＹＯＵ　ＤＥＡＤ』的なものが見えるようになるよ!?

バ○オ４でいう最後の島脱出イベントで死ぬようなものだよ!?

「うぉおおおおお!」

叫び声のような咆哮をして転生者四人、仲間を抱えて全力疾走をしている。

すぐに最初にテレポできた場所へ到着し、クリスが何かを念じて水の聖域を操作し、近づかせる。それに全力で飛び乗ると、全員が長いため息をつく。

「いやぁ・・・最後のトラップってのはよくあるけどさぁ・・・」

現実でなくてもいいじゃないか・・・というアリスの言葉に皆がうなづく。

「まぁ、アリスのいっている意味はわからないけど、最後の最後で気を抜いてこの状態ってのは正直・・・嫌。」

エリカの率直な意見にも全員がうなづく。ゲームでならドキドキものだけれど、現実にされてはしゃれにならない。

「なにはともあれ、ハッピーエンドだ。」

「はっぴぃえんど？」

「幸せな終わり方ってことだよ。」

「ふむ・・・そうだな、うむ、そうだ。」

心なしか微笑んでいるユリアをみて、自然と笑みを浮かべ、俺は腕に力をいれて地に手をつく。そしてそのまま立ち上がると、後ろをみる。

「んで、これでいいかい？『アニータ』さん？」

そういうと、全員が俺の見ている方向をみる。

そこには世界少女たちがいた。

「はい、ありがとうございました。・・・それでは、『奇跡』を――？」

世界少女が言い終わる前にアリスが手をあげて言葉を制す。

「俺・・・いってないんだけ「チッ」誰だ!?今したうちしたやつ!?。」

どこからか舌打ちが聞こえてきた。

「はい、わかりましたよ。いってください。」

「なんでそんなに投げやりなんだよ・・・まぁいいや。じゃー」

そういって自らを飛ばした世界少女に近づきボソボソと何かを告げた。そういってちょっと悪い笑顔を浮かべると、俺に『こっちにこい』という合図を送ってくる。

「ん?なんだ?」

疑問符を浮かべながらも、俺は近づいていくとアリスはにっこりと笑って。

「制限時間は十分だ。」

「は?」

「さぁいけい!」

そうアリスが言った瞬間に、俺のいる空間は黒に塗りつぶされ・・・

いつのまにか、どこかの部屋にいた。

「・・・え?」

一瞬思考がとまり、見回す。どこか懐かしい気持ちがして・・・

ボロボロと涙を流していく。

「・・・え?え?」

混乱して涙を何度も拭き見回し、見回し気づく。

「・・・両親がいたころの・・・家か・・・」

その家は、アパートの一室、決して裕福とはいわないだろう。でもそこには、思い出というものを感じ取れた。

見回していると、隣の部屋から三人がこちらへ入ってくる。その姿は真実をみたときにみた姿と同じで、思わず泣いてしまった。両親は、車のキーを鍵いれであろう箱から取り出し、俺である少年ははしゃいでいた。その姿をみて思わず微笑んでしまった。

『おとーさん早くー!』

『ハハハ、今行くよ。』

『リィン早くー！』

『いや、さすがにエレナは大人になろうよ。』

『私の心はいつまでも幼き純粋な心を忘れないのダ！』

『アハハ・・・』

ほほえましい光景があり、そして俺の心にはこの先起こるであろう両親の死をしっているわけで、それを止めたくて止めたくて、手をすこし伸ばしても、その両親の体をすり抜けていく。

「何も・・・かえられないんだな。」

俺はちょっとうつむいて、すぐに顔をあげる。部屋を見回し、一枚の写真をみつけ、触れてみる。

「・・・触れられた？」

ちょっと驚いたけど、その写真を両手でもつ。

「これくらい、いいよな？」

ドロボウかもしれないが、いや、俺この家の主の子供だし、別にドロボウじゃないよね？ね？

ポケットにその写真をしまい、俺は部屋からみえる空を見上げながら、この世界から退場した。

「・・・」

「ルイス？どうしたの？ルイス」

戻ってきて、呆然としていると、ユーリが俺を揺らしてくる。すぐにハッとして笑顔になって「大丈夫だよ」という返答をすると、はぁ・・・という安心したといったため息をユーリはついた。

「ふぅ・・・ありがとな、アリス」

ポケットから一枚の写真を取り出し、眺める。アリスは「うん」とうなづくと、照れくさそうにそっぽをむく、その顔は赤くて、その様子をみていた全員が苦笑する。その様子を、アリスは「な・・・なんだよぉ！」といって怒るが、とてもじゃないが怖くなくて、全員が笑う。

笑い終えたルイスは、世界少女へと向き直る。

「じゃー俺の奇跡「次は俺とクリスかな？」ちょ・・・カイト？」

思わず横から入ってくるカイトに驚きながらも、納得がいかないので睨むと、カイトは苦笑いを浮かべながら「まぁいいから！」といってくる。

・・・納得がいかない

「『平和』という奇跡ですね？」

「あぁ」

カイトの世界少女が確認をすると、カイトはうなづく。世界少女はニッコリと笑い、執行されました。と笑う。

「・・・え？これで終わり？」

「終わりです」

「えっとーもしかしてー私のも・・・」

「はい♪」

「「うわっ短ッ！！」」

そんな同時の叫びに世界少女までも笑ってしまう。

「んで？やっと俺か？」

「はい、そうですね。」

アニータがゆっくりと前にでてくる。

「奇跡を掴むきっかけは私がやりました、ですか貴方の奇跡は貴方たちが作り出すものです。」

「・・・あなたたち？」

「はい。」

「どういう・・・どうしたの？ユーリ。」

ユーリが俺の肩を真っ赤になりながらも掴んでいる。

「いいね、ルイス？」

「は？何が？」

「これが、奇跡なんだよ。」

「・・・いや、だから――ムグッ」

視界がちょっと暗くなったと思ったら・・・

思ったら・・・思ったらららら!?

「プハッ!?キ・・・キキキキスゥ!?」

慌てふためく俺をよそに、ユーリは真っ赤になりながらいう。

「いいね?聞いて、勇樹」

その言葉をきいて、俺は時が止まったようにみえた。

だけど、そんなことはない

「ボクの、いや・・・私の名前は――美奈子っていうんだ」

その後、船の上で抱き合う少年と少女がいた。

彼らは涙を流し、うれしそうに、本当にうれしそうに笑う。

それをみている仲間たちもうれしそうに微笑んでいて

少年と少女は一生一緒にいるだろう

エピローグ&後日談の提案（後書き）

白銀の剣は、もうそこにはない
その剣は慈愛の力をもっていて
悪を打ち消し正義を強め
そして人の心をもってその剣は力となる。

その力が必要がなくなった今
白銀の剣は最後にその光を強め
悲しき少年を包み込む。
そして白銀の剣はここで消えてゆく

世界少女の名前紹介完了しました。更新しなさすぎて忘れ去られているでしょうが、とりあえずキャラクター紹介をみてください。

ついでに、次回作をよみたいならどんなの読みたいですか？

転生系でも不可思議系でもホラー系でも騎士ファンタジーでもやれるかと思いますけど
探偵系は無理ですね、ハイ

ついでにルイスとユーリがさらに転生ｏｒ召喚とか・・・あるかなぁ？

そういえば続きを書いてみたりしました。

出来が出来なのである程度のものなんですよね。

アクセスが１００万超えたらちょっと投稿してみようかと思います。
あ、あと１０００ｐｔこえてましたね、夢にまでみた感じです。
色々と物語を考えてみては設定を思いえがいたりしている毎日です。
やばい書きたい。
後日談は大変短いので、書くべき設定があるならいってくれると助かります。現在はすでに9月をこえて、終了して一ヶ月以上たっておりますが、まぁがんばっていきますね。学園黙示録もよろしくね！あれ書くのに時間がかかるから、時間が必要なので更新は停滞さ

せましたが。
この物語の後日談を書いたら、まぁたぶん2月まではあらわれることはないでしょうけど、今後ともよろしくお願いします。

いつの間にかできてたエピローグ（前書き）

やぁ、作者さ
最近何書いても楽しくない、どうしたんだろうって思ってて、原点に戻ろうと思ってこの物語を読み始めてみたよ

うん、それで気づいたんだよ、アクセス１００万こえてるじゃないかって
すでに１３０万いってたよ、ありがとう。
だけど感想をみると、世界観があまり詳しく書かれてないとかいわれてたんだよね、うん…だから書き直したほうがいいかなって思ったんだけど、今の状況じゃ右往左往するだけだと思うんだ…
わかんない、なんであんな楽しかったんだろう…うぅーん…
また思いついたものを適当に書いてみたりしようかな？

いつの間にかできてたエピローグ

なにもかも終わったようで、終わってはいない。

のんびりと丘に寝そべり風を感じ、ルイスはそう思った。

ザァァッという音、草が風をうけ、その音は海の音のように感じた。

『リィン』それが父さんの名前。

『エレナ』それが母さんの名前。

『ユウキ』それが、俺の名前。

父さんは邪紳――いや、飲み込まれてしまった彼を倒せなかった。

邪神は最後の最後で、世界から彼を拒絶し、異世界へと吹き飛ばした。

そして邪神は弱りきったところを封印された。

でも、その封印された空間から、彼は救いを求め、倒してくれると、

『死』を求めリィンの前に現れ、リィンは勝てずに負けた。

そして、あの俺の記憶が消えた火事。

いまさらに思い出す。

母さんの手が、俺の頭にのせられたときを。

『ごめんね』『守れなかった』

『だから、貴方は――平和でいて。』

そんな言葉が口からつむがれるのを聞いた。

でも、平和なんて言葉は程遠い毎日を送った。
俺は親戚でもないのに、受け入れてくれているのだから『親戚』などと考え、虐待され、……何本、骨を折ったかわからない日々を送った。
煮えたぎるお湯を、間違えたと証してかけられたこともある。

『あぁ――幸せが欲しい、いつかくるきっとくる。』

そんなことを考え、俺は逃げるための日々を模索し
そしてアルバイトでもいいから仕事ができたら家を飛び出し

生きるために必死だった。

でも、俺は――その時は幸せだった。
アルバイトの先輩に罵倒されても、骨は折れない。
お金が無くてご飯が食べられなくとも――やけどにはならない。

それは幸福だったのだろう。

人生はプラマイ0、あぁきっとそうだ

『飢え死にかけている子供たちは、たとえ他人の残飯でも食べられれば幸福』なのだ。

『虐待された子供は、虐待されなかったときが幸福で幸福でしかたない』のだ。

『なんでも買ってくれる優しい親がいる子供は、叱られるときがと

ても悲しい』のだ。

ようは上下なのだ。プラスマイナス０という人は、結局幸福な人間なのだろう。

でも価値観でいったら個人個人でプラスマイナス０なのだろう。

だからこそ――痛くない日々は、ボクにとってプラスだった、そう思う。

でも人生でもっともプラスだったのは――

『ねぇ勇樹！』

『あははは！勇樹なにそれ！』

『だったら・・・今から碌じゃない人生にすればいいじゃない』

「ねぇ、ルイス、ぼーっと何をやってるの？」

ハッとした、結構深くまで思考の海に沈んでいたのだろう、生暖かな空気が頬をなで、すぅっと冷たい感触が頬に感じられた。

「泣いているの？なにか悲しいことがあった？」

そういわれて、俺はすぐに頬をぐしぐしと拭い、にぱっと笑う。

「悲しいことなんか無いさ」

「えぇ？じゃぁなんで泣いてたのさ？」

俺はユーリの頭にポンッと手を当てて、撫でながらユーリの顔へと近づけ。

笑いながら俺はいった。

「うれし泣きさ、今幸せなことに対して、ね。」

そう言い放つと、ユーリはちょっとキョトン、としたあと、すぐに笑った。そして泣き声も出さずに、涙を流し始める。笑いながら泣いていた。そうしてポツリとユーリが零す。

「長かった、ね。」

そういわれて、俺はコクリとうなづく。

「うん、そうだね。」

身近な言葉だった。でもユーリはとても嬉しそうに続ける。

「でも、楽しかったね。」

あぁ、楽しかった。この思いはきっと、嘘じゃない。だからうなづこう。

「うん。」

頬をなでる風が、さらに頬に流れた涙を冷やしていく。

辛かった、苦しかった、疲れた、痛かった。
愚痴はたくさんあった。
でも、ルイスはそれらの言葉をいわずに、ただ一言いった。

「幸せだ。」

世界少女はなぜ、世界少女になったのだろう。
なぜ、彼女らは俺をここによんだのだろう。
それは彼女らにしかわからないけど

きっと、彼女らは願ったんだ。

たくさんの人々の、幸せを。

【カイト】

「っていうか、なんでエリカはここにいるんだ？」

「う、うるさいわね！うれしいでしょ？こんな美少女が近くにいるなんて！」

「俺にロリコンの化はないんだが――痛いッ、痛いよ！」

【アリス】

「お姉さまぁ～」

「なんか、もうどうでもよくなってきた――」

はぁっと溜息をつくと、騎士としての先輩はケタケタと笑いながら俺へといってくる。

「おいおい、騎士として仕事しろよ、この女たらし。」

「女なのになぁ――体は。」

「なら問題ありませんわ！」

「「いや、あるから」」

【クリス】

ガンガンゴンゴン。

「発明、発明発明、発明発明……私――姫だよね？姫なんだよね？」

「気にしたらダメですの！クリス！」

「ねぇレイ、私って姫なんだよね？どうして産業革命しなきゃいけないの？姫が産業革命してどうするの？」

「き、気にしたらダメですの！」

【ユリア】

「ふぅ――」

溜息をついてあたりを見回す。
そこには兵士たちが横たわっていた。

「骨のあるヤツはいないのか？」

ボソッといったら兵士が本気でかかってくる、それの背後に一瞬で回りこみ、手刀で気絶させる。

「ダメだなぁ、ぜんっぜんダメだ……ふむぅ……ルイスか――カイトか、アリスのところでもいってくるか――そういえば、ルイスどこいったのだろ？」

【ルシル】

お墓の前にいた。

お母さんとお父さんのお墓の前。

「お父さん、お母さん――いま、私は幸せだよ。」

手を合わせて、それで笑って。

「ルイスさんのところに戻らなきゃなぁ……」

そういって――クルリと身を翻し

「いってきます」

そういった。

――まわるまわる、物語が回りゆく。

人がいれば、物語は多種多様。

時はたち、ルイスたちが死んだとしても、この世界の物語はクルリクルリとまわりゆく

――白銀の剣は壊れた

だが――白銀の剣は不滅である。

人の慈愛も希望も、無くならない

だから白銀の剣は、また、『いつそこにあったかもわからない』のに、暗い森の奥深くにある――

【ルイス】

――落ち着いた、とでも言おうか。

それでもあのお姫様は俺を探し回っているようだけど

とりあえず、今は目の前の仲間たちに話をしよう。

「…なぁ、とりあえず聞いてくれ」

話そう、今までであったことを

そして、俺とユーリのことを

いつの間にかできてたエピローグ（後書き）

うん、書いてみたものは
世界ごとの生き残りをかけた戦争的なものだったり
化け物になるもんに感染したけど意識を保てる主人公が同じような
境遇のやつらと、事件を解決したりというものだったんだけど
決めた、ちょっとギャグ系の小説読みまくってくる。
今書いているものにギャグが足りない！呼んでいたものを覆すよう
ないきなりの設定が足りない！
ちょっといってくる！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6925k/

奇跡のための試練

2011年7月1日01時50分発行